

# 研究紀要 15

## 目 次

長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の移動及び縄文文化へのその影響	李 喜福	1
縄文時代前期後半から中期初頭段階における異系統土器の流入の様相について ——山梨県に見た出土事例を中心に——	野代 幸和	13
縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶へ ——御坂町桂野遺跡出土土偶に関する一考察——	市川 恵子	39
縄文晩期後半遺跡分布の意味と課題 ——山梨における遺跡の継続性と立地から——	新津 健	53
甲ヶ原遺跡発掘調査報告(平成10年3月3日から3月26日)	山本 茂樹・網倉 邦生	67
大月市御所遺跡から検出された動植物遺体とその性格(1)…小林 公治・吉川 純子・樋泉 岳二		73
大月遺跡の敷石住居跡について	笠原みゆき	83
御動使川扇状地の古地形と遺跡立地 ——中部横断道の試掘調査の成果から——	保坂 康夫	93
中部横断道試掘調査のテフラ分析	河西 学	101
塙山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理	小林 健二	103
山梨市牧洞寺古墳採集の須恵器について	石神 孝子	111
山梨県内出土木製品について	雨宮加代子	113
甲府城の鬼門守護と除災招福の思惟 —— 稲荷曲輪にみる一考察 ——	崎田 哲	119
<資料紹介>高根町箕輪横森前墓地所在地蔵陽刻板碑	坂本 美夫	125(10)
山梨県における月待信仰について —— 文献を中心として ——	坂本 美夫	134(1)

1999

山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

## 序

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターの日頃の研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第15号を公刊する運びとなりました。

今回は、計15篇の論考と、1篇の報告、1篇の資料紹介を収載いたしました。本県が毎年実施している海外技術研修生受け入れ事業に基づいて受け入れた四川大学歴史学系考古学専門の李映福氏の「長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の移動および縄文文化へのその影響」は近年の考古学的調査成果に基づき、生業形態と環境の視点から論じられています。また、帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏より「中部横断道試掘調査のテフラ分析」を寄稿いただきました。岡氏には、衷心よりお礼申し上げる次第であります。

これらが、考古学研究並びに埋蔵文化財の普及啓蒙活動の進展に少しでも貢献できるとすれば、望外の喜びとするところであります。

県立考古博物館と埋蔵文化財センターは設立されてから、今年で17年目を迎えております。山梨県における埋蔵文化財の調査体制と保護行政は大きく前進しましたが、なお課題の多い事も事実であります。今後とも努力をかさね、より一層の充実をはかる所存でありますので、些少にかかわらず、各位からのご教示と忌憚のないご批判を賜りますようにお願い申し上げます。

1999年3月

山梨県立考古博物館館長  
山梨県埋蔵文化財センター所長

大塚初重

## 長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の移動 および縄文文化へのその影響

李 映 福 (四川大学歴史系)

- 1 はじめに  
2 新石器文化の類型および編年

- 3 新石器時代文化集団の移動の検討  
4 縄文文化へのその影響

### 1 はじめに

長江デルタ地帯に関する考古学調査史は1928年の良渚遺跡の調査に遡る。当時、発掘された資料は多くないが、中原地域にあり広く知られている彩陶文化とは全く異なる新しい文化類型と認識された。だが、この地域の新石器時代出土資料も欠落しており、考古学文化の実態に対する認識はやはり曖昧なままであった。しかし、この状態は70年代の初めに変化した。73年と77年に河姆渡遺跡において前後二度にわたって科学的な発掘が行われ、多くの遺物が出土した<sup>1)</sup>。とくに、第4文化層において多くの稻、稻の根、稻葉、炭化米および大量の農耕具などが出土したことは、長江デルタ地帯の新石器時代文化の重要性を明らかにさせただけでなく、稻作農業の起源に関する世界的な激しい討論を呼び起した。

さらに、この地域では大規模な調査によって、これまでに例を見ないほどの多数の遺跡・遺物が相次いで発見された。とりわけ90年代に入ってからは、良渚文化の大規模な上木構造である祭祀壇・大墓と堤防など<sup>2)</sup>が発見されるに及び、学界の注目を集めた。こうした最新の考古学的な資料を利用して当地域の新石器時代文化の編年と文化集団の分布および変遷が明らかにさればかりでなく、中国文明の起源問題と文化伝播の研究に対して、非常に重要な資料と手がかりを提供した。また、当地域での考古学的研究は中国で注目されただけでなく、日本の研究者からも大きな関心を持たれている。日本の関連分野の研究団体は中国の考古学研究者と協力して、その地域と関連する地域で大規模な調査をおこなっている。中日双方でも多くの論考が出版されている。それらの論著をまとめてみると、中日両国の研究者間では当地域の考古学的材料を検討する際の視野・視点が異なっているように思われる。中国の研究者は当地域の考古学的文化類型と社会構成の分析を主に目指しているのに対し、日本の研究者は日本古代文化の源流とこの地域との関係を重点的に探究しつつ、特に、日本への稻作農業の伝来を中心にして研究を進めている。しかしながら、双方ともに多くの成果を上げたとは言っても、いまだに両者の研究は十分とはいえない。例えば、長江デルタ地帯における新石器文化集団の移動といった重要な問題の研究はあまり深くなされていない。また一部の研究者は当地域の文化集団の大規模な移動にも着目した。しかし、移動の原因、方向、段階および周辺文化への影響などの問題にはほとんど触れていない。そこで、拙文では近年の考古学的調査成果に基づき、生業経済と環境の視点から、この問題についてやや不十分ながら、論じてみることにしたい。

なお、本稿は「長江・黄河流域における新石器時代農耕経済および社会形態転換の比較研究」というテーマの一部分を構成しているものであるが、その基本的な考え方を簡単にまとめたものにすぎない。また、紙幅の関係から利用した資料と分析内容について、充分に触れることができないが、ご寛容いただきたいと思う。

### 2 新石器文化の類型および編年

長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の移動は、長期にわたって漸進的に起こった段階的な過程であり、もとより同地域の新石器時代の各文化類型および編年を検討する必要がある。そしてその上で、各段階の移動を

裏付ける考古学的資料について分析を進めてみたい。

往古、長江デルタ地帯には、いくつかの小島とさして大きくない砂洲があるにすぎなかった。長江が運んできた大量の土砂によって、錢塘江に部分的な堆積が始まり、やがて南北両側の砂堤が形成された。後に砂堤は次第に丘となり、一つの大きな潟湖を取り囲むように形成された。歳月を経て、潟湖は太湖を中心とする多くの湖沼と沼沢に変化していった。当地域の新石器時代遺跡の多くは湖沼の岸辺や沼沢の近くに分布している。現在の行政区からみると、長江デルタ地帯は上海・杭州・蘇州・無錫・常州・湖州などに広がる。また、浙江省の杭州湾と寧紹平原は錢塘江水系に属しているが、古代にわたってその文化様相はほぼ同じであり、一般的にこの地域も長江デルタ地帯の文化区域としてみなされている。そのため本稿の編年で対象とする範囲は、太湖流域・上海・杭州湾と寧紹平原などを包括している。

長江デルタ地帯における新石器時代文化に関して、初めて基礎的な編年の枠組みを提示した「略論青蓮崗文化」という論文<sup>(3)</sup>が発表されてから現在にいたるまで、編年および類型などを論じている多くの論考と各種の知見・見解が頻繁に見受けられ、ここで改めて子細に検討する必要はないと思われるが、本稿の目的に必要な範囲で四つの新石器文化類型および基本的な編年を以下に述べてみよう。

### 河姆渡文化

河姆渡遺跡に代表される河姆渡文化は、浙江省寧紹平原の南縁の平原と山地が接する地帯に位置している。この遺跡では上層から下層まで関連する四つの文化層が重なりあっており、第3・4文化層の出土遺物、とりわけ土器の器形変化には連続性が強い。またそれと対応するように第1・2文化層の関連性も同じく著しい。そしてこうした特徴は考古学的に広く認知されている。さらに第2文化層と第3文化層から出土した遺物を比較すれば、両文化層の差異は一目瞭然である。このため、第3・4文化層を河姆渡文化と名付け、第1・2文化層を馬家浜文化とする、という見解が広く受け入れられた。河姆渡文化的年代は紀元前5,000~4,000年であり、約1,000年の間にわたって続いた。年代に関しては、その上器の製作技法・焼成温度と型式学の研究を通じて、中国新石器時代の早期段階における土器の原始的特徴を著しく示していることが如実である。さらに、河姆渡遺跡から出土した第4文化層の9点のサンプルで炭素14年代を測定してみた結果、最古のものは紀元前4,360±100年で、最新のものは紀元前3,960±190年であった。もし年輪年代で補正するならば、紀元前5,005±130年から紀元前4,620±220年とすべきであろう<sup>(4)</sup>。熱ルミネッセンス法で測定された年代の結果もほぼ一致しており、当遺跡の年代判定は確定的である<sup>(5)</sup>。これらによって、長江下流域新石器時代文化の最古の年代が確定された。

### 馬家浜文化

馬家浜文化の代表的遺跡である馬家浜遺跡<sup>(6)</sup>は杭嘉湖平原上に位置する。この文化は70年代のなかば、すでに確立されていた。しかし、その性質・帰属・文化名称といった問題に対していくつかの見方があったが<sup>(7)</sup>、近年出土した新資料によって馬家浜文化は一つの独立した新石器時代文化であるということが明らかにされた。またその年代については10点の炭素14年代測定値があるが、極端に古い1点を除いてほかの9点の年代データはほぼ一致しており、基本的に信頼性が持てるであろう。その年代幅は紀元前3,670±115年~紀元前3,050±220年である。年輪年代によって補正すれば、その年代値は紀元前4,325±205~紀元前3,655±140年となる。

### 松澤文化

代表的遺跡である上海市青浦県にある松澤遺跡<sup>(8)</sup>によって命名された松澤文化は太湖流域の周辺および上海地域に分布している。松澤文化に対してはいくつかの異論がある。その一つはこの文化を馬家浜文化に入れるべきであるという見方、すなわち馬家浜文化の前期を馬家浜類型、後期を松澤類型に分けられるとするものである<sup>(9)</sup>。もう一つは馬家浜文化から松澤文化を独立させた見解であって<sup>(10)</sup>、先行する馬家浜文化の伝統的な要素の多くが脱落し、また大きく変容し、従来の良渚文化の概念の範疇にも入れることのできない独特の様相を呈することを

評価したものである。この見解は最新の考古学的資料の出土によって、信憑性が高まっている。松澤文化の相対年代と絶対年代については、標準地層である松澤遺跡下層が馬家浜文化の文化層であり、その上の地層は松澤文化層であることから両者の相対年代は明白となった。さらに出土上土器と玉器の形態変化からも強い連続性を示すことがはっきりわかった。それらを踏まえると、松澤文化早期の年代は馬家浜文化の晩期年代と連続するものと考えられ、また、松澤文化に属する北陰陽遺跡や張陵山遺跡などの炭素14年代データを参考とすると、その年代幅は紀元前3,700～3,300年であるとみられる。

### 良渚文化

長江デルタ地帯において最初に調査された良渚遺跡の名から命名された良渚文化はすでに新石器時代の晩期段階に入る。遺跡の規模と遺跡数は先行する松澤文化より増大し、それらの内の多くの遺跡では松澤文化層のすぐ上に良渚文化層が載っている。その年代判定については各遺跡での炭素14法測定データがかなり多くあるが、張陵山遺跡<sup>30</sup>の測定データには誤差があり、明らかに古過ぎるので、参考程度としておくべきである。良渚文化的な早期である錢三漾遺跡<sup>31</sup>の4点のデータの値は紀元前3,300年～2,700年であり、良渚文化の後期に属する水出坂遺跡<sup>32</sup>第4層での4点の年代測定値は紀元前2,700年～2,100年である。これら8点の年代値を見てみれば、その最古の年代は松澤文化で最も新しい時期の年代とちょうどつながっており、また最も新しい年代は中国の新石器時代末期段階の年代とほぼ一致する。従って良渚文化の年代は紀元前3,300～2,100年の範囲であると認められるであろう。

上述したように、各遺跡の地層関係と炭素14法の測定データによって、長江デルタ地帯における新石器時代文化の編年が確立されたばかりではなく、その年代幅は紀元前5,000～2,100年であり、約3,000年にわたって続いたことが明らかとなった。そしてこれ以後当地域の新石器時代文化は、およそ紀元前2,000年前後に中原の二里頭文化に相当し馬橋文化と名づけられている青銅器時代、あるいは越文化時代に入るといつてよい。以上、地域の新石器時代各文化類型および編年について基本的な検討をおこなった。さらに明確にさせるために、各文化類型および年代をまとめてみると以下のとおりとなる。

河姆渡文化：紀元前5,000～4,000年

馬家浜文化：紀元前4,300～3,600年

松澤文化：紀元前3,700～3,300年

良渚文化：紀元前3,300～2,100年

### 3 新石器時代文化集団の移動の検討

一般的に、新石器時代文化集団の移動が活発になるほど人間集団の活動範囲が拡大し、活動範囲の拡大はまた遺跡数の増加をもたらすであろう。従って、文化集団の移動を考察するためには、先ず古代人間集団の活動によって残された遺跡数とその遺跡の分布範囲を分析しなければならない。言い換えれば、遺跡数と遺跡分布範囲の観察を通して、古代文化集団の移動を知ることができる。長江デルタ地帯において最も早い新石器時代文化である河姆渡文化の年代幅はかなり広く、約1,000年間一連して連続的に発展していた時期があった。しかし現在までに考古学的調査がなされた遺跡は浙江省余姚県の河姆渡遺跡をはじめ、茅湖、鄞縣辰蛟、寧波市八字橋<sup>33</sup>、桐鄉縣羅家角<sup>34</sup>、舟山白泉<sup>35</sup>など6カ所の遺跡しかない。これら遺跡の主な分布範囲は浙江省の寧紹平原東部地区だけであり、こうした調査の結果からも遺跡数は少なく、分布範囲も狭いことがわかる。もちろん、今までの調査結果だけで河姆渡文化の遺跡数と分布範囲を完全に確定することはできないが、同地域においてはこの数年間に全面的な考古学的調査が続けられているだけではなく、河姆渡文化の遺跡を見つけることが調査の重点とされているので、調査によって判明した遺跡数と分布範囲はある程度推論を行うに足る値であろう。

河姆渡文化の遺跡数の少なさと分布範囲の狭さからは、この文化集団の社会発展の程度および移動のエネルギーを推察することができる。河姆渡文化の標準遺跡である河姆渡遺跡では石製・骨製・木製・土製の各種の生産

用具が數千点出土しているが、骨角器が主で、中には中国の新石器文化の中でも初めて見られるような加工が精巧な多くの骨製・木製用具がある。特に第4文化層から出土した170点余りの骨耜は注目され、主要農耕具であるとともに、河姆渡文化を特徴づける遺物の一つといえる。一般的に、この長さ20センチ前後の農耕具は大型哺乳動物である水牛の肩甲骨を用いて加工成形されている。これらの出土品と大量の船は、当時の農業経済形態と生産水準をほぼ反映している。

しかしながら、さらに加えて遺跡から出土した動物骨格と狩猟用具を分析してみると、河姆渡文化の稻作経済への依存度がかなり低かったことがわかる。河姆渡遺跡の第3・4文化層では哺乳類27種、鳥類8種、爬虫類3種、魚類8種、貝類1種の計47種の動物骨格が出土している。キバノロ、シフゾウなどの沼沢地に棲息するものから、クマ、サイ、イノシシなどの密林に棲息するものまでが狩猟の対象となっており、可能な限り広範な狩猟活動がおこなわれていたことを示唆している。また、羅家遺跡では40~50センチもの厚さで魚骨堆積層が発見された。このことからは、魚撈経済への依存度がかなり高かったことがわかる。

河姆渡遺跡では狩猟用と考えられる骨鏃、木矛、骨笛、石丸、陶珠などの遺物のうち、骨鏃の出土数が極めて多く、合計1,000点余りの出土量を見る。ところで、骨鏃と土器の使用場所は異なる。土器は古代人の食住にともなうことから、一般的にその使用および廻集場所は集落内にほとんど集中する。これこそが土器が出土遺物の最も多くを占める理由である。しかし、骨鏃は本来集落外で使用される狩猟用具であるから、河姆渡遺跡で出土した骨鏃数はその人間集団が本来の保有していた数のごく一部であるといえる。したがって、こうした資料からも河姆渡文化の人間集団の狩猟経済への依存度がかなり高かったことを裏づけていると見ることが可能である。

この他、河姆渡文化の各遺跡ではヒョウタン果皮、種子、ナラ穂堅果、ヒシ果実、ナツメ果核などが多く出土していることから、その人間集団の採集経済への依存度の高さも明確になった。

以上述べたように、これらの資料から河姆渡文化期においては、人間集団は小範囲での稻作栽培を進めながらも、一方では集落周辺の自然環境の恵みによる狩猟・採集経済を行うことで、十分とはいえないまでも、最低限の生存が可能となっていた。つまり、当時の人口と集落周辺の生業環境とはおおよそバランスがとれていた時期であると言える。このように見ると、河姆渡文化が少ない遺跡数と狭い分布範囲を持つにすぎないのは、その人間集団に対する環境的限界による影響が小さく、生計活動範囲を拡大する動機とエネルギーが強くなかったため、言い換れば、人間集団が大規模な移動を行う必要性が高くなかったからであるといってよいであろう。

集落周辺の環境収容力とその人間集団の農業への依存度は、遺跡数および分布範囲へ影響をおよぼしている。この点を明らかにさせるために、次に中国新石器時代の考古学的資料とアフリカの民族学的資料を挙げてみたい。

黄河中流域に位置し、粟を主要な農作物とする裴李岡文化の年代は河姆渡文化とほぼ同じであるが、集落の周辺環境から獲得することのできる動植物資源は少なく、遺跡で出土した動物骨格と植物の種実また狩猟用具と考えられる石器の出土量も少ない。このことは、農耕への依存度が高かったことを明らかに示している。原始的な農耕段階において、土地を有效地に利用するためには、一般的に休耕を行うことが必要である。しかし、休耕を行うためには、頻繁な移動と居住地の増加が必然となる。裴李岡文化で調査された遺跡数は比較的多く39カ所以上もあり、その分布範囲も広く、河南省中部地区から河北省北部地区までにいたる。また、同様の位置にある黄河中流域仰韶文化の半坡類型は農業経済に高度に依存しており、居住地の移動はかなり頻繁となる。その遺跡分布の密集地域である黄河支流の渭河流域においては、発見された遺跡数や密集度は現代の村落とまったく同じである。現代の村落は基本的に半坡類型の遺跡上に建っていると見てもよい。このように、中国の新石器時代において、遺跡数の多少および分布範囲の広狭は、居住地の周辺環境から獲得することができる動植物資源の多少および農業経済への依存度と密接に関係していると言える。さらに、一般的に人口と生態環境のバランスが崩れると、集落周辺で獲得することのできる動植物資源量が減少する。早期の農耕段階において、獲得可能な動植物資源量の減少は農業の発展を促進したにちがいない。それがある程度の段階に達すると、古代人間集団が自然を大きく改造する生産技術レベルに達し、古代人間集団の移動への動機と移動エネルギーを生み出すのである。

黄河流域の新石器時代文化各時期の経済形態を全体的に考えると、生態環境下での動植物資源量は長江流域の

資源の豊富さの足下にも及ばない。にもかかわらず黄河流域における新石器時代早期から晩期までの遺跡数および遺跡の密集度は同時期の長江流域よりも遥かに高い。黄河流域の人間集団にとって、農耕経済への持続的な依存度の上界は生存を維持する重要な手段であるばかりでなく、必然的に選択せざるをえない道であった。農耕経済へ依存を高度に指向した結果は人間集団の移動範囲と移動エネルギーを持続的に高めるだけではなく、さらに社会機能のシステム化と制度化をも促進した。これらの要因も黄河流域で最終的に夏朝という最初の国家を誕生させた根本的な理由の一つである。

さて、遺跡テリトリーを遺跡住民が食料などを日常的に調達していた領域とみなせば、案の如くアフリカのクン・ブッシュマン（Kung Bushman）に見られるように、狩猟・採集経済社会ではホーム・ベースを中心として恒常に生業活動を行う範囲は、一般的に半径10キロを越えない。この範囲内で動植物資源の豊富な時期には効率的な食料獲得が可能であり、集団の行動域は10キロ以内となる。しかし何らかの要因により、この半径内で効率的な食料獲得が不可能になると、かれらに移動する動機が生じる。こうなると、必要に応じてホーム・ベースを移すことになり、従って新たなテリトリーが生じる。

前に述べたように、河姆渡文化期において、河姆渡文化の人間集団は完全な狩猟・採集経済を行なってはいられない。しかし、狩猟・採集活動と農耕による複合的な経済形態ではあるものの集落周辺の動植物資源により多くを依存しているところに、クン・ブッシュマン（Kung Bushman）の狩猟・採集経済社会の生業活動様式を参照する理由がある。そしてこうした観点からも河姆渡文化の人間集団は日常的に食料獲得が容易であったと見なし得るのであり、従って居住地を移動する動機とそのエネルギーは高くなかったものと考えられよう。換言すれば、河姆渡文化期は長江デルタ地帯新石器時代の相対的安定期であると考えられるのである。

馬家浜文化期における農耕が水稻栽培を主としていたことは、出土した穀米と頻繁に使用されるようになった新出の農耕具から明らかにされた。そして、その農耕経済への依存度は明らかに河姆渡文化期よりも高いことが見てとれる。狩猟用貝と考えられる骨器の出土量が明らかに減少していることもこのことを証明している。中村慎一氏の統計によれば、馬家浜遺跡上・下層で計14点、羅家角遺跡第1・2層で計9点、梅塘遺跡<sup>27</sup>下層で計7点、松澤遺跡下層で計6点、河姆渡遺跡第2層で計6点、圩墩遺跡<sup>28</sup>中層で計5点である。ただし青墩遺跡<sup>29</sup>下層はすこし異なっており、出土量は比較的多く178点である。他方、馬家浜文化の遺跡では大量の陸生・水生動物の骨格が発見されている。馬家浜遺跡では200平方メートル余りの調査区域内で、出土した獸骨総量が土器の破片に比べおよそ10倍以上にもぼっており、ある箇所では20~30センチの厚さの堆積がすべて破碎された獸骨であった。しかし、大量の獸骨を出土した遺跡、あるいは地層はほとんど馬家浜文化の早期に属している。ところが晩期段階の遺跡あるいは地層での出土量は極めて少ない。

以上の出土資料からみると、馬家浜文化期では農耕を主とする経済生活が行われたと同時に、狩猟・採集活動は経済領域中に一定の比重を占めていたといえる。河姆渡文化期に比べると、馬家浜文化期の経済活動中における農耕と狩猟・採集活動の上位関係はすでに逆転していた。この時期の狩猟・採集経済の漸次的な減少と農耕経済への依存度の高まりと共に、馬家浜文化期人間集団の移動動機と移動エネルギーも高くなる。したがって、その文化集団の行動範囲は次第に拡大し、調査された遺跡数も20カ所余りに増えている。馬家浜文化集団の上位な移動範囲は浙江省の杭州から嘉興および湖州に至る。さらに、江苏省の寧鎮山脈の北陰陽營遺跡<sup>30</sup>と連雲港二溝村遺跡<sup>31</sup>までは馬家浜文化要素が見られる。それぞれの文化要素からみて、この時期は長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の移動準備期であるとみられる。

松澤文化期における各遺跡の出土資料は明らかに文化要素の激しい変化を示している。まず前述したのと同様に、動物骨格と狩猟用貝の資料を使ってその変化を論じてみたい。松澤遺跡中層で鑑定可能な動物種類は下層出土のものと同じであるが、動物骨格の数量は極めて少ない。青墩遺跡中層では少量の鹿角と獸骨が出土している。ところが松澤文化に属する他の遺跡では動物出土資料はまだ発見されていない。

骨器の数量について、松澤文化の各遺跡報告書を精読してみると、骨器の出土した遺跡は松澤遺跡中層と圩墩遺跡中層の2カ所しかなく、しかもその出土数は前者では極めて少なく5点、後者の発掘報告書は具体的な数字

を載せていないが、多くはないであろう。

良渚文化期に移行してから、各遺跡では動物骨格はたまに発見されるが、その数は極めて少ない。加えて、骨鑑は1点もないか、少なくとも各遺跡の発掘報告書にはその記載がない。

以上の資料を踏まえれば、松澤文化期においてはある程度の狩獵・採集経済は存在していたと言つてよいが、良渚文化期に移行すると、長江デルタ地帯における古代人間集団は約2,000年にわたって続き、生業経済の補充的位置にあった狩獵・採集経済をついに放棄したことが明らかである。

一方、狩獵・採集経済比重の低下と最終的な放棄までの過程に伴い、経済生活の根本的な転換は次第に加速し、松澤文化中期にはすでに広域的な農耕が生業経済の主体となっていたとみられる。さらに良渚文化期には完全な広域農耕経済への転換が完成した。この転換の過程は前述した資料によって証明可能であるのに加え、松澤文化・良渚文化の各遺跡で大量に出土している高度な農耕経済に使われた農耕工具も十分にその転換の様相を反映している。両時期の農耕具に関しては、多くの著作で言及しており、ここであえて述べる必要はないであろう。

さて、広域農耕経済が拡大するにしたがって、松澤文化と良渚文化の人間集団における動機と移動エネルギーが非常に高くなつたことは明らかである。前期に比べ、両時期の遺跡数と遺跡の分布範囲は自覚ましく拡大することとなった。松澤文化の遺跡数は60カ所余り増え、その分布範囲は江蘇省の太湖流域を中心とする地域と浙江省の一部に拡大した。

さらに、良渚文化の遺跡数は徐朝龍氏の統計によって、400カ所近くに上る。目下のところで主要な分布地域における代表的な遺跡の数を上げるとすれば、江蘇省常熟地域に23カ所、昆山地域に28カ所、上海地域に10敷カ所であり、遺跡の分布が最も密集している浙江省嘉興地域では、180カ所あまりに達している。その分布範囲は太湖に囲まれ、南は錢塘江を越え、北は江蘇省北端の阜寧県にまで及び、西は無錫県を含むという、約5万平方キロもの広域にわたっている。

遺跡数の大量増加と分布範囲の大幅な拡大は人口増加で広域農耕経済をおこなった必然的な結果である。相対的に安定した生産は基本的な食生活を保障し、ひいては人口の持続的増加につながる。その一方で、人口の増加は新たな生存空間を必要とし、それによって、豊富な労働力と複雑な栽培過程を必要とする稻作農耕の地域的拡大が加速されることになる。また、広域農耕経済の根本的な転換は、人口と空間・生態環境間の矛盾を顕在化させた。さらに、單一栽培による農耕経済に完全に依存することは、古代人間集団の対応限度を超える自然災害に遭遇すると、手も足もでないことになる。従って、この矛盾を効率的に解決し、自らの生存を維持するためには、当地域内の人間集団はより広域的な移動を進ばざるを得なくなる。

それぞれの資料から考えると、松澤文化期と良渚文化期は長江デルタ地帯における古代人間集団の大規模な移動時期であり、特に、良渚文化の中期からは更に強烈な大規模な移動時期に入ることが明瞭に認められる。

ところで、松澤文化中期に開始された長江デルタ地帯古代人間集団の大規模な移動原因は、人口の増加で生存環境を変化させた以外に、古気候の変化およびその変化でもたらされた古地理の変化とも密接な関係がある。

生物学者の竺可楨氏は、花粉分析の結果と古代堆積物にみられる動植物種の傾向から、今から3,000~5,000年以前においては、この地域の一月平均気温は現在より3度から5度高かったと推定している<sup>23</sup>。

さらに、王開闢・張玉蘭氏は、長江デルタ地帯の3カ所の遺跡で採取された花粉分析の資料を用いて、同地域の過去1万年以来の古気候復元を試みた<sup>24</sup>。その研究結果で関係する部分をまとめてみると以下のようになる。

第一寒冷期：10,300~9,500年前。冷涼・乾燥。

第二寒冷期：9,500~7,500年前。冷涼・乾燥。気温は今より1~2度低かった。

第一温暖期：7,500~5,000年前。「アトランティス」とほぼ同じであり、気候の最適期と言われている。温度、湿度共に上昇し、年間平均気温は現在よりも2~3度ほど高く、降水量も現在より500~600ミリ多かった。

第二寒冷期：4,000年前後。冷涼・乾燥。

第二温暖期：3,885~3,550年前。年間平均温度は現在より1~2度高く、降水量は200~300ミリ多かった。

第四寒冷期：約3,000年前。冷涼・乾燥。

第三温暖期：2,500年前。温暖・湿润。

第五寒冷期：2,000～1,650年前。冷涼。

三人の研究結果から見ると、長江デルタ地帯では気候と気温の変動は異常なほど頻繁に繰り返されていた。また、各遺跡の堆積状況は前述の変動とほぼ一致している。錢三漾遺跡の良渚文化層の上には泥炭層と沼鉄鉱層が複数、水田坂遺跡の良渚文化層の上には一層の黒灰層と沖積土層が堆積していた。低平な平野にある梅壠遺跡では洪水の跡が最も著しく馬家浜文化の地層中に厚さ約11～40センチの洪水堆積層が見つかっており、さらに、良渚文化地層中では厚さ43～90センチの泥炭層が形成されていた。以上のような各遺跡の堆積様相からみて、馬家浜文化時期から良渚文化時期において、相当規模の洪水に襲われたことが明らかである。

さらに、古気候の変化、とりわけ温暖期から寒冷期への転換は、稲の栽培および古代人間集団の生業に不利な影響を与えたはずである。南京の北にある高郵遺跡第8、7、6、4層では炭化米が出土し、江蘇省農業科学院の湯陵華氏はそれを詳細に分析された。その遺跡最下層の第8層から出土した炭化米は、全体に小ぶりで瘦せており、また大きさにばらつきが見られないという結果が得られた。ところが、第7、6層で見つかった炭化米は全体に粒が大きくなり、また大きさのばらつきも目立つようになる。同遺跡第8層の年代は約6,000年前で、第4層の年代は約5,000年前と、馬家浜文化期と松澤文化期の年代とほぼ同じである。この間の米粒の大きさの変化は気候の変動による稻作栽培への影響と関係があるのであろう。こうした分析はまださほど多くはないが、長江デルタ地帯では同じような現象があちこちで見られたことであろう。いずれにせよ、この変動は農耕経済の持続的発展に影響しただけでなく、農耕経済に依存する古代人間集団社会に対しても激しい揺さぶりを与えたものと予測される。

古気候の変化は古地理環境を変化させ、古地理環境の激しい変化は古代人間集団の生存環境に影響を与えたであろう。日本人考古学者である中村慎一氏の研究結果によると<sup>36</sup>、アトランティス期には気候の温暖化で海面が上昇し、長江河口から杭州湾の沿岸にかけての地域では現在よりも海岸線が内陸に及んでいた。その後、気温の冷涼化にともなう海面の低下と沖積作用の進行によって、次第に現在の海岸線に近づいていった。各時期の海岸線を正確に推定することは困難であるが、江蘇省常熟市福山から上海奉賢縣柘林にいたる、いわゆる「岡身」地帯が紀元前4,000～3,000年頃の海岸線の跡であろうことはほぼ間違いない。また海岸線の変動にともなって内水面も変動していたようである。当地域では一般に温暖期は湿润期でもあるから淡水域は拡大した。逆に冷涼期は乾燥期でもあり、したがって淡水域は縮小した。松澤文化および良渚文化の遺跡である澄湖遺跡<sup>37</sup>が、現在では水を湛えている澄湖の湖底にあり、しかもこの遺跡では多くの井戸が検出されていることや、また、良渚文化の淀山湖遺跡<sup>38</sup>がやはり湖底に存在することなどはその証左となる可能性がある。このように、古気候と古環境の変動は、該地域の人間集団の生存と発展に対して、深刻な影響を与えたと見なせよう。

以上述べたように、長江デルタ地帯における新石器時代人間集団は松澤文化期からとりわけ良渚文化への移行期においては、人口増加による生存空間の矛盾の顕在化と、古気候の変化による地理環境の悪化が、当地域における人間集団の大規模な移動をもたらした二つの根本的原因である。そしてこの大規模な移動は周辺地区の新石器時代文化集団に強い影響をもたらしたばかりでなく、中国文明の形成に対しても深遠な影響を生み出した。

長江デルタ地帯における新石器時代文化集団は二つの矛盾に臨むことになる。一つは、大規模な移動を行う過程で、各文化集団間での交流と競争が生じるために、個人あるいはある集落住民の生存は集団の力に依存しなければならなくなる。したがって、それぞれ大小規模の各組織を作ることが必要となっていた。もう一つは、自然災害である洪水に対応するために、それぞれの治水施設を造る必要が生じた。これらは個人あるいは単独の団体の力だけでは完成することができない。たとえば、浙江省余杭縣西部にある良渚文化の莫角山遺跡は周囲の平地から立ち上がる巨大な高土台で、ほぼ長方形をなし、東西670メートル、南北450メートルで、現在でもその高さは5～8メートルもあり、総面積が30万平方メートル以上に達する。さらに上台の上には三つの台基が築かれており、現存高でも2メートルくらいあり、一・二号台基の総面積は17,000平方メートル、二号台基の総面積は6,000平

方メートル、三号台基の総面積は1,500平方メートルである。水害を避けるために造られたこのような巨大な土台施設および他の多くの堤防施設などは各集落を組織しなければ、絶対に完成することができない。このような巨大土木工事を進める中で組織の制度化・システム化と集中化された権力が次第に形成され、最終的に絶対的な権力を握る階層を生み出していく。

自然界、特に水害との闘争は長江デルタ地帯における社会の転換と文明を発生させた強力な外在的な動力であると思っている。現在でも治水は長江流域住民の重大な課題である。長江文明の形成と黄河文明の形成とは文明の異なる二つのあり方である。たとえば、長江流域の新石器時代の城壁と他の大規模な土木構造は一般的に水害を避けるために造られたものであり、この建築の造りかたと構成によって、その機能を十分に裏づけている。他方、黄河流域新石器時代の城壁は一般的に敵対する集団に抵抗するために造られた。良渚文化中後期の年代に相当する竜山文化の中原地区河南省登封市にある王城岡古城遺跡<sup>⑦</sup>と淮陽市にある平輜台古城遺跡<sup>⑧</sup>などの城壁は険しいだけでなく、さらに平輜台古城の城門の両側には門衛室が建てられており、これら古城の機能は敵対する集団に向けての防護する役割であったことが知られている。戦争の武器として使われたと考えられる石鎚、石矛などの遺物は竜山文化の各遺跡で大量に出土し、また、人骨の捨て場、無頭墓葬、無下半身の骨格、石鎚に貫かれた頭骨といった戦争と関係があると考えられる資料が竜山文化の多くの遺跡で発見された。しかしながら、長江下流域における各遺跡では戦争と関係する遺跡・構造、そして遺物はまだ見つかっていない。黄河流域の新石器時代後期である竜山文化期においては、人口と村落の密度は長江デルタ地帯より遥かに高いにもかかわらず、自然資源は長江デルタ地帯よりも少なく、また休耕を必要とした稲作栽培が行われていたので、土地に対する欲求は強くなっていた。このため各個人集団は相互の争いを避けることができなかつたであろう。このように闘争を繰り返す過程で、黄河流域における新石器時代人間集団の社会組織は次第にできあがつていった。つまり、階級闘争は黄河流域における文明起源の根本的原動力であると考えてよいであろう。しかし、この問題に関してはここで触れず、別稿で改めて詳しく検討することにしたい。

#### 4 謙文化へのその影響

以上、生業形態と自然環境変動の視点から長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の移動について検討を行った。この地域では約3,000年の文化発展期の間、とりわけ良渚文化中後期から、黄河中・下流域と長江デルタ地帯が激しい社会変動期に入ったといえる。この段階はまた中国古史伝説時代と呼ばれている。この時代の歴史に関しては、「竹書紀年」「尚書」「山海經」と山馬遷によって書かれた「史記・五帝本紀」などの豊富な古代文献中に大量の神話伝説的資料が記載されている。これらの文献史料を読んでみると、長江デルタ地帯において人間集団が行った頻繁な移動と、移動の過程で周辺の人間集団との間で生じた交流と戦争の手がかりを見つけることができる。さらに、出土した考古学的資料と稻作農耕の黄河流域までの伝播もそうした移動の結果を明らかに示している。長江デルタ地帯における新石器文化集団の移動は周辺文化に深遠な影響を与えただけではなく、その影響は海を隔てた遙かな日本列島の縄文文化までも及ぶ。この問題に関して未熟なものではあるが、日本考古学を勉強する中で生じた考え方をまとめてみたい。

まず、この問題を触れる前に、大陸と日本列島の地理的な変遷を少々述べる必要がある。

日本列島は大陸と陸続きであったことがあるが、一体いつごろ大陸から離れたのか、現在までに定論がない。しかし、最近ではプレート・テクトニクス理論によって、日本列島は1,500万年前に基礎ができ、現在の日本列島の骨格は800~200万年前につくられたという<sup>⑨</sup>。その後、数回の氷期の発生は日本列島と大陸の海上距離を縮ませ、とりわけ20,000~18,000年前の氷期の最盛期であるヴュルム氷期から13,000年前までに、海面が現在より140メートル低く、朝鮮海峡と津軽海峡は陸橋になった。地理変遷とともに、マンモスやナウマンゾウなどをはじめとする動物群は朝鮮半島と九州陸橋を経由して日本列島に渡来し、大陸の人類もこのコースに沿って日本列島に到來したという。この推論は出土した多くの資料で裏づけられる。その後海面水位は上昇したが、大陸の新石器時代人間集団の日本列島への移動は完全に遮断するにはいたらなかったであろう。そこでいくつかの資

料からこの問題を検討してみたい。

日本列島において今までに発見された最も古い縄文時代の遺跡の内では長崎県の福井洞穴<sup>39</sup>が最も有名である。この遺跡の第3層では隆起土器と細石器が共伴して出土した。土器の放射性炭素分析による絶対年代は、12,700±500年という測定結果が出ており、共伴する細石器からみてもおよそ妥当なデータであるとみられる。また、12,000年前後の上黒岩岩陰第9層、泉福寺洞穴、花見山、上野第1文化層などの遺跡でも隆起土器と細石器が伴出でて出土した。

中国では土器と細石器が伴出した明確な遺跡は出竜江流域北部にあるNovopetrovka 遺跡と、それ以南にある昂昂渓遺跡の2カ所しか発見されていない。年代判断については自然科学的な年代測定データはないが、Novopetrovka 遺跡で出土した細石器の製作技法と形状によって、最も早い時期の土器出土遺跡であることが知られる。昂昂渓遺跡では多くの遺物が出土され、その中の無文土器と沈線文・押引文土器および細石器の製作技法によって、その年代は北部のNovopetrovka 遺跡より遅いものであることが明らかである。

昂昂渓遺跡の土器製作技法は朝鮮半島隆起土器と同様であると見られた。また、日本列島では細石器と土器が伴出する各遺跡の出土品は、朝鮮半島や中国との関連性が非常に強いことが認められている。さらに、これらの遺跡分布をみると、朝鮮半島と最も隣接する北部九州地域に限定されている。このことから、日本列島における縄文時代草創期の隆起土器の発祥は、中国の出竜江流域から朝鮮を経て、九州一本州方面へ伝播したものと考えられている<sup>40</sup>。また、黄河流域にある中国の最も早い新石器文化の磁山文化下層から出土したおよそ7,000年前の隆起土器は、福井鳥浜遺跡の出土品、朝鮮半島羅津遺跡の出土品と同じであると見られている。

東アジアにおける石器の分布と特徴によっても大陸と日本列島の関連性が認められる。すなわち、中国華北・東北地域、朝鮮半島、東シベリア、沿海州および日本列島から出土した両面調整三角形半基・凹基鑿は、形からみれば区別できないほどよく似ている<sup>41</sup>。大陸と関連性があると考えられている縄文時代の遺物を分析してみれば、草創期の隆起土器と石器をはじめ、大陸系文化要素は日本列島の西北端に位置する東北地域、黄河流域から伝来していたことが明らかである。

さらに、旧石器時代に遡ると、日本列島との関連性も非常に強い。こうした文化要素が日本列島に移動したルートについては、朝鮮半島を経由し、海を渡ってたどり着いたという結論が一般的に受けられている。

ところが、縄文文化早期段階に入ってからは、長江デルタ地帯における新石器文化と関連性を持つと見られる出土品や遺跡が注目されるようになる。河姆渡遺跡で大量に出土した耳飾りの玉器は縄文文化早期の遺跡で多く出土しており、河姆渡遺跡の同じような丸玉も静岡県富士川町木戸などの遺跡で出土している。また、埼玉県浦和市北元宿遺跡では長さ2m、幅50cmぐらいの墓坑が発掘され、その墓坑内から早期末の土器が発見され、頭部があった位置には太い環状の耳飾りの玉器が二つあり、丸玉と半月状の玉が胸部付近の位置にまとまっていた。こうした墓坑の構成と副葬品および副葬状況は河姆渡遺跡の墓葬と同じである。さらに北元宿に隣接する遺跡では耳飾りの玉器と玉を伴った墓坑が発見された<sup>42</sup>。このような考古学的資料はまだ多く確認されているが、ここで詳しく述べない。

この他、長江デルタ地帯の新石器時代文化と関連性を持つと考えられる高床建築や漆、ヒョウタン、鹿角斧といったものは日本各地の縄文時代遺跡で発見されている。これら資料によって、日本列島と長江デルタ地帯新石器文化との交流は縄文時代早期本、およそ7,000年B.C頃から始まったことが明らかであろう。

では、縄文時代早期において長江デルタ地帯の文化要素はどこを経て、日本列島まで移動したのであろうか。これに関する議論がある。一つは長江デルタ地帯から海を渡って直接日本まで移動する華中ルートであり、もう一つは長江デルタ地帯から山東半島・遼東半島・朝鮮半島を経由する北向ルートである。

河姆渡文化期は相対的な安定期であるが、長江河口付近の舟山島では河姆渡文化期の白泉遺跡が見つかっており、加えて、河姆渡遺跡では丸木舟と櫂が発見されている。この発見によって、河姆渡文化期の人間集団はある程度の航海技術を身につけていたことが判明した。しかし、この簡易な丸木舟で長距離の東シナ海を渡り、日本列島まで到達することは不可能であろう。ところが、この時期の人間集団は海岸線に沿って陸伝いに山東半島に

移動することは難しくなかったであろう。一方、前述したように旧石器時代から黄河流域の住民による山東半島・朝鮮半島・日本列島への移動は始まっていた。この過程で蓄積された知識や経験は、北向へ移動する長江デルタ地帯の住民に対しても役に立っていたであろう。この一つの証拠は朝鮮半島で櫛文土器の出土する早期の遺跡から耳飾りの土器が発見されていることである。また、82年には長江デルタ地帯から1,000km以上離れた山東半島にある栖霞縣大竹島付近の深さ約30mの海底で松澤文化期の土器が魚網にかかり発見された<sup>36</sup>。この発見によつても、松澤文化期の住民は海岸線に沿い、北向へ移動するルートをよく知っていたことが明らかである。河姆渡文化期は松澤文化期より早いが、この資料から松澤文化期の人間集団の北向への移動は河姆渡文化期の人間集団の経験を引き継いで、このルートを身につけたのであろうと考えられる。

さらに、以下の古地理環境の復元結果によって、河姆渡文化期の人間集団は前述したルートに沿う移動は可能になった。中国の研究者は廟島列島から出土した淡水産の大きなシジミと揚子江のワニの骨によって、3,500～4,000年前の渤海は淡水湖であり、その渤海が海になるのは4,000年から後であることを指摘している。加えて、山東半島と遼東半島との距離は90海里しかなく、その間に30余りの島々からなる廟島列島が横に並んでいる。遠い島でも20海里以内、近い島は僅か数海里しか離れていない。山東半島と遼東半島で出土した考古学的資料から両地域の住民は6,000～7,000年前にも海を渡り、頻繁に文化交流が行われていたと知られている。これら資料によつて、山東半島・廟島列島・遼東半島・朝鮮半島に沿って日本列島まで移動することは、航海技術があまり発達していなかった河姆渡文化期の住民にとっても、実現することができたルートであろう。

## 注

- (1) 浙江省文管会「河姆渡遺址第一期発掘報告」「考古学報」1978-1
- (2) \_\_\_\_\_ 「余杭瑤山良渚文化祭壇遺址発掘簡報」「文物」1988-1  
\_\_\_\_\_ 「余杭匯觀山良渚文化祭壇興墓葬」「中國文物年鑑」文物出版社 1994年  
楊楠・趙華「余杭莫角山清理大型建築基礎」「中國文物報」1993年10月10日
- (3) 吳山菁「略論青蓮崗文化」「文物」1973-6
- (4) 中国社会科学院考古研究所「中国考古学炭素14測定数据集1965～1981」「文物出版社 1983年
- (5) 上海博物館試験室「熱歎光測定年代報告」「上海博物館集刊」2 1982年
- (6) 浙江省文管会「浙江嘉興馬家浜新石器時代の発掘」「考古」1962-7
- (7) 南京博物館「太湖地区的原始文化」「文物集刊」1
- (8) 上海市文管会「上海市青浦縣松澤遺跡の試掘」「考古学報」1962-2  
\_\_\_\_\_ 「青浦縣松澤遺跡第二次発掘」「考古学報」1980-1
- (9) 中国社会科学院考古研究所「新中国的考古発見と研究」「文物出版社 1980年
- (10) 王仁湘「論松澤文化」「考古学集刊」1 文物出版社
- (11) 南京博物院「江蘇吳縣張陵山遺址発掘簡報」「文物資料叢刊」第6期
- (12) 浙江省文管会「呉興錢三漾遺址第一・二次発掘報告」「考古学報」1962-2
- (13) \_\_\_\_\_ 「杭州水田坂遺址発掘報告」「考古学報」1962-2
- (14) 林士民「浙江寧波市八字橋発見新石器時代遺跡」「考古」1979-2
- (15) 羅家角考古隊「桐鄉縣羅家角遺跡発掘報告」「浙江省文物考古学刊」1981年
- (16) 王和平・陳金生「舟山列島発見新石器時代遺址」「考古」1983-1
- (17) 江蘇省文物工作隊「江蘇省吳江梅堰新石器時代遺址」「考古」1963-6
- (18) 常州博物館「江蘇常州圩墩村新石器時代遺址の調査と試掘」「考古」1974-2  
\_\_\_\_\_ 「常州圩墩新石器時代遺跡第三次発掘簡報」「史前考古」1984-4
- (19) 南京博物院「江蘇海安青墩遺址」「考古学報」1983-2
- (20) 南京博物院「北陰陽營遺址第一・二次発掘」「考古学報」1958-1

- (21) \_\_\_\_\_ 「連雲港市二澗村遺址第二次發掘」『考古』1962-3
- (22) 竹可禎「中國近五千年来氣候變遷的始步研究」『考古學報』1972-1
- (23) 王開亮・張玉蘭「根莖孢粉分析推論沪杭地區一万多年来的氣候變遷」『歴史地理』1
- (24) 中村慎一・「長江下流域新石器文化の研究」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第5号
- (25) 南京博物院「太湖地区的原始文化」『文物集刊』1
- (26) 聞惠芬「從考古資料看太湖地区新石器時代遺址分布的特徵及其與古地理的關係」『史前研究』1985-4
- (27) 河南省文物研究所『登封王城崗興陽城』文物出版社 1992年
- (28) \_\_\_\_\_ 「河南淮陽平糧台龍山文化城址試掘簡報」『文物』1983-3
- (29) 佐原真「日本人の誕生」小学館 1995年
- (30) 錦木義昌・岸沢長介「日本の洞穴遺跡」平凡社 1967年
- (31) 李東注(著)・申鉉東(訳)「アジアにおける朝鮮の初期・新石器文化について」『柵原考古学研究所紀要』第18冊 1994年
- (32) 張宏彦「東アジア大陸の石器文化からみた日本の縄文文化—石錐を中心として」『柵原考古学研究所紀要』第17冊 1993年
- (33) 江坂輝彌「縄文上器文化研究史と展望」『考古学雑誌』第83巻第1号 1997年
- (34) 董楚平『吳越文化新探』

最後ではあるが、小稿を草するにあたり、山梨県埋蔵文化財センター・考古博物館の大塚初重先生、田代孝先生など多くの方々に御指導、御教示をいただいた。また、小林公治氏には日本語を校正していただいた。末筆ながら心より御礼申し上げます。

(1998年12月30日脱稿)



# 縄文時代前期後半から中期初頭段階における 異系統土器の流入の様相について

—山梨県に見た出土事例を中心に—

野代幸和

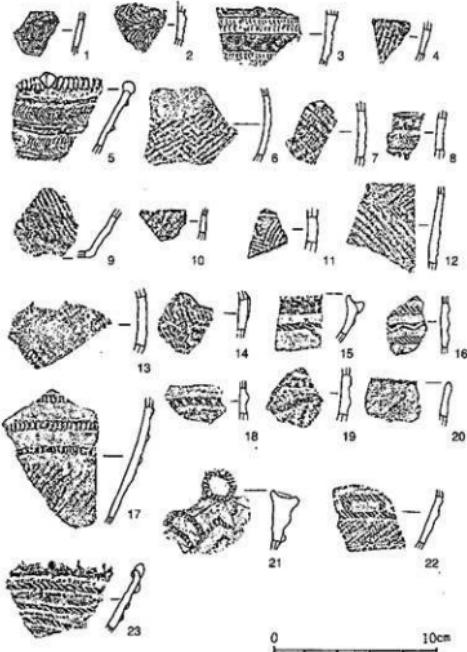
- 1 はじめに
- 2 県内における出土事例
- 3 流入の状況とその特徴

- 4 在来系と異系統土器の共存関係
- 5 まとめ

## 1 はじめに

本県と周辺地域との交流は、縄文時代前期後半に始まる土器群の流入をもって活発化の一途を辿っていたとされているが、その様相についての実態はあまり理解されていないのが現状である。そこでここでは、本県において分布の主体を認めることができない土器群について、異系統土器として取り扱い、その出土例から流入の状況を把握し、その特徴について考えていきたいと思う。ここで示す異系統土器の主な分布地域としては関西、東海、東関東、東北などといった地方がこれに該当する。

その判別については、視覚的な差異（文様・胎土・色調・器厚など）に基づいて、異系統と考えられるものに限定して取り上げるものであり、基本的には搬入品として捕らえられるが、これらの中には模倣タイプのものや折衷タイプのものと考えられるものもあり、この判別方法だけ十分とは考えられないため、ここではこれらも含めて取り扱うものとする。また、ここでは中部、関東地方の土器群については在来系のものとして位置付け、異系統とする土器群からは除外して扱うものとすることを記しておく。異系統土器群の主なものとしては、諸磯式期では関西系の北白川下層式、十三菩提式期では関西系の大歳山式、東北系の大木6式、五領ヶ台式期では関西系の鷹島・船元式、東海系の北裏C1・C2式などがあるが、地域によっては分類が不明確でその名称が決定に至っていないものもあるので、そうしたものは各地方系統別に認識していくことにした。よって、これらの土器群でも関西・東海系と考えられる型式名称に不適切と思われるものもあると思う



第1図 獅子之前遺跡出土土器

が便宜状系統を認識するために用いたので了承願いたい。

遺物のスケールについては、破片類が $1/3$ 、個体資料は $1/4$ に合わせたが例外もあることを記しておく。

## 2 県内における出土例

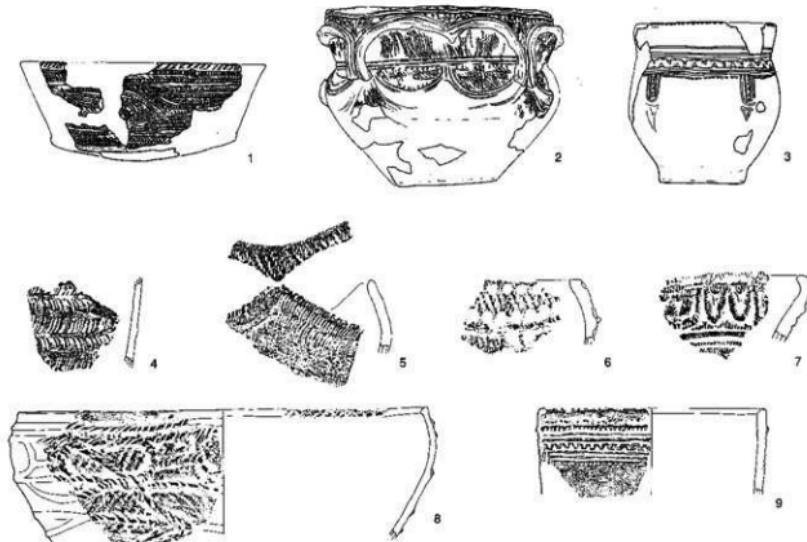
ここでは、遺跡ごとに外来系の土器群を紹介するが、遺構出土のものについてはその伴出関係を把握するため、在来系の土器群と共に併記した。図版番号の次に示した番号は、文献番号に対応している。共伴関係については、Ⅳ章で詳細に扱うものとする。

### 塙市 獅子之前遺跡（第1図）1

前期後葉のものが、合計23点の資料が認められる。条痕文の施された北白川下層I式（1）、大小の爪形文が施された北白川下層IIa・IIIb式（2～5）、浮線文（凸帶文）上にヘラ状工具で刻みを付けられた北白川下層IIc式（6～23）が出土している。北白川下層IIa・IIb式を中心とした（1・4・7・9・10・11・14・20）は第3号住居跡からの出土であり、諸磯b式期の上器群との共伴関係が窺える。また23点中8点については、赤色塗装されている。

### 北巨摩郡長坂町 酒呑場遺跡（第2図）2

破片資料については未発表のため、その主なものについて紹介する。まず個体資料では、B区第5号住居跡から細かい爪形文が施された北白川下層IIb式と考えられる浅鉢（1）、C区第135号土坑より単独出土の北裏CI式の浅鉢（2）、E区第2号土坑から五領ヶ台II式併行の東園東系の鉢（3）が出土している。その他、破片資料では大型の爪形文を持つ北白川下層IIa式（4）、凸帶文と口唇部に刻みを持つ北白川下層IIb式（8）と考えられるが、色調が若干明るめでヘラ刻みも繊細さに欠けるため、模倣の可能性も視野に入れておくべきものである。爪形文や円形刺突文が施された船元I式（5・6）、五領ヶ台II式併行と考えられるが系統不明のもの（7）、

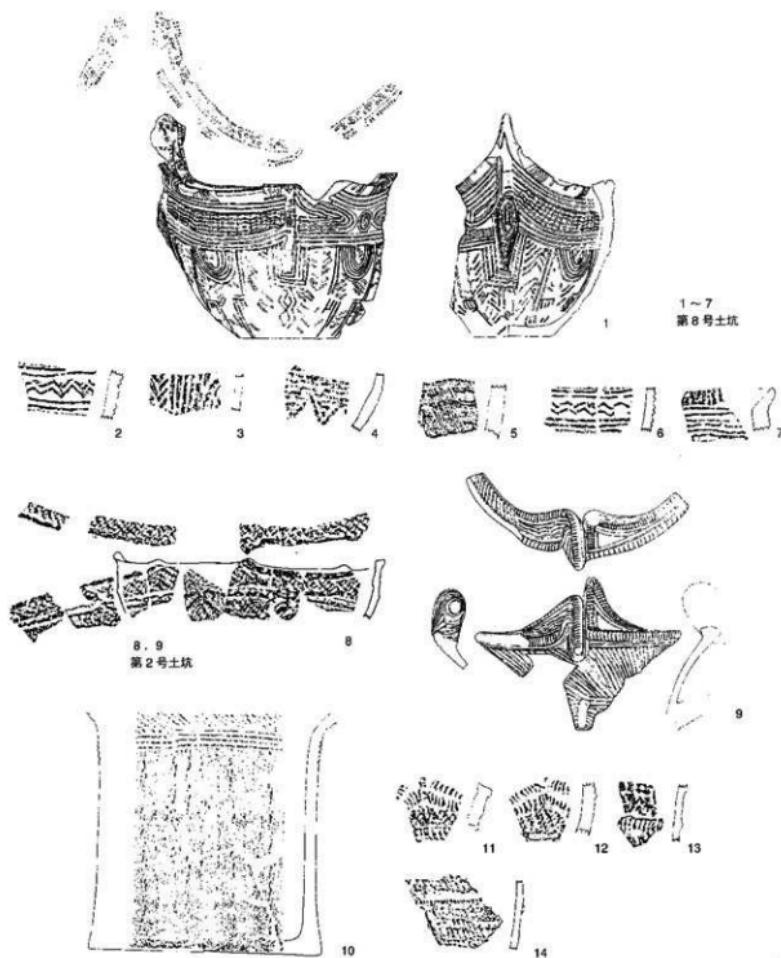


第2図 酒呑場遺跡出土土器

五領ヶ台II式併行の東関東系のもの（9）がある。他にも北白川下層式期の破片資料は約40点認められ、その中でIIb式期の大部分のものに赤色塗彩が認められる。

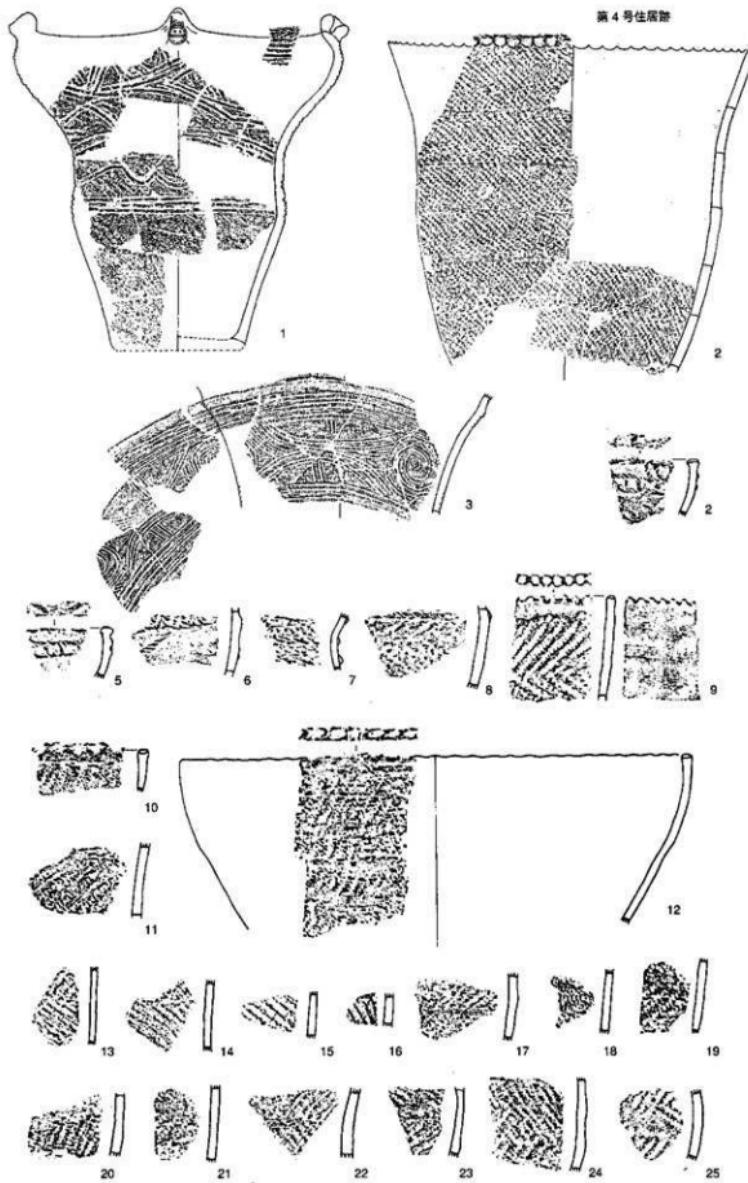
### 北江・摩都大泉村 小坂遺跡（第3図）3

第8号土坑出土のもの（1）は、石川県の真脇遺跡出土のものと酷似しているため北陸系的一群として紹介する。第22号土坑では、関西系の前期末葉土器群（北白川下層III式or大歳山式）の器形・施文を模倣したもの（8）



第3図 小坂遺跡出土土器

第4号住居跡

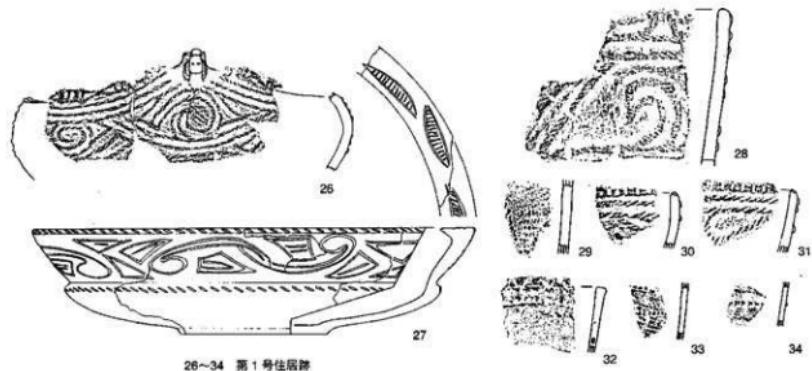


第4図 御所遺跡出土土器(1)

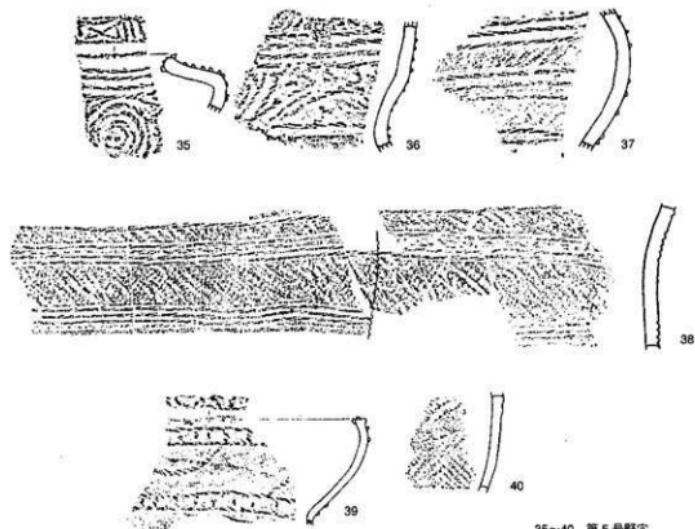
と考えられ、器厚は薄手で、その色調についても白色を呈しているが、つくりは粗雑で繊細さに欠けるのが特徴である。この他〔乙〕状工具による迷続刺突で施した特殊内帶文などと称される大歳山式（11～14）、中期初頭の北陸との関係が強いとされる木目状燃糸文が施された朝日下縛式のもの（10）がある。

#### 北陸摩郡大泉村 御所遺跡（第4～6図）4

諸磯b式期の第1・4号住居跡、第5号竪穴遺構、第2・3号土坑から、在来系の上器群と併出して細い半裁

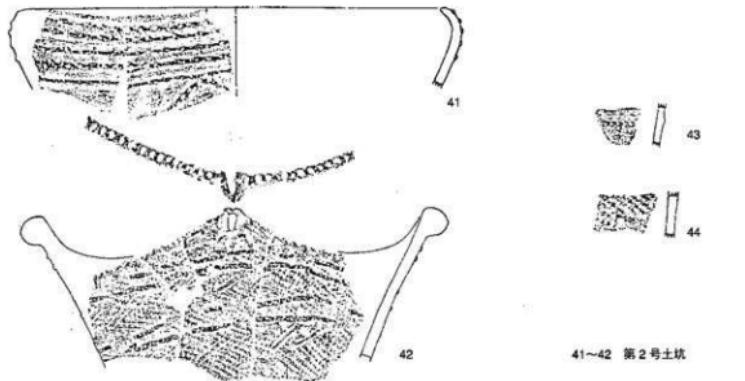


26～34 第1号住居跡

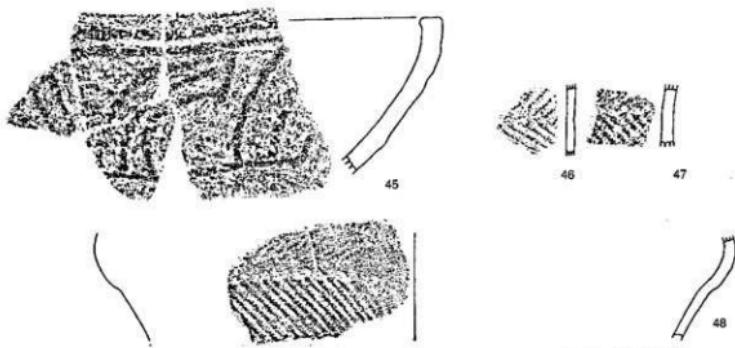


35～40 第5号竪穴

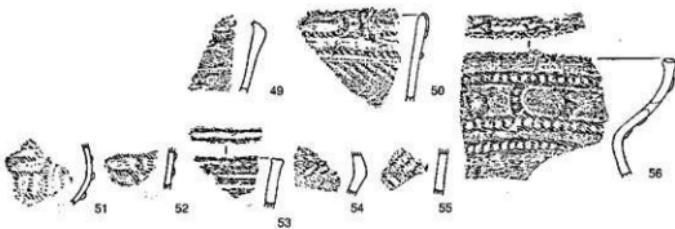
第5図 御所遺跡出土土器（2）



41~42 第2号土坑



45~48 第3号土坑

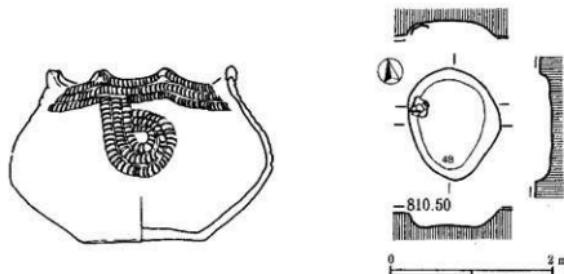


第6図 御所遺跡出土土器(3)

竹管文を施している北白川下層Ⅱb式（第4図7～9、第5図29・32・33、第6図49）と浮線文（凸帯文）上にヘラ状工具で刻みを付け、梯子状に文様を施した北白川下層Ⅱc式（第4図4～8、第5図28・30・31・34、第6図43、50～53、56）が出土している。また、羽状縞文を施した一群（第4図9～25、第5図29・40、第6図44・46～48・54・55）も北白川下層Ⅱc式と考えられ、ⅡbとⅡcでは後者が主体を占めている。赤色塗彩されているものも多い。

北巨摩郡大泉村 宮地第3遺跡（第7図）5

第48号土坑から出土したこの土器は、口縁部に連続した爪形文を施した降線を巡らせるもので、北裏C I式である。



第7図 宮地第3遺跡出土土器・第48号土坑

北巨摩郡大泉村 甲ヶ原遺跡（第8図1・2）6

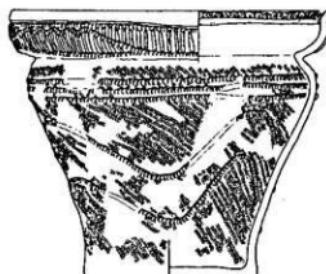
合計2点で中期初頭の関西系のもので、粗い縄文を表面に施し、口唇部などには刻みが認められる（1）と、円形刺突文を施した（2）船元T式が認められる。



第8図 甲ヶ原遺跡出土土器

北巨摩郡小瀬沢町 沢の田遺跡（第9図）7

これは第4号土坑出土のもので、関西系の前期末葉上器群（大歳山式）の器形と口唇部の凹形貼付文は〔2〕状工具による連続刺突で施文した特殊凸帶文を模倣したものか北陸系の流れを受けたものと考えられる。



第9図 沢の田遺跡出土土器

### 東八代郡中道町 東山北遺跡（第10図）8

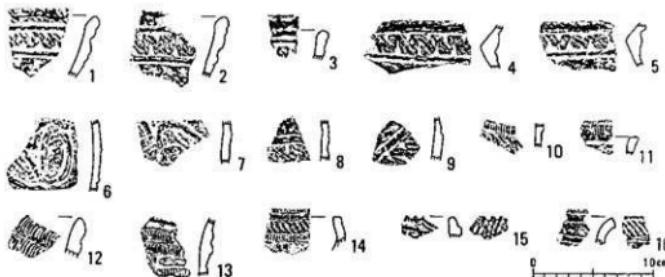
口唇部に〔Σ〕状工具による連続刺突を配した特殊凸帯文を持つ大歳山式土器が2点出土している。（1）は口縁部は半裁竹管による結節浮線文、（2）は摩擦が著しいため判別が難しいが〔Σ〕状工具による連続刺突による結節沈線が施されているものと考えられる。



第10図 東山北遺跡出土土器

### 東八代郡中道町 上の平遺跡（第11図）9

合計16点出土している。前期末葉大歳山式土器（10・11、14～16）が5点見られるが、ただし15については口唇部に刻みを持っているため、北白川下層Ⅲ式の可能性がある。半裁竹管による半隆起線で区画文様帶の中に縄文を充填し、三角印刻文を交互に配置する上器群（1～9）と、口縁部に連続した爪形文を施した隆線を巡らせる土器群（12・13）である東海系の北裏C I式が出土している。



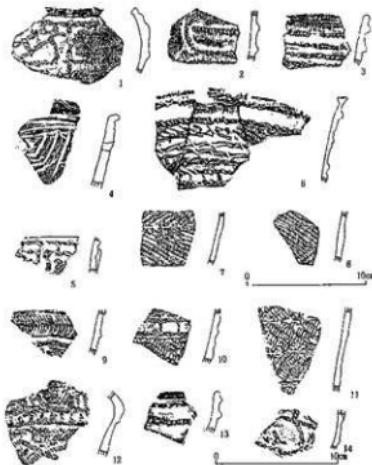
第11図 上の平遺跡出土土器

### 東八代郡境川村 京原遺跡（第12図）10

合計14点出土している。大型の爪形文が施された北白川下層Ⅱa式（9）が1点、残りは浮線文（凸帯文）上にヘラ状工具で刻み付けられた北白川下層Ⅱc式である。有孔上器と赤色塗彩の土器が各1点含まれる。

### 東八代郡境川村 寺平遺跡（第13～15図）11

諸磯b式期の第2号住居跡（第13図1～5）、第3号住居跡（第13図6～15）から北白川下層Ⅱb・c式（11～15）を伴って出土している。また、前期末葉の第1号集石遺構（第13図16～18）からは、集合沈線と三角印刻文が施されたもの（16）と、羽状縄文が施された北白川下層Ⅱc式（17・18）の伴出が確認されている。第2号集石遺構（第14図）では二時期のものが重複しているようで、諸磯b式土器（19～24）と北白川下層Ⅱb式（25～28）、前期末葉の集合沈線と三角印刻文が施された土器群（29～34）と大歳山式（35）の共伴例が認められる。また36は北白川下層Ⅱc式である。この他遺構外（第15図）では、北白川下層Ⅱa～c式（38～48）・北白川下層Ⅲ式（37、50～56）、大木6式の影響下にあると考えられるもの（49）、関西系の粗製タイプで器面に指頭痕が残るもの（60～62）、中部高地系と考えられる粗製土器（57～59）の存在も気になる。また指頭痕のある関西系粗製タイプのものは、本紙では扱わなかったが桂野遺跡からも類似したものがまとまって出土しており興味深い。



第12図 京原遺跡出土土器

#### 東八代郡境川村 標訪尻遺跡 12

未発表のため詳細なことはわからないが、北白川下層Ⅱa～c式が約20点出土している。住居跡より諸磧b式の古段階のものと、大型の爪形文を施す北白川下層Ⅱa式との共伴関係が窺える。

#### 東八代郡御坂町 花鳥山遺跡 (第16図) 13

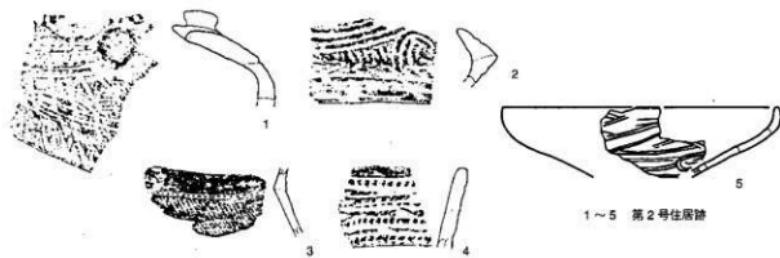
合計36点出土している。内外面に条旗文が施された一群 (1～6) は北白川下層Ⅰ式。大型の爪形文が施されるもので、爪形の両側に側線がない一群 (7～13) は北白川下層Ⅱa式で、その胴部には羽状縄文が併用されている。小型の爪形文が施されるもので、爪形の両側に側線がある一群 (14～20) は北白川下層Ⅱb式で、この段階のものは厚手のものも存在することから、模倣されたものも多いものと思われる。また、赤色塗彩されたものも多い。粘土紐による降帶(凸帯文)を構成し、その降带上にはヘラ状工具による刻みが施されるもので、地文に羽状縄文が施された一群 (27～36) は北白川下層Ⅱc式である。北白川下層Ⅱ式に含まれるものとして羽状縄文を施したもの (21～26) がある。

#### 東八代郡境川村 一の沢西遺跡 (第17図) 14

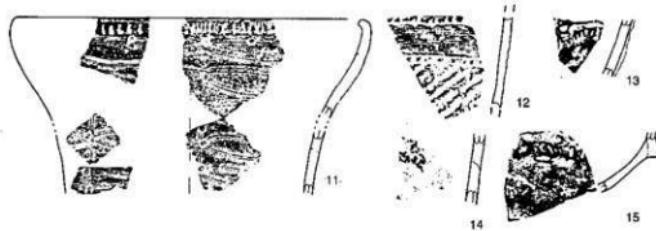
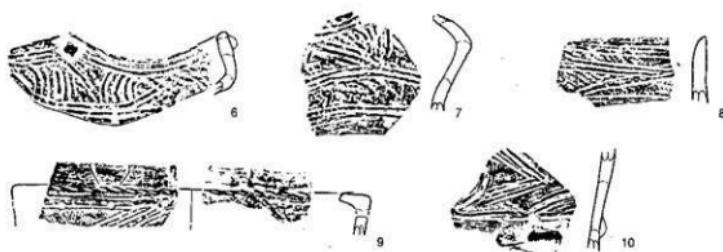
第40号土坑より浅鉢形土器が出土している。これは口唇、口縁、底部付近に粘土紐による隆帶を構成し、その隆帶上にはヘラ状工具による刻みが施されている。また胴部には、半截竹管により弧状、平行沈線による区画文が施され、その内外面には三角、円文様が施されている。器の内外面には赤色塗彩されている。奈良県橿原遺跡出土のものと酷似しており、北白川下層Ⅱb～Ⅱc式間に比定されるものと考えられる。

#### 東八代郡御坂町 桂野遺跡 (第18図) 15

未報告のため主要なもののみに留めるが、第7号住居跡 (第19図) から縄文地に沈線による区画文と斜線文、弧線文が施されたもの (第18図2) と、口唇部に〔Σ〕状工具による連続刺突を配した特殊凸帯文と口縁・胴部には半截竹管による結節浮線文を持つ大歳山式鉢形土器 (第18図1) が共伴關係で出土している。破片資料では、大歳山式土器を模したと考えられる指頭痕が残る粗製土器も伴出している。第57号土坑 (第20図) では、口



1～5 第2号住居跡

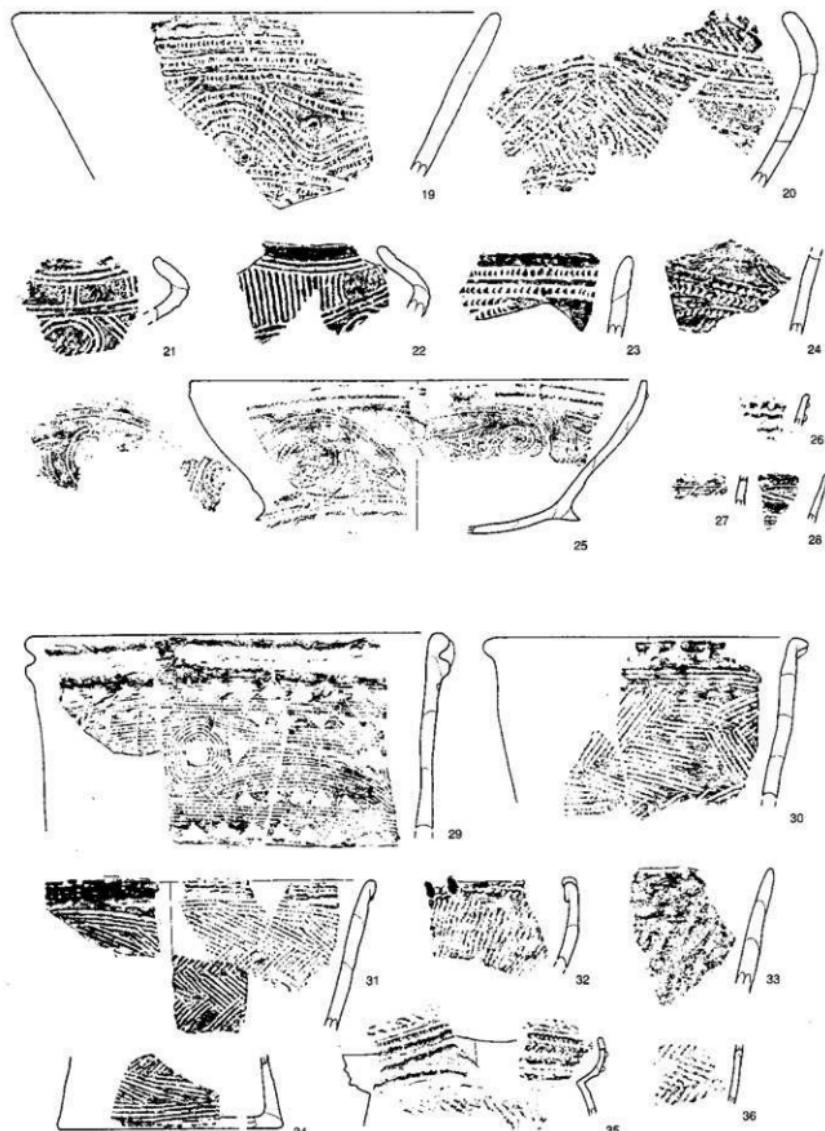


6～15 第3号住居跡



16～18 第1号集石遺跡

第13図 寺平遺跡出土土器 (1)



第14図 寺平遺跡出土土器 (2)



第15図 寺平遺跡出土(3)

唇部が肥厚する縄文地の土器群（6・7）と縄文地に半裁竹管による斜線文と区画文が施されたもの（1・5）、半裁竹管による平行沈線文が充填された中に三角文が施されたもの（2）などと共に、口唇と胴部に〔Σ〕状工具による連続刺突を配した特殊凸帯文を持ち、内面に指頭痕が残る粗製タイプの大歳山式の深鉢型土器（8）が共伴関係で出土している。このほか破片資料の中に、交互刺突文を施す北裏C I式も確認されている。

#### 東八代郡一宮・勝沼町 駅廻堂遺跡群（第21図）16

合計34点出土している。大型の爪形文が施されるもので、爪形の両側に側線がない一群（1・2）は北白川下層II a式である。小型の爪形文が施されるもので、爪形の両側に側線がない一群（3～4）は北白川下層II b式である。粘土紐による隆帶（凸帯文）を構成し、その隆帶上にはヘラ状工具による刻みが施されるもので、地文に羽状縄文が施された一群（5～29）は北白川下層II c式である。口唇部に〔Σ〕状工具による連続刺突の特殊凸帯文が施されたものと半裁竹管による結節浮線文が認められる大歳山式（30～33）がある。

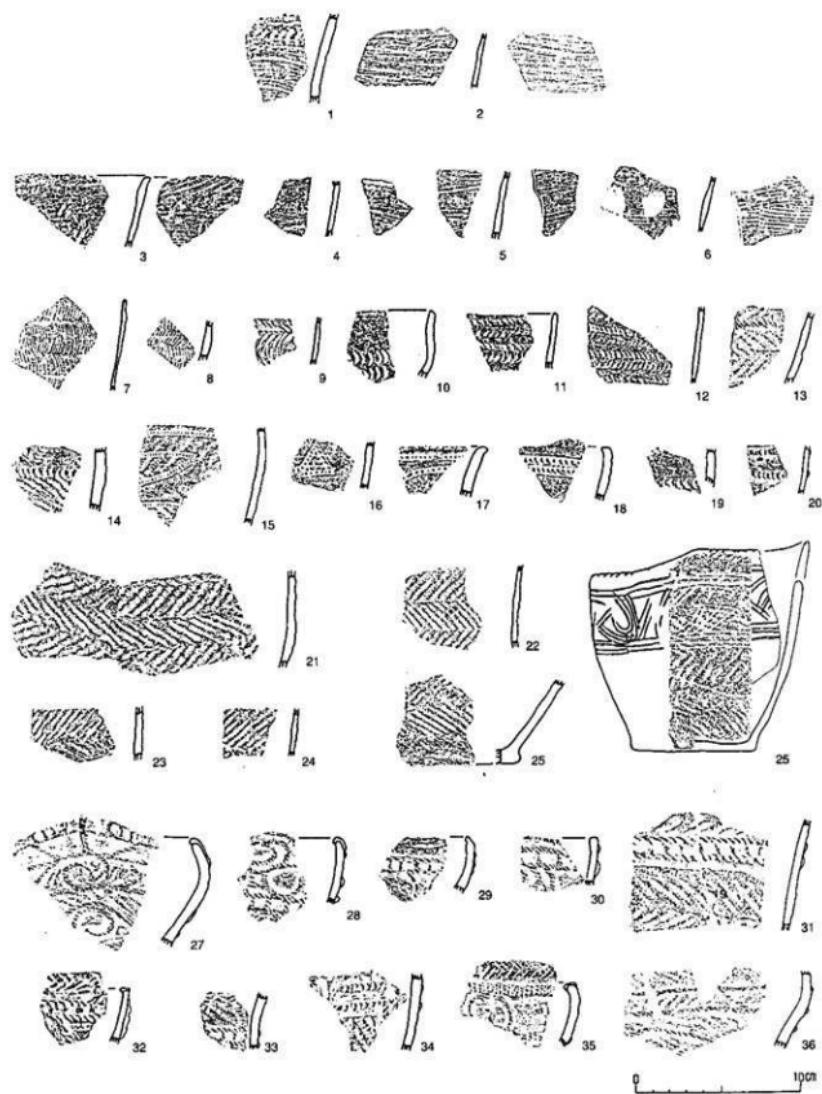
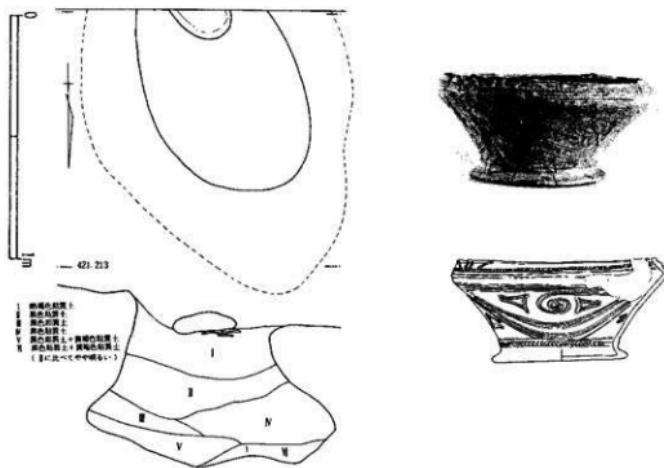
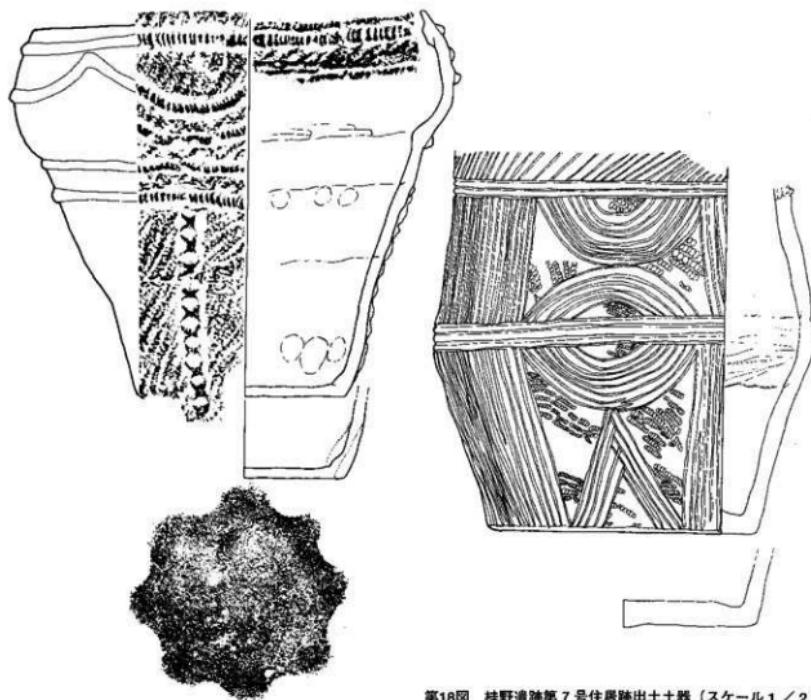


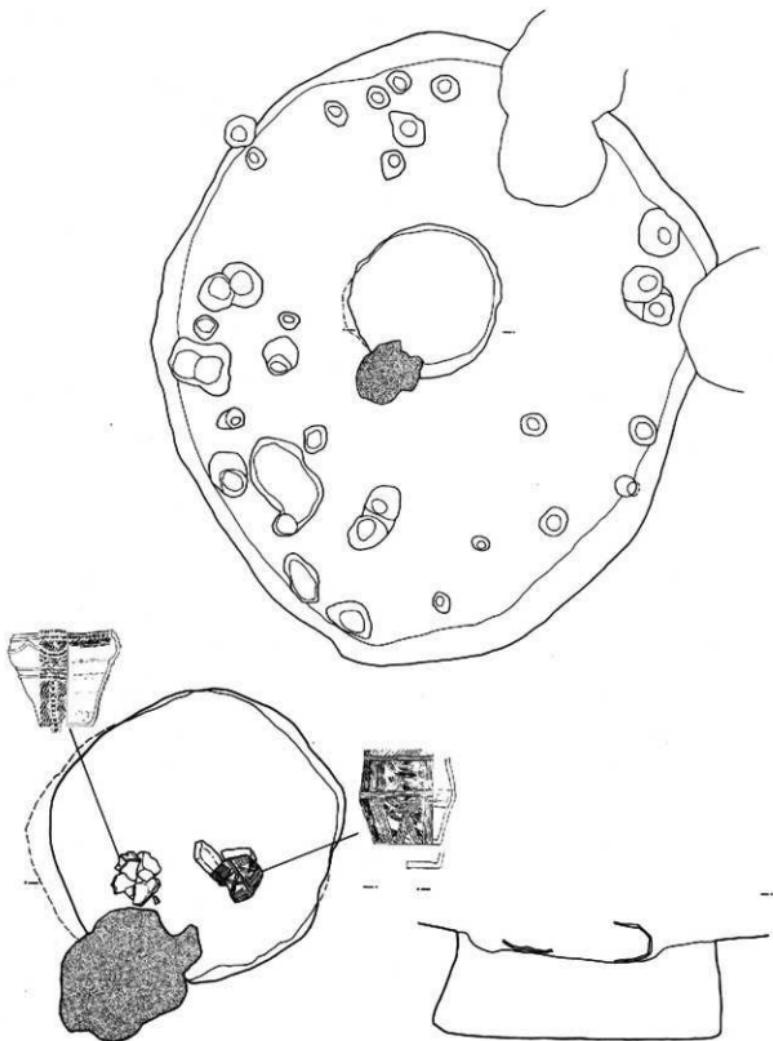
図16 花鳥山遺跡出土土器



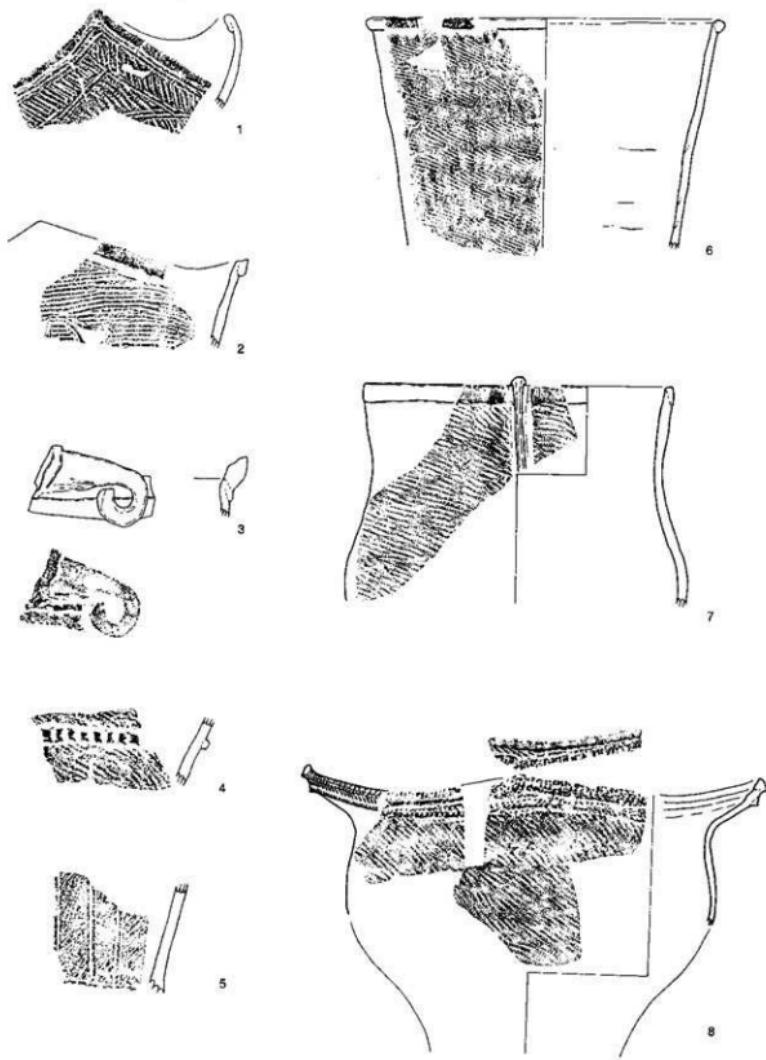
第17図 一の沢西遺跡第40号土坑・出土土器



第18図 桂野遺跡第7号住居跡出土土器（スケール1／2）



第19図 桂野遺跡第7号住居跡・遺物出土状況



第20図 桂野遺跡出土土器

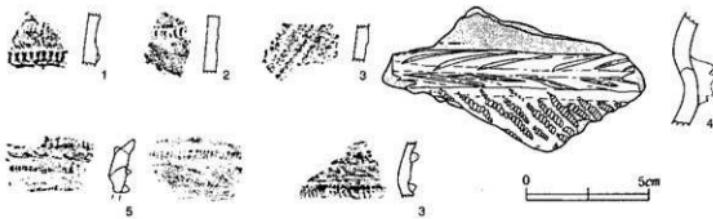
東八代郡八代町 上の平遺跡（第22図）17

合計7点のうち1点は小破片のため未報告である。大型の爪形文が施された北白川下層Ⅱa（1）、小型の爪形文に赤色塗彩された北白川下層Ⅱb式（2）、隆帶上にヘラ状工具による刻みと赤色塗彩された北白川下層Ⅱ



第21図 駅場堂遺跡群出土土器

e式（3・4）、口唇部に〔Σ〕状工具による連続刺突の特殊凸帯文が施されたものと半裁竹管による結節浮線文が認められる大歳山式（5・6）がある。



第22図 上の平遺跡出土土器

東八代郡八代町 三光神遺跡（第23図）18

大型の爪形文が施された北白川下層Ⅱa式と考えられるものが1点出土している。

東八代郡八代町 錦子原遺跡 19

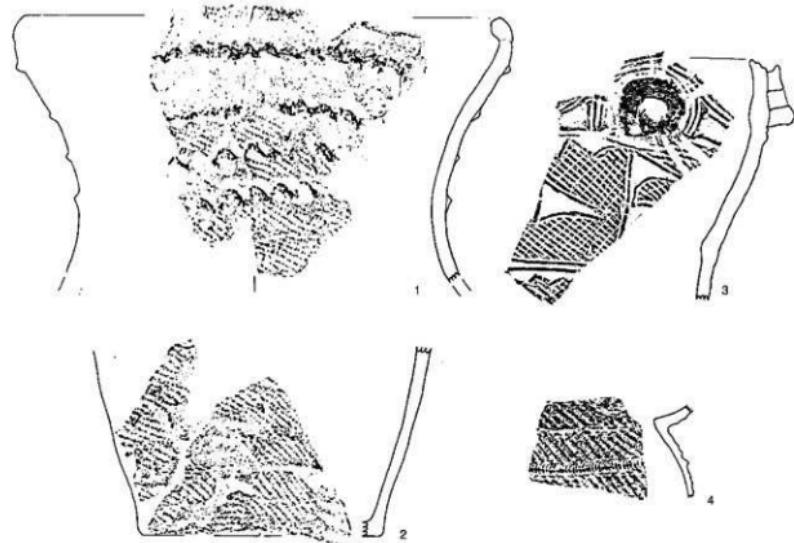
隆帶上にヘラ状工具による刻みと赤色塗彩された施されている北白川下層Ⅱc式が出土している。

西八代郡三珠町 上野遺跡（第24図）20

第10号住居あとから沈縫と三角印刻による区画文の中に籠目文が施されたもの（3）と、口縁部に押付隆帶文を施した上器（1・2）に伴って、大歳山式土器（4）が伴出している。



第23図 三光神遺跡  
出土土器



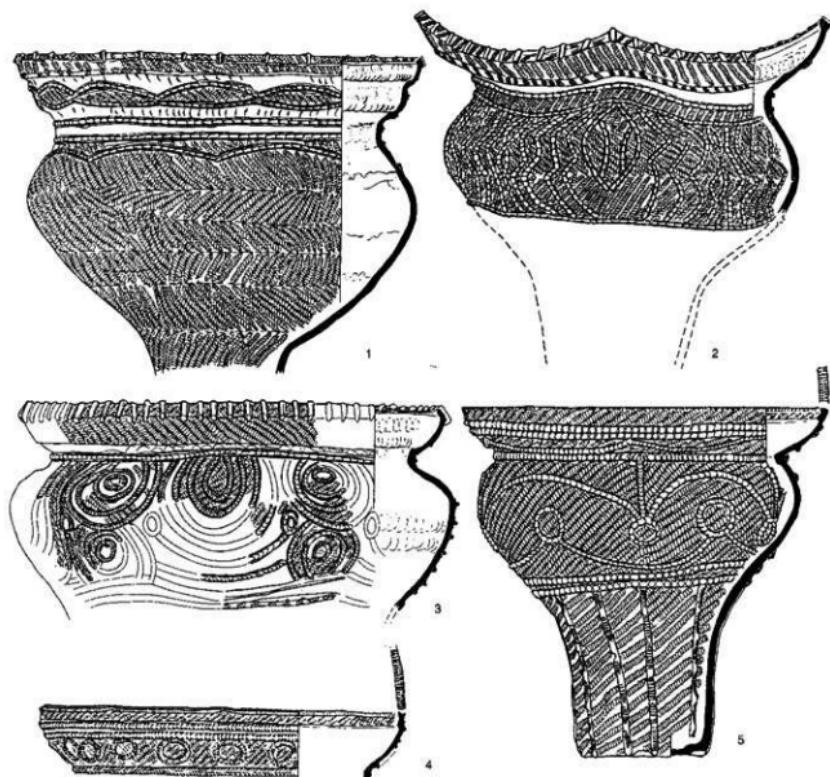
第24図 上野遺跡出土土器

### 3 流入の状況とその特徴

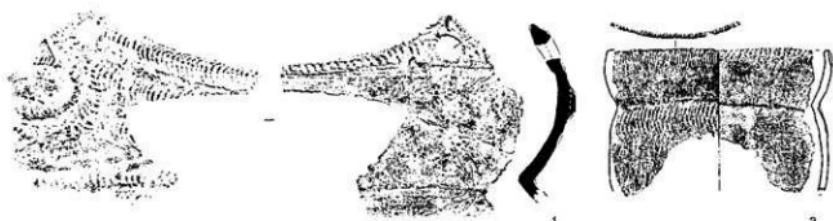
○各期における貢系統土器の流入とその地域的に見た分布の状況

〔諸磯式期〕該期においては、関西系の北白川下層式土器が出土している。

北白川下層式土器は京都府に標識遺跡を持つ関西地方を中心に広く西日本地域に分布を持つもので、東日本では関東・中部地方にまで分布を持つことが知られている。土器の特徴については前章のとおりであるが、再度述べると、全体的に薄手な作りで、色調が白色系を呈している。各期別では、I式は内外面に条痕跡が施される。II a式は大型の爪形文が施され、爪形の両側に側線がないもの。II b式類似されており、小型の爪形文が施されるもので、爪形の両側に側線があるもの。II c式は枯土紐による降帶（凸帯）を構成し、その隆带上にヘラ状工具による刻みが施されるもので、地文に羽状繩文を持つものが多い。II e式はIII式との区別には不明瞭な点がある。III式（第25図1～3）はC状工具による押し引きの刺突凸帯文を施しているが、この段階を大歳山I式としても位置づけられている（1991小杉）。県内では、I式は獅子之前遺跡、花鳥山遺跡、II式は獅子之前遺跡、酒呑場遺跡、御所遺跡、京原遺跡、寺平（境川村）遺跡、諏訪尻遺跡、一の沢西遺跡、花鳥山遺跡、釈迦堂遺跡群、上の平（八代町）遺跡、二光神遺跡、銚子原遺跡、III式は寺平（境川村）遺跡から出土している。良好な資料としては酒呑場遺跡A区第5号住居跡（第2図1）、寺平（境川村）遺跡第2号集石遺構（第14図25）、一の沢西遺跡第40号土坑（第17図）出土のものが挙げられ、特に一の沢西遺跡のものについては、奈良県樞原遺跡出土の資料

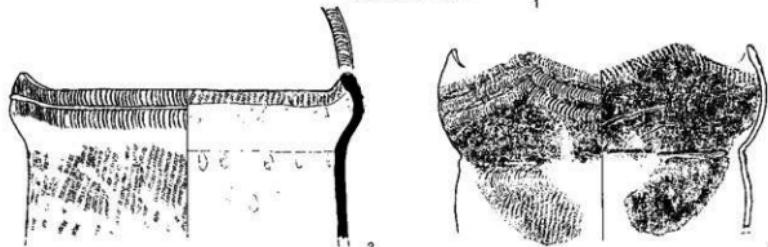


第25図 志高遺跡出土土器（北白川下層Ⅲ～大歳山式）



1

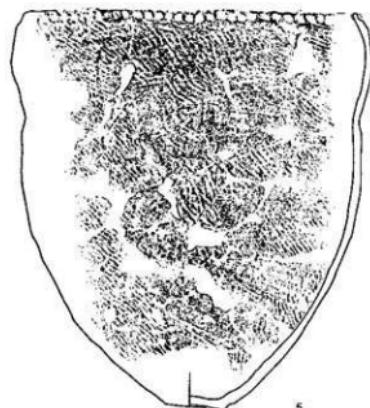
3



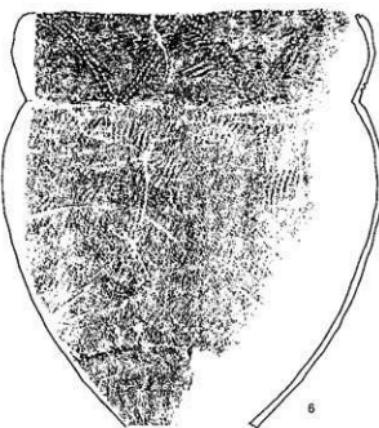
2

4

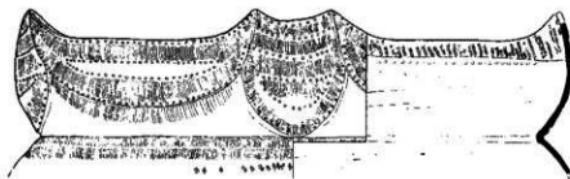
1・2は平道跡



5



6



7

3～7は栗津湖底遺跡

第26図 平・栗津湖底遺跡出土土器（鹿島式・船元I式）

との類似性が指摘されており、興味深いものである。ここでは、Ⅱb～Ⅲc式期に位置付けたが、諸磯式との折衷型や文様要素の組み合わせの相違といった点などで、生産主要地でいう各時期の特長があてはまらない例も多く、今後の検討を必要とする。

〔十三音提式期〕該期においては、関西系の大歳山式上器（第25図4・5）、東北系の大木6式上器が出土している。

大歳山式土器は兵庫県に標識遺跡を持つが、その分布は関西地方でも特に京都府周辺に主体を持つものと考えられるもので、東日本では関東南部まで出土例が知られている。その特徴については前章でも述べたが、つくりは薄手で、色調が灰白色～黒褐色系を呈している。文様は三状工具による押し引きの刺突凸带すなわち特殊凸帶文などと呼称されるものを主体としている。また底部にも特徴があり、指頭などによる抉りが設けられ車輌状の形態を持つものが多い。ただし破片資料の場合、北白川下層Ⅲ式と大歳山式の区別は難しいため、便宜上大歳山式として一括した。県内では、小坂遺跡、東山北遺跡、上の平（中道町）遺跡、寺平（境川村）遺跡、桂野遺跡、积迦堂遺跡群、上の平（八代町）、上野遺跡の8遺跡から出土している。多くの場合破片資料で、遺構外からの出土であるが、第18図1に示した桂野遺跡第7号住居跡と第20図8の第57号土坑出土の資料については復元可能な資料であり、次章で述べる在来系の土器群との共伴関係が指摘できるなど興味深く、貴重な例である。該期においても施文方法や器形の差異など、生産主要地のものとうまく適合しないものが多いが、第18図1については器種の違いという点で理解できるものと考えている。

東北系の大木6式土器は、十二音提式などとの影響下にあると考えられ、器形などに類似性が認められる。胴部が球形を呈する鉢形に近いものなどがある。県内では、施文に影響を受けたものと考えられるものが寺平（境川村）遺跡から出土しているが、明確に断言できるものではない。

〔五領ヶ台式期〕該期においては、関西系の船元I式土器（第26図3～7）、東海系の北裏CⅠ式土器、東関東系の五領ヶ台式併行の土器が出土している。鷹島式（第26図1・2）と考えられるものは発見されていない。

船元I式土器は、岡山県に標識遺跡を持つが、その分布は関西地方でも特に京都府・滋賀県周辺に主体を持つものと考えられるもので、東日本では中部地方まで出土例が知られている。その特徴については、口縁部に広めのC字形の爪形文を施し、器形は胴が強く汚れるキャリバー形を呈するのが主体で、つくりは薄手である。また円形刺突を伴うものもある。編年的には、鷹島式（五領ヶ台I式に併行）の次の段階にがあるので、五領ヶ台II式に併行するものと考えられる。県内では、酒呑場遺跡、甲ッ原遺跡から出土しているが、いずれも破片資料である。

北裏CⅠ式土器は岐阜県に標識遺跡を持つもので、つくりはやや薄手で、半裁竹管による半隆起線で区画した文様帶の中に縄文を充填し、三角印刻文を交互に配置するものと、口縁部に逆C字形に爪形文を隆線上に施すものとがあり、その分布は東海地方に主体を持つ。県内では、酒呑場遺跡、宮地第3遺跡、上の平（中道町）遺跡、桂野遺跡から出土しているが、第2図2の酒呑場遺跡C区第135号土坑出土資料と、第7図の宮地第3遺跡第48号土坑出土資料については単独であるが、一括出土資料として興味深いものである。

東関東系の五領ヶ台式併行の土器は、異系統として扱う難しさがあるが、中部高地のそれとは異なるタイプであるためここに併記する。県内では、特徴を持った顕著な例として第2図3に示した酒呑場遺跡E区第2号土坑出土のものをここに紹介した。

以上のような結果から、前期後半から中期初頭段階における異系統土器の流入は、前期においては非常に関西方面に系譜が辿れるもののみに限定されて出土していることに気付かされるのである。中期以降その流入は広がりを見せ、関西・東海・東関東、その他に北陸地方と広がっていくことが理解できる。多くの場合、破片資料である場合が多いが、酒呑場遺跡、寺平遺跡（境川村）、一の沢西遺跡、桂野遺跡から出土した個体資料を始め、土器の流入の接点として興味深い作付関係の窺える獅子之前遺跡、酒呑場遺跡、小坂遺跡、御所遺跡、寺平遺跡（境川村）、桂野遺跡、上野遺跡があり、内容的に興味深いものである。遺跡の分布については、発掘調査の実施状況に影響されるのであるが、八ヶ岳南麓に位置する北巨摩地域と中府盆地の南側に位置する曾根丘陵を主体と

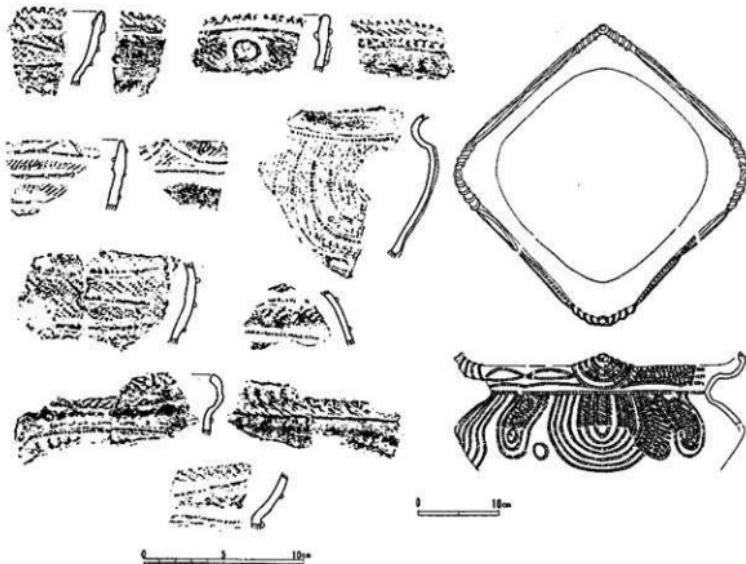
した東八代地域の二地域に大別することができる。このどちらの地域とも、該期の遺跡が多く発見されている地点であり、在来の文化と密接に関係していることを示すものである。

#### 4 在来系と異系統土器の共存関係

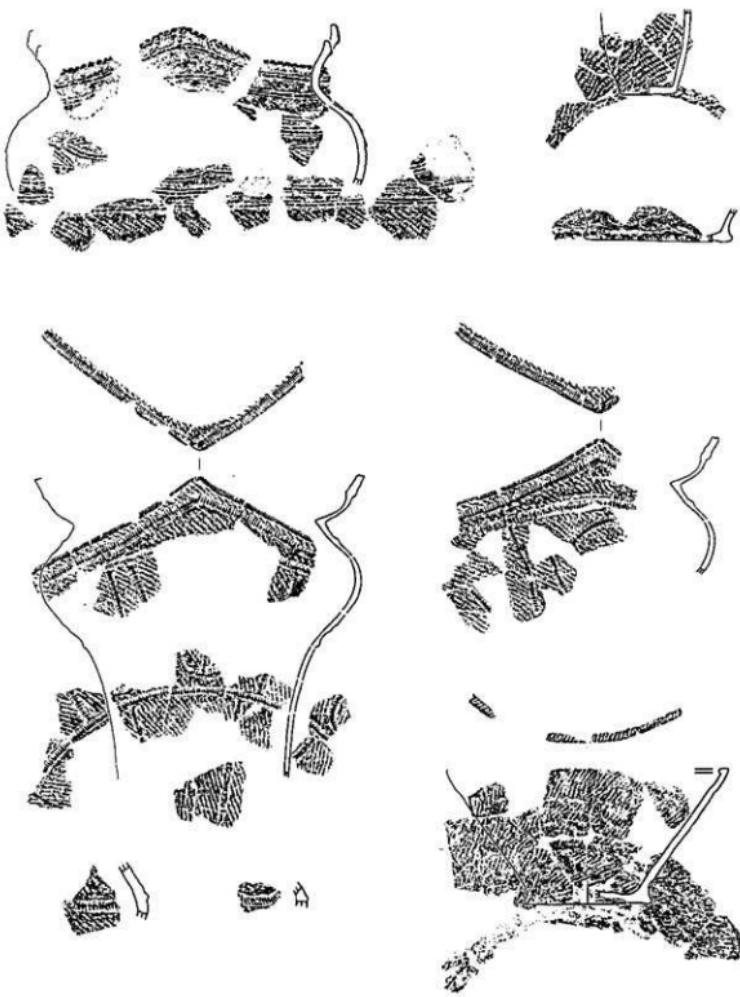
ここでは前章で指摘した県内において伴出関係の窺える遺跡だけでは不十分なので、補強する意味で周辺地域の例と比較しながら検討してみることにする。

諸磯式期では、北白川下層式との伴出関係が窺えるが、獅子之前遺跡第3号住居跡、酒呑場遺跡A区第5号住居跡、御所遺跡第1・4号住居跡、第5号祭祀状遺構、第2・3号上坑、寺平遺跡（境川村）第2・3号住居跡、第2号集石遺構では北白川下層II b式と諸磯b式との共伴例がある。北白川下層II e式と諸磯c式ないし十三普提式併行との共伴例では、寺平遺跡（境川村）第1号集石遺構の共伴例が顕著であり注目されるものである。北白川下層II b式と諸磯b式との共伴関係は從来から知られているものであるが、北白川下層II c式と諸磯c式ないし十三普提式併行との共伴例については、あまり明瞭となっていないため興味深い。後者のII c式に目を向けて周辺地域に類例を求めるに長野県の小垣外・辻垣外遺跡、羽場下遺跡、有明山社遺跡、崩越遺跡などでも確認されており、中部地方の文化の過渡期における異文化との接点を探る上でも興味深いものである。

十三普提式期では、大歳山式との伴出関係が窺える。ただし破片資料の場合、北白川下層III式と大歳山式の判別は厳密には不可能であるため、多くの場合一括して捕らえられる場合が多く、本県においても例外ではない。出土上例としては小坂遺跡第22号土坑、寺平遺跡第2号集石遺構、桂野遺跡第7号住居跡、第57号住居跡、上野遺跡第10号住居跡の共伴例があり、これらは良好な資料である。段階的には弧状沈線に三角印刻文を施すものと伴出する寺平遺跡、押上墳帯を持つものと沈線による籠目文を持つものと伴出する上野遺跡のものが古段階で、沈線による区画文と斜線文を持つものと繩文地に口唇部が肥厚するものと伴出する桂野遺跡、沈線による区画文と

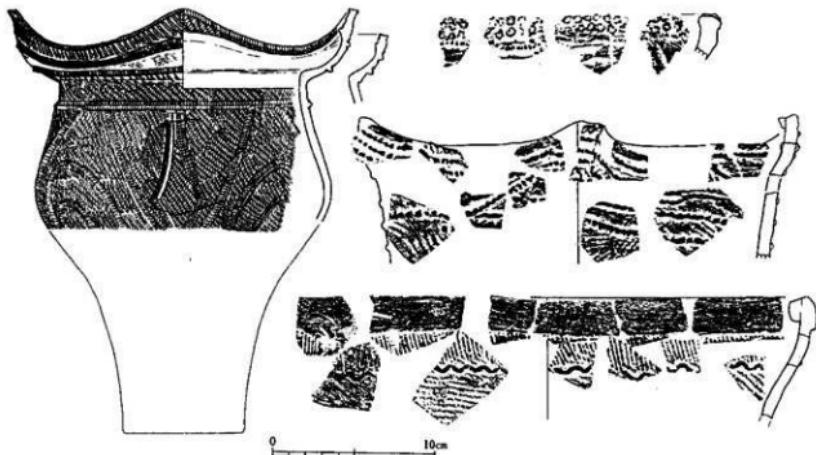


第27図 大洞遺跡出土土器



第28図 松原遺跡出土土器

斜線文を持つものと伴出する小坂遺跡のものについては新段階に位置づけられるものである。県外の例としては、遺構に伴う伴出例ではないが良好な資料が出土している遺跡として、長野県大洞遺跡（第27図）から北白川下層Ⅱc式、北白川下層Ⅲ式、大歳山式が、また長野県松原遺跡（第28図）では北白川下層Ⅲ式、人歳山式、鷹島ないし船元T式とされるものが知られている。共伴例として著名なものでは、東京都三矢田遺跡の竪穴状遺構から出土した資料（第29図）で、結節浮線文と無節の浮線文を持つ土器群との共伴例、落越遺跡第14号土坑から出土した資料（第30図）は、沈線による区画文と斜線文を基調とするもので、口縁部に鋸歯状の山形文が見られる例



第29図 三矢田遺跡出土土器

口下層系の様相を呈する深鉢形土器の中に、小型深鉢の胴部が入れ子状態に収められた状態で出土した共併例が知られている。この小型深鉢は、結節浮線文が施された底部に抉りを持つ大歳山式系のものであるが、色調や器厚の状況から在来型の様相を呈している。こういった共併例から、十三菩提式の古段階では北白川下層Ⅲ式が、新段階では大歳山式が伴う状況を窺い知ることができ、異系統同心の接点を考える上で好資料である。

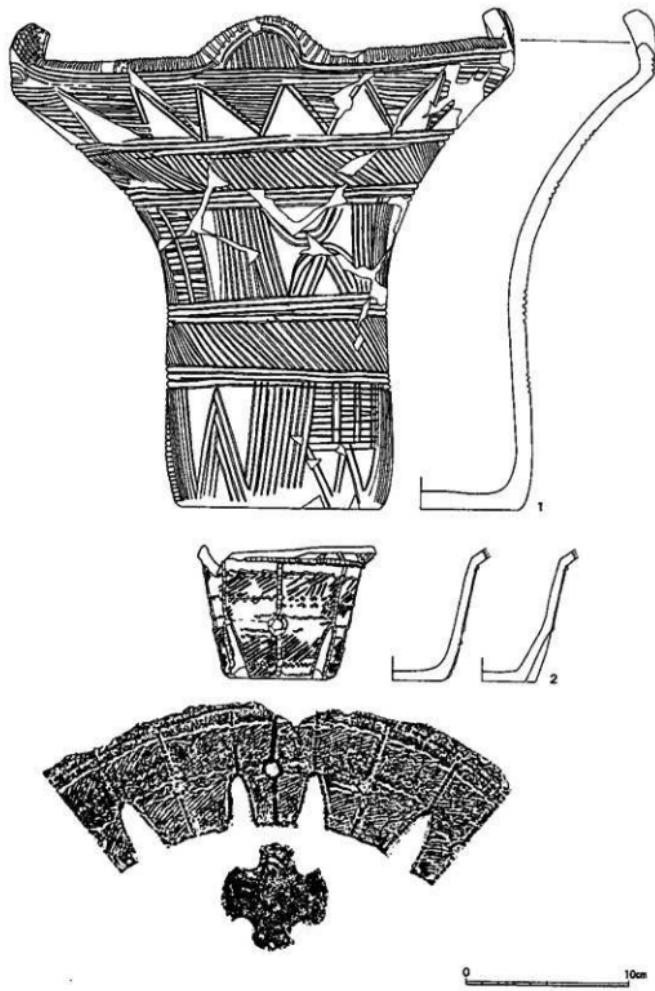
五領ヶ台式期では、上坑から個体での単独出土するパターンが多く、在来系との併出関係が窺えるものは認められず、両者の文化的な相違を物語っているのかもしれない。

## 5まとめ

結果的に異系統土器の流入は、実際問題として各期における外來系土器群がどの地域に主体を持つのかあまり知られていないため、流入経路については現状では明言することができない。なぜなら、誤解されやすいのであるが、標識となっている遺跡とその周辺での遺跡数や資料の量などが少ないなど、実際の主体地域と異なる可能性が高いため検討が必要であるからである。時期的な差異については、前期後半段階における関西系を中心とした流入形態から、中期に至る過程段階で関西・東海地方を中心とした各方面から広く流入の実態が理解することができたが、これは中期以降における交流すなわち交易エリアの拡大化に影響されるものであろう。

各期の土器様相に関しては、北白川下層式の関東と関西地方における土器型式の併用関係が不明朗な部分があり、併出例をもって再整理の必要性が感じられる。また大歳山式と鷹島式、そして中部高地系の土器群との影響関係や、地域性のある土器群の再整理の必要性などを検討課題である。全体を概観して見ると、関西・東海系のものは全体として不明瞭な状況が指摘されている現状もあり、いろいろ影響し合っている関係から単純に線を引いて分類することができず難しい状況にある。

近年、該期の遺跡調査例が増加しており、今後その類例は多数存在していくものと考えられる。全体的に少量の破片が出上するケースが多いが、こうした資料の集積なくして説くことができない時期であるため、今後も注意深く資料を見極めて流入の状況を把握して細かく分析し、接点と動向を追いかけていく必要性を強く感じるものである。今後の課題としては、併用関係の確認から時期的な差異をより具体的に再確認することと、周辺地域の類例と共に流入経路についても検討することである。



第30図 落越遺跡出土土器

文献（本文中の出土例の遺跡番号と文献番号は共通）

- 1) 山梨県教育委員会「獅子之前遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第61集（1991）
- 2) 山梨県教育委員会「酒呑場遺跡（1・2次）一遺構編一」山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第135集（1997）
- 3) 山梨県教育委員会「小坂遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第63集（1991）

- 4) 山梨大学考古学研究会『御所遺跡発掘調査報告書』山梨大学考古学研究会調査報告第1集 (1978)  
山梨大学考古学研究会『御所遺跡—第2次発掘調査報告書—』山梨大学考古学研究会調査報告第2集 (1981)
- 5) 大泉村教育委員会『宮地第2・第3遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告書 第9集 (1991)
- 6) 山梨県教育委員会『甲ヶ原遺跡Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第96集 (1994)  
山梨県教育委員会『甲ヶ原遺跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第114集 (1996)
- 7) 小瀬沢町教育委員会『沢の田遺跡』小瀬沢町埋蔵文化財調査報告書 第2集 (1984)
- 8) 山梨県教育委員会『東山北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第79集 (1993)
- 9) 山梨県教育委員会『上の平第6次調査・東山北遺跡第4次調査・銚子塚古墳南東部試掘』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第94集 (1994)
- 10) 境川村教育委員会『京原遺跡』境川村教育委員会発掘調査報告書 第5輯 (1989)
- 11) 境川村教育委員会『小黒坂遺跡群』境川村教育委員会埋蔵文化財調査報告書 第3輯 (1986)
- 12) 未報告
- 13) 山梨県教育委員会『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呑遺跡・浜井場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第16集 (1986)
- 14) 山梨県教育委員会『花鳥山遺跡・水呑場遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第45集 (1989)
- 15) 山梨県埋蔵文化財センター『年報14』(1998)
- 16) 山梨県教育委員会『釈迦堂』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第21集 (1986)
- 17) 八代町教育委員会『上の平遺跡』(1985)
- 18) 八代町教育委員会『三光神遺跡』(1987)
- 19) 未報告
- 20) 三珠町教育委員会『上野遺跡』(1989)

#### 引用・参考文献（発行年順）

- 京都府『京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告』京都府史蹟跡名勝天然紀念物調査報告 第16冊 (1935)
- 長野県教育委員会『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 1』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 1 (1987)
- 長野県教育委員会『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 4』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 27 (1987)
- 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『志高遺跡』京都府遺跡調査報告書 第2集 (1989)
- 鶴川第二地区遺跡調査会『三矢田遺跡』『真光寺・広袴遺跡群IV』(1991)
- 東京都八王子市落越遺跡調査团『落越遺跡T』(1992)
- 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『平遺跡』京都府遺跡調査概報 第79集 (1997)
- 滋賀県教育委員会『栗津湖底遺跡第3貝塚』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 1 (1997)
- 人野賢・「神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅳ前期終末・中期初頭期 3 異系統土器」『かながわの考古学』研究紀要2 神奈川県立埋蔵文化財センター・財團法人 かながわ考古学財團 (1997)
- 知多古文化研究会『愛知県南知多町の考古資料』(1997)
- 財團法人 かながわ考古学財團『長津田遺跡群III』かながわ考古学財團調査報告 14 (1997)
- 財團法人 かながわ考古学財團『宮畠遺跡・矢頭遺跡・大久保遺跡』かながわ考古学財團調査報告 25 (1997)

## 縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶へ

### —御坂町柱野遺跡出土土偶に関する一考察—

市川 恵子

- 
- 1 はじめに
  - 2 遺跡の概要と土偶の出土状況・土偶の観察
  - 3 山梨県における河童形土偶出現以前・出現以後
- 

- 4 考察
- 5 おわりに

#### 1 はじめに

土偶はその姿ゆえ、古くより多くの人々の関心をさそってきた。近年、「土偶とその情報」研究会によって資料集成がなされ、シンポジウムも頻繁に行なわれるようになり、全国的な視野にたった土偶の時期的・地域的な動態が論じられるようになってきた。

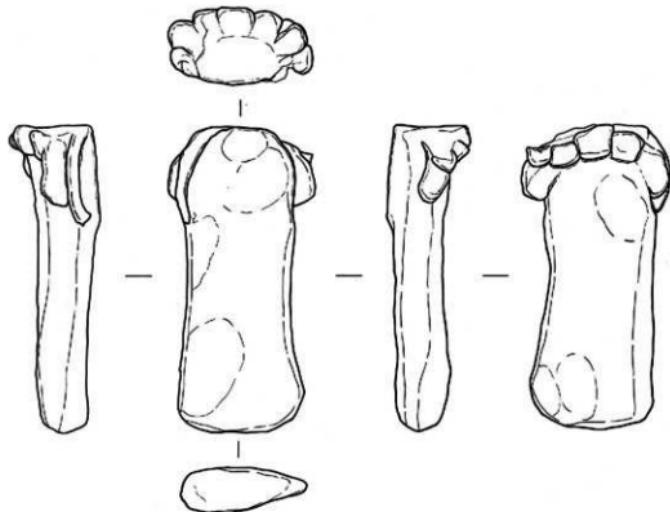
山梨県においても、過去より数多くの縄文時代の遺跡の調査が行なわれ、それに伴い土偶に関する資料も数多く蓄積してきた。またそれらをもとに、前出のシンポジウムなどでも活発な発言がなされている。県内において、土偶が爆発的な増加をみせるのは、縄文時代中期に入ってからであり、それ以前のものについては資料自体も少なく、定形化した型式変化をみせるまでには至っていない。私たちが「土偶」といってまず思い描くのは、中期にみられるような腹部や尻部をデフォルメして表現された立った姿の土偶であろう。この立体的な中期土偶は、中期初頭に入って、特徴的な頭部形態をもつ河童形土偶という形で突如として出現する。ここでは、この河童形土偶と関連があると考えられる資料を提示し、河童形土偶について若干の考察を加えたいと思う。

#### 2 遺跡の概要と土偶の出土状況・土偶の観察

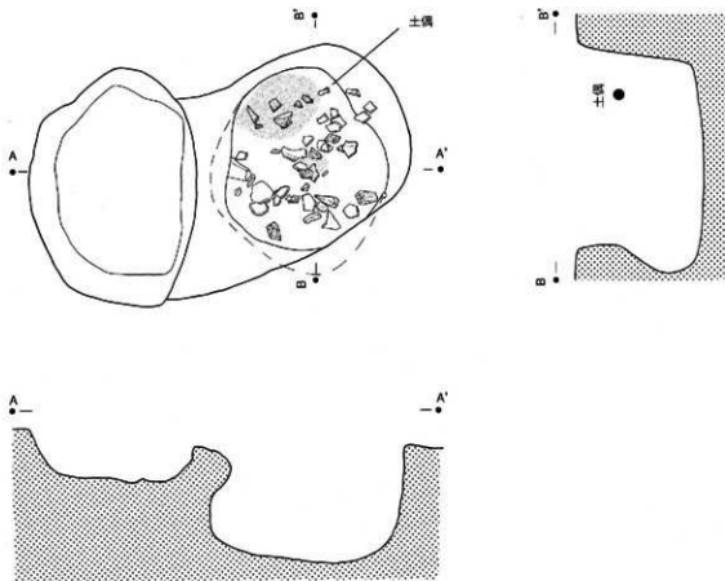
柱野遺跡は、甲府盆地の東部に連なる御坂山塊の北西緩斜面に位置し、標高は約530mを測る。当センターにおいて3年間にわたり調査が行なわれているが、その結果縄文時代前期木葉の住居跡6軒、同中期初頭の住居跡19軒、同中期後葉の住居跡1軒、弥生時代中期後半の住居跡1軒の他、土坑約600基などが発見されている。包含層からも縄文時代前期後葉から後期前葉にかけての遺物が多量に出土している。

今回提示する資料は、第57号土坑から出土した土偶である(第1図)。土坑は長径62.5cm、短径55.0cmを測り、ややオーバーハング気味であり、中からは土偶のほか多量の土器片、礫、焼土塊、炭化物が出土している(第2図)。土坑の壁や出土した土器片には火を受けた痕跡がないこと、土器の接合状況などから、別の場所で火を作ったなんらかの行為が行なわれ、土器は土坑に納められる前に壊されその一部が焼上や炭化物などとともに土坑内に投棄されたものと考えられる。このときに土偶も一緒に埋められたのであろう。共伴した土器でみると(第3図)、時期的には前期木葉にあたる。

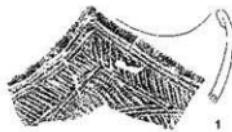
土偶は高さ6.2cm、幅2.1~3.0cm、厚さ1.0~1.7cmを測り板状を呈する。縁辺部のうちの一方に粘土粒の塊が付けられている。この粘土粒は中央に小さな粒を3つ置き、その両側にやや大きめの粒を付け、さらに顔を形作るような格好で板状の両側辺部に粘土紐を付け足しているが、このうちの一方は欠損している。粘土粒塊の上面は平らになでられている。板状を呈する本体にはところどころ指頭圧痕がみられる。人形(ひとがた)としての明確な表現はみられないが、粘土粒側が頭部、以下胸部を表わしていると考えられる。粘土粒の塊は頭髪を表わし、粘土紐によって囲われたやや高さを持つ平坦な面が顔面にあたると思われる。



第1図 桂野遺跡第57号土坑出土土偶（原寸大）



第2図 桂野遺跡第57号土坑遺物出土状況



1



6



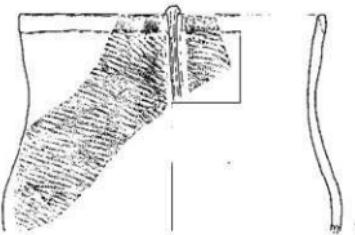
2



3



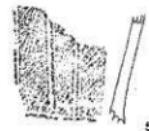
4



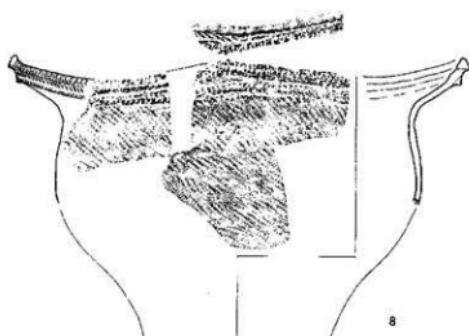
7



8



5



8

1~5 S=1/3

6~8 S=1/4

第3図 桂野遺跡第57号土坑出土土器

### 3 山梨県における河童形土偶出現以前・出現以後

県内においては、前期に位置付けられる土偶は確実なもので14点を数える（第4図）。獅子之前遺跡の2点をのぞいては、すべて板状を呈するものである。時期的にみると、黒浜式並行で3点、諸磯a・b式期で6点の他、時期不明のものが5点ある。その他にも土偶関連遺物として上器片錐に類似した人形土器が花島山遺跡で15点、獅子之前遺跡で1点出土している。前期土偶を時期別に追って見ると、黒浜式並行では割合明確な頭部・四肢表現をもったものであるが、時期的に若干の間隔を置いた諸磯b式期になると、板状土偶に関しては人形（ひとがた）とは程遠い稚拙な表現をもったものがみられるに過ぎない。これは関東・中部・東海地方にみられる、諸磯b式期を境にした、「稀装飾タイプ」土偶と「富装飾タイプ」上側の対照的な動態<sup>(1)</sup>と軸を一にする傾向ととらえることができよう。このように、県内においては諸磯b式期を最後に、中期初頭段階に至って河童形とよばれる立像土偶が出現するまでは、土偶に関する資料は知られていなかった。今回提示した土偶は河童形土偶出現前夜にあたるものである。では、河童形土偶は出現後どのような変化を遂げそのバリエーションを増やしていくのだろうか？

ここに、県内でみられる河童形土偶の頭部を集成し、分類を行なってみた。河童形土偶は、特徴的な頭部形態をもつものの、胸部については板状のものや立体的なものなど、他の中期土偶と同じくさまざまな形態を持つことが指摘されている<sup>(2)</sup>。そこで今回は頭部形態にのみ着目して分類を行なうこととした（第8図）。分類は頭部形態に主眼を置き、それに顔面表現（顔の輪郭、目・鼻・口などの表現）の特徴を付随させる形で行なった。

I類 頭部・体部一体型。頭部はロート形を呈し顔の輪郭はなく、目鼻口の表現も弱々しいもの。

II類 頭部形態はI類とほぼ同様だが、顔の輪郭を意識はじめたもの。

III類 頭部は逆台形状を呈し、顔の輪郭は顔面部を貼りつけることにより明確となり、目鼻口の表現もはっきりとしたものとなる。顔から首にかけてのつながりが不自然で人の頭としてみるにはいささか違和感を覚える。

IV類 頭部はIII類に比べてしっかりと長方形を呈し、顔から首にかけてのつながりが自然なものとなる。

V類 岩上からみた場合の頭部形態はIV類と同様で、顔面もはっきりと区画されているが、顔の両側に頭部がせりだしていないもの。顔面部が横に間延びしているもの。

VI類 頭部と顔面部が独立したもの。首から自然とつながる顔面にヘルメット状の頭部が載った形となる。ヘルメット状の頭部をとればI類のような頭部形態となる。

頭部形態の変化は、

・側面から見た場合、①ロート形→②逆台形→③横長の長方形

・真正から見た場合、①不正円形→②円形→③半円形

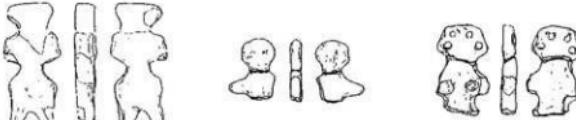
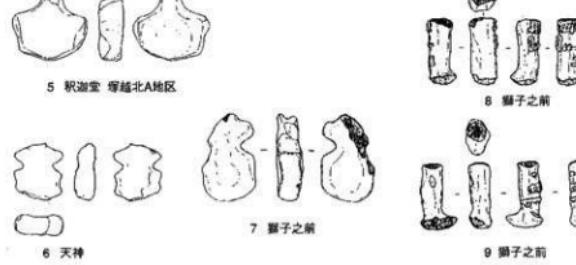
顔面部の変化は、

・①顔面輪郭のない弱々しい目鼻口→②顔面輪郭の表出→③顔面部を区画しはっきり作り出す  
→④顔面部と体部とが自然につながる

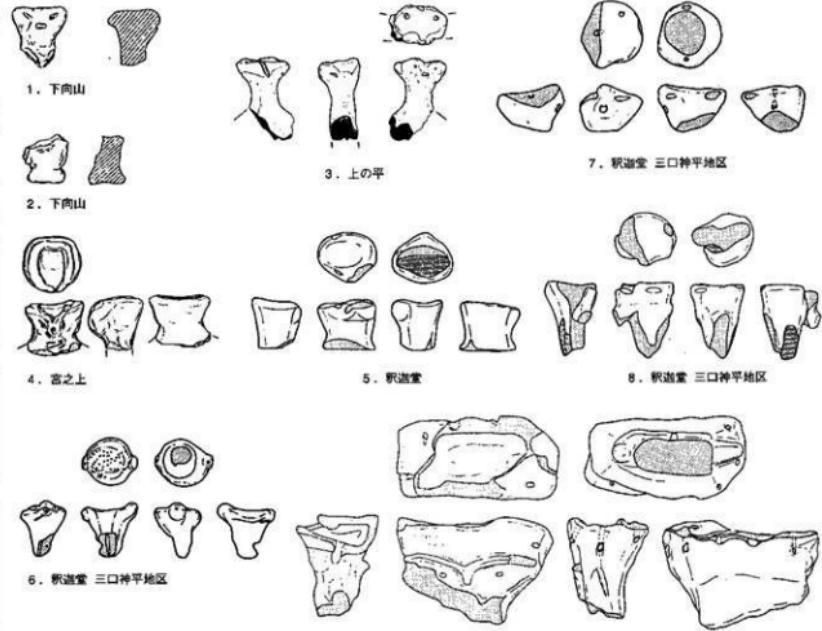
というような変遷過程を追うことができる。表情が力強いものとなり装飾表現が豊かになるのは、顔面部変化的③の段階からである。では、各類の内容を個々に例を挙げてみていくことにする。

I類（第5図1～9）

全体的に表現が過少である。泥人形的な1や3などがこの典型であろう。頭部に粘土紐が巻きつけられた4や、頭部平坦面上に刺突の施された6のような例もある。また、顔面表現のまったくない5のような形態のものも含めて、これら3点は東北地方の前期末葉段階、大木6～7式期に確立していく「塩ヶ森タイプ」<sup>(3)</sup>に系譜を求める

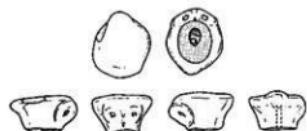
黒浜併行	 <p>1 积遊堂塚越北A地区 2 同 塚越北A地区 3 同 塚越北A地区</p>
諸磯 a新 b古	 <p>4 獅子之前 <math>S = 1/4</math> 5 积遊堂 塚越北A地区</p>
諸磯 b中	 <p>6 天神 7 獅子之前 8 獅子之前 9 獅子之前 10 一の沢</p>
諸磯 b新	
十三菩提	 <p>11 桂野 12 獅子之前</p>
時期不明	 <p>13 獅子之前 14 积遊堂塚越北A地区 15 同 塚越北A地区</p>

第4図 山梨県内の前期土偶（柳原 1998に加筆修正）



## I類

$S = 1 / 3$



10. 积道堂 三口神平地区



## II類

## V類



12. 积道堂 三口神平地区



13. 积道堂 三口神平地区



14. 酒香場 C区



15. 吉之上



16. 酒香場 G区

第5図 山梨県における河童形土偶頭部の分類 (1)

られそうである。

#### II類（第5図10～11）

顔の輪郭を表出し始めるが、この類に属する例は少ない。

#### III類（第6図17～30）

27のように頭部形態はIV類だが、顔面部の付け方、顔面部の首へのつながり方がIII類的なものもこれに含めた。なお26は北陸地方に多くみられる、「長山タイプ」に属するものであろう。

#### IV類（第73図31～38）

31のように典型的なIV類に含まれるもの、顔の表現がないものもある。まゆの表現によってのみ顔の輪郭が表わされる35、36のようなものもついても、その形態はIV類を示すことからここに含めた。

#### V類（第5図12～16）

14、15、16のようなこけし状を呈するもの、12、13のような円盤状のものがあるが、真上からみた頭部形態はIV類と共通する。

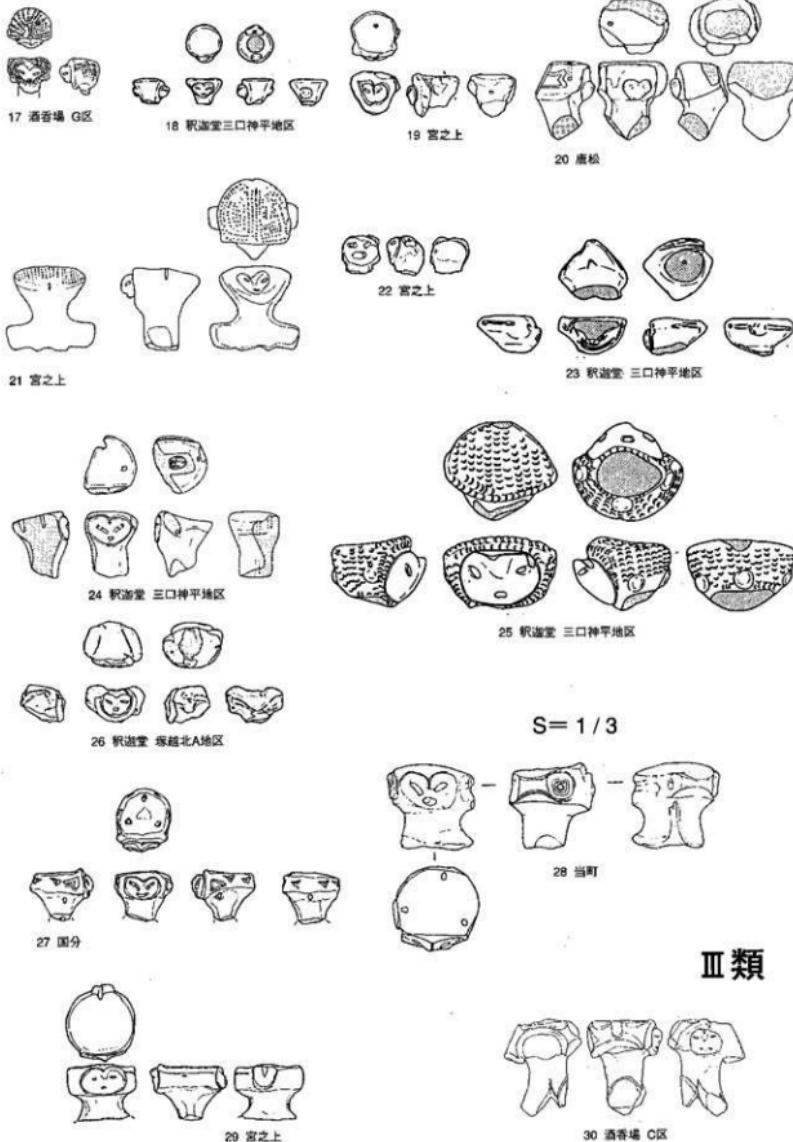
#### VI類（第7図39～43）

全体的に河童形がかなり崩れたイメージである。

以上、6種類のタイプに分けて分類してみた訳だが時期的な変遷についてはどうなのであろうか。型式学的に考えれば、IV類のような典型的な河童形土偶ができるがっていく過程とそれが崩れていく過程という流れとられることができよう。とすればおおまかには、I類からVI類へという変遷が追えると考えられる。ただし、新しい要素と古い要素がひとつの土偶に混在している例も多く、単純に1本のレールにのって変化していく訳ではない。河童形土偶の変遷過程については、中期初頭の土偶変遷として、土偶の全身の姿について今福氏が行なっているが（第9図）、その頭部形態に着目すると今回行なった分類とその変遷過程もほぼ同様の結果となっている。

### 4 考察

まず今回提示した土偶の時期についてだが、この土偶が出土した桂野遺跡第57号土坑の上器についてみると（第3図）、1～7は縄文を地文とする粗製タイプの在地系の土器で、前期末葉の新段階にあたるものと考えられる。8は関西系の大歳山式上器であるが、口縁部に2条みられる特殊凸帯も極めて軽いといつくりであり、頸部のくびれも緩くなっていることから大歳山式のなかでもかなり新しい段階に属するものと考えられる。このように第57号土坑は、異系統土器が共伴する特殊な土坑であるが、時期的には前期末葉のうちでも極めて中期初頭に近い段階にあたると考えられる。これと一緒に出土した土偶もこの時期に位置付けられるということになる。これは、上述したとおりこれまで空白であった諸磕b式期～中期初頭の間を埋める資料ということになるが、では次にこの十偶の特徴を踏まえた上での位置付けを行ないたいと思う。土偶本体は板状を呈することから前期土偶の流れのなかでおさえることができるが、その頭部形態に注目すれば、粘土粒を付けることによって頭部がはっきりと意識され、さらに頭部上面が平坦につくられ後頭部が突出している形はまさに河童形土偶を彷彿とさせるものである。この粘土粒の付けかたについても、ランダムに配置されているのではなく、後頭部からみた場合小さな粘土粒が中央に4つ付けられ、その両端には大きめの粒が添えられる、というように左右対称になることが意識され、また顔面部から見た場合にも、その側面に対称になるよう2本の粘土紐が頭部を形作るよう付けられている。このようにその表現は稚拙ながらも、頭部を作り出そうという明確な意識が見受けられ、しかもその形態は



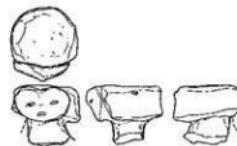
第6図 山梨県における河童形土偶頭部の分類（2）



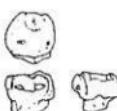
31 宮之上



32 釧道堂 三口神平地区

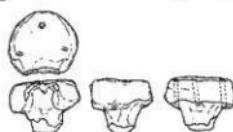


33 宮之上

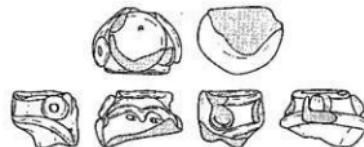


34 釧道堂 野呂原地区

S = 1 / 3



35 酒香場 C区



37 釧道堂 三口神平地区



36 酒香場 C区



38 釧道堂 三口神平地区

## IV類



39 釧道堂 野呂原地区



40 黒物筋屋



41 酒香場 C区



42 釧道堂 三口神平地区



43 宮之上

## V類

第7図 山梨県における河童形土偶頭部の分類(3)



河童形土偶と類似した形を示し、それと同じ創意の傾向がうかがえると言える。このように、桂野遺跡の上偶は板状という前期的な要素と特殊な頭部形態を持つ河童形土偶という中期的な要素をあわせ持った形であると考えられる。ではこの桂野遺跡のようなタイプの上偶から河童形土偶が成立したのであろうか？もし、このタイプからのみ河童形土偶が派生したのだとすれば、このタイプの上偶が山梨県以外の河童形土偶分布地域をも含めてみられるはずではないだろうか？しかしながらこのタイプに含まれられるようなものは未だ報告されていないのが現状である。河童形土偶成立のなかでこのタイプを解釈するには、むしろ以下のような流れを考えるのが自然のように思われる。すなわち、河童形土偶成立の経過は単線的ではなく、複線的にとらえられるべきだということである。たとえば、県内における状況を考えた場合、河童形土偶をさかのぼり前期において、一の沢遺跡から出土した諸磯式期の板状土偶（第4図10）は、東北地方の大木3～5式期にみられるような胸の中央部などに凹みを持つタイプに極めて類似する例であるし、また河童形土偶のI類としたなかの4や5、6（第5図）などのようにロート形の頭部を持つものはその表現方法をも含めて同じく東北地方の大木6・7式期にみられる「塩ヶ森タイプ」に類似する。単純な形の類似性だけで系譜をたどるのにはいさか不安を感じるが、III類のなかにみられるような北陸地方の「長山タイプ」に明らかにその出自を求めるべきである。しかし、他地域の土偶型式の流入も十分に考えられることである。山梨県内のみという限られた資料のなかではあるが考えられるることは、中期初頭においてはI類にみられるようなロート形の頭部を持った土偶があり、そこから次第に加飾され河童形土偶が成立していった流れがあることは前にも述べたとおりだが、II類は前期土偶からはかけ離れた形態を持つことから、東北地方の前期末葉にみられるタイプの土偶に系譜を求ることはできないだろうか。しかしながら山梨県内では今のところ、朝日下巻式などの北陸系土器が多少なりともみられるのに対して、大木式の出土はほとんどみられないことから直接東北地方からもたらされたルートというよりはむしろ、東北地方から北陸地方へ、そこから山梨県へもたらされた可能性の方が強い。すなわち、北陸地方における「長山タイプ」は東北地方板状土偶に系譜を求められるともいわれているが、「長山タイプ」以前の前期末葉から中期初頭段階において北陸地方でも「塩ヶ森タイプ」がみられるのは事実であり、「長山タイプ」以前に北陸地方にすでにあった「塩ヶ森タイプ」の土偶が山梨県内にも流入し、河童形として発展していったのではないだろうか。これまで指摘してきたように、北陸地方では、III類段階にあたる「長山タイプ」が完成された形で突如として出現することから、山梨県を含む中部高地地域で発展していった典型的な河童形土偶が、今度は五領ヶ台式土器とともに北陸地方をも含んだ周辺地域へと広がっていったのではないかと考える（注4）。これに関しては、河童形土偶の分布と時期的変遷を考察するなかで小林氏は、河童形土偶の分布図を挙げているが（第10図）、これをみて中部高地、北陸地方で際立って分布する初期段階の河童形土偶が、次第に周辺地域へ分派していく様子がみてとれる。また、東北地方において中期前葉を境として出現する西ノ前タイプの土偶について阿部氏は、「西ノ前タイプ土偶の原型が中期前葉に出現したと考えができるとすれば、上器様相に見る五領ヶ台式系や北陸系土器群の流入と伸長がこの土偶出現に大きく関与したと考えるのは当然だろう。」と述べている（注5）。

さて桂野遺跡の上偶であるが、この流れにのっていないことはその形態から明白であるが、時期的には河童形土偶出現前夜に位置付けられるのもまた、明白である。関東・中部・東海地方の前期土偶について原田氏が、諸磯式期から出現する“富加賀タイプ”的土偶は、急激な個体化を進めながら前期末葉にまで存続する可能性が大きい、といっているように、桂野遺跡の上偶も個体化した板状土偶のひとつなのではないだろうか。このような個体化の一途をたどったタイプは後続の型式を生み出すことなく消滅していったのであろう。しかしながら、桂野遺跡の土偶は、頭部形態に関しては、中期初頭にその萌芽がみられる河童形土偶に受け継がれていく流れは読み取ることができることから、個体化し“四肢表現のない板状”という胴部形態は消滅の過程をたどる一方で、そのままの形で定形化はしないものの河童形という頭部形態は受け継がれていくという相反する2種の性格を合わせ持った土偶ととらえることができる。つけ加えるならば桂野遺跡の土偶は、前期～中期、消滅～継続、という形態と存続状態において2重構造の性格を持ち合わせており、時期的な、また形態的な移行期にあたり、前期末葉～中期初頭という時期の性質をそのまま具現化したような姿だということができよう。

前期

前葉  
板状土偶  
(型式化タイプ)

中葉



後葉  
板状土偶  
(非型式化・個性化タイプ)

末葉

中期

I類 東北 塩ヶ森タイプの類似例

II類



III類



IV類



V類



VI類

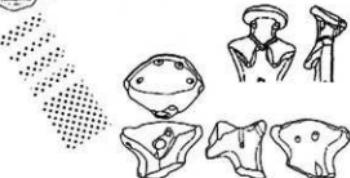


第11図 河童形土偶の成立過程試案

北陸 長山タイプ



東北 西ノ前タイプの一部



……地域内における型式的連續性

……他地域間での関連性

他地域間の相互影響という広域的な流れの中で河童形土偶は成立し、今回提示した資料は、そのような大きな流れとは別に、前期板状土偶という枠の中で出現した、河童形頭部へと指向する土偶であると位置づけられる（第11図）。

## 5 おわりに

桂野遺跡出土の前期土偶を考えるにあたって頭部形態において系譜がたどれるのではないかという予測をもとに、山梨県内における河童形土偶の頭部を集成し分類を試みていくなかで、河童形土偶はそれぞれの地域ごとに出現し発展し消滅していくという、一地域内でほぼ完結した変遷をたどるのではなく、周辺地域との複雑な相互影響のもとに変化していくことがわかった。このために、各地域ごとで河童形土偶の変遷を追ねうとしても、いずれかの段階で前タイプとの断絶がみられたのである。また、河童形土偶の成立過程の中で今回提示した新タイプの上偶を位置付けるにあたって、中部高地における前期土偶一一とくに前期中葉以降——の形式的なイメージが今ひとつ固まらない理由は、資料数が中期土偶に比べて極めて少ない事の他に、該期においては急激な個性化が進んだためであり、桂野遺跡の上偶もその範疇に含まれるという結論に達した。しかしながら注目すべき点は桂野遺跡の上偶には中期初頭以降に現われる河童形土偶の頭部形態のはしりがみられ、個性化する土偶の1タイプではあるものの、今までの個性化タイプ上偶と違って完全に消滅する訳ではないということである。

今回は山梨県内の河童形土偶の頭部についてのみを抽出して検討を行なった。山梨県は河童形土偶の密度の高い地域のひとつである中部高地に属することから、ある程度の傾向は出せたとは思うが、部分的にうまく説明のつかない箇所もあり、それは今後中部高地全体としてとらえ直し考察していくことによって、補っていきたいと思う。また、周辺地域の動向については細部にいたるまで把握していないため、今回の考察の筋道と結論をもとに視野を広げて検証していきたいと考えている。

本稿を草するにあたって奈良大学泉拓良先生、同大学院生岡田憲一氏、同可児直典氏には関西系土器に関するご教示を得た。また、酒呑場遺跡、桂野遺跡の未発表資料掲載については当センター野代幸和氏の快諾を得た。文末ではありますが、記して感謝致します。

## 註

- 1) 原田氏は、大曲輪上偶形式や井沼方上偶形式のような“稀装飾タイプ”的土偶は、諸磯b式期をもって消滅するのに対して“富装飾タイプ”的土偶は諸磯b式期に出現し前期中葉にまで存続する可能性が大きいと述べ、“富装飾タイプ”土偶の出現を“土偶形式の個性化現象”としてとらえている。さらに、上偶の急激な個性化によって前期中葉にまで確実に認識された土偶形式は型式の飽和を起こして崩壊し、単発的な“富装飾タイプ”土偶も型式化していくことなく消滅していくと述べている。（原田1998）
- 2) 小林氏は河童形土偶について各部位の形態的特徴を挙げてその全体形について述べる中で、頭部形態は共通するものの胸部・脚部にはかなりのバラエティーがあることを指摘している。（小林1997）
- 3) 近藤・阿部1994参照。
- 4) ‘長山タイプ’とよばれるものの中には河童形頭部の完成されたⅣ類のようなものばかりでなく、‘塩ヶ森タイプ’に加飾した形のものもわずかだがみられることから、‘長山タイプ’の出自についても単線的な系譜のみではたどれないものと思われる。
- 5) 東北地方の‘西ノ前タイプ’は、頭部形態に注目した場合幾つかのバリエーションをもっておりそのうちの一部が、所謂河童形にある。

## 引用参考文献

- 吉田 格 1963 「山梨県下山遺跡」『考古学雑誌』483 日本考古学会

- 木本 健 1975 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」 山梨県教育委員会
- 奥山和久 1984 「中部山岳地帯に於ける縄文中期土偶の基礎的研究」『中部高地の考古学Ⅲ』
- 小野正文 1986a 「糸迦堂Ⅰ」 山梨県教育委員会
- 小野正文 1986b 「糸迦堂Ⅱ」 山梨県教育委員会
- 雨宮正樹 1987 「西町・当町遺跡」 高根町教育委員会
- 中山誠二他 1987 「上の平遺跡」 山梨県教育委員会
- 長沢宏昌 1987 「糸迦堂Ⅲ」 山梨県教育委員会
- 小林広和 1989 「一の沢遺跡調査報告書」 山梨県教育委員会
- 古谷健一郎 1989 「一の沢・金山遺跡」境川村教育委員会
- 室伏 敏 1990 「宮之上遺跡(第3次)」「1989年度下半期遺跡調査発表会要旨」
- 小野正文 1991 「縄文時代の土偶について」「獅子之前遺跡発掘調査報告書」 山梨県教育委員会
- 米田明訓他 1991 「獅子之前遺跡発掘調査報告書」 山梨県教育委員会
- 近藤 悟・阿部博志 1994 「大木式土器の土偶①」「土偶シンポジウム2 秋田大会東北・北海道の土偶Ⅰ」  
土偶とその情報研究会
- 新津 健他 1994 「天神遺跡」 山梨県教育委員会
- 阿部明彦 1996 「中期大木式期の様相—西の前タイプ土偶の出現と展開—」「土偶シンポジウム6 長野大会中部高地をとりまく中期の土偶 発表要旨」 土偶とその情報研究会
- 石神孝子 1996 「唐松遺跡」山梨県教育委員会
- 小宮山隆 1996 「酒呑母遺跡G区」長坂町教育委員会
- 神保孝造 1996 「北陸西部の中期土偶」「土偶シンポジウム6 長野大会 中部高地をとりまく中期の土偶 発表要旨」 土偶とその情報研究会
- 小林康男 1997 「河童型土偶の系譜とその変遷」同上
- 原田昌幸 1997a 「発生・出現期の土偶総論」「土偶研究の地平」勉誠社
- 原田昌幸 1997b 「発生・出現期の土偶について」「土偶シンポジウム6 奈良大会 西日本をとりまく土偶 発表要旨集」
- 今福利恵 1998 「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」「土偶研究の地平2」 土偶とその情報研究会
- 樋原功一 1998 「山梨県の縄文時代中期土偶一有脚立像土偶の出現をめぐってー」 同上
- 原田昌幸 1998 「発生・出現期の土偶から中期の土偶へ」「土偶研究の地平2」 同上

## 縄文晚期後半遺跡分布の意味と課題

### —山梨における遺跡の継続性と立地から—

新 津 健

- 1 はじめに
- 2 継続性からみた「型」
- 3 各遺跡の状況

- 4 遺跡分布の意味するもの
- 5 おわりに

#### 1 はじめに

以前、八ヶ岳南麓における遺跡分布の例から縄文後・晚期の立地についてふれたことがある<sup>(注1)</sup>。そこでは後期中葉以降、遺跡の立地が低位化する傾向の強いことが確認できたのであるが<sup>(注2)</sup>、同時に晚期終末になると低位志向に加えて再び『中期的』な高台へも立地するようになることについても注意したところでもあった。特に終末期の遺跡では弥生黎明期の条痕文土器を伴う例も多く、新しい弥生文化の受容といった点を踏まえる中でも、縄文終末期遺跡の在り方が重要であることを指摘しておいた。その後何年か経つ中で、晚期の発掘調査例も徐々にではあるが増加してきており、十分とは言えないながらも終末期の資料も加わってきていている。このような中で百瀬長秀氏は長野県から山梨県にかけての「浮線文期」を中心とした遺跡分布の実態を把握し、詳細な検討を行なっている<sup>(注3)</sup>。その結果「浮線文期の初めは、集落の移転と増加に始まり、集落の短期移動と居住地の激増等落ち着かぬ動きが目立ち、集落の動搖期と言える」ととらえられた。晚期後半期から初期弥生にかけての遺跡の在り方については、この百瀬氏により十分に把握されているものと思われ、特に晚期後半遺跡の増加はその後の発掘調査でも確認されているところもある。

ここでは山梨での新しい資料を加える中で、大洞C2式期以降水I式期を中心とした時期の土器を出土する遺跡の在り方について、立地と継続性の面から検討しその持つ意味について考えてみたい。

#### 2 継続性からみた「型」

後・晚期遺跡の継続性については、かつて八ヶ岳南麓に分布する遺跡例から次ぎのようにとらえたことがある<sup>(注4)</sup>。

①後期前葉に限られるもの	49遺跡（33）
②後期前葉から後期中葉まで継続するもの	6遺跡（4）
③後期前葉から後期後葉まで継続するもの	3遺跡（1）
④後期前葉から晚期まで継続するもの	3遺跡（3）
⑤後期前葉と晚期後半に限られるもの	3遺跡（3）
⑥後期中葉に限られるもの	2遺跡（2）
⑦後期後葉に限られるもの	1遺跡（1）
⑧晚期後半に限られるもの	7遺跡（5）

( ) 内は曾利式期も出土する遺跡数

調査例が進んだ現状ではこの数値に変動はあるとみられるものの、継続性についてはさほど変化はないものと思われる。このうち④が金生遺跡、石堂遺跡、長坂上条遺跡といった配石遺構を伴う規模の大きい集落址であり、地域の拠点集落とみられる遺跡である。特に金生や長坂上条では晚期後半から条痕文土器の時期まで継続してい

る。これに対して⑤や⑥は継続することなく晩期後半の時期が突如として現れるような感覚である。立地についても後期中葉以降に特徴的な低位志向とは異なった状況も窺われる。小稿ではこのような、晩期終末になって新たに出現する遺跡の意味を考えるために、資料を集め検討を加えることにしたい。

そこでまず始めに、晩期終末遺跡に関する継続性の型を分類してみると次ぎのようになる。

I型 晩期前半～晩期後半～初期弥生

II型 晩期前半～晩期後半

III型 晩期後半～初期弥生

IV型 晩期後半のみ

I型は、細かい土器型式では中断することもあるが、基本的には後期前半以降後期後半も含めて、縄文後期～晩期への継続性が高い遺跡である。さらにはこの遺跡において初期弥生文化も受容した可能性のある、極めて複点性の高い集落とみることができる型である。

II型もI型に次ぎ継続性の高い遺跡で後期から続く場合も強いが、初期弥生へは続かないものである。

III型はIIとは逆に晩期前半は見られないものの、晩期後半から初期弥生へと続くもの。中期や後期前半の土器も出土する場合がある。

IV型もIIIと同様に晩期後半になって突如出現するものであるが、初期弥生へは継続せず、晩期後半単独という遺跡である。

このような型を設定することにより、晩期後半の継続する様子をつかむことができる。

### 3 各遺跡の状況

現在報告書等で確認できる晩期後半期の遺跡数は32箇所である。これは発掘調査に限らず分布調査の成果も加えており、遺構の有無や遺跡の性格は全く関係無く、例え1片でも土器が出土しているものもピックアップしたものである。これを一覧にしたもののが第1表であるが、以下各遺跡の説明を行なう。なお、説明順番の番号は第1表および第1図、第2図それに遺跡位置図の番号と共に通す。また各遺跡の引用文献は一覧表に記入した。

#### [八ヶ岳南麓地域]

##### 1 源氏籠遺跡（北巨摩郡小瀬沢町上笹尾）

標高780m、谷との比高5m、幅150mほどの尾根上に立地。分布調査により縄文早期から後期堀之内式、晩期浮線文系（第1図①）、弥生条痕文などの土器破片が採集されていることから、III型とすることができる。小瀬沢町の遺跡分布についてはすでに木本健氏によりその傾向がとらえられている<sup>(43)</sup>。すなわち後期以降の遺跡数は、称名寺式期1、堀之内式期8、加曾利B式期1、晩期後半4、弥生初頭条痕文期15とのことである。このことだけからすると後期前半を境として遺跡が減少し、晩期後半になって再び増加し始め初期弥生へと展開していくことを意味する。もちろん今後の発掘例により遺跡数に変動があることは十分に考えられ、遺跡数の増減については複雑な様相があろうが、少なくとも晩期後半から初期弥生への遺跡数の増加傾向は確認できる。山梨における弥生文化の成立については、中山誠二氏により遺跡の集中する八ヶ岳山麓と富士山麓という二つのルートが大きく関わったと指摘されている<sup>(44)</sup>とおりであり、山梨への北の玄関口でもある小瀬沢町域での晩期後半遺跡の在り方も非常に重要なとなる。すなわち、晩期前半からの継続性が少ない中で後半期から増加傾向にあることは、低位立地志向にあった後期中葉～晩期前半期とは異なる遺跡存在の意味があることになるからである。

##### 2 篠八田遺跡（北巨摩郡小瀬沢町上笹尾）

源氏籠遺跡と同様に分布調査により確認された遺跡。標高910mという高地の尾根上に位置する。継続性はIII型。中期曾利式、晩期水I式、弥生条痕文などの土器破片が採集されている（第1図②）。

##### 3 神田遺跡（北巨摩郡小瀬沢町松向）

1、2の遺跡同様分布調査で確認。標高840mの尾根に立地。水I式から弥生条痕文土器の破片が採集されている（第1図③）。継続性はIII型。

#### 4 健康村遺跡（北巨摩郡長坂町中丸）

晩期の遺構や遺物は、人深沢川により深く解析された谷に面した標高750mを測る尾根の東斜面を中心としている。二箇所の地区から土坑5基と埋設土器1基が発見されている。出土した土器は浮線文系であり、水I式期に位置付けられるものが中心である（第1図④）。他には中期初頭と中期後半の遺構遺物が発見されているだけである。継続性は晩期後半に限られるIV型である。

#### 5 長坂上条遺跡（北巨摩郡長坂町長坂上条）

標高680mほどの微高地状の尾根に位置する。この尾根を北に登ると中期の大集落である酒呑場遺跡となり、「高台にある中期遺跡、低位窪にある後晩期遺跡」という立地がよく分かる遺跡群をなしている。人山史前学研究所による昭和15年の調査により配石遺構が発見され、後期から晩期を中心とした遺物が多く出土している。土器の主体は竹下氏により真福寺式、亀ヶ岡近似式、関西系統式、縄糸混式とされており、加曾利B式以降後期後半を経て、晩期前半から後半、さらには条痕文土器まで含んでいる。遺跡の立地条件や広がりそして継続性からみて、撲点性の強い集落遺跡と思われる。継続性はI型である。

#### 6 米山遺跡（北巨摩郡長坂町大八田）

標高約800mの丘陵の北西端部分に小さな埋没谷があり、この上層中から縄文早期末の条痕文、諸磯式、中期および後期初頭（称名寺式、壠之内式）に加え晩期後半の浮線文土器群や初期弥生の条痕文土器の破片が出土した。焼土址はあるものの住居等の遺構は発見されていない。付近には中世の屋敷跡や旧石器時代の遺跡がある。湧水をもつ低湿地を前にした立地である。継続性はIII型。

#### 7 柳坪遺跡（北巨摩郡長坂町大八田）

標高720mほどの尾根の末端に縄文中期後半の土器破片が多く出土する疊群が発見された。この時期によくみられる自然に露出する疊を利用して配石遺構の一種とみられるものである。ここからわずか1点ではあるが水I式の浅鉢とみられる破片が出土している。さらにこの地点から浅い谷を隔てたA地区からは初期弥生条痕文土器を出土する住居跡1軒が発見されている。従ってこの遺跡での継続性はIII型ということになる（第1図⑦）。

#### 8 金生遺跡（北巨摩郡大泉村谷戸）（第1図⑧）

標高770mあまりのゆるやかな傾斜の尾根上に位置する。幅約100m、谷との比高は5m程という低位の尾根である。発掘では前期から晩期までの遺構が発見されているが、継続性をみると後期前半から晩期後半まで統いている。特に中心となるのは大規模な配石を伴う後期後半から晩期前半である。それでも晩期後半にも人済C2式期～水I式期の住居が3軒、配石2基が調査されており、全般的にも住居の検出例の少ない晩期後半にあっての稀少な事例となっている。土器については条痕文まで出土しており、継続性I型の撲点的な集落とみることができる。なお金生遺跡と谷を隔てて東に隣接する尾根上には、条痕文土器を作う土坑群が発見された寺所遺跡がある。

#### 9 川又坂上遺跡（北巨摩郡高根町箕輪）

比高差50m以上もある須玉川の谷に面した標高700m程の尾根上に縄文中期を主体とした遺跡があるが、この尾根の東斜面から浅い谷部にかけての発掘で後期称名寺式期の集落が発見された。この後期初頭の遺構群を覆っている黒色土中から水I式系の土器群が破片ながら多く出土している（第1図⑨）。称名寺式、壠之内式土器以降の土器は出土しておらず、晩期後半に関しての継続性は全くないIV型の遺跡である。

### [塩川・須玉川流域]

#### 10 桑原遺跡（北巨摩郡須玉町津金）

標高800m余りの尾根上に位置する。尾根の西側には遺跡からゆるやかに落ち込む谷が発達しており、金生遺跡とよく似た立地条件である。この尾根の西側から南側の斜面にかけて発掘がなされており、縄文前期・後期～晩期の住居跡が発見されている。土器は壠之内式期以降後期後葉、さらには清水天王式を含む晩期前半から水I式までみられる（第1図⑩）。特に後期中葉以降晩期までが付立つようである。詳細は不明であるが継続性の

高いⅠ型とみられる遺跡である。

#### 11 塩川遺跡B地区（北巨摩郡須卡町比志）

標高840m程の、両側を川にはさまれた舌状の段丘上に位置する。縄文時代の遺構は中期曾利後半期の住居6軒や埋甕、土坑などであるが、土器は早期から晩期まで認められる。晩期では水1式とみられる破片が1点ながら出土している（第1図⑪）。後期は堀之内式に限られていることから晩期への継続性はみられない。Ⅳ型の遺跡である。

#### 12 大豆生田遺跡（北巨摩郡須玉町大豆生田）

須玉川に面した標高470m程の自然堤防上に立地する。主体は平安時代の集落であるが、縄文では諸磯式・曾利後半期・堀之内式に加え晩期水1式、さらには弥生条痕文土器破片が出土している。特に条痕文の出土が多く、晩期後半から初期弥生への継続性の強いⅢ型の遺跡である（第1図⑫）。

#### ・藤井平遺跡群（13～17）

【塩川・須玉川流域】の遺跡のうち、特に菲崎市塩川右岸の穴山町、中田町、藤井町一帯には自然堤防状の微高地や河岸段丘状の平坦地が発達している。この地域に縄文中期の集落や奈良・平安時代の極めて質の高い村落が形成されていることがここ十数年来の発掘によって明らかにされつつある。これらの調査の過程で縄文晩期後半の遺物も少なからず出土しており、しかも初期弥生につながる中で山梨では最古とみられる水田跡も検出された遺跡もある。水の便に恵まれたこの地域にあって、縄文晩期から弥生への遺物が出土することは大きな意味がありそうである。以下5ヵ所の遺跡についてふれるが、塩川に沿った4km以上にも及ぶ藤井平地域にはさら多くの遺跡があると思われる。厳密にそれらを区別することは難しく、晩期については藤井平遺跡群としてとらえた方がふさわしいものと思われる。

#### 13 中本田遺跡（菲崎市穴山町）

現状では藤井平遺跡群の最も北の、標高約432mの微高地上に位置する。遺構は発見されていないが、縄文中期末から中葉までと、晩期後半水1式から条痕文土器までが出土している（第1図⑬）。出土数が少ないとから、南約100mに位置する中道遺跡を中心とした遺跡の端にあたっているのかもしれない。継続性はⅢ型。

#### 14 中道遺跡（菲崎市中田町小田川）

中本田遺跡の南100mのところが発掘箇所であり、中道遺跡・中本田遺跡とも同じ遺跡の可能性もある。ここからは晩期後半の浮線文土器群（第1図⑭）が多く出土し、沈線文系や凸帯文系もみられる。また条痕文土器を出土する住居跡とみられる遺構もある。上器以外にも土器破片再利用の円盤や耳飾り、土偶なども出土している。このような出土遺物からみて、晩期後半から初期弥生の集落が形成されていたと思われる。後期初頭から中葉までの土器は出土するものの、その後は認められることから、Ⅲ型の遺跡とみられる。

#### 15 前田遺跡（菲崎市中田町中条）

藤井平のほぼ中央の標高404mを測る微高地上に位置する。奈良・平安時代の集落遺跡であるが、遺構外からわずかながら晩期後半の沈線文土器や条痕文土器が出土している（第1図⑮）。継続性はⅣ型とみられる。

#### 16 宮ノ前遺跡（菲崎市藤井町坂井）

主体は奈良・平安の集落であるが、水田遺構や溝状遺構およびその周辺から晩期終末～初期弥生条痕文土器が多く出土している。特に水田遺構直下の溝からは明らかに浮線網状文土器が出土しており、水田からは浮線文系を含みながら条痕文土器が多くみられる（第1図⑯）。他に縄文土器は中期終末から後期末までの破片が散見する程度であることから、継続性はⅢ型とすることができる。

#### 17 堂の前遺跡（菲崎市藤井町坂井）

これまでの遺跡の中では最も南端に位置する。標高は383mである。遺跡の主体は弥生後期と平安時代の集落であるが、遺構外から水1式の一群の上器が出土している（第1図⑰）。継続性はⅣ型。

以上藤井平遺跡群の中での各遺跡を紹介したが、これらは全てⅢ型ないしⅣ型という晩期前半以前からの継続性の見られない遺跡であった。しかし1997年度に調査された三宮地遺跡からはこれまで藤井平で見ることのでき

なかった晩期前葉から中葉の上器群が、配石遺構をともなって多く出土した(図1)。このことから藤井平地域では縄文後期以降各時期の集落が小ブロック状に点在し、全体として継続性Ⅰ型ないしⅡ型といったとらえかたも可能かと思われる。

#### [釜無川右岸地域]

釜無川(富士川上・中流)右岸には、西側の山地からびて扇状地や台地が発達しているが、さらにそれらは釜無川による解析で河岸段丘として形づくられている。この台地や段丘上には各種の遺跡が残されているが、この遺跡中から遺構は明確ではないものの晩期後半の土器が出土する例が増えてきている。白州町から蘿崎を経て中巨摩方面までいくつかの遺跡があるが、北巨摩方面から紹介する。

#### 18 板橋遺跡(北巨摩郡白州町下教来石)

標高700m余の釜無川の中位段丘面に位置する。縄文早期末から前期初頭の住居3軒が調査されているが、後期壇之内式および晩期後半水工式とみられる破片(第1図18)も1点ずつ出土している。継続性はⅣ型。

#### 19 上小用遺跡(北巨摩郡白州町鳥原)

広大な鳥原台地の東南端に位置し、釜無川を見下ろす標高700mの平坦地が遺跡である。縄文中期中葉から後葉の大規模な遺跡とみられるが、分布調査により晩期後半浮線文系の土器片が1点ながら採集されている(第1図19)。継続性はⅣ型である。

#### 20 雜木遺跡(北巨摩郡白州町白須)

標高670mを測る河岸段丘高位面に位置する。平安時代の集落であるが、縄文前期末の土坑や中期曾利後半期の上器と晩期後半期の土器も出土している。晩期は浮線文系の土器群(第1図20)で、平安住居の覆土や遺構外からの出土である。継続性はⅣ型。

#### 21 尾敷平遺跡(北巨摩郡白州町台ケ原)

釜無川と尾白川とにはさまれた標高670mほどの平坦面に位置する。遺跡の主体は中世であるが、遺構外から縄文早期・中期前半そして晩期後半から初期弥生条痕文土器、さらにはわずかであるが弥生後期の破片が出土している。

晩期は浮線文系の一群で氷工式とみられるものである(第2図21)。またこれらの土器片を利用した上製円盤も多く出土している。初期弥生への継続からⅢ型の遺跡に分類できる。

#### 22 石之坪遺跡(蘿崎市円野町下円井)

釜無川右岸に張り出す標高450m程の舌状台地上に位置する。主体は中期曾利式期の環状集落である。後期では初頭の住居が発見されているものの、それ以降は遺構・遺物は発見されず、晩期終末になって浮線文系の土器群が出土するようになる。調査中であり詳細不明であるがⅣ型の遺跡と思われる。

#### 23 水無遺跡(蘿崎市円野町下円井)

標高450m程の河岸段丘上に位置する。平安時代の遺跡であるが、遺構外から晩期後半の浮線文系に属するとみられる沈線を持つ土器が数片出土している(第2図23)。弥生後期の土器片も数点出土しているが、他の時期の土器はみられない。従って継続性はⅣ型である。

#### 24 大塚遺跡(中巨摩郡八田村野牛島)

御勘使川扇状地末端の微高地に位置する。標高は約330m。

中心は奈良・平安時代の集落であるが、浅い窪み状のところから浮線文系の上器群が少量出土している(第2図24)。縄文時代の遺物は他になく、継続性はⅣ型。

#### 25 石橋北屋敷遺跡(中巨摩郡八田村野牛島)

大塚遺跡の約400m東側に位置する。大塚遺跡よりさらに扇状地端の標高328mの段丘状の平坦地が遺跡である。遺跡のすぐ東側は釜無川により解析され崖になっており、付近には湧水がある。主体は奈良・平安・中世の集落であるが、縄文後期加曾利B式上器や晩期浮線文系の土器破片も多く出土している。継続性はⅣである。

## 26 長田口遺跡（中巨摩郡衛形町平岡）

甲府盆地西部に発達した市之瀬台地の一つをなす、標高440mあまりの平坦な丘陵地全体が遺跡であり、縄文中期や弥生後期から古墳時代にかけての集落が中心である。晚期後半の浮線文系土器は、この台地の南端に近い箇所の黒色土中から出土している（第2図26）。条痕文土器もみられることから継続性はⅢである。

## 27 上の山遺跡（中巨摩郡衛形町上野）

長田口遺跡とは谷を隔てた南側、標高410mあまりの台地上に立地する。台地の前面には比高差100mほど下がって盆地が広がり、笛無川をも望むことができる。遺跡の主体は縄文中期中葉と弥生時代後期の集落であるが、遺構外からは水I式土器や条痕文土器破片が出土している（第2図27）。継続性Ⅲ型。

## 28 溝呂木道上第5遺跡（中巨摩郡若草町十日市場）

御動使川扇状地南端の滝沢川小扇状地上の微高地間の低地に立地する遺跡で、標高は280mほどである。中世の土坑や溝が調査されているが、遺構外からは浮線網状文土器や弥生初期の条痕文土器が破片で少量出土している（第2図28）。他に縄文時代の遺物ではなく、継続性Ⅳ型の追跡である。

### 【富士山麓・桂川流域】

## 29 鶴の島遺跡（南都留郡河口湖町大石）

河口湖の中にある鶴の島から遺物が出土することは、柴田常恵『富士の遺跡』にも紹介されているように、古くから知られている。標高840mを測るこの遺跡からは、山本寿々雄氏によると前期や中期の土器とともに大洞B・BC・A・A'などの晚期上器、さらには条痕文土器が出土するとされている（文献27）。このうちの水I式から初期弥生の条痕文土器については、中山誠二氏が閑話している（文献28）（第2図29）。継続性はⅡ型となる。

## 30 尾咲原遺跡（都留市朝日馬場）

桂川の支流、朝日川と大平川とにはさまれた標高500mの台地斜面が遺跡である。縄文早期から晩期までの遺物が出土するが、遺構の主体は中期曾利式期、後期加曾利B式期、晩期前半清水天王山式期である。晩期後半の上器は非常に少ないが、浮線網状文破片が山本寿々雄氏により報告されている（第2図30）。後期から継続する継続性Ⅱ型の数少ない事例の一つといえる。

## 31 中谷遺跡（都留市小形山）

桂川左岸に発達する河岸段丘の一つ大原台地の山際の斜面に位置する遺跡。標高は400mあまりを測る。これまで都留市教育委員会や県教育委員会により4回ほどの調査が行なわれており、中期から晩期までの継続性の高い遺跡として、また晩期前半清水天王山式上器の中心的遺跡として全国的に有名な遺跡である。晩期後半の資料は極めて少ないが、浮線文系と見られる破片がわずかながら報告されている（第2図31）。従って継続性はⅡ型としておく。

ところで先にふれた尾咲原遺跡同様に、都留市域では晩期前半には清水天王山式土器を中心とした集落が発達するものの、後半期は激減するような觀がある。ただし初期弥生になると熊井戸、生出山山頂や西柱町内遺跡をも加え遺跡数が増加していくといった、注目すべき傾向が窺われる。

## 32 川竹（殿村）遺跡（北都留郡上野原町横原）

桂川の支流、鶴川西岸の標高約330mを測る河岸段丘上に位置する。鶴川との比高差は約60mのことである。称名寺式から壠之内式を中心に土器が出土しているが、加曾利B1式から竹谷式、晩期前半の清水天王山式、安行3b式などに加え、晩期後半の大洞C2式から浮線文系の土器も少量出土している（第2図32）。継続性はⅡ型である。

## 4 遺跡分布の意味するもの

以上概観した32の遺跡について、継続性の型をまとめてみると次ぎのようになる。

I型（晩期前半～晩期後半～初期弥生）	2遺跡
II型（晩期前半～晩期後半）	4遺跡
III型（晩期後半～初期弥生）	11遺跡
IV型（晩期後半のみ）	15遺跡

I型とII型とが少ないのでに対してIII型とIV型とが非常に多い傾向をうかがうことができる。I型は金生遺跡、長坂上条遺跡といった大規模な配石遺構をともなう継続性の長い撲点集落と考えられる遺跡である。II型も後期から晩期まで継続する撲点性の高い集落である。今回は確認出来なかったが後期から晩期初頭にかけての大遺跡である高根町石原遺跡もこのタイプに入る可能性がある。また尾尻原遺跡や中谷遺跡のような柱川地域にある遺跡では清水天王山式土器が非常に発達する晩期前半に比べ、後半期の遺構や出土遺物は激減することは注目すべきであろう。

いずれにしてもI型やII型といった後期以降継続する遺跡に比較して、III型とIV型が多い傾向が、晩期後半遺跡の特徴といつていいことができる。換言すれば、晩期後半になって遺跡数が増加することになる。しかもこれらの遺跡は配石遺構やしっかりとした住居などの明瞭な施設を残すことのない、小規模な遺跡の場合が多い。加えてその半数近く11遺跡が初期弥生の条痕文土器の時期にまで継続するIII型の遺跡なのである。

このような小規模な遺跡が急増する原因は一体何だったのであろうか。百瀬長秀氏は「浮線文期遺跡分布論」の中で、集落の種類を区分した上でこの時期の特色を「集落の移転と増加」「集落の短期移動と居住地の激増」「集落の動搖期」というキーワードで表現した。さらにその背景に「広域的祭祀圈の衰退・消失にみられる伝統的社会体制や価値観の弛緩、遠賀川集団の成立とその東方進出及びそれから派生する稻作情報を核とする諸情報の伝達」という事態を想定している<sup>(44)</sup>。繩文の伝統の中に刺激的な新しい情報が入り込む度合の高い時期であったことは確かであったと思われるが、集落（遺跡）の増加が動搖による集落の分散なのには定かでない。一方では集落維持のための生業にかかわる積極的な試行という見方もできないであろうか。

ここで各遺跡の立地を振り返ってみよう。I型の遺跡の代表は金生遺跡である。以前からも主張しているように後期中葉以降の集落は低位化する傾向にあるが、金生遺跡の場合も尾根上にありながらもその尾根は低い尾根であり、しかも水の湧き出す湿地に面した斜面側に立地するという特徴を持っている。つまり生活環境の一部に低湿地を含む集落構成が、この時期の撲点集落の特徴ともなっている<sup>(45)</sup>。同じI型の長坂上条遺跡や桑原遺跡もその傾向にある。このような撲点集落に対してIII型とIV型には次ぎのような立地様相をみることができる<sup>(46)</sup>。

山麓型 小瀬沢遺跡群、健康村遺跡、米山遺跡、川又坂上遺跡、

高台型 上小川遺跡、雜木遺跡、石之坪遺跡、長出口遺跡、上の山遺跡

非高台型

#### ①川沿い型

A 塩川遺跡、星敷平遺跡、水無遺跡、大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡

B 藤井平遺跡群、大豆生田遺跡

C 溝呂木道上第5遺跡

②湖水沿い 鶴の島遺跡

まず山麓型は八ヶ岳の裾野に点在するものであるが、健康村遺跡や川又坂上遺跡のように裾野の端部に近い深い谷沿いの尾根に立地するものと、米山や小瀬沢町の遺跡のように緩やかな尾根上に立地するものとがある。川又坂上の例では尾根の中心部分は中期の集落であり、次ぎにふれる高台型と共にするとともに須正川という大河川沿いでもある。

高台型は、長出口遺跡や上の山遺跡のように繩文中期の集落が近くに営まれている遺跡で、その点からは中期的な立地とも言えるタイプである。同時に上小川、雜木、石之坪などの遺跡は釜無川右岸の段丘上に位置するもので、非高台型の川沿いタイプにも共通する。特に石之坪遺跡は中期の大集落もあり、川沿い段丘上の高台とい

った両者に共通する立地は注目すべきである。

非高台型のうち顕著なのは川沿いの低い段丘上や自然堤防上といった立地である。このうちA群としたものは屋敷平遺跡、木無遺跡、大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡のように釜無川右岸の段丘ないし扇状地上に位置するものが特徴的である。特に屋敷平や石橋北屋敷は釜無川に面した平坦な段丘上に位置しており、川との関係の強い立地条件と思われるものである。

B群としたものは主に藤井平遺跡群である。A群よりも低位であり、川沿いに展開する微高地あるいは自然堤防上とその間にひろがる低地を取り込んで生活の場としたと見られるものである。

C群は扇状地末端から沖積地にかけての立地である。本来中府盆地により多くの遺跡があると思われるが、現状では定かではない。

その他として河口湖中の鶴の島遺跡があるが、河口湖の生成や当時の遺跡と湖との位置関係は不明であるものの、水と関わりのある立地とみてよかろう。

このようにみると、晩期後半Ⅲ型とⅣ型とは立地上から高台型と非高台型の両方の場所に立地しており、このことが遺跡数の増加につながっていることになる。高台型については中期に大きな集落が形成され後期初頭以後は生活の場として使われなかった場が再び晩期後半になって使われるようになる場所である。長野や山梨の事例から後期晩期の遺跡立地を考察した小宮山降氏も晩期後半の遺跡立地について比較的高い山麓や高位河岸段丘上に多いことを確認している<sup>(20)</sup>。このような高台型に加え、川に面した段丘上やより低い箇所にもこの時期の遺跡を見ることができる。つまり金生遺跡のような住居や配石から構成される集落を拠点しながらも、中期的な高台やより低い場所に小規模な遺跡が展開てくるものと考えられるのである。

この理由は一体何であろうか。後期中葉以降の低地志向が金生遺跡のような生活環境の中に低湿地を取り込む集落の選地をもたらしたことは、生産や加工において水辺への依存度が高まることにもよると考えており、基本的には晩期後半も同様と言える。特に釜無川や塩川といった大きな河川に面した場所に適地とする遺跡が増えていることは、その表れでもあろう。の中でも蘿崎山宮ノ前遺跡の初期弥生段階の水田跡の発見は大きな意味がある。その直下からは浮縫文系土器群が出土しており、この時期にまで水稻耕作が遡る可能性が高いからである。遅くとも大洞C 2式期の段階に西日本では弥生文化に移行したものとみられ<sup>(21)</sup>、山梨でも晩期中葉から後葉の集落にて弥生文化の受容が行なわれたものと考えている。このような中で、宮ノ前遺跡を含めた藤井平地区は気温・水利とともに水稻作りに適した地域であり、晩期後半期においてもいちはやく新しい生産技術を取り入れるにはふさわしい土地であったと思われる。

一方、釜無川に沿った白州町屋敷平遺跡から八田村石橋北屋敷遺跡に至るまでの間の遺跡については、水利といった点からは藤井平に比べてさほど便利とは言えない河岸段丘上に立地している。この場合水稻耕作というよりも川そのものとの関わり、例えば川漁といったような生業とのかかわりに求められないであろうか。しかし石錘や上鍤といった遺物は明確ではなく推測の域を出ることができない。ただ土製臼盤が32点も出土している屋敷平遺跡のような例もあることは注目すべきである。この用途については不明であるが、中道遺跡から27点、雜木遺跡から5点が出土しており今後注目したい。なお屋敷平遺跡からは跡跡と見られる痕跡のある初期弥生土器底部が出土している事から、この付近で稲作りが行なわれていたことは確かであろう。水とのつながりから言えば、現状河口湖中にある鶴の島遺跡がその最たるものであり、湖での漁業といった生業形態を探ることのできる遺跡でもある<sup>(22)</sup>。ただし縄文晩期の時点での遺跡の立地がどのようなものであったのかは明確ではなく、漁業にかかる遺物の発見も定かではない。湖水と遺跡との関係もふくめ今後の調査の課題であろう。

高台に出現する遺跡についてはすでに畑作の可能性を考えたことがある<sup>(23)</sup>。弥生文化導入の一つの地域である八ヶ岳山麓にあっては標高が高く、稲作の成功には標高700m以下の地域に下がる必要があることから、畑作を考えたものである。これについても具体的な遺物は現状では全くないことから推測の域をでないものである。石器の分析をおしてこの問題に対処する方法もこれまで試みられているが、加えて土壤分析等の必要も考えら

れる。特に川又坂上、長田口遺跡などにみると、晩期後半の遺物包含層は黒色土である。これらの水洗選別や分析をとおして検討することも課題であろう。

なお中山誠二氏は縄文時代の多角的食料獲得手段の一つに「稲を含む原初的な農耕」の存在を前提に考えている<sup>(註1)</sup>が、このことは逆に初期弥生にあっても水稻耕作とその補完関係にある生業の存在を意味することになる。さらに中山氏は稻栽培についても縄文時代に遡る資料を整理した上で、陸稲栽培と原初的な水稻栽培とが地域の立地環境に合わせてどちらも行なわれていた可能性を指摘している<sup>(註2)</sup>。

このような視点からみると、立地の低位化が顕著になる後期中葉と、再び高台や川沿いに立地する晩期後半期という二つの画期は、やはり生業とのかかわりの中で考えることが必要であり、しかも縄文期のベースとなる生産形態に加えて複数の食料獲得方法が試されていた可能性を示唆するものであろう。中部高地に位置する山梨にあっては、少なくとも晩期後半に新しい生産形態との本格的な出会いがあったと思われ、この時期にこそ多角的な生産經營が試行されたものとみなされる。継続性Ⅲ型・Ⅳ型という小規模な遺跡が高台や非高台といったいくつかの場所に現れてくる背景には、そのような生業上の原因があったものと考えたい。

## 5 おわりに

山梨においては後期中葉以降遺跡が減少する傾向が指摘されていたものの、ここ十数年間の圃場整備事業などの低地部分の調査により、徐々に資料が蓄積されつつあり低地志向という傾向も分かつてきただろう。その中でも特に晩期後半になると、小規模ながら遺跡数が増加する傾向がとらえられるようになってきた。この実態について、遺跡の継続性から検討してみたのが小稿である。その結果晩期後半から初期弥生への継続性のあるⅢ型と晩期後半に限られるⅣ型が増加していることがわかった。加えて立地の点からも低位志向にあった後期中葉から晩期前半期までは異なって、再び中期的な高台が利用されるとともに大河川沿いにも点在するような傾向をつかむことが出来た。このことは金生遺跡のような配石を構築し土偶の祭を行なうという縄文文化の伝統に基づく集落を拠点としながらも、多角的な生産の場を求めるというこの時代の特性を表わすものなのかもしれない。各立地における生産の中味については今後の調査に期待されるが、特に高台に位置する遺跡でも晩期特有の黒色土が形成されている場合が多く、この黒色土の分析をとおす必要があろう。また河川沿いの遺跡については漁業とのかかわりある遺物の確認も課題といえる。

なお今回の資料収集では甲府盆地低部から東部にかけての資料が少なかった。未発見や整理中の遺跡も多く、見落としたものも多いと思う。特に弥生初期の土器のみられる敷島町金の尾遺跡、中道町米倉山遺跡群などを含め、盆地中心部から周辺の丘陵地帯での状況もつかんでいくことが課題でもある。その上でこの時期の拠点となつた集落が、縄文文化の伝統を保つ金生型に限られるのか、あるいは藤井平のような沖積地に接した地域に別の拠点集落が形成されていたのかといった点についても課題としておきたい。山下孝司氏は、藤井平に展開する遺跡について「石を造構に使用することに象徴される縄文文化の伝統を切り捨て、水稻耕作が進展していった」ととらえているし<sup>(註3)</sup>、百瀬長秀氏もまた配石祭祀を固守する金生群と新たに台頭する中道群という両者の関係を説いている<sup>(註4)</sup>。縄文文化の伝統と新しく押し寄せる波の中で、これまでの集落間関係がどのように変化していったのか問題となるところである。

なお縄文終末から弥生初期の例として、宮町塙田や都留市熊井戸から出土した土器があるが、今回これらは弥生の様相の強い段階のものとして一覧からははずした。今後この段階も含め弥生の立場から検討する必要があろう。

最後に小稿をまとめるにあたっては中山誠二氏から種々なご教示を得た。感謝の意を表したい。

### 註

1 新津 健「八ヶ岳南麓における縄文後・晩期の遺跡について」甲斐考古21-2 山梨県考古学会 1984

2 後期晩期遺跡の立地について、その後小宮山隆氏は長野山梨の例から、明らかな低地化の徴候は認められな

い反面、浅谷近くの水場を思わせる場所により接近して立地する事例が多くなることを指摘した（小宮山隆「中部高地縄文時代後晩期の遺跡立地について」『筑波大学先史学・考古学研究』第3号 1992）。

筆者のいう後期晩期の低位化とは、小宮山氏が研究史で整理した垂直分布を意味するものではなく、まさにこの「浅谷近くの...」立地を意味するものであることは前掲註1文献をみれば明らかであり、この点から八ヶ岳南麓においても後期中葉以降、遺跡の立地は低位化が進んでいることが確認できる。さらに小宮山氏が「生業構造に影響する性質のものではない」としたこの微地形変化について、筆者は生業活動においての重要な現象と考えている。晩期後半期に再び遺跡立地に変化が現れることもまた生業とかかわる重要なできごとと考えたい。

- 3 百瀬長秀「浮線文期遺跡分布論」「中部高地の考古学」IV 長野県考古学会 1994
- 4 新津 健「縄文晩期集落の構成と動態—八ヶ岳南麓・金牛遺跡を中心に—」縄文時代 3 縄文時代文化研究会 1992
- 5 木本 健「小淵沢町の原始・古代」「小淵沢町誌」1983
- 6 中山誠二「甲斐における弥生文化の成立」「研究紀要」2 山梨県立考古博物館、山梨県埋蔵文化財センター 1985
- 7 並崎市遺跡調査会「三宮地遺跡」並崎市教育委員会 1998
- 8 註3に同じ
- 9 註4に同じ
- 10 山麓型、高台型と大きく区分したが、これらはさらに台地中央部にあるものと、台地端から斜面に近い箇所にあるものなど細かい区分ができる。今回はそこまで区別しなかったが、小宮山隆氏が註2論文の表7で区分したような、ビジュアルな微地形分類も今後必要となろう。
- 11 註2記載の小宮山文献に同じ
- 12 新津 健「山梨における縄文文化の伝統と消滅」「山梨考古学論集」I 山梨県考古学協会 1986
- 13 栗田常恵「富士の遺跡」
- 14 註1に同じ
- 15 中山誠二「灌漑型水稻作の波及・定着論」分析ノート「西相模考古」7 西相模考古学研究会 1998
- 16 中山誠二「縄文稻作論の現状と新たな課題」「遺跡・遺物から何を読みとるか(II)一食の復元ー」資料集 帝京大学山梨文化財研究所 1998
- 17 山下孝司「藤井平における弥生文化の波及について」「金山遺跡・下木戸遺跡・中道遺跡」並崎市教育委員会他 1986
- 18 註3に同じ

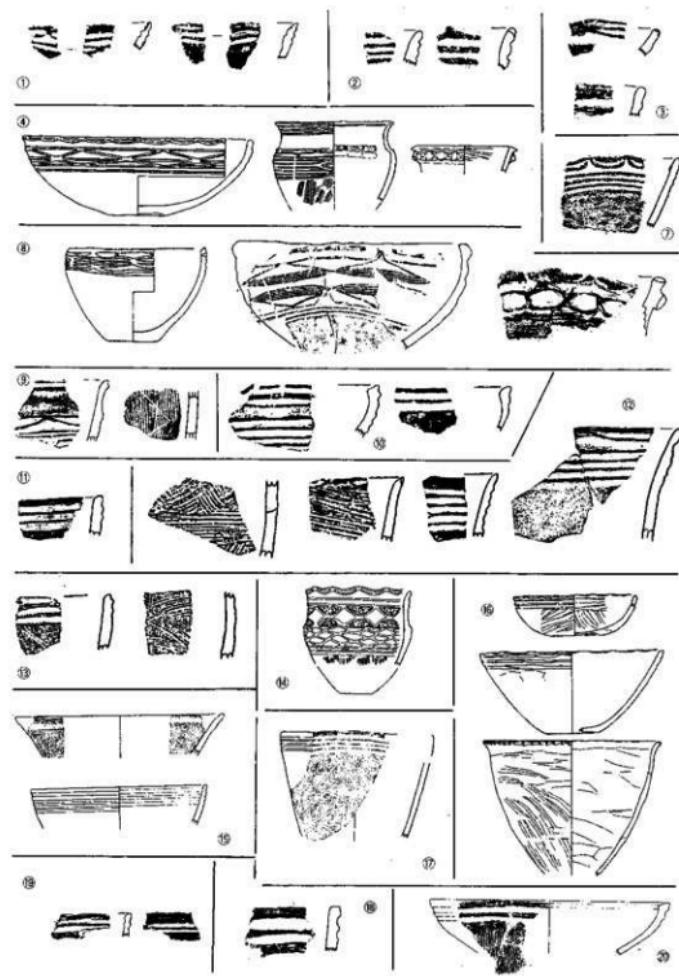


第1表 晩期後半遺跡一覧

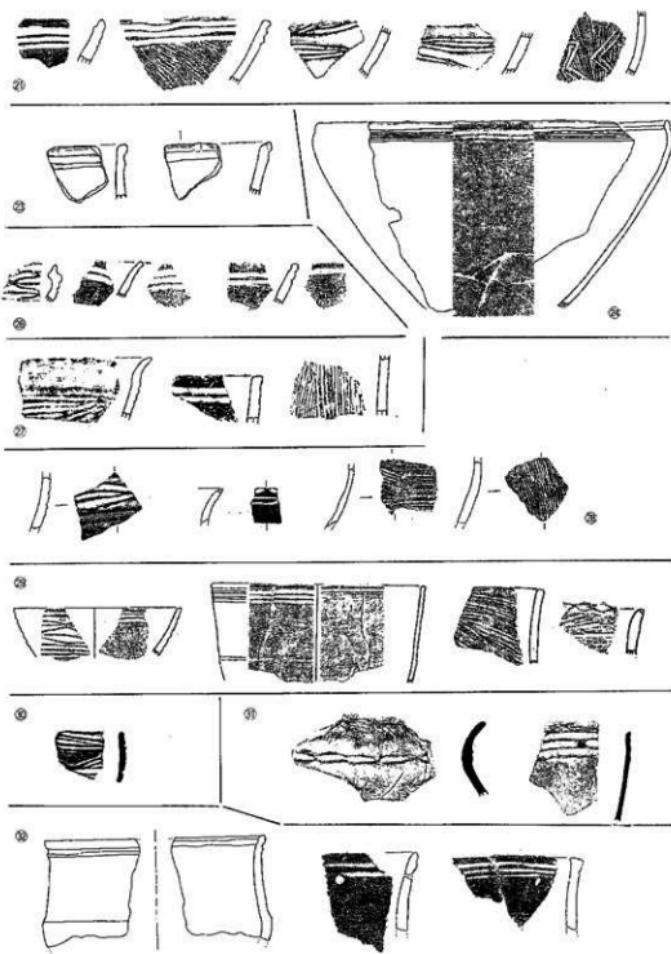
遺跡名	所在地	立地	難読性	文献
1 沢氏龍浦跡	北巨摩郡小瀬沢町上新尾	尾根	A型	1
2 萩八田浦跡	北巨摩郡小瀬沢町上新尾	尾根	B型	1
3 神田遺跡	北巨摩郡小瀬沢町松向	尾根	B型	1
4 健原村遺跡	北巨摩郡長坂町大字中丸	台地上	B型	2
5 長坂上条遺跡	北巨摩郡長坂町上条	低位の山根斜面	I型	3
6 末山遺跡	北巨摩郡長坂町大八田	丘陵斜面	B型	4
7 柳坪遺跡	北巨摩郡長坂町大八田	尾根末端	B型	5
8 金生遺跡	北巨摩郡大泉村谷戸	低位の盆地	I型	6
9 川又坂上遺跡	北巨摩郡高根町穴輪	尾根斜面から深い谷部	I型	7
10 交原遺跡	北巨摩郡須工町津金	低位の山根	(B型)	8, 9
11 世川遺跡(日向市)	北巨摩郡須工町北志・小尾	河岸段丘(古佐證丘先端部)	B型	10
12 大豆生田遺跡	北巨摩郡須工町大豆生田	須玉川の自然堤防上	B型	11
13 中本田遺跡	北巨摩郡穴山町中条	低位の河岸段丘	B型	12
14 中道遺跡	北巨摩郡中田町小田川	"	B型	13
15 斎田遺跡	北巨摩郡中田町中条	"	B型	14
16 宮ノ前遺跡	北巨摩郡藤井町坂井	"	B型	15
17 宮ノ前遺跡	北巨摩郡藤井町坂井	"	B型	12
18 桂橋遺跡	北巨摩郡白州町下教士村	河岸段丘中位面	B型	16
19 小田田遺跡	北巨摩郡白州町丸原	台地	B型	17
20 桐木遺跡	北巨摩郡白州町白瀬	河岸段丘中位面	B型	18
21 斎平浦跡	北巨摩郡白州町台・野	河岸段丘	B型	19
22 石之坪遺跡	北巨摩郡丹野町下円井	河岸段丘	B型	20
23 本無遺跡	北巨摩郡丹野町下円井	河岸段丘	B型	21
24 人塚遺跡	中巨摩郡八田村野々島	扇状地上の尾根斜面	B型	22
25 石横北屋敷遺跡	中巨摩郡八田村野々島	扇状地扇端部	B型	23
26 長良寺遺跡	中巨摩郡御町形平岡	市之瀬台地先端の丘陵	B型	24
27 上の山遺跡	中巨摩郡御町形平岡	"	B型	25
28 清呂木道上第5号遺跡	中巨摩郡若草町・日市場	扇状地上の微高地と標高地	B型	26
29 鶴の島遺跡	南都留郡御代町・鶴の大石	鳥、標高40m	B型	27, 28
30 逆矢原遺跡	西都留郡朝日馬場	台地斜面	B型	29
31 中谷遺跡	西都留郡山形村	斜面	B型	30
32 用竹(殿村)遺跡	北都留郡上野原町横原	河岸段丘	B型	31

## 晩期後半遺跡(第1表・第1, 2図)引用文献

- 末木 健「小瀬沢町の原始・古代」『小瀬沢町誌』1983
- 新宿区民防災課調査班「健原村遺跡」1994
- 大山裕ほか「山梨県日野春森村長板上条発掘調査報告」『史前学雑誌』13-3 1941
- 山梨県埋蔵文化財センター「山瀬遺跡」『年報』14 1998
- 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告第13号「柳坪遺跡」1986
- 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告第41集「金生遺跡」山梨県教育委員会 1989
- 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告第57集「川又坂上遺跡」山梨県教育委員会他 1993
- 新洋 健「ハッカ山南面における縄文後・晩期の遺跡について」『甲斐考古』21-2 1964
- 須玉町史編纂委員会「須玉町史」史料編第一巻 須玉町 1998
- 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告第70集「塙山遺跡」山梨県教育委員会他 1992
- 山梨県教育委員会他「山梨県中央道御坂文化財包蔵地発掘調査報告書」北巨摩郡須玉町地内へ 1976
- 山下孝司「中本田遺跡・宮の前遺跡」並崎市教育委員会他 1987
- 山下孝司「金山遺跡・下木戸遺跡・中道遺跡」並崎市教育委員会他 1986
- 山下孝司「前田遺跡」並崎市教育委員会他 1988
- 中山誠二「宮ノ前遺跡出土の縄文灰陶甌から弥生時代中期初頭の土器群」「宮ノ前遺跡」並崎市遺跡調査会ほか 1992
- 折井 政「板橋遺跡」白州町教育委員会 1989
- 新洋 健「考古」「白洲町誌」1986
- 杉本 充「味木本遺跡」白州町教育委員会他 1997
- 杉本 光「尾瀬平遺跡」白州町教育委員会 1991
- 閑間俊明「石之坪遺跡」「遺跡調査発表会要旨」1997年度下半期 山梨県埋蔵文化財センター 1998
- 山下孝司「水無遺跡」並崎市教育委員会他 1998
- 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告書第137集「大塚遺跡」山梨県教育委員会、ほか 1997
- 山梨県埋蔵文化財センター「石横北屋敷遺跡」「牛報」14 1998
- 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告書第82集「長田上4遺跡」山梨県教育委員会 1993
- 清水 博「上の山遺跡」櫛形町文化財調査報告書2 櫛形町教育委員会 1985
- 田中大輔「満木木道上第5遺跡」若草町教育委員会他 1998
- 山本万々雄「山梨県御代町御代の出土の土器の例」「富士山国立公園博物館研究報告」6 1961
- 中山誠二「中腹における弥生文化の成り」『研究紀要』2 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1985
- 山本寿々雄「石造遺跡の新探」『私立富士山国立公園博物館研究報告』4 1960
- 都留市教育委員会「中谷遺跡」1973
- 小西政樹「用竹(殿村)遺跡」上野原町埋蔵文化財調査報告書第8集 上野原町教育委員会 1998



第1図 各遺跡出土の土器 (実測図 1/6, 拓本 1/4)



第2図 各遺跡出土の土器（実測図1/6, 拓本1/4）

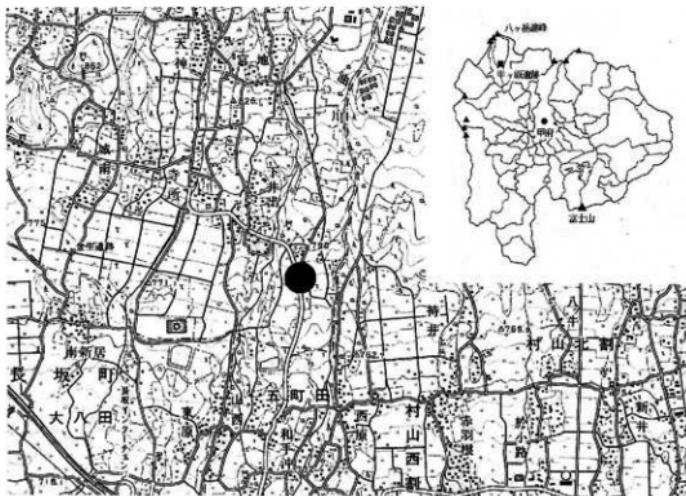


## 甲ッ原遺跡発掘調査報告 (平成10年3月3日から3月26日)

山本茂樹・網倉邦生

- 1 発掘調査に至る経緯と調査経過  
2 調査組織

- 3 遺構と遺物  
4 まとめ



第1図 甲ッ原遺跡位置図 (1/25,000)

### 1 発掘調査に至る経緯と調査経過(山本)

一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業は、第7次調査(1997年度)をもって全て終了したが、現道部分の改修工事がアスファルトから約1m掘削されることにより、急遽現道部分の調査が実施されることとなった。

調査は、山梨県土木部から山梨県教育委員会が依頼され、山梨県埋蔵文化財センターが実施し、平成10年3月3日から3月26日までの間で延べ9日間行った。

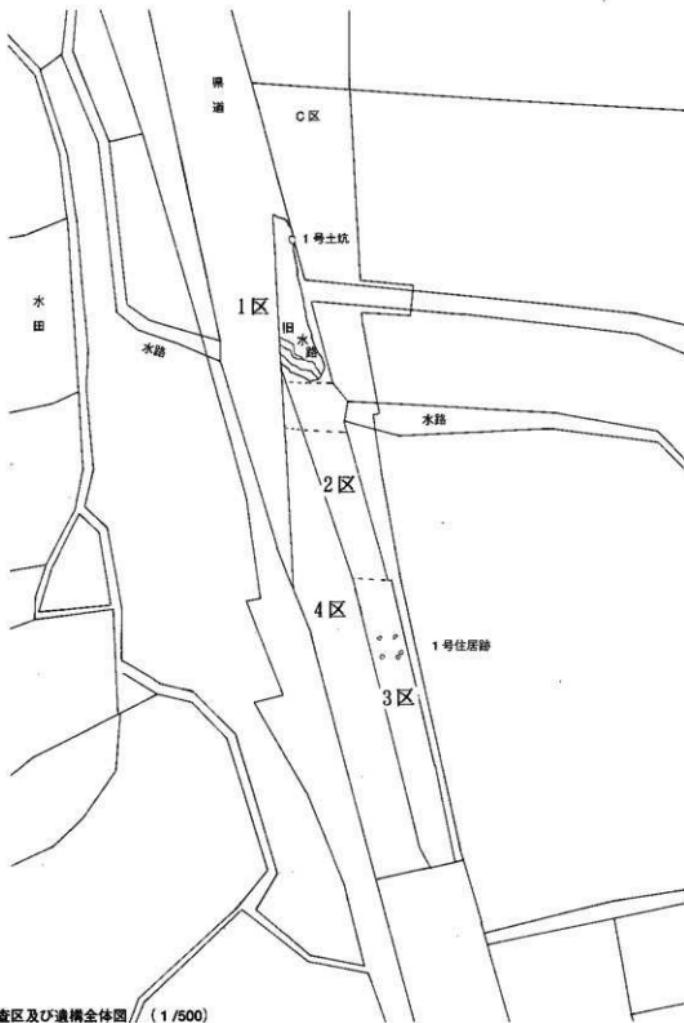
今回の現道部分の調査は、甲ッ原遺跡の範囲内であることと、遺構の存在が十分考えられることによるものである。

現道部分の調査は4区画を設定し(第2図)、アスファルトおよび下層の碎石まで約50cmを重機によって排除し、その後遺構確認を行った。

H10.3月3日 第1区の調査を行った。その結果、縄文時代前期後半諸磧式の土坑1基と小ピット数基が確認され、第6次調査C区で発見された旧水路と思われる遺構の続きが確認された。この旧水路の時期は、不明である。

H10.3月4日 昨日に引き続き第1区の調査および遺構平面図の作成。終了後、全体写真の撮影。

H10.3月6日 第2区の調査を行った。現在の水路をはさんだ南側部分では搅乱が著しく、握り拳大の礫が層を

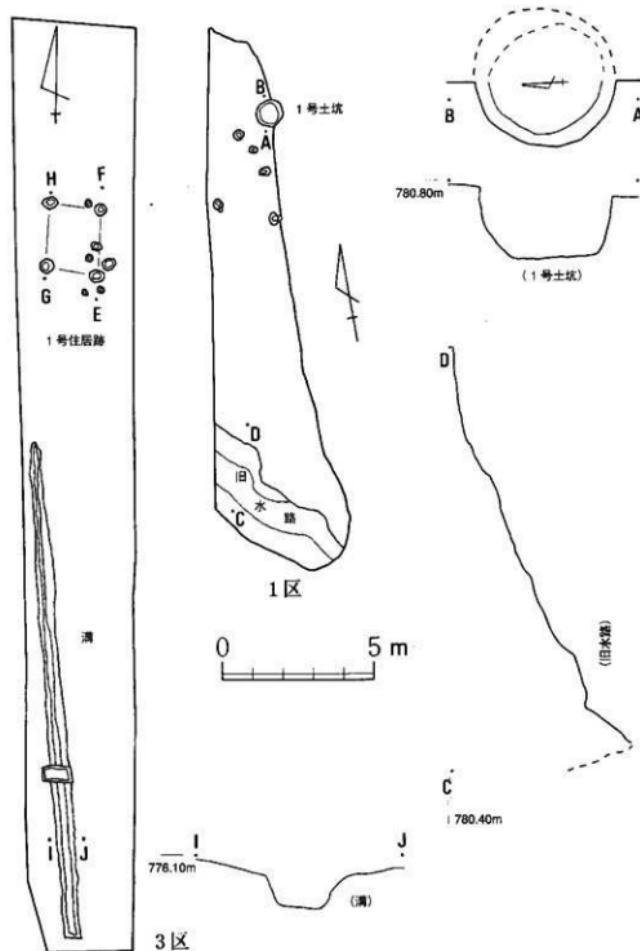


第2図 検査区及び遺構全体図 (1/500)

成して埋められていた。そのためか遺構は検出されず、遺物の出土は数点であった。

H10.3月9日 第3区の調査を行った。現道から約80cmまでを重機によって暗褐色を呈する粘質土上面までを排除した。その結果、上坑3基、ピットと思われる遺構5基を確認する。

H10.3月10日 第3区の西側部分において、2基の土坑が確認された。前日確認された土坑との関係から、方形を呈する柱穴の配列が想定されることから住居跡とした。柱穴の覆土は暗褐色土でしまりがよく、2本の柱穴から黒曜石片が出土した。また試掘坑を3ヶ所設定し掘り下げたが、遺構・遺物は検出されなかった。



第3図 1区・3区遺構配置図(1/160)及び各遺構図(1/30)

H10.3月11日 昨日に引き続き、遺構確認作業を行った。また新たに1.5m×1.5mの試掘坑を設定し掘り下げを行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

H10.3月23日 第4区で遺構確認作業を行った。遺物は、土器片が数点と黒曜石片数点であった。

H10.3月24H 昨日に引き続き、遺構確認作業を行った。遺物は、土器片が数点と打製石斧1点および黒曜石片数点である。

H10.3月25日 昨日に引き続き遺構確認作業を行い、1.5m×1.5mの試掘坑を設定し掘り下げを行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

## 2 調査組織

調査主体：山梨県教育委員会

調査機関：山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者：山本茂樹・渡辺泰彦（現：大泉村教育委員会）

調査員：綱倉邦生（現：山梨県埋蔵文化財センター非常勤嘱託）

作業員：千野三男、千野松代、千野あやめ、浅川たみ子、浅川茂子、浅川保代、戸島義和、河手寿子

三井幸子、平嶋純一、平嶋弘子

協力機関：大泉村教育委員会

## 3 遺構と遺物（第3・4図）（網倉）

### 遺構

#### 1号住居跡

第3区に位置する本住居跡は、道路敷設時に壊されたものと考えられ、壁・床面および周溝は確認されず、4本の柱穴のみ認められる。それぞれの柱穴間は、1-2が2.25m、2-3が1.73m、3-4が1.3m、4-1が1.68mをそれぞれ計測する。出土遺物は、検出されない。

#### 柱穴の配置から、縄文時代中期に帰属するものと思われる。

#### 1号土坑

第1区に位置し、東側は水路によって約半分壊される。現存で長径87cm、短径84cm、深さ41cmをそれぞれ計測する。坑底は平坦で、丸く立ち上がる。出土遺物より、縄文時代前期後半の諸磯c式期に属する。

#### 溝状遺構

第1区の南側に位置し、1995年度（第6次調査）C区の調査の際確認された溝の続きと思われる。この溝は直ぐ脇に設置されている水路との関係から、旧水路と考えられる。

#### 溝

第3区に位置し、ほぼ南北に16.2m、幅17cmから65cm、深さ6.4cmから22.7cmをそれぞれ計測する。出土遺物は、縄文時代前・中期に比定される上器片が認められるものの、溝の覆土は灰黒色の粘質土であること、また握り拳大の礫が溝に混入していることからかなり新しいものと思われる。

#### 遺物

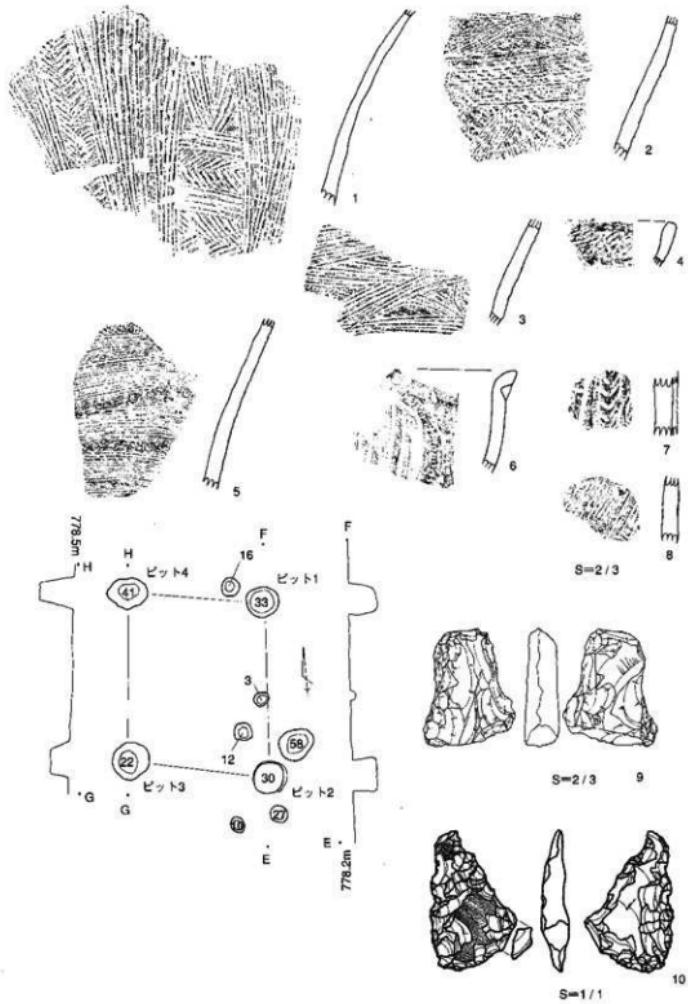
1から5までは1号土坑の出土遺物で、諸磯c式期である。6から8は、第1区の旧水路から出土したものである。6、7は井戸尻式期、8は諸磯c式期である。

9は横長剥片を素材としたホルンフェルス製の打製石斧である。刃部が破損しているが、基部と刃部の形態差が明確に認められる。側縁において潰れは認められず、階段状剥離が著しく発達する。折れ面においては、腹面側の右側縁に接してネガティップルブルが存在する。

10は横長剥片を素材とした黒曜石製の両面調整石器であり、折れを有する部位から石匙である可能性が高いが、最終の剥離単位が背面右側縁からの調整であることや端部形状が鋸歯状であることから、石匙である可能性もある。右側の折れ面はポジティブであり、背面中央にリングを収束させ、ヒンジフラクチャー状に剥離されている。

## 4まとめ（山本）

今回の甲ヶ原遺跡の報告は、現道のアスファルト部分改修工事のため掘削が現道から100cmにも達することにより、事前に発掘調査を行うこととなった。広範囲にわたって形成された本遺跡は、今回の調査によって、南側部分の遺跡の範囲が確定された。しかしながら、現道が建設されたことによって、幾つかの住居跡や土坑が破壊されたことも事実である。そのような中で、残存状態は良くないものの、1軒の住居と1基の土坑が調査されたことは本遺跡を解明する上で重要なことと思われる。



第4図 1号住居跡(1/60)・1号土坑出土遺物及び各区出土遺物



# 大月市御所遺跡から検出された動植物遺体とその性格（1）

小林公治・吉川純子（古代の森研究会）・樋泉岳二（早稲田大学）

## 1 はじめに

御所遺跡は山梨県大月市駒橋地内に所在する奈良・平安時代を中心とする集落遺跡であり、中山湖を水源とし、山梨県内から神奈川県まで総延長およそ110km余りにわたって流れている桂川（相模川）の中流域右岸に立地している（第1図）。

本遺跡は、大月市の中心部を迂回する大月バイパスの建設に先立ち、当センターによって1995年度に約1,500㎡が調査された。

検出された主な遺構と遺物は、奈良・平安時代の竪穴住居跡8軒、土坑15基、ピット群と、金粉と水銀朱が付着し鍍金（金メッキ）に使用されたと考えられる石柱などである。またこの他の時代のものとしては、縄文時代中期の竪穴状遺構2基、炉穴を含む焼土遺構11基などがある（山梨県教育委員会1998）。

これらの奈良・平安時代竪穴住居跡8軒のうち7軒からは調査範囲内にカマドが検出され、その内部の灰・炭化物・焼土層を中心とする土壤を、また焼上遺構でも炭化物・焼土層を採取し、整理作業において水洗選別を行った。その結果、サンプル土壤の多くから炭化種実や動物骨が検出された。これらの結果について報告書中には詳細に記載・報告することができなかったため、本研究紀要の紙面を借りて報告し、併せてこうした動植物遺体が検出される理由について検討することにしたい。

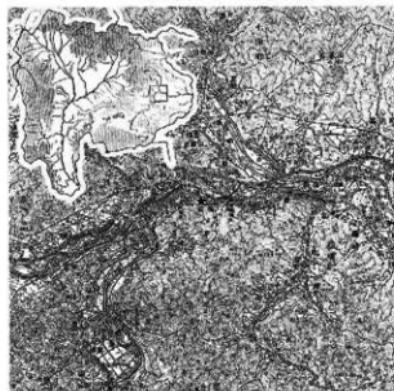
なお、動物遺体についてはサンプルを前後2回に分けて水選・依頼しており、今回の報告するのは最初に依頼した分である。従って、各遺構からの同定資料数や種類は今後さらに増えることが予想される。これらの未同定資料については機会を改めて報告することにしたい。

## 2 方法

### （1）サンプリング

ここで報告する動植物遺体が検出された遺構は、縄文時代と推測される焼土遺構と奈良・平安時代の竪穴住居跡カマドである。焼土遺構には炉穴（楕円形を主体とする土坑中に焼土面が形成されている遺構）と焼土跡（少なくとも確認面では掘り込みが確認できず、焼土面のみが検出された遺構）の2種があるが、出土遺物がほとんど無いため時期の限定は困難である。遺構の切り合い関係および近隣地域で検出されている類似遺構の検討から、縄文時代という広い時間幅で捉えている。サンプリングはこれらの焼土面より上層に堆積している炭化物・焼土粒を多く含む土壤を中心で実施した。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、方形で一辺3~4m程度の規模のものが主であり、この時代に東日本で一般的に



第1図 御所遺跡の位置

検出される竪穴住居とまったく異なるごく通有的なものである。住居内土壤のサンプリングに当たっては、床面、柱穴、が跡、貯蔵穴などの各所から傾向分析に足りる程度の量を採取する必要性が指摘されているが（細谷1997）、処理時間や手間の限界、また食生活および生業の復元という主目的から、カマド内に限定して実施した。住居跡カマドは南壁を除く各壁に付設されているが、多くは北壁中央に造られている。遺存状況のよいものからその構造を推測すると、両袖を大形の自然縛および粘土等で造り、燃焼部上部も大形の扁平盤などで蓋をしていたようである。採取土壤はカマド調査時に燃焼部内の中心に堆積している灰層からサンプリングしたが、良好な灰層が存在しない場合は、同部分に堆積している炭化物や焼土を多く含む土壤に対して行った。なお、表中の〇区とは、発掘時にカマド燃焼部が交点となるようにセクションベルトを十字に設定した際に、壁に向かって右半向こう側から時計回りに順に名付けた4つの区画を意味している。

サンプリング自体は、土壤等の付着していないきれいな移植ごてなどを用い、ビニール袋などに採取した。また選別した動植物遺体は炭化植物および動物骨に限定していることから、採取時点以降での汚染（contamination）の可能性はほぼ除外してもよいであろう。

## (2) 選別方法

以上の遺構から発掘調査時に採取した土壤の水洗選別方法および道具は、筆者が以前行った方法（小林ほか1991）と基本的に同じであるが、確認のため簡単に述べておくと、

①まず、採取土壤を自然乾燥させる。

②乾燥土壤を一定量水を入れた大形ピッチャーに入れ体積を計る。またこの時に浮遊する炭化物を市販の湯垢すくいによって採取する。

③計量した土壤を適量、水を張ったたらいの中においた理化学用フルイ（最小メッシュ0.25mm）に入れる。そしてフルイより細かい土壤を落としながら、浮遊する炭化物を市販の湯垢すくいによって採取する。

④炭化物をすくい上げた後、残った土壤中から骨と思われる動物遺体を丁寧に拾い上げる。

⑤炭化物および動物骨の採取が終了した土壤を自然乾燥させ、保存する。

という手順であり、内容的にはフローテーション法と水洗篩別法を併用したものだと言える。水洗過程での拾い上げに際しては植物では炭化物全体を、動物では骨と思われるものはすべて取り上げるようにし、それらすべてに対して古川・植泉兩氏による種実および動物骨の選別・同定を依頼したので、水洗選別過程でバイアス・偏りが生じた可能性は少ない。また新たなサンプルにうつる際にはフルイなどの道具はきれいに洗浄し、サンプル間での汚染をふせいでいる。これらの作業は室内で行い、作業に従事したのは、筆者および山梨県埋蔵文化財センターで整理作業をお願いした比較的年齢の若い女性数名で、かなり丁寧な作業をしていただいた。

この他、フルイ残土の再水選を実施していないので回収率については不明であるが、筆者自身が以前行ったのと比べ、同程度以上の検出率は得られたものと思われる（小林1995）。

なお、同一遺構からの土壤サンプルが複数個ある場合は、必ず1つ以上は未フルイのまま残し、今後の再検討が可能なように保存してある。

## 3 検出された動植物遺体の同定・記載

### (1) 炭化種実同定結果及び記載（第1表・写真図版）

肉眼により選別された炭化物の中から実体顕微鏡にて同定可能な炭化種実を選び出し、詳細に観察検討した。炭化種実の種類と個数を第1表に示す。

産出した炭化種実の中で最も多いのは穀類などが焼けただれたと推定される炭化物の塊である<sup>⑩</sup>。オニグルミの内果皮の破片も多数産出するが、大変小さい破片である。また、雑草であるイネ科2種を多く産出している。食用の穀類としては、アワが5遺構（10試料）から、キビが1遺構（1試料）から、コムギが1遺構（1試料）から、ムギ類が1遺構（1試料）から産出し、穀類以外では食用と思われる大きさのマメ科が4遺構（8試料）から産出している。これらの他にサンショウ属、キチゴ属、イバラモ属、シロザ近似種、タデ属、シソ科、堅果破片を産出した。特徴としては、イネを一粒も産出せず、穀類が少な目でややマメが多いことである。

第1表 御所遺跡で水洗選別された動・植物遺体

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.) : 内果皮の小さい破片を多数産出した。もとの内果皮は長さが3cm前後の球体であるため、産出量としては少ないものになる。

サンショウ属 (*Zanthoxylum*) : 内果皮の小さい破片を産出したため、種までの同定はできなかった。サンショウ属は低木から中高木まであり、利用した可能性も考えられる。

キイチゴ属 (*Rubus*) : 核が少し焼け膨れた感じのものを産出した。サンショウ属同様、1個のみのため、雑草などと混ざって炭化した可能性もある。

イバラモ属 (*Najas*) : 産出したのは1試料だけであるが、イネ科の雑草2種も多産している試料で、ともに持ち込まれ炭化したと思われる。イバラモ属はある程度水深がある湖沼などに生育する沈水植物である。外形が類似するキク科は光沢がなく炭化すると多片に裂けるが、本炭化種子はやや光沢が残り縦にまぶたつに裂けるため、イバラモ属と同定した。

アワ (*Setaria italica* Beauv.) : 通常主食とされる雑穀類のうち、個数、試料数ともに最も多く産出した。乾燥高温を好み、水田耕作が困難な地域に栽培される雑穀である。

キビ (*Panicum miliaceum* L.) : アワと同様水田耕作が困難な地域に栽培される。

コムギ (*Triticum aestivum* L.) : 水田の裏作として栽培される雑穀である。通溶粉食とされているが、住居跡でたびたび炭化種子として産出する。

ムギ類 (*Hordeum* or *Triticum*) : 溝があるが焼け膨れていたり、欠けていたりしてコムギかオオムギかの区別が付かない炭化ムギ粒である。

イネ科A (Gramineae A) : 長さは0.7~0.9mm、オオムギ型で縦に細いスジがあり、基部はあまり尖らない。雑草と思われる。

イネ科B (Gramineae B) : 長さは1.3~1.6mm、棒状に細長く、先端は丸い。雑草と思われる。

マメ科 (Leguminosae) : 焼け膨れていって、外種皮がはがれ、へその部分も残っていない。長さは5~7mmほどで、アズキ属とも考えられるが、確定はできない。マメ科近似種はさらに激しく焼け膨れているものである。

シロザ近似種 (*Chenopodium* cf. *album* L.) : 円形、扁平でやや光沢があり、2面に割れやすい。1カ所にへそがあり、ややへこみ、そこから中央に向かって1本不明瞭なスジがはいる。この仲間は比較的乾燥した場所を好み雑草である。

タデ属 (*Polygonum*) : 長さは2mm程で、焼けてかなり膨れており、3面かと思われるが不明。

シソ科 (Labiatae) : 長さは1.5mm程で焼け膨れている。

堅果: 小さい破片で表面も焼けているが、内側に種皮のようなものが付着しているようである。

## (2) 動物遺体の同定 (第2表)

分析試料はすべて住居跡のカマド内部より採取された堆積物のブロックサンプルで、年代は奈良・平安時代(8~9世紀)に属す。これらは0.25mm目のフルイによって水洗された後、骨片と思しき破片が拾い出され、筆者の元に届けられた。これを双眼実体顕微鏡下で観察しながら、分類群の特定が可能と思われる標本を選び出し、現生骨格標本との比較によって同定した。

検出されたのは魚類・鳥獣類の遺体(骨片)で、貝殻等は含まれていなかった(第2表)。骨はすべて焼けて灰色ないしは白色を呈している。大部分は細片化しているため、種類を特定できた標本は少ない。

魚類では、第3号竪穴住居跡と第7号竪穴住居跡よりマイワシ *Sardinops melanostictus* の主上顎骨・舌顎骨が検出されている。これらの部位では他のニシン科 *Clupeidae* 魚類との判別は容易である。いずれも標準体長(SL)16.7cmの現生標本よりやや小型だが、焼けて収縮しているので、元は同じほどの大きさであったろう。同じ試料から検出されているニシン科椎骨もマイワシのものである可能性が高い。部位構成を見ると、頭骨は2軒の住居で少なくとも3個体分が検出されているのに対し、椎骨数は計8点と著しく少ない。ニシン科の椎骨は細片になってしまって識別可能だが、試料中にそうした椎骨片は見られなかった。したがって、こうした頭骨と背骨のアンバランスは、残存率の違いではなく、頭部が選択的にカマド内に入れられたことを示していると考えてよいだろう。

第2表 御所遺跡で水洗選別された動物遺体（その1）

試料番号	遺構	採取位置	時 期	種 類	部 位	左 右	数	備 考
47	第3号竪穴住居跡	カマド	9世紀後半	マイワシ ニシン科 魚類（真骨類） 魚類（骨質類）？ 鳥類？ 哺乳類？	主上顎骨 尾椎 歯骨 頭骨破片 不明骨片 胸骨	右 一 左 一 一 ?	2 8 1 1 多數 1	SL16.7の現生標本よりやや小 ブリ属の可能性あり 上と同一骨か？
48	第4号竪穴住居跡	カマドⅡ区	9世紀後半	不明	不明骨片	一	数点	
49	第5号竪穴住居跡	カマドⅠ区	8世紀	哺乳類？	不明骨片	一	1	鳥類の可能性もある
50	第6号竪穴住居跡	カマド	9世紀後半	哺乳類？	不明骨片	一	多數	
51	第7号竪穴住居跡	カマドⅡ区②	8世紀	マイワシ マイワシ マイワシ ニシン科 魚類（真骨類） 哺乳類？	主上顎骨 下上顎骨 舌頭骨 胸骨 不明骨片 不明骨片	左 右 右 一 一 ?	1 1 1 1 多數 数点	SL16.7の現生標本よりやや小 SL16.7の現生標本よりやや小 SL16.7の現生標本よりやや小 SL16.7の現生標本よりやや小 鳥類も混じる可能性あり
52	第8号竪穴住居跡	カマドⅡ区①	9世紀後半	哺乳類？	不明骨片	一	数点	

おそらく胴部は背骨ごと食され、残った頭がカマド内に廻棄されたのではないかろうか。

この他、第3号竪穴住居跡からは別種の魚類の骨格が1点検出されている。おそらくズスキ目のもので、歯列面は綿毛齒による幅広の歯帯を成し、骨表面には微細な溝条が密に走る。これらの特徴から、ブリ属 *Seriola* の可能性も考えられるが、小破片のため断定できない。少なくとも海産魚であることは確実と思われる。

魚類以外では、哺乳類と考えられる小破片も普通に含まれているが、すべて細片のため種類は明らかでない。また、小型の鳥類と思しき指骨が1点検出されている。

#### 4 検出された動植物遺体の特徴

##### (1) 炭化種実産出傾向のもつ意味

まず、本遺跡からは雑穀やマメを産出しているものの、数住居から試料を採取したにもかかわらずイネの炭化粒を1つも産出しなかった。本遺跡は現在でも水田耕作が困難な場所にあり、当時も畑作穀類に頼っていたという事は容易に推測できる。しかしながら、マイワシの骨を出土するなど、決して外界から隔離され交易がほとんどなかった集落というわけではなく、コメを購入して食べようと思えば比較的容易に主食の一部に加えることは可能なはずである。もちろん、炭化米が産出しないことが必ずしも食用としていなかったという事は言えないが、少なくともその頻度は非常に低かった可能性を示唆する。当時、水田耕作が困難であったうえにみられる山地部に立地する、上ノ原遺跡、社口遺跡、健康村遺跡、梅平本田遺跡などからはいずれもイネを出土している（櫛原1998）。また、コメの代用として他遺跡で主要に産出しているオオムギは皆無、コムギもわずかしか出土しない。雑穀のアワ、キビ、及びマメは特に他の作物が作れないような栄養の乏しい土地に栽培されることから、水利よりもむしろ土壤の発達が乏しいという立地条件が浮かび上がってくる。

##### (2) 動物遺体のもつ意味

本遺跡で注目されるのは、マイワシをはじめとする海産魚が2軒の住居跡から検出されたことである。古代の関東・中部内陸遺跡における海産魚の検出例としては、ほかに神奈川県秦野市草山遺跡（8～9世紀。櫛原1990）よりもマイワシ・カタクチイワシが、また長野県小諸市中原遺跡群（古墳時代。櫛原印刷中）よりもニシン科が検出されており、この時代にはイワシ類をはじめとする海産魚が内陸域までかなり広く流通していたことが明らかになってきた。一方、中原遺跡群ではコイ科も検出されているが、本遺跡や草山遺跡では淡水魚は確認されておらず、内陸域でも淡水魚の利用頻度が必ずしも高くなかった可能性を示している。

#### 5 カマドから検出される動植物遺体の性格

以上のように、御所遺跡の土壤サンプリングは住居跡カマドおよび焼上遺構に対して行い、カマド内土壤からは予想していた以上に豊富な動植物遺体が検出された。

ところでこうした動植物遺体は、どうしてカマド内に混入するに至ったのだろうか？ この点について、先年、神奈川県内の2遺跡でのカマド内土壤の水洗選別結果の報告（小林ほか1991、以下前稿と呼称）では2つの可能

性を指摘した。一つは「「竈神」や「物送り」といった儀礼・習俗的な祭祀行為による主体的な意志行動の結果であるという見方であり、もう一つは「その住居址の食事の食物残滓を消掃等によって集め、「少量のゴミ捨て場」として廃棄したという行為」の結果であるという考え方である。そこでこうしたカマド内から検出される動植物遺体の性格について、前稿以後、御所遺跡を含む各地で実施された同様の分析例を踏まえて、これら2つの予測からさらに具体的に踏み込んで考えてみたい。

#### (1) カマド内から検出される動植物遺体の出土傾向と特徴

近年、東日本を中心とした各地でもカマド内堆積土壌の水洗選別やフローテーションがしばしば実施され、炭化種実や動物骨データが徐々に増えているが（大森1998、櫛原1998、仙庭ほか1995、白石ほか1994、藤原1998、など）、まずこれらの分析から現在までに経験的に得られている出土傾向と特徴をいくつかまとめておきたい。

前稿において、神奈川県の2遺跡でカマド内から検出された動植物遺体が「ほとんどすべて可食動植物」（小林ほか1991：155）であることが指摘されたが、これら各地の分析によって検出された動植物遺体においてもやはりほぼ可食動植物から構成されるという現象は繰り返し広く確認することができる。このことからは、同類遺構に認められるこうした現象は、おそらくかなり普遍的なものであると予測できるであろう。従って、こうした食用動植物に極端に偏った出土傾向が「偶発的に」「起きるとは考えられず」、「人為的な選択・行動の反映である」（小林ほか1991：155）として前稿で提示したこの基本的な前提認識は、現在においても認められ、なお一層確実性を増していると考えることができよう。

一方、各地でのカマド内土壤水洗選別の結果からは新たな傾向も窺われるようになってきた。それは、a）炭化種実はいずれの地域においてもほぼ普遍的に検出される。b）これに対し動物遺体（骨・貝殻など）は、一般的に炭化種実よりも検出度が低い。c）また動物遺体はかなり明らかに、検出される遺跡とほとんど検出されない遺跡の2種に分けられる。というものである。c）の傾向についてさらに具体的に述べると、筆者が直接的に関わった遺跡のうちでは神奈川県の草山遺跡・三ツ俣遺跡・山梨県御所遺跡の3遺跡ではごく一般的に検出されたのに対し<sup>⑨</sup>、山梨県櫛形町の村前東遺跡では再水選まで実施したにも関わらず（小林1995）、哺乳類とまで同定されるごく小さな骨片がわずかな量得られたにとどまっている（櫛原1995）。さらに村前東遺跡と同じ甲府盆地内では、高根町・須玉町・一宮町などの各町の相当数の遺跡でカマド内土壤の水洗選別が実施されているが、いずれの場合でも動物遺体は検出されていないか、あってもごく微量な程度に過ぎないという<sup>⑩</sup>（櫛原1998）。こうした状況からすれば、c）の特徴は、遺構ごとに見受けられる現象であると同時に、遺跡ないしは地域的に認められる差であると予測することができる。

以上述べたような動物遺体の出土傾向と植物遺体のそれとの間に見られる明らかな差<sup>⑪</sup>は、両者がカマド内に持ち込まれる経緯・契機が異なっていたことを推測させる。さらに、動物遺体の検出率が炭化種実のそれよりも一般的に低いことは、カマド内に混入する必然性が炭化種実よりも低かったためであると推測されよう。そこであらじ動物遺体と植物遺体とに分けて、それぞれがカマド内に持ち込まれる経緯について考えてみたい。

#### (2) 動物遺体の混入経緯

生態的環境および歴史的・文化的伝統が大きく異なる標文化遺跡例を除き、上記分析例である程度まとった量の遺体が検出された神奈川県（草山・三ツ俣遺跡）・山梨県（御所遺跡）・長野県（芝宮・中原遺跡）の5遺跡での動物遺体を見てみると、数値化は困難であるが、カマド内から出土するのは細片化した微小骨がほとんどである。これは大型哺乳類の骨についても同様でかなり小形・断片化しており、このことがより低次な分類群への同定を困難としている理由である。またこれらの遺跡例で共通しているのはいずれも魚類やカエル・鳥類といった小型動物が含まれる比率が高いことで、村前東遺跡例のように、魚骨などが含まれない場合には動物遺体自体もあまり検出されないという傾向も認められるようである。

ところで、富岡直人氏によれば、動物骨は「酸性土壤中ではリン酸カルシウムや炭酸カルシウムなどが比較的溶解しやす」く、「貝塚では残るようなノーマルな骨格群が溶解して失われて」しまうのに対し、「高温度で熱を

受け酸化カルシウム等に変質した焼骨類は、水に極めて難溶で酸性土壌中でも残存」しやすいという（富岡1998：79-80）。カマド内資料の場合、その中に持ち込まれた動物遺体は当然加熱され焼骨化したと考えられ、燃え尽きてしまう部位の残存は見込めないが、その多くが遺存する可能性が高い環境であると推測されよう。だとすれば、検出された内容は、住居居住当時、カマド内に持ち込まれた動物遺体組成と比較的近似したものであることが予想される。またもしこの時、大形の骨もカマド内に持ち込まれていたとすれば、発掘時あるいは水選別作業によって発見される可能性が高いと思われる。しかしながら実際にはそうした大形骨は出土せず、カマド内土壌から検出される動物遺体はいずれもかなり細片化したものに限られている。

一方、3(2)「動物遺体の同定」で権泉氏が述べられているように、御所遺跡の今回の同定結果ではマイワシの検出部位の偏りから、マイワシの胸部は背骨ごと食べ、食べ残した頭部残滓をカマド内に残すという行為が推測されている。イワシの頭は、火であぶって枝などの枝に刺し、戸門などに立てて鬼を追い払う「焼喰いし」という現代にも残る節分習俗からもうかがわれるよう、祭祀的色彩を持つものである。またカマド内からは種は不明であるが豆も検出されており、一見すると節分の形跡を示しているかのような印象を与える。しかしながら、「豆打」に関する文献は最も古いものでも室町時代の応永十八年（1421年）であること（鈴木1977：321）、またイワシの頭が出土した住居が8世紀と9世紀後半と時期が大きく異なっており、両者がたまたま同じ祭祀痕跡を残し、ほぼ同じ季節に廃絶したものだとは考えにくいことなどから、これらを儀礼や習俗的な祭祀行為と見るよりは、やはり廃棄行為の結果であると考えておきたい。

以上のように見ると、カマド内から出土する動物遺体は主として魚類といった小型動物の食用残滓が捨てられたものであるという見通しが得られることになる。こうした結果に到る過程としては、食用とされる動物の内、哺乳類などの大型動物の骨格は調理時以前に解体され事前に屋外廃棄されるが（小林1991：333）、あまり骨を取り去らずに住居内で丸ごと食べられるような小型動物食品（たとえばイワシの丸干し）は、その一部が食べ残されると残滓（生ゴミ）としてカマドに廃棄されるといったケースが考えられる。

そしてこうした見方に基づけば、小型魚類などの小骨格動物を日常的に入手していた地域ではカマド内からこれらの焼骨が検出される可能性が高くなるが、逆にさほど入手できなかった地域ではカマドから動物骨はあまり検出されないと予測されることになる。

また、動物骨が一般的に検出される遺跡においても、動物遺体が比較的豊富に検出されるカマドとほとんど検出されないカマドの両者が見られる。上記の推定および「カマド内部は頻繁に清掃されていた可能性が強く、堆積環境としてはきわめて不安定で累積的な堆積物が形成されにくい」（小林ほか1991：155）という前稿での見方を敷衍させるならば、こうした遺跡のカマドの一部から動物遺体が検出されない原因としては、住居廃絶直前の時期に小型動物が食料として入手されていなかったために生じた可能性が導びかれる。またこうした状況を牛んだ原因についてはいくつかの可能性が上げられようが、主なものとしては季節性などによる入手の困難さや、居住者の階層差といった社会経済的な要因等が考えられるであろう。

### (3) 植物遺体の混入経緯

では炭化種実の場合はどういう経緯が考えられるのであろうか。第3表は上記5遺跡に加え、権原功一氏の論文（権原1998）中より5軒以上の住居跡カマド内土壌の水洗選別が実施されている6遺跡を選び出し、カマド内から穀類（コメ・オオムギ・コムギ・ムギ類・アワ・キビ・ヒエ）が出土したカマド数を炭化種実出土カマド数で割り、その比率を出したものである。この穀類出土比率を見ると、最も低い社口遺跡で40%である他は、最低でも60%以上と極めて高い検出率であることが明らかである。ここでは詳述しないが、穀類以外の炭化種実ではマメ類やウメ・モモ核などの出現頻度がやや高いものの、他の種実は遺跡ごとに顔ぶれも一定せず、かなり偶然的な検出状況であるといえ

第3表 穀類出土カマド比率

遺跡名	所在地	検出率		穀類出土カマド比率 (a/b) × 100
		検出件数 (a)	出土地数 (b)	
笠山遺跡	神奈川県横浜市	12	15	80%
三ツ石遺跡	神奈川県小田原市	9	9	100%
御所遺跡	山梨県大月市	5	6	83%
三日市遺跡	長野県佐久市・小諸市	4	6	67%
中原遺跡	長野県小諸市	5	89	60%
分谷分寺遺跡	山梨県甲府市	10	11	91%
東根遺跡	山梨県甲府市	11	12	92%
西門山遺跡	山梨県南都留郡・吉�町	7	7	100%
村前遺跡	山梨県南都留郡・吉田町	16	17	94%
上ノ保遺跡	山梨県南都留郡	3	5	60%
社口遺跡	山梨県南都留郡	2	5	40%

る。このように各地のカマドから検出される炭化種実の中では明らかに穀類の比率が圧倒的に高く、それ以外の食用植物や雑草類は例外的であると指摘でき、このことからカマド内には穀類が混入する必然性がかなりあったと考えることが可能であろう。

だとすれば、これはどのような行動の反映なのであろうか。カマドでの穀類調理と言えば、まず主食としての粒食が上げられるであろう。古代の東日本において、穀類を「煮るか蒸すか」という問題については、土器の使用痕による実証的な研究が進められ、すでに定説とも言える見解も得られているが（小林1997a・b、坂井1988、佐原1996）、ここではこの問題には触れない。また、群馬県を中心とした古墳時代のカマド構造および長胴壺外面に残るヨゴレや付着粘土の痕跡から、東日本では長胴壺は調理の度に取り外す可動式のものではなく、カマドに固定されたまま使用されたと考えられており（外山1992）、山梨でも同様であったとする意見がある（櫛原1998:49）。ここで指摘しておきたいのは、蒸した場合、煮た場合のいずれにしても、調理される内容物（穀類）をカマドの上まで直接持ち運んで上器などの調理具内に入れたとすれば、他の場所で調理具に穀類を入れた後カマドまで持ち運んで調理する場合よりも、回りへこぼす機会がかなり多くなると予想できることである。カマドから出土する穀類は、おそらくこのような調理時の行動により周囲にこぼれ、カマド内に混入したものである可能性が強いと推測できるのではなかろうか。

## 6 まとめ

以上、御所遺跡から水洗選別によって検出された動植物遺体の同定・記載と、カマド内から出土する動植物遺体の性格について検討を行った。その結果、炭化種実はカマドでの調理時に回りにこぼれた穀類が主体となっていると見られること、また動物遺体は調理され住居内で食べられた動物食品残渣がカマド内に廻棄されたものであるらしいこと、という一応の見通しを得るに到り、その性格について前稿よりもさらに具体的に限定した可能性を提示することができた。

しかしながら、こうした可能性については数少ないデータからの推論によって考え得たものであり、正論を得たものであるかどうかについては、未だ充分に検証されたものとは言い難い。今後も各地で実施されるカマド内土壤の水洗選別成果によって再検討し、より一層妥当性・信頼性の高い仮説へと高めていく必要がある。

ところで、動物遺体の遺存には包含される土壤の酸性度（pH）が強く影響するが、筆者を含めて今までサンプリング土壤のそれを調べた例は大変少ない。小稿ではカマド内から出土する焼骨というやや特殊な環境下で变成容を受けた動物骨を対象としており、その遺存環境予測に基づいて検討を行った訳であるが、こうした場合でも遺存度に対する見通しを保証する基礎的なデータとして、土壤酸性度を調べて併記することが今後は必須の条件となろう（富岡1998:78）。

先述のように、今回の分析で検出された動物・植物遺体の同定結果にはかなり興味深い内容が得られているが、小稿では事実報告および検出された動植物遺体の性格という基本的な問題についての検討にとどめておくこととし、同定データから復元される食生活や生業、そして交易等の問題については稿を改めて立論することにしたい。

なお、本稿の執筆は1・2・5・6を小林、3(1)・4(1)の植物遺体を吉川、3(2)・4(2)の動物遺体を樋泉が行い、全体構成および表の編集は小林が行った。

末筆ではあるが、お忙しい中、動植物遺体の同定作業および原稿をご執筆いただいた両氏にお礼を申し上げたい。また櫛原功・氏・藤原直人氏には直接ご教示をいただいた。さらに1998年11月、帝京大学山梨文化財研究所で開催された研究集会「遺構・遺物から何を読みとるか（II）－食の復元－」に際し得た、報告・発表者諸氏らとの会話が小稿を成す上でも大変有意義であったことを特に明記し、感謝致したいと思う。

（1999年2月3日脱稿）

## 註

- (1) 「炭化塊」とは、従前イネとかアワなどのひどく焼けただれた塊を意味する「炭化穀類塊」としていたものである。しかし他の種実に対して燃焼実験を行ったところ、たんぱく質、炭水化物、脂肪が程よく含まれて、かつ水分が少ないとされる種子はすべてこのような（やや光沢がありやや発泡状態の塊）になることが判明したため、炭化塊とした

ものである。

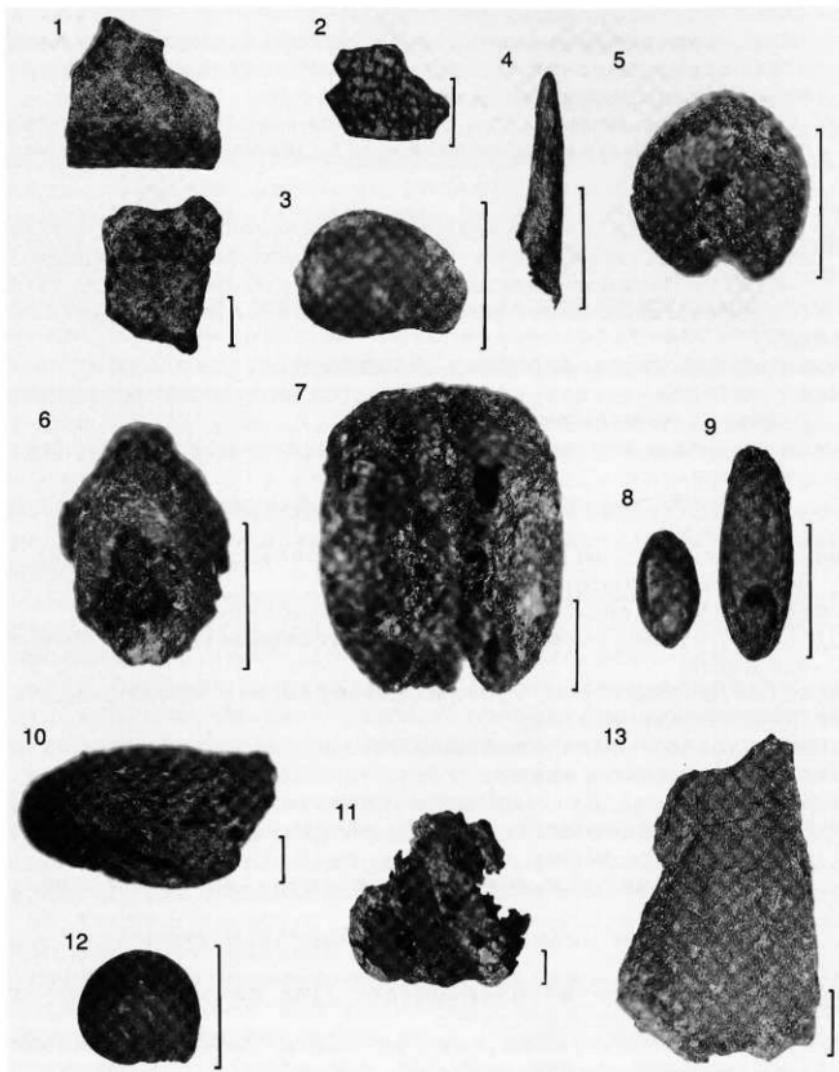
雜草もこうした塊となる可能性は十分あるが、この成分をもつ種子のうち大きいものがほとんど食用のために栽培されていることから、今のところ穀類、マメのどちらかの可能性が高いと考えている。また、堅果は成分が若干異なる為これらとは違った炭化状況を呈する。従って、炭化塊には含めていない。

- (2) これらの遺跡が基本的に相模川水系であることによる可能性も推測されようが、これらとはまったく水系の異なる長野県内佐久盆地の諸遺跡でもかなり豊富な動物遺体が検出されており(藤原1998)、単なる水系の問題で片付けられないことは明らかである。
- (3) 植原功一氏のご教示による。

- (4) 藤原直人氏のデータからの計算では、長野県芝宮遺跡では動物遺体の検出率が80%で植物遺体が30%、同じく中原遺跡では動物遺体が78%で植物遺体が33%と動物と植物の検出率が一般的な傾向と逆転している。これは両遺跡のカマド内土壤サンプリングが動物遺体を肉眼的に確認した後に純灰層を対象として行われた(藤原氏のご教示による)ことによる影響であると思われる。純灰層中に含まれていた炭化種は燃え尽きてしまったものが多いと推測されよう。

#### 引用文献

- 人森隆志 1998「小野一小野遺跡第3地点発掘調査報告書」松戸市遺跡調査会
- 樋原功一 1998「炭化種実から探る食生活—古代~中世を中心に—」『遺跡・遺物から何を読みとるか(Ⅱ)一食の復元—資料集』帝京大学山梨文化財研究所 pp.39-53.
- 小林公治 1991「古代集落の食生活と生業—草山遺跡と三ツ俣遺跡の検討を通じてー」『古代』第92号 早稲田大学考古学会 pp.321-368.
- 1995「水洗選別法による炭化種子検出率とコスト」『帝京大学山梨文化財研究所報』第23号 帝京大学山梨文化財研究所 pp.10-12.
- 小林公治・古川純子・樋原岳二 1991「三ツ俣遺跡出土の動植物遺体とその考古学的コンテクスト」『神奈川考古』第27号 神奈川考古同人会 pp.141-158.
- 小林正史 1997a「先史時代・古代における土器による煮炊き方法」『月刊文化財』10月号 pp.39-45.
- 1997b「弥生時代から古代の農民は米をどれだけ食べたか」『北陸学院短期大学紀要』第29号 北陸学院短期大学 pp.161-179.
- 坂井秀弥 1988「古代のご飯は蒸した「飯」であった」『新潟考古学談話会会報』第2号 新潟考古学談話会 pp.12-15.
- 佐原 真 1996「食の考古学」東京大学出版社
- 白石真理ほか 1994「武田畠—1993年度武田遺跡群発掘調査の成果ー」(財)勝川市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木栄二 1977「日本年中行事辞典」角川書店
- 仙庭伸久ほか 1995「H317遺跡」札幌市文化財調査報告書46 札幌市教育委員会
- 樋原岳二 1990「草山遺跡出土の動物遺体について」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書18:草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター pp.627-634.
- 1995「(3)動物遺体」「村前東A遺跡概報2」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第103集 山梨県教育委員会 p.20.
- (印刷中)「中原遺跡・芝宮遺跡出土の動物遺体」同遺跡群発掘調査報告書(長野県埋蔵文化財センター)掲載予定
- 富岡直人 1998「動物遺存体の分析・論争—海外の研究事例を含めてー」『遺跡・遺物から何を読みとるか(Ⅲ)一食の復元—資料集』帝京大学山梨文化財研究所 pp.72-82.
- 外山政子 1992「「炉」から「カマド」へ—古墳時代の新しい食文化—新米の食文化の実態とその受容における東西日本の比較」『助成研究の報告』2 財團法人味の素食文化センター pp.87-99.
- 藤原直人 1998「芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の動植物遺体—古代の食生活を考えるー」『遺跡・遺物から何を読みとるか(Ⅱ)一食の復元—資料集』帝京大学山梨文化財研究所 pp.91-103.
- 細谷 葵 1997「歐米式archaeobotanyによる武田西塙遺跡植物遺体の分析」『武田Ⅹ—1996年度武田遺跡群発掘調査の成果ー』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 pp.46-57.
- 山梨県教育委員会 1998「大月市御所遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第154集



写真図版 御所遺跡より産出した炭化種実 (スケールは 1 mm)

1. オニグルミ, 内果皮破片 (No.20 SI007 カマド 3 区①)
2. サンショウ属, 内果皮破片 (No.20 SI007 カマド 3 区①)
3. キイチゴ属, 核 (No.8 SI003 カマド 2 区④)
4. イバラモ属, 種子焼け跡 (No.2 SI003 カマド 1 区)
5. アワ, 肝乳 (No.2 SI003 カマド 1 区)
6. キビ, 肝乳 (No.3 SI003 カマド 2 区①)
7. コムギ, 肝乳 (No.9 SI003 カマド 2 区①)
8. イネ科A, 種子 (No.2 SI003 カマド 1 区)
9. イネ科B, 種子 (No.2 SI003 カマド 1 区)
10. マメ科, 種子 (No.2 SI003 カマド 1 区)
11. マメ科近似種, 種子 (No.8 SI003 カマド 2 区④)
12. シロザ近似種, 種子 (No.2 SI003 カマド 1 区)
13. 堅果, 破片 (No.8 SI003 カマド 2 区④)

# 大月遺跡の敷石住居跡について

笠原 みゆき

- |                |             |  |
|----------------|-------------|--|
| 1 はじめに         |             |  |
| 2 大月遺跡の概要      | c) 炉の位置     |  |
| 3 敷石住居の問題点について | d) 埋甕の有無    |  |
| a) 住居の形と敷石の割合  | 4 中谷遺跡と比較して |  |
| b) 柱穴構造        | 5 まとめ       |  |

## 1 はじめに

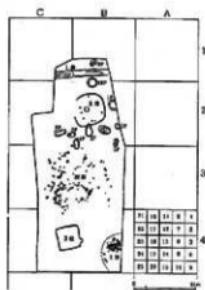
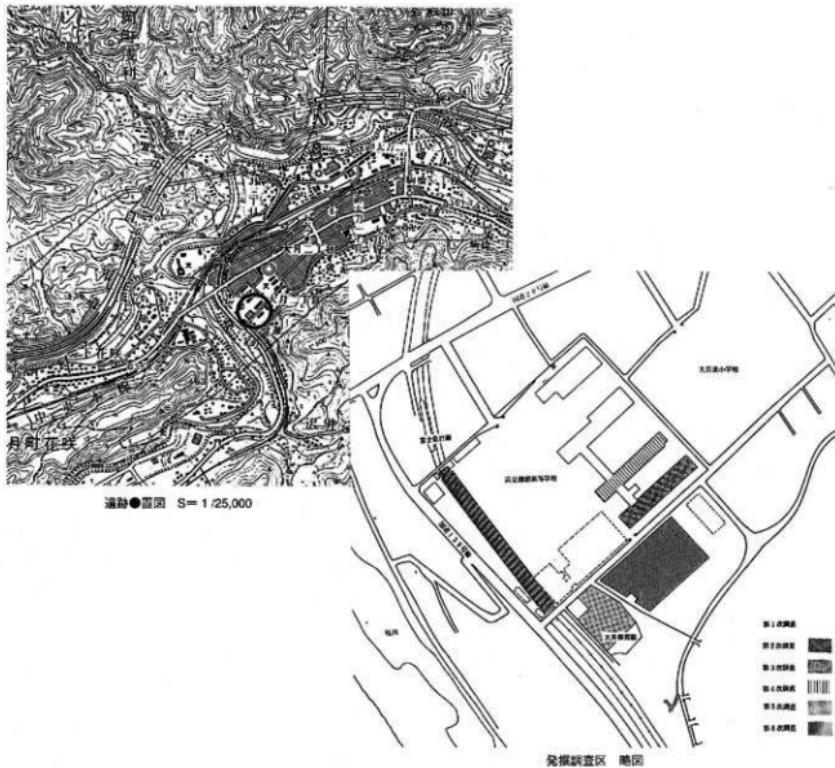
遺跡の発掘調査は、不況ながらも全国で数多く行われ新聞紙上を賑わせている。そのようななか、山梨県でも発掘調査は全城でなわれ貴重な資料の発見が相次いでいる。今年度、筆者は、縄文時代後期の極めて珍しい敷石住居跡を調査する機会に恵まれた。今までにも、中谷遺跡・大月遺跡の2遺跡で十数軒の保存状態の良好な敷石住居跡を調査してきた。敷石住居跡という地域や時代が限られている遺構を調査していると、よく見学者から聽かれることがある。「なぜ、家の中に石を敷くのですか?」この質問は、とても難しいもので敷石住居跡の研究のうえでも欠かせない問題点といえる。これについては、今まで様々な考え方がなされてきた。家の奥に祭られた祭壇が発展したものだと、「生」に関する埋甕の周辺から敷石という風習が広まったものだと。しかし、いまだ誰もが納得できる結論にたどりついてはいない。「石を敷く」という行為は、今まで造られてきた竪穴住居とどんな関係があったのだろうか。敷石住居も竪穴を掘ってその床に石を敷いている。平地式もあったかもしれないが多くは埋里こみをもっている。上の上と石の上にどのような違いがあったのか。考えればきりがないほど不思議さが増す。これらが、自然に生み出されたものなのか、元々あった何らかの風習が発展したものなのかは謎の多いところである。

敷石住居跡を語るとき、そもそも、人が生活する場所なのか、祭りを行う場所なのか。普通の村を作る一つの構成家族が住んでいたのか、特殊な人が住んでいたのか。このこともよく問題にされている。筆者自信も、実際に敷石住居跡を調査するまでは、特別な意味をもって造られたものだと考えていた。しかし、今では竪穴住居跡と同じく敷石住居跡も集落を構成する一つの住まいと考えている。今回、敷石住居跡について考えようと思った背景には、これらのような、様々な疑問が自分自信ではわかりにくいために、他の研究者の問題提起から、その答えを導き出す何らかの手掛かりにでもなるのではないかと思ったからである。

## 2 大月遺跡の概要

大月遺跡は、山梨県東部の大月市と都留市の市境に近く、国道139号線沿いに位置している。また、標高は366mほどを測り、山中湖を水源とする桂川が、笛子峠から流れくる笛子川と合流するほんの500mほど手前の河岸段丘上にある。現在は、そのほとんどが、山梨県立都留高等学校の敷地内となっている。

遺跡は過去数回に渡って発掘調査が実施され<sup>[1]</sup>、縄文時代中期から後期と奈良・平安時代の2つの時期に生活が営まれた集落跡であることがわかっている。敷石住居跡あるいは配石構造が始めて確認されたのは、第2次調査で、炉の周囲に敷石があったことが記されていた。第1回の中央に各調査区を示したが、第2次調査区はグラウンド西端に位置している。遺構はその中でも、第5次調査区に近い部分から確認されていた。現在、発掘調査は第10次まで行われ、遺跡の南辺部から西辺部と都留高校の敷地内はほぼ調査が終了している。平成元年に大月市



第1図

教育委員会がおこなった第5次調査では1軒、続く平成6年に山梨県埋蔵文化財センターでおこなった第6次調査では6軒、合計7軒の敷石住居跡が発見されている。これらのほとんどは縄文時代中期終末から後期初頭に該当する。第5次調査の1軒は、出土した上器から縄文時代後期と位置づけられているが、整理途中のため詳細は不明である。また、敷石住居の関連として、敷石を一部残すもの1基、かうのみが3基、竪穴住居跡（敷石が外された可能性あり）1軒も存在する。なお、第5次と第6次調査区では、6m程の道路を挟んで東西に位置し、現状では、山梨県立都留高等学校の体育館（第6次）と大月市大月保育園（第5次）の建物が建設されている。この2箇所に挟まれた道路も、平成8年度に大月市教育委員会と山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査がおこなわれたが、遺物以外、はっきりした遺構は確認されなかった。また、大月バイパスの建設に伴って、平成7年から平成9年まで大月保育園の跡地など南側部分を調査してきた。これらの結果、現在の都留高校校舎から体育館にかけて、縄文時代中期曾利Ⅱ～Ⅲ式を最も古い段階として曾利V式・加曾利E4式・称名寺式に相当する時期まで住居が作られている。第6次調査区の西側では、縄文時代後期の土器集中区が約600mの範囲で出土しており、第5次調査区ではこの時期の遺構が確認され、この南に位置する第7次調査区からも縄文時代後期の遺構や遺物の出土が日立つようである。このように、当遺跡全体を見ていくと、縄文時代中期から後期まで継続的に生活が営まれたと推定できる。

### 3 敷石住居の問題点について

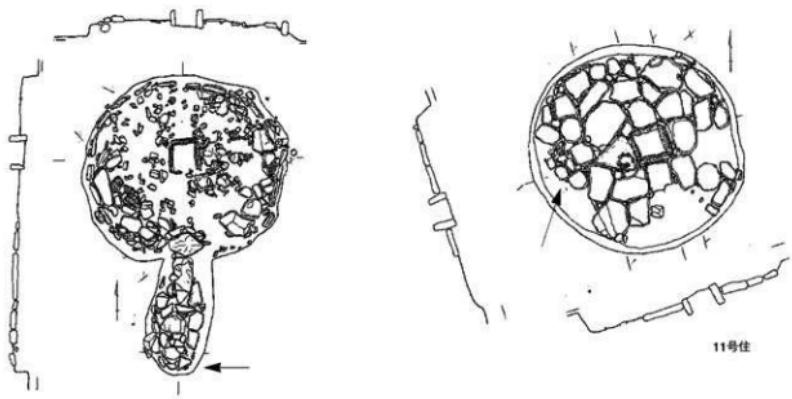
敷石住居跡がいつ頃から出現し始め、消滅してゆくのかという問題は、今後の資料の増加を待たなければ結論のないものである。1996年に神奈川県埋蔵文化財センターにおいて「平成7年度かながわの遺跡展観の敷石住居」が企画された。これはパネル展示であったが、このテーマに沿ったパネルディスカッションも行われ、今まで、紙面で論じられてきたことが壇上で話し合われたのである。この時の資料集や展示図録は、敷石住居を学ぼうとするとき、概説書的な役割を果たしてくれた。今回、この図録を参考にして大月遺跡の敷石住居を見直すことにした。

敷石住居の発展は、大きく4段階に分けられ出現期・成立期・発展期・終末期とされている。大月遺跡の敷石住居跡はここでいう成立期となるが、成立期の敷石住居跡の特徴は、「円形の主体部に長方形の張出部が付く典型的な柄鏡形（敷石）住居」となり、敷石の方法として「全面敷石のものは関東山地寄りの諸丘陵、主体部周縁や張出部周辺など部分的には敷石をもつものは武藏野台地や下末吉台地などに、敷石をもたないものは大宮台地や下総台地北西部に多く見られ、地域的な違いが認められる」こと、また、構造状の特徴として「竪穴住居から敷石住居への変化は、円形から柄鏡形という形態変化だけでなく、柱穴構造においては主柱穴型から壁柱穴型に、かうの位置は奥壁から出入口方向へという構造的な変化をする」さらに、「この時期の敷石住居には前段階と同じように埋甕を持つ例が多く見られ、その大半が張出部に設置されている」ことがあげられている。これに基づいて形態の明確な1・2・7・10・11・13号住居跡について見直してみる。

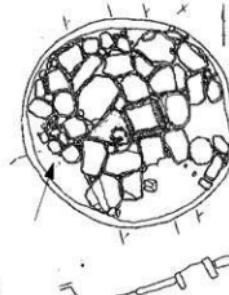
#### a 住居の形と敷石の割合

住居の形態は、11号住居が円形をしている以外は、皆、柄鏡形敷石住居である。1号住居は、居住部<sup>(2)</sup>の堀方が円形で敷石は主軸に並行な面をもつ六角形である。柄は他の住居に比べると明瞭ではないが、平石と自然石を階段状に組み合わせているように見える。柄の先端に、階段状の施設を有するものは13号住居にもみられるものである。

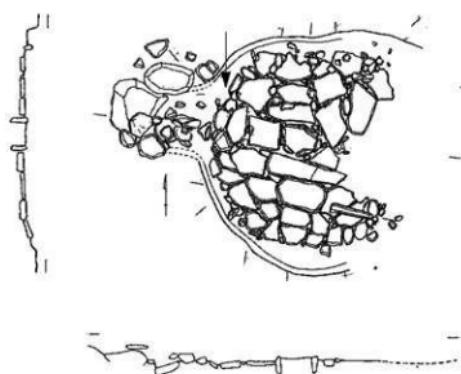
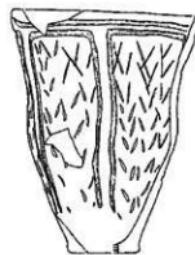
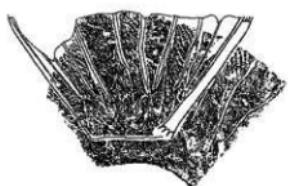
敷石については、1号住居は奥壁側が掘削されていて敷石がないが、居住部はほぼ全面に敷石がされていたものと推定される。7・11・13号住居も部分的に敷石が抜けているが、柄までびっしり石が敷かれている。特に、7号住居の柄は、石棺墓と見間違うほどであった。2号住居は、壁際にぐるっと一周敷石が巡り、炉の西側にも一部敷石がある。10号住居は縁石の側に敷石は敷かれず、かうと奥壁の間と、炉の西側に一部敷石があるだけであった。この遺跡では、平石と平石との間に小礫を埋め込んで、比較的丁寧に敷石をする傾向がみられる。このた



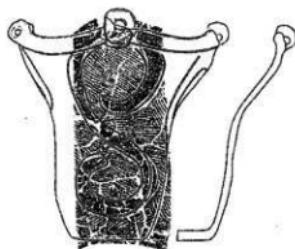
2号住



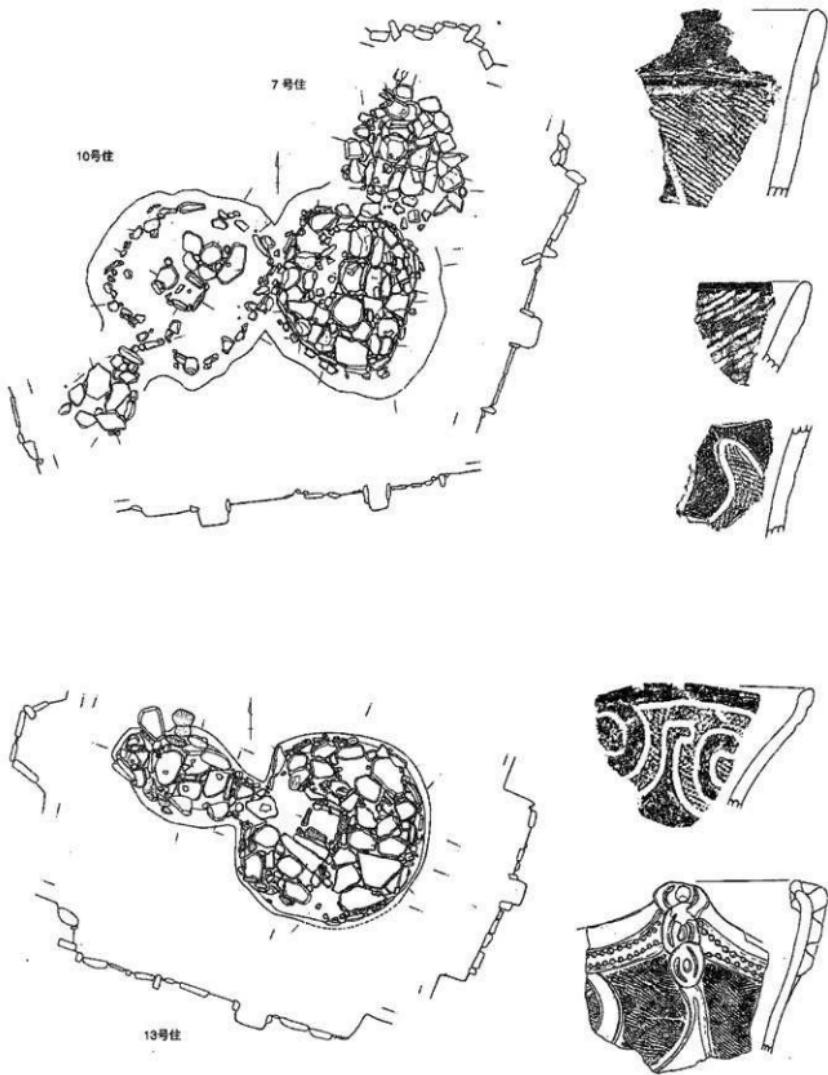
11号住



1号住



第2図 1・2・11号住居 (遺構 S = 1/80, 土器S= 1/6)



第3図 7・10・13号住居跡 (遺構 S = 1/80, 土器 S = 1/3)

め、10号住居はわからないが、2号住居については、居住部の中に小さな礫が沢山残されていたことから、本来は敷石があったのではないかと推定される。

#### b 柱穴構造

今回調査した6軒とも、柱穴は確認できなかった。1・7・11・13号住居はほぼ全面に敷石が施されているので、居住部内側に柱穴があるとは考えにくい。そのため、居住部に巡らされた縁石の周辺か、それより外側にある可能性が高いと言える。2号住居は、敷石が全面に確認できず、居住部内側に柱穴があったともいえるが、縁石と縁石の間に隙間があるため、壁柱穴とも考えられる。10号住居は、2号住居と同じ状態である。

#### c カ<sup>i</sup>の位置

敷石住居が確認される以前の段階では、炉の位置に違いがあるということだが、2・11号住居以外は、円形の中心より入口部分に炉が近く造られていることがわかる。1号住居は1.5：1.6～1.8、2号住居は1.5：1.3、7号住居は1：1.5、10号住居は1：1.6、11号住居は1.8：1.4、13号住居は1.2：1.6であった。ちなみに、今回の調査区で唯一通常の竪穴住居跡で、曾利Ⅲ式に相当する9号住居では、3.1：1.2と極端に奥壁にカ<sup>i</sup>が寄っている。このことから、炉が居住部の中心から奥壁に寄るか、入口部によるかで時期に多少の差が生じることになる。6軒の住居跡のなかで、2号住居と11号住居が他の住居より若干古く位置づけられることになる。

#### d 埋甕の有無

埋甕が埋設されていたのは1・2・11号住居の3軒であった。1号住居は、中心軸から入口に向かって右側にあり、居住部の敷石が検出されると同時に確認されていた。本来は、敷石よりやや低い位置に埋められているものだが、はっきりと埋めた場所がわかるようにしておく何らかの理由があったのかもしれない。加曾利E 4式の深鉢で正位の状態で検出されている。2号住居では、柄の先端部分に埋設されており、敷石がその上に敷かれていた。これもまた、加曾利E 4式の深鉢で、同部下半分よりさらに下位置から底部のみが、正位の検出された。11号住居は中心軸上、しかもも入口部分に埋設されていた。これは、まさに、居住部に足を踏み入れたとき、踏みつけてしまいかねない位置にあり、1号住居同様、意図的につくられた可能性が指摘できる。敷石住居の成立期としての特徴からいえば、入口付近と柄の先端部分に埋甕を撞する例が多いということで、これが発展期になると埋甕が作られなくなるという。このことからいえば、この3軒が多少占手となることになる。

以上、単純に敷石住居の成立期の特徴に大月遺跡の敷石住居を照らし合わせてきたが、2号住居は、典型的な柄鏡形敷石住居跡であり、敷石は柄の部分が全面で居住部は少ない。居住部の敷石の状態から、柱穴が居住部内に上柱穴としてあっても、縁石沿いに壁柱穴として存在してもおかしくない状態を呈している。また、炉も中心からやや奥壁沿いに位置し、埋甕も柄の先端部分に埋設されるという条件を見事にクリアし、大月遺跡の敷石住居のなかでは最も古い様相が窺える。遺物は、加曾利E 4式の埋甕と曾利V式の二通りの上器が出土している。他の住居跡には、称名寺式が混在しているのに、2号住居からの出土例はないことからも裏づけることができよう。その次に、古手にあげられるのは、埋甕を持っている1・11号住居である。この2軒は、敷石の敷き方が、入口から炉を中心にして放射上に配置されている様が類似しており、主軸の方向が同じである。しかし、炉の位置が1号住居は入口に近く、11号住居は奥壁に近いという違いが生じている。単純に判断すれば、2号住居に続くのは11号住居で1号住居はやや新しいと言えるかもしれない。この次は7号と13号住居で、柄の部分がやや発達していく。7号住居は、石棺墓のような、しっかりした石組、その周辺を平石で囲むことを行っている。13号住居の柄は先端に階段状の施設があり、柄の長編がやや膨らみ、柄の発達を窺わせる。最後に7号住居を切るかたちで確認されている10号住居となる。この住居は、とりわけその構造に特殊なものはないが、居住部と柄の連結する丁度その場所から、右棒が1点出土している。この石棒は、かなり精巧なつくりで信仰の対象物として連結部に立てられていたものとも考えられている。それ以前は、埋甕に信仰の対象が注がれていたが、この頃か

ら右棒にとって変わることになるのだろうか、今後の過大となるであろう。

#### 4 中谷遺跡と比較して

今回、大月遺跡の6軒の敷石住居について、成立期の特徴を検証してみた。その結果、以外にも、各々の特徴と遺物から、時期的な差が生じることになった。このことが、他の遺跡でも起こりえることなのか、それとも、大月遺跡だけに生じたことなのか。多少の不安が残ったため、以前調査した中谷遺跡の敷石住居についても、簡単に見てみようともう。

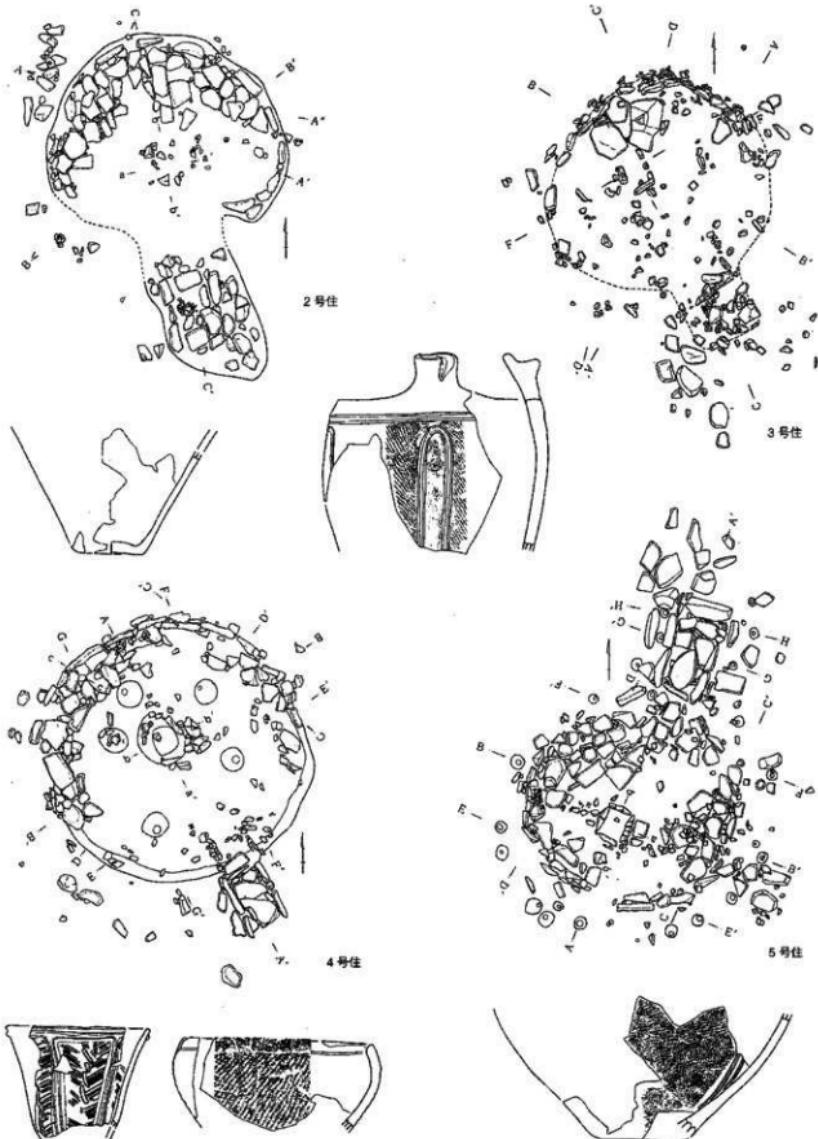
中谷遺跡では、10軒の敷石住居が確認されており、中期末に該当するものが7軒、後期始めに該当するものが3軒であった。中期末（加曾利E4式と曾利V式）にあたるものは、2・3・4・5・9・10・15号住居で、特に、2・3・4・9号住居は方位もほぼ同じとなる。敷石も、奥壁部分と柄の部分に限定されているようである。この他の、5号住居は方位が全くの逆向きになり、10号住居は炉とその周辺に敷石が残るだけである。中谷遺跡のなかで、比較的大きく残存状態の良い12号住居はほぼ南北に主軸を持っている。今回、検証したのは成立期についてであるので、10軒のうちの7軒について検証を行う。まず、住居の形態と敷石の割合だが、10号住居以外は柄鏡形敷石住居跡である。2・3・4号住居は奥壁側と柄の部分に敷石を持ち、5・12号住居はほぼ全面に敷石があったのだろう。9号住居は柄の部分しか残存していない。10号住居は炉を中心に敷石があるだけである。柱穴は4・5・10号住居しか確認できなかった。4号住居は居住部内部に5本の柱穴があり主柱穴である。5・10号住居は、壁柱穴あるいは居住部の外側に柱穴がまわるものと思われる。かの位置については、2号住居が1:2、3号住居は2.2:1、4号住居は2.4:1.8、5号住居は1.8:1.2、12号住居は2.2:1.8、9・10号住居は測定が不可能だった。埋甕は、2・9号住居にあり、2号住居は、柄の先端中心軸上にあり、深鉢の削下半分が正位で埋まっていた。時期は不明だが、住居内資料は曾利V式であった。9号住居は居住部内、入口に向かって右側に正位で埋まっていた。底部を欠損した鉢だが無文で時期はわからない。他の土器から曾利V式と加曾利E4式の土器が出土している。以上のことから、住居の時期的な差が生じるかということだが、柱穴の配置からいえば4号住居が古く埋甕からいえば2・9号住居が古くなる。また、炉の位置からいえば、2・9・10号住居以外は、入口より奥壁に寄って造られているため、すべてが古く位置づけされることになる。この7軒の敷石住居跡は、すべての条件をクリアするものが無く、ある1つの条件だけにあてはまるのみで統一性がない。しかし、角度を変えてみれば、時期的な差がほとんどないともいえるのではないか。そして、出土している土器からみれば、曾利Vを主体としている住居と加曾利E4式土器と一緒に最も住居があることも窺える。中谷遺跡では、以上のように大月遺跡とは違い、思うとおりの条件に納まらなかった。

#### 5まとめ

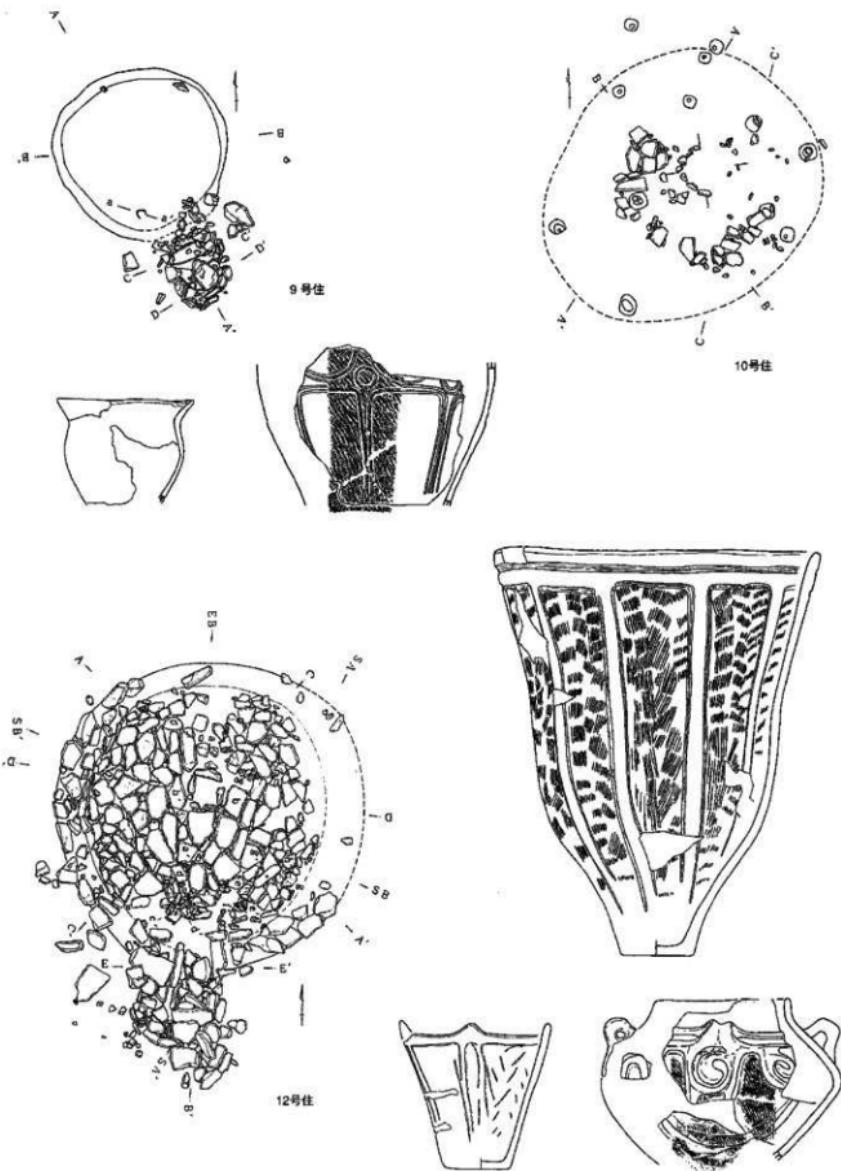
大月遺跡の発掘調査は、保存状態の良好な敷石住居跡が6軒も発見でき貴重な資料となった。敷石住居の発展の過程を、初源期・成立期・展開期・終末期の4つに分ける意見を借りて、6軒の敷石住居を検証したところ、住居自体に微妙な時間差が生じることになってしまった。それに比べて、中谷遺跡の中期の敷石住居からは、あまり明確な結果が得られなかった。この違いは、どこから出てしまったのか、今後の課題となってしまった。

成立期は縄文時代中期終末から後期初頭という幅の広い範囲を取っているが、この時期の土器の編引きが流動的なところからおこることなのだ。この6軒の敷石住居も、加曾利E4式・曾利V式・称名寺式の3種類の土器が同時に存在する複雑なものであった。このため、土器については、時間が足りずほとんど触れていないが、詳細に分類すれば、更なる事実固めが出来たことだろう。

筆者は、中谷遺跡を調査したときから、敷石住居とは何だろうという疑問を持ち続けていた。遺跡全体とすれば、縄文時代中期の竪穴住居跡も何軒か発見されている。これについて、探れば探るほど難しく、用意に解決できる問題ではないが、山梨県では、初源期といわれる調査例は今のところ確認されていない。関東地方でいう加曾利E3式に相当する頃がその初源期といわれているが、大月遺跡では、この時期の住居跡は普通の竪穴住居跡



第4図 中谷遺跡 2～5号住居 (遺構 S = 1/80・土器 S = 1/8)



第5図 中谷遺跡9・10・12号住居（遺構S=1/80、土器S=1/6）

である。炉は右回いだが、特徴として上げられる奥壁側での石柱・石壇や入口付近に存在する埋甕部分の小張出などは確認できない。しかし、突然、竪穴住居跡の床面に石を敷くという行為を思いついたとは考えにくい。どこかに、このルーツがあるはずある。県内全体でも、比較的古い時期の敷石住居がこの県東部地域で発見されはじめ注目度が高くなっている。それにも増して、この遺跡では、ほぼ同時期の住居がまとまりをもつことが窺える。縄文時代中期から後期に集落として展開した貴重な例である。今後、大月遺跡全体とその周辺の遺跡について細かな検証を加えれば、敷石住居の出現と消滅に係わる何らかの手掛かりがみつけられるかもしれない。

註1 過去の発掘調査については、「山梨県史資料編1」に詳しいため、そちらを参照のこと

註2 柄鏡形の柄（円形）の部分のことを主体部と言っているようだが、ここでは報告書にもとづいて居住部という言葉を使用する。しかし、一般的に使われている主体部と同じ範囲を示すものである。

## 参考文献

- 櫛原功・ 1995 「柄鏡形住居の柱穴配置」「特集 縄文時代中・後期の住居をめぐる諸問題」 帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- 本橋恵美子 1995 「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生について」「特集 縄文時代中・後期の住居をめぐる諸問題」 帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第6集 帝京大学 山梨文化財研究所
- 山本輝久 1995 「柄鏡形（敷石）住居成立期の再検討」「古代探叢IV—滝口宏先生追悼考古学論集—」 早稲田大学出版部
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1996 「平成7年度かながわの遺跡展『謎の敷石住居』展示図録」
- 山本輝久 1996 「敷石住居址研究の現状と課題」「パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」資料集」  
神奈川県立埋蔵文化財センター・（財）かながわ考古学財團 1997 「パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」記録集」
- 長沢公昌・笠原みゆき 1996 「中谷遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第116集 山梨県教育委員会
- 石井 寛 1998 「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」「縄文時代」第9号縄文時代文化研究会
- 山梨県 1998 「大月遺跡」「山梨県史資料編1原始・古代1考古（遺跡）」

## 御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地

—中部横断道の試掘調査の成果から—

保坂 康夫

- 
- 1 はじめに
  - 2 土層断面の類型
  - 3 上層類型の分布
- 

- 4 御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地
- 5 環境変動説との関連

### 1 はじめに

平成10年5月から11月にかけて実施した中部横断道および中西バイパスにかかる試掘調査で、これまでほとんど遺跡が確認されていなかった白根町内において平安時代を中心とする巨大な集落遺跡が発見された。この調査では御勅使川扇状地を横断するかたちで長大なトレーニングを数メートルの深さで設定しており、地表下の様子から古地形と遺跡立地についても検討可能である。今後に控える本調査や、白根町や八田村での埋蔵文化財保護のため速報的な報告を行なうとともに、その成果から御勅使川扇状地旧地形と遺跡立地について若干の考察を試みたい。

御勅使川扇状地地域の中部横断道および甲西バイパス関連の調査は、白根町在家塚以南の地域については1998年までに発掘調査が終了しており、報告書が刊行される予定である。今回報告する成果は、在家塚以北で八田村地内までの地域である。白根町地内での試掘調査の期間は平成10年5月10日から同年11月10日で、10m～50mのトレーニング86ヶ所を設定した。担当者は小林広和、保坂康夫である。なお、八田村地内での調査が平成10年2月から3月に実施された。10m～100mのトレーニングを21ヶ所設定、担当者は米田明訓、三田村美彦で実施されたが、その成果についても合わせて紹介したい。

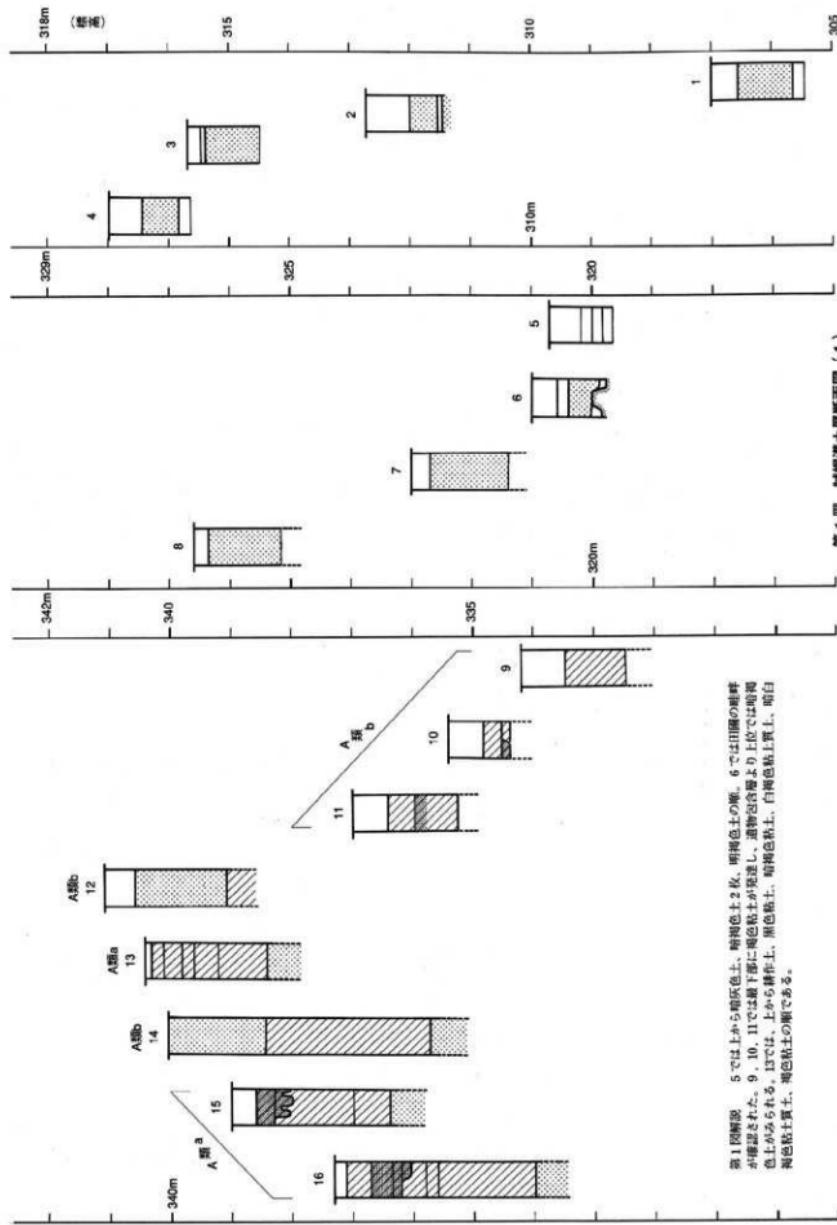
### 2 土層断面の類型

第3図に、今回提示する土層断面図の位置を現況の地形図の中に示した。御勅使川扇状地の北半部で、扇央部を約3.5kmにわたって南北に横断した線上に配列している。

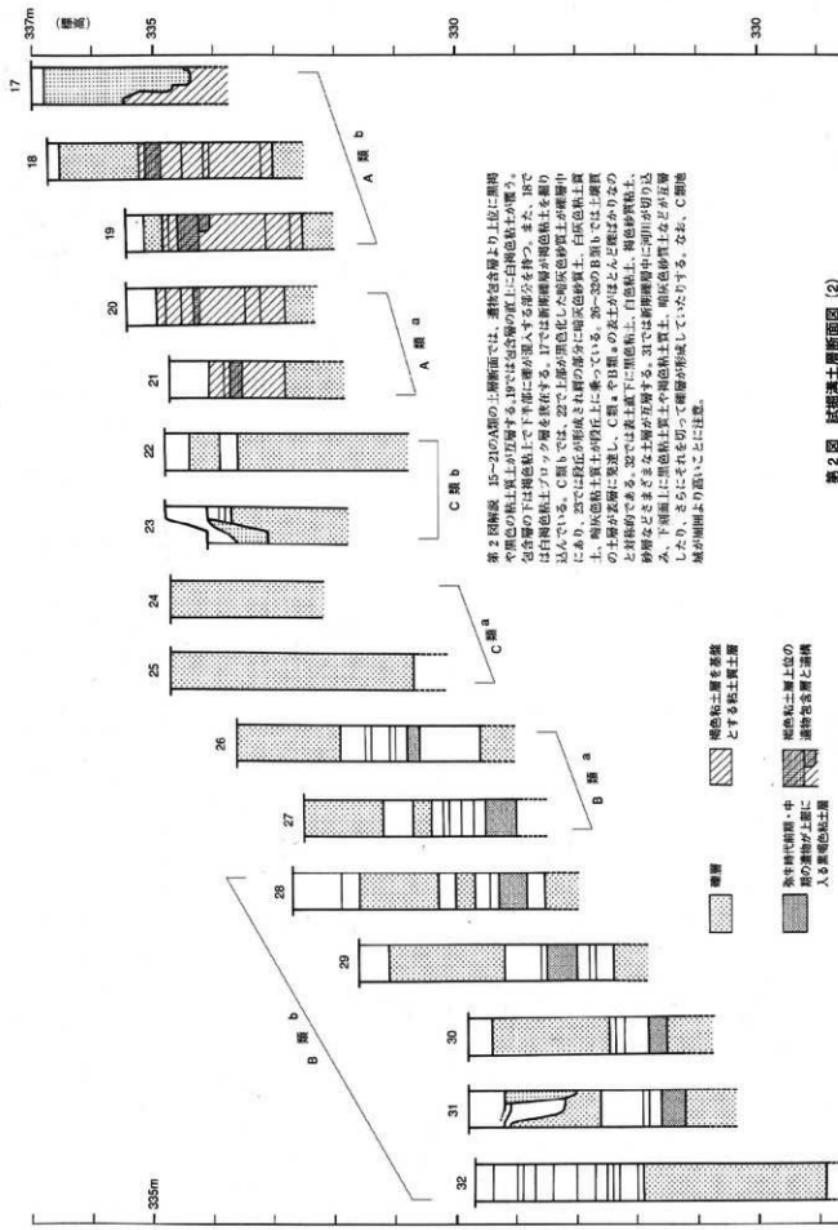
土層断面図を第1・2図に示した。断面の深さは6mから1.5mである。これを見ると上層断面をいくつかの類型に分類できる。まず、表土直下に黒色から暗褐色の粘土質土層があり、その下位に褐色粘土層が発達する1mから3mの厚さの土層がみられる。褐色粘土層上の黒褐色粘土質土層中に平安時代遺物が含まれ、その下位の褐色粘土層に竪穴住居跡が掘り込まれている。また、褐色粘土層の上部には弥生時代前期から中期の土器や石器が含まれている（土層断面N o. 9～21）。褐色粘土層は本誌掲載の河西学氏の分析にみるとおり縄文時代晚期頃に形成された可能性が高い。この褐色粘土層の下位には礫層が発達している。ここではこれを占期礫層と仮称する。この土層類型をA類とする。なお、このA類の上層の上部に礫層が発達している断面がある。礫層は厚いところでは2m以上もあるが、局的に存在している。この礫層を新期礫層と仮称する。新期礫層が発達している土層断面をA類b（上層断面N o. 12、14、17、18、19）とし、新期礫層の被覆が見られないものをA類aとする。

つぎに、砂層やシルト層の互層に黒色粘土層が挟在する厚さ2mから1mの土層と、その上位に発達する厚い礫層が特長である土層断面がある（土層断面N o. 25～32）。黒色粘土層の上部には弥生時代前期から中期の土器片が確認され（土層断面N o. 29、30、31）、土層断面N o. 30では多量の土器の出土があり横堀遺跡と命名された。

第1図 試験溝土層断面図(1)



第1回測定  
5では上から鶴匠色土、鶴匠色土2kg、明神色土の順。  
6では山側の明神色土層が削除された。9、10、11では下部に鶴匠色土が充填し、遺物包含層より上位では鶴匠色土がみられる。13では、上から耕作土、鶴匠色土、鶴匠色土、白海岸土質と、昨日海岸粘土質土、褐色粘土土の順である。



第2図 試験溝土層断面図(2)

新期疊層は1mから4mの厚さがある。また、黒色粘土層を挟む土層の下位には古期疊層が発達している。この類型をB類とする。なお、新期疊層の上位に暗褐色の砂礫質土壤層が厚さ50cmから1mで発達している上層断面がある。また、そのなかには土壠層の下位に軟質の黒色土や褐色粘土質土層などが発達した土層断面も見られる。これらを一括してB類b（土層断面N<sub>o.</sub>28~32）とし、新期疊層のみの上層断面をB類aとする。

また、疊層のみで構成される上層断面がある。これをC類とする（土層断面N<sub>o.</sub>22~24）。このなかにも、軟質の黒色土や褐色粘土質土層が見られる土層断面がある。これをC類b（土層断面N<sub>o.</sub>22, 23）とし、前者をC類aとする。この類型の疊層では、遺物を含む土層が存在しないので、新期と古期の境界が不明である。

### 3 土層類型の分布

この上層断面類型の分布を見ると、ランダムに分布するのではなく、ある類型が一定の地域にまとめて分布する状況を示している。まず、A類は調査地域北半部分に広く分布する。A類aとA類bが交互に現われ、A類bは局所的、限定的に分布する。A類bの分布地域は旧御勅使川（釜無川にかかる信玄橋から西へ行く道路がこの川底にあたる、第4図参照）の南側に見られ、旧御勅使川の河道も含め、新期疊層を形成した河道が褐色粘土層の上に形成されていることがわかる（土層断面N<sub>o.</sub>12）。この地域には、大塚遺跡<sup>(注1)</sup>や石橋北屋敷<sup>(注2)</sup>など、弥生時代前期・中期から古墳時代前期、奈良・平安時代、中世までの遺跡が広く確認され、発掘調査されている。

また、B類は調査地域南端部に存在する。B類aがその北半部分に、B類bが南半部分に分布する。弥生時代前期・中期の遺跡が点在し、この時期にはA類分布地域と同様に地表が土壌化して、水域とは分離した安定した土地を形成したものと思われる。その後、シルト層や砂層が形成され氾濫水流の侵入があり、さらにその上に新期疊層の形成にみられるように、弥生時代前期・中期より後の時期では一貫して水域となっていたと思われる。ただし、B類b分布地域については新期疊層堆積後ないしはその後半で黒色土層が形成されており、一時的に水域から分離され安定した地域が存在したらしい（土層断面N<sub>o.</sub>28~32）。

C類はこの両地域に挟まれた地域に存在する。この地域では、C類aが南半部分に、C類bが北半部分に分布する。A類分布地域に接して疊層形成後ないしは後半で土壤が形成され一時に水域から分離した地域が存在する。この状況はB類bと近似し、同様な時期に形成された土層である可能性もある。

ところで、調査地域の最北端部分は現況でも岸線が確認でき、これまでみてきた地域とは地形面が異なる低地帯である（土層断面N<sub>o.</sub>1~8）。さらには御勅使川扇状地の東を区切る大岸線にもかかる地域でもあり2重、3重に地形面が錯綜しているものと思われる。今回は上層分類を行わないこととする。試掘調査では疊層中心の断面の地域と、A類とは異なる暗褐色土層の分布する地域がみられ、後者の地域には中世のかわらけが出土した水田遺構が確認されている。この部分は旧河道にあたり、新津健氏は能岡台地を流れる割羽沢川の旧流路の存在を推定している（注3）。試掘調査では1.5m程度の深度までが確認されているが、それ以深については中世水出跡の発掘調査での成果に期待したい。

### 4 御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地

土層類型が地域的なまとまりをもって分布しており、古地形の地形単位を示している可能性がある。そこで、現状の微地形や土地利用状況と土層類型との関連性を検討し、御勅使川扇状地全体に敷衍できるかどうかや、古地理と遺跡立地どのようにかかわるかをみてみたい。

現地形の地形分類については、高木勇夫・中山正民両氏の論考がある<sup>(注4)</sup>（第5図）。これによると、御勅使川扇状地の主要部分は古期扇状地によって構成される。古期扇状地の形成時期、形成過程については不明としながらも、「地表を構成する疊層の直下に厚さ約1.5mの黄色粘土が記載されている」地点があること（図示された位置から櫛形町沢登付近）ことや、「台地末端部の徳永付近にみられる露頭では、褐色の火山灰質粘土層と、小礫を主とする疊層の互層が約8m以上の厚さで堆積」していることをあげ、更新世に形成されたローム層と同一時期の形成時期を暗示している。この黄色粘土や褐色の火山灰質粘土が、今回確認したA類の褐色粘土層との

関連については不明であり、高木・中山氏が指摘する土層が別に存在する可能性も否定できないが、今回河西学氏によって分析されたように、A類の褐色粘土層は形成時期が縄文時代後期と推定されたことから、古期扇状地の表層部分はかなりの地域でこの時期に地形が形成されている可能性がある。ただし、高木・中山氏の指摘した地域は扇状地の末端部かその近くであり、そうした地域にはより古期の上層が残存している可能性がある。現に白根町德永では、縄文時代後期の土器が多量に表採されており<sup>(註)</sup>、この時期以前の遺跡がA類の褐色粘土層以前の上層の上に立地している可能性が高い。御動使川扇状地東端の崖線脣付近の地域と、褐色粘土層の発達する扇尖部とでは地形区分を異にしたほうがよいかもしれない。

さらに両氏は御動使川扇状地を「小さな波長の微起伏が発達する」扇頂部と、「大きな波長の起伏と、末端部における浸食谷の発達」が特長の扇尖部と台地末端部の崖線下の地域に発達する「新しい小規模な扇状地」とがみられるとする。扇頂部では、「閃光洪水（flash flood）のような氾濫による土石流堆積によって形成された」古期扇状地を覆う新しい時期の扇状地であるとしている。つまり、古期扇状地の扇頂部と末端部の崖線下の地域に新期の小扇状地を伴っている地形としている（第5図）。

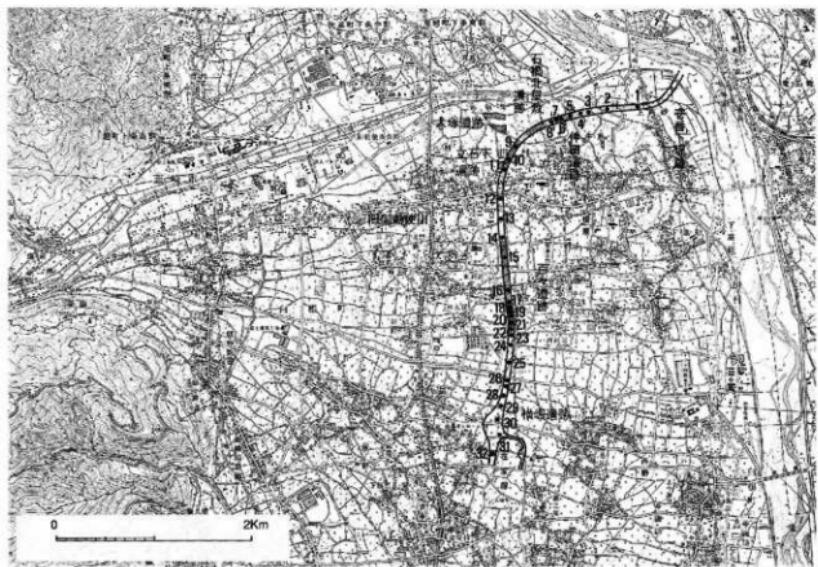
今回の試掘結果からすると、A・B類の土層の分布地域で弥生時代前期・中期以降の新期疊層が発達する部分があり、新期小扇状地の形成にかかる可能性がある。さらに、旧御動使川ばかりではなく、C類の分布地域についてはA類やB類の土層の形成期間をとおして一貫して流水の存在が推定され、旧御動使川よりも古くから安定して流路だった地域がある点に留意する必要がある。さらに、その端部は古期扇状地端部の崖線を埋積していることが地形図（第4・5図）から推定される。古期扇状地端部では深くえぐられた細長い谷が発達するが、旧御動使川ではそれが新期扇状地の堆積物によって埋められている様子がわかる。一方、今回の報告のC類上層分布地域の河道についても、下刻ではなく埋積状況を示しており、新期扇状地である可能性を指摘できる。

ところで、この状況と明治21年に旧帝国陸軍陸地測量部が測量した20000分の1地形図とを重ねてみたところ、土地利用状況と土層類型分布地域とが相関関係にあることが見いだされた（第4・6図）。旧御動使川は現御動使川同様に河川敷として表示され、高木・中山氏の河川敷と一致する。また、扇頂部の新期小扇状地は、ほとんどが陸田とされている。また、古期扇状地地域のうち、A類分布地域は白地の畑である。そして、疊層のみのC類分布地域は、松小樹の樹林やその伐採地、桑畠などで構成される地域で、しかも扇頂部の新期小扇状地に帶状に連続している。また、B類の分布地域は、畑地域の中に松小樹の樹林やその伐採地、桑畠などで構成される地域が塊状に分布する地域である。それぞれの地域の境界は、土層類型の境界地点と非常によく符合している（第6図）。こうした点から、逆に土層類型の平面的な分布域が推定可能と思われる。土地利用状況と土層類型の関連性については、たとえば疊の多い地域では透水性が強いため乾燥に強い松や桑が繁茂し、粘土質の強い土壤が厚くあるA類地域では上壤がよく発達し、肥沃な畑地となり表層に上壤の発達がみられるが、比較的砂礫質で薄く、その下位に厚い疊層が分布するB類分布地域では上壤の状況によって畑であったり桑や松林であったりという状況になるのであろう。広く疊層で覆われている新期小扇状地地域が陸田となっているのは、徳島県など近世初頭からの水路の開削で水の補給が容易な地域であると理解される。

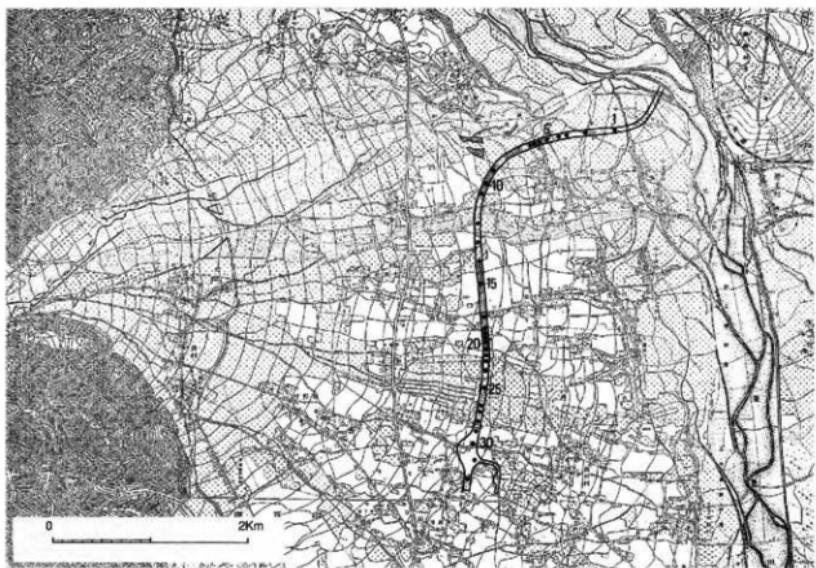
遺跡の立地をみると、弥生時代以降の集落はA類分布地域に広く存在しており今後この地域に多数の遺跡が確認される可能性が高い。B類分布地域には深い深度に弥生時代前期・中期の遺跡が立地する。より下流域である櫛形町や若草町内でも弥生時代前期・中期の遺跡が確認されているが、扇状地端部ではそれ以降の時期の遺跡が連續と形成されている。櫛形町教育委員会による遺跡の分布調査の成果によると<sup>(註)</sup>、遺跡は桃園新田と下小路東地城、沢登地城、十五所と吉田地城から若草町内へとやはり団塊状に分布する。この前者と後二者とに挟まれた地域には松林・桑地城が扇頂にむかって帶状に分布し、この地域にも古流路が存在していた可能性もある。

## 5 環境変動説との関連

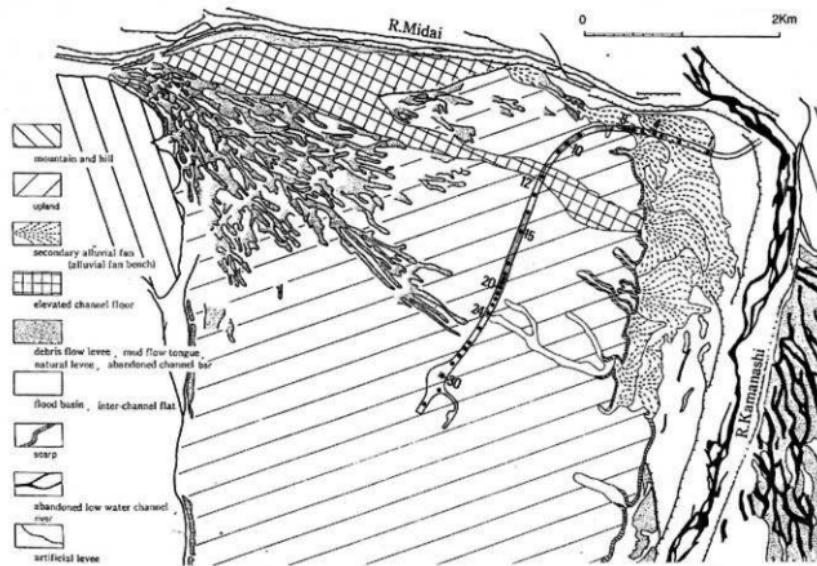
高橋学氏は中部から西日本地域の平野や内陸盆地での縄文後期以降から現代に至る微地形について論じている<sup>(註)</sup>。これによると弥生時代前期末から中期前半と古代後半から中世初頭にかけての2度のわたり扇状地帯にお



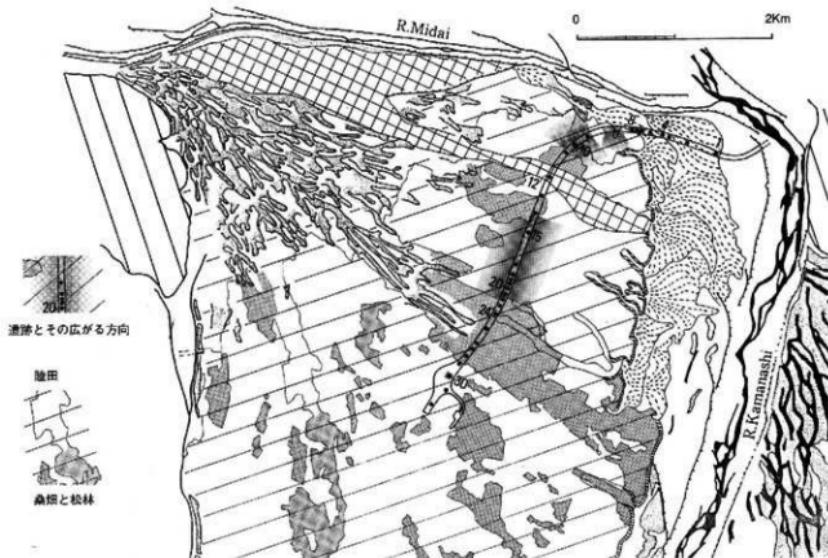
第3図 中部横断道予定地と試掘調査土層断面および遺跡位置図（1/50,000）



第4図 明治21年測量地図と土層断面および遺跡位置図（1/50,000）



第5図 高木・中山(1983)による地形分類図と土層断面および遺跡位置図 (1/50,000)



第6図 高木・中山(1983)による地形分類図と明治21年測量図の土地利用状況および遺跡分布状況図 (1/50,000)

いて崖線が出現し、前者で離水した地形面を完新世段丘Ⅰ、後者を完新世段丘Ⅱとしている。

また、外山秀一氏は同様な地域のなかで、地形の変化や土地条件の不安定な時期が弥生時代前期から中期初頭、弥生時代後期から古墳時代前期、古代末、15・16世紀の4期にわたってみられるとしている<sup>(注5)</sup>。

今回のA・B類土層分布地域での弥生時代前期・中期の遺跡の立地と土壌の形成は高橋氏の完新世段丘Ⅰ形成期にあたる可能性がある。しかし、B類土層分布地域ではその後流水の侵入があり、外山氏の弥生時代後期から古墳時代前期の不安定期に御動使川扇状地扇頂付近での地形変化があった可能性がある。また、新規疊層については外山氏の指摘する古代末か15・16世紀の不安定期の所産である可能性がある。今回は、土層の類型化をしなかった扇状地北端部地域では旧河川に中世末の上器が伴う水田面が確認されており、15・16世紀での水路の争奪がこの付近にみられた可能性がある。この付近は『中斐圍志』の記述から現御動使川の河道が人工的に掘削されたとされるが、これはあくまで仮説のひとつであり、不安定期に流路争奪により自然に出現したものである可能性も検討される必要がある。中世以前ではこうした不安定な気候により氾濫していた古い御動使川の流路は決して1本ではない。しかし、こうした不安定期の存在にもかかわらず扇状地北半部では安定した地域を形成し弥生時代から中世まで人集落が形成され続けており、扇状地南半部地域で弥生時代前期・中期以降、常に河川が流れ込んでいた可能性があることに注意を喚起したい。

(注1) 新津健一 1997 「大塚遺跡」山梨県教育委員会ほか

(注2) 小林健二ほか 1998 「石橋北屋敷」『年報』14 山梨県埋蔵文化財センター

(注3) 注1と同じ

(注4) 高木勇夫・中山正民 1983 「甲府盆地西部地域の地形」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』第18号

(注5) 新津健氏のご教授による

(注6) 清水博ほか 1990 「町内遺跡詳細分布調査報告書」桶形町教育委員会

(注7) 高橋学 1996 「古代の地形環境と土地開発・土地利用」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集

(注8) 外山秀一 1994 「プラントオバールからみた稻作農耕の開始と土地条件の変化」『第4紀研究』V o l.

## 中部横断道試掘調査のテフラ分析

山梨文化財研究所 河 西 学

**1 はじめに****2 試料****3 分析方法****4 分析結果****1 はじめに**

中巨摩郡白根町百田地内の中部横断自動車道遺跡群試掘調査におけるトレンチ断面で、褐色粘土層が確認された。この地点は御動使川扇状地扇央部に相当している。この褐色粘土層は、他の粘土質土層に比べ褐色が強く明るい色調を示し、現場での判断では洪積台地上に堆積しているいわゆるローム層に対比される可能性が推定されていた。しかし層位的に年代観を与える考古学的遺物はほとんど出土していない状況であった。ここでは、柱状断面からテフラ粒子を検出し、地層に年代観を与えることを目的としてテフラ分析を行ったので、以下に報告する。

**2 試料**

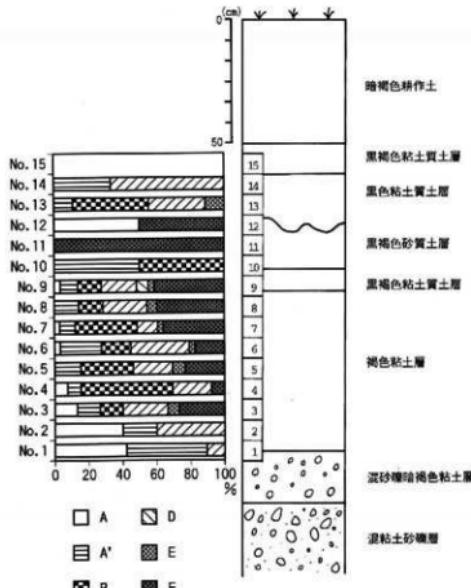
試料は、試掘調査時に担当者によってすでに採取されていた地質試料を用いた。試料は10cmの等間隔で採取された15試料である（第1図）。

**3 分析方法**

試料は、湿ったまま約30gを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析節（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析節（#60, #250）を用いて $>1/4$ mmおよび $1/4 \sim 1/16$ mmの粒径に節別・秤量した。鉱物粒子の観察は、 $1/4 \sim 1/16$ mmの粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行った。今回はテフラ粒子の含有の有無についての調査が主目的であるため以下の方法で観察した。24×24mmのカバーガラス全範囲を、視野が重複しないように総合倍率100倍で観察し、その間に検出された火山ガラスを全て計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従い、細粒結晶を包有するF型をF'型とした。

**4 分析結果**

偏光顕微鏡下での計数結果を第1表に示す。これをもとに形態別火山ガラス組成を算出し第1図に示す。試料全体を通じ粘土質の部分は、きめの細かい粘性の高い良質の粘土



第1図 形態別火山ガラス組成

第1表 計数火山ガラス粒数

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15
A 無色	8	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
A' 褐色															
A' 無色	9	1	2	1	2	7	3	5	3	1	1	1	2	1	1
A' 褐色															
B 無色					2	7	4	5	12	5	4	1	4	1	1
B' 褐色															
C 無色	2	2	4	3	3	10	4	8	6	1	1	1	3	4	1
C' 褐色										2					
D 無色															
E 無色	1			1	1	1	2	1					1		
F 無色	4	1	3	5	12	14	12	12	12	2	1	1	1	1	1
合計	19	5.	15	13	13	29	33	35	29	2	2	2	9	6	0

一郎型（泡壁型）のA・A'型無色火山ガラスが多い。姶良Tnテフラ（AT）（約2.5万年前）に由来する火山ガラスの可能性がある。ローム層中に認められるAT降灰層準と比較すると火山ガラスの含有率が極めて少ない。ATガラスの二次堆積物として泥流中に混入したと考えられる。

Nos.3～9は、組成が類似していて、塊状のB型、中間型C型、軽石型繊維状のE型、軽石型スponジ状のF型などで特徴づけられる。これらのうちC・E・F型の一部はカワゴ平軽石Kg（約2800～3000年前）に、またB・C型の一部は立川ローム層上部ガラスUG（約13年前）に火山ガラスの形態が類似している。さらにF・C型火山ガラスを付着させた新鮮な白形柱状緑色角閃石がNos.6.7で確認されたが、カワゴ平軽石に伴う斑晶鉱物である可能性が考えられる。中山・高木（1987）によると御動使川局地は、上石流や泥流などの堆積によって形成されていることが述べられている。試掘調査地点が粘土堆積地域に相当していること、それらの地域が泥流で形成されたと考えられること、さらに含有される火ガラスの形態的組成が層内でほとんど均一であることなどから、褐色粘土層のNos.3～9は一回の泥流堆積によって形成された可能性が考えられる。この褐色粘土層の堆積時期は、含有される火山ガラスの特徴からカワゴ平軽石の降灰以降と推定される。以上のように暗褐色粘土質上層は、時期および成因の点で洪積台地上に堆積する風成ローム層とは異なる堆積物であるといえる。

Nos.11～14についてもテフラの含有率が極めて少なく二次堆積として火山ガラス粒子が混入しているものと考えられる。

本地点は、洪水時に御動使川の氾濫で生じた泥流によって褐色粘土層が堆積して以来、何回かの泥流堆積があったと考えられることから、長期にわたって御動使川の流路間に挟まれた地域として存在していたものと推定される。

## 文献

- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、19-30。  
中山正民・高木勇夫（1987）微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程。東北地理、39、98-112。

である。洗い出された砂分中には泥岩・緑色変質火山岩類などが多く含まれている。これらの岩石は御動使川上流域に広く分布する第三系（中新統）に由来するものであることは明白である。火山ガラスの含有率は極めて少ない。

下部No.1～2ではパブルウォ

# 塩山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理

小林 健二

- |               |         |
|---------------|---------|
| 1 はじめに        | 4 若干の考察 |
| 2 西田遺跡発掘調査の概要 | 5 おわりに  |
| 3 B区2号住居跡出土土器 |         |

## 1 はじめに

古式土器の成立に関する研究は、1990年代に入り急速に進展を見せている。甲斐地域においても弥生土器と土器の境界をどこに置くかという両期の問題は依然としてあるものの、東日本では特異ともいえるS字型A類<sup>(1)</sup>の出土状況を特徴として、時間的な流れについてはその様相が見えてきた<sup>(2)</sup>。

一方、古墳時代前期から中期への土器編年については、資料の少なさもあり、最近になってようやく動き出しあなばかりであり<sup>(3)</sup>、須恵器の出現に至る時期までの土器様相については、他地域に比べると依然として不鮮明であることは否めず、今後の課題となっている。このような状況の中で、前期から中期への両期を捉える場合、まず前期末の土器様相を考えてみると、その基準資料として、塩山市の西田遺跡B区2号住居跡出土の土器があげられる。筆者も度々土器編年に取り上げてきたが、この土器群が掲載された第1次調査報告書<sup>(4)</sup>の刊行から既に20年が経過している。この間その編年的位置については、基本的に大きく変わることはないが、器種の構成・系譜等についてのとらえ方は、かなり明瞭になってきたものの、その分断的な問題点も指摘されるようになった。このような状況から、現在の視点で再びこの土器群に注目することの意義は、きわめて大きいものと思われる。よって小稿では、西田遺跡B区2号住居跡出土土器について改めて取り上げ、整理してみたい。

## 2 西田遺跡発掘調査の概要

西田遺跡は甲府盆地の東部、塩山市熊野から西広門田にかけて所在する。秋父山系の人苔蔭嶺、柳沢峰に源を発する重川によって形成された扇状地上、標高364m付近に立地する。重川の右岸に形成された自然堤防で南北に長い微高地の上に遺跡は展開している。周辺には芦原田遺跡、町田遺跡、安道寺遺跡など縄文時代から平安時代までの遺跡、原之京鐵治遺構や於吉屋敷をはじめとする中世以降の屋敷跡なども数多く存在する。

本遺跡は古墳時代前期を中心とした遺跡で、これまで3次にわたる調査が行われている<sup>(5)</sup>。第1次調査は塩山バイパスの建設に伴う調査で、昭和52年(1977)山梨県遺跡調査団により実施された。発見された遺構は、縄文時代の土坑2基、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡7軒、方形周溝墓5基、上坑2基、溝状遺構5条、奈良時代の住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、時期不明の溝状遺構2条である。第2次調査は山梨県警塩山警察署の新築工事に伴う調査で、昭和53年(1978)に山梨県教育委員会により実施され、古墳時代前期の住居跡54軒、溝状遺構6条、土坑などが発見された。そして第3次調査は店舗新設に伴う調査で、平成3年(1991)に塩山市教育委員会により実施され、古墳時代初頭の住居跡4軒、中世の掘立柱建物跡1棟、土坑6基が発見されている。

これらのうち、第1次調査ではここで取り上げる住居跡の他、同時期の方形周溝墓群が発見されている点は重要である。いずれも1コーナーにブリッジを有するもので、弥生時代後期後葉以降甲斐では最も多い形態である。古墳が出現するこの時期にも伝統的な墳墓が継続して造営されていたことがわかる。また第2次調査では前期の中頃から後半にかけて多くの住居跡が重複しており、堅際に沿って床面を高くするベッド状遺構をもつ住居が54軒中18軒に見られることは注目される。一方調査区を二分するように位置する溝からも非常に多くの土器が出

土しており、時期的には前期の後半に中心を置くものである。

### 3 B 区 2 号住居跡出土土器（第1図）

遺構の詳細については報告書に譲るが、第1次調査で発見された住居跡のうち、ほぼ全体が調査されたものはこの住居跡のみである。東西4m、南北4.8mのやや不整形の長方形のプランを持ち、200点余りの古式土器片が出土したことが報告されている。今回再整理するにあたり、報告書掲載のものについて筆者が改めて実測したもの（1・2・4～17・21・26～28）の他に、報告書には掲載されていないものがあることが判明した（3・18～20・22～25）。これらについては出土状況等不明な部分があるが、図化出来たものについて、合わせて紹介しておきたい。

1は小型壺の口縁部破片である。口径8.2cmで、口縁部はわずかに外反し、途中がやや肥厚している。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキが施されている。内・外面とも赤彩され、色調はにぶい赤褐色を呈している。胎土には金色の雲母をわずかに含んでいる。

2は広口壺の口縁部から体部上半にかけての破片である。口径は13cmで、口径と体部最大径はほぼ同じである。調整は外面は頸部に横方向のヘラミガキ、それ以外は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキを施している。色調は外面は黒褐色、内面はにぶい赤褐色で、胎土には赤色粒子・白色粒子を含んでいる。

3も広口壺と見られるが、こちらは口縁部のみの破片である。口径は15.2cmで、内・外面横ナデされている。外面は明るい赤褐色、内面赤褐色の色調で、胎土には赤色粒子・白色粒子を含んでいる。

4・5は壺の体部下半から底部にかけてのものである。底径は4は6.8cm、5は6.6cmで、ともに外面には縦方向のヘラミガキが施され、内面は斜めのハケ調整であるが、5については外面のヘラミガキは不鮮明である。色調は4は内・外面とも橙色、5は内・外面ともにぶい褐色を呈している。胎土については4は金色の雲母・赤色粒子をわずかに含んでいるが、5には小礫も多く含んでおり粗い。

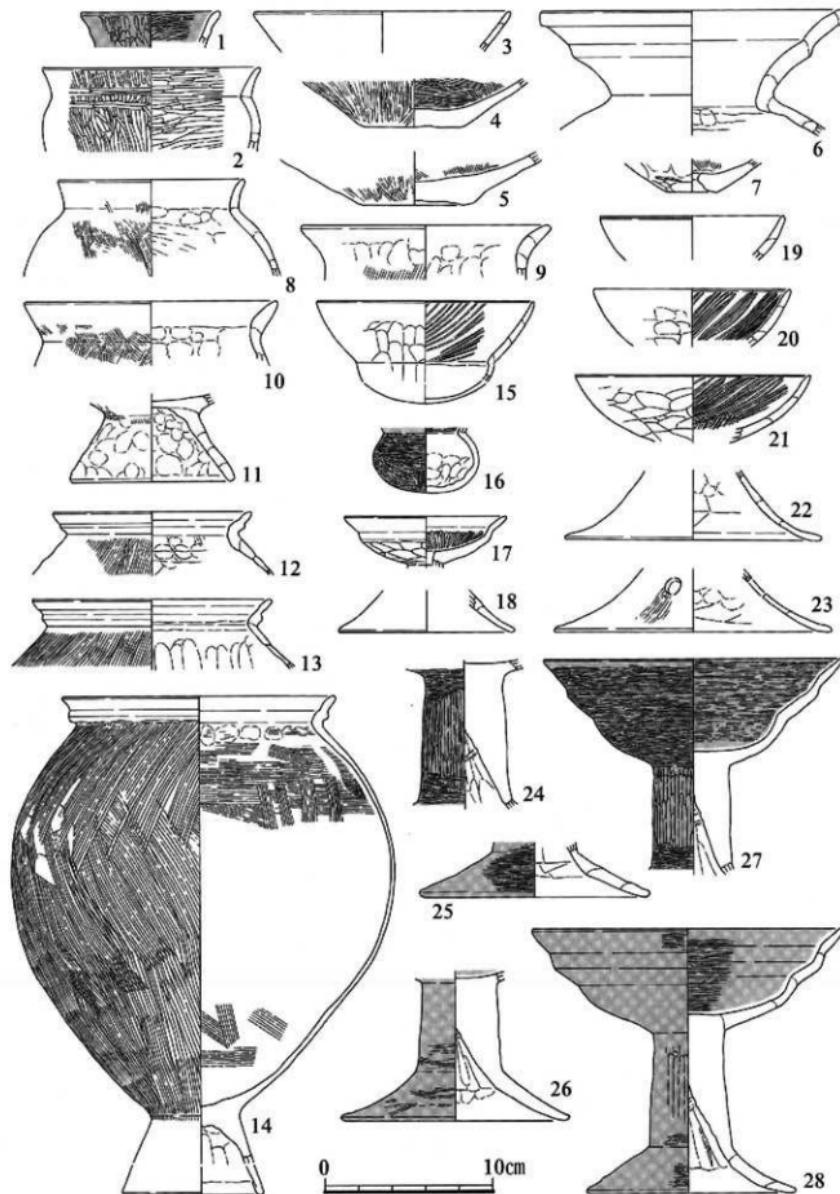
6は二重口縁壺で、口縁部から肩部にかけて約3分の2が残存している。口径は18cmで、頸部から大きいくの字に屈曲する。器面は磨滅しており、調整は確認できないが、頸部内面に指ナデ・指オサエと輪積み痕が見られる。色調は内・外面とも明るい黄褐色で、胎土は白色粒子・小礫を多く含み粗い。

7は有孔鉢の体部下半から底部にかけてのものである。底径は2.8cmで、体部外面の上部は指ナデ、下部から底部にかけてはヘラケズリを施す。体部内面はハケ調整、底部は指ナデが確認できる。さらに体部外面には引っ掻いたようなヘラケズリも見られる。底部の単孔は棒状工具であけた後、底部外面側をヘラケズリによってさらに覆めてある。色調は内・外面とも明るい赤褐色を呈し、胎土は赤色粒子・白色粒子・小礫を多く含み粗い。

8～10は単純口縁の台付壺とみられる。8は口縁部から体部上半にかけての破片で、口径は11cm、口縁部は横ナデで、直立気味に外反している。体部外面は单斜ハケ調整で、1部をナデ消してある。頸部内面は指オサエ、体部内面はナデが見られる。内・外面ともにぶい黄褐色で、胎土は小礫を含み粗い。9は口縁部から頸部にかけての破片である。口径は14.6cmで、口縁部は横ナデであるが、頸部にかけて内・外面に成形時の指オサエが残る。外面には单斜のハケがわずかに確認できる。色調は外面黒褐色、内面明るい褐色で、胎土は金色の雲母・赤色粒子・小礫を含み粗い。10は口縁部から頸部にかけて約5分の1が残存している。口径15cm、口縁部は横ナデ、頸部外面は单斜ハケ調整で、内面は指オサエが見られる。色調は内・外面とも明るい褐色で、胎土には小礫を含んでおりやや粗い。

11は台付壺の底部から脚台部にかけてのもので、約3分の2が残存している。底径は9.6cm、底部内面はナデ、体部外面下部にハケ調整が見られる。脚台部外面から端部は横ナデであるが、成形時の指ナデが残っている。内面は指ナデ・指オサエのままである。色調は内・外面ともにぶい黄褐色で、胎土は金色の雲母・赤色粒子・小礫を含んでおりやや粗い。

12～14はS字壺である。12は口縁部から肩部にかけての破片で口径11.6cm、口縁部は横ナデによって成形され、頸部にかけて厚く屈曲は不明瞭である。肩部外面は羽状ハケ、頸部から肩部内面は指ナデ・指オサエ・輪積み痕



第1図 西田遺跡B区 2号住居跡出土土器 (1 : 3 筆者再実測)

と、わずかにハケの痕跡が見られる。内・外面とも赤褐色の色調で、胎土は金色の雲母・赤色粒子・白色粒子を多く含み粗い。13は口縁部から肩部にかけて約5分の1が残存している。口径は14cmで、成形・調整技法は12と同じであるが、口縁部は12と比べると各段が面をもって彎曲している。色調・胎土も12とほぼ同じである。14は口縁部から体部上半にかけて約3分の1と、脚台部下半が欠損している。口径は16.2cm、器高は約30cmで、底径は推定で8.4cmである。口縁部はやはり横ナデ成形で、彎曲は12・13よりもさらに明瞭さを欠き立ち気味である。体部は長胴を呈し、最大径は中位にある。外面は底部から肩部方向へ、その後頸部から肩部方向に羽状ハケが施されている。しかしこうどうハケが交差する体部最大径付近に、体部上側のハケを施す前にヘラケズリを行った痕跡があり、ハケメが消えている部分がある。また中位から下位にかけては煤が付着している。頸部内面は指オサエ、体部内面上部はハケによる調整がなされ、1部ナデ消されている。中程はナデ、下部から底部にもハケ調整が見られるが不鮮明である。脚台部外面はナデ、内面は指ナデによる成形痕が残っている。色調は外面は明るい黄褐色、内面は明るい褐色で、胎土には金色の雲母・赤色粒子を多量に含んでいる。

15・16は小型丸底鉢である。15は口縁部から体部上端にかけての破片で、口径が高が体部高を凌駕するタイプと見られる。口径12.8cmで、口縁部は内彎しながら開く。内・外面とも横ナデを行っているが、外面にはヘラケズリの痕跡が見られ、口縁部内面は暗文のようなヘラミガキが斜めに施されている。色調は内・外面とも明るい赤褐色で、胎土は赤色粒子を多く含みやや粗い。16は口縁部を欠き、頸部から体部が残存している。体部上半と頸部内面は横方向のヘラミガキ、体部下半はヘラケズリにより丸底に整形しその後斜め方向のヘラミガキが施されていることが確認できる。体部内面上半はナデ、下半は指ナデ、外面と頸部内面は赤彩され赤褐色で、体部内面は黄褐色を呈している。金色の雲母を含む胎土は精良である。

17は小型器台の器受部で、1部欠損している。口径は9.5cmで、口縁部は横ナデされ器受部中程から外曲している。外面下半はヘラケズリ、内面は中程から底部にかけて丁寧なヘラミガキが放射状に施され、中央に貫通孔が空けられている。色調は内・外面とも明るい黄褐色で、胎土には赤色粒子を含んでいる。

18は小型器台の脚部下半と見られる破片で、底径は10.4cmであるが、磨滅により調整は確認できない。内・外面とも橙色の色調で、白色粒子・小礫を多く含み粗い。

19~21は高杯の杯部である。19は小型の口縁部破片で、口径は10.8cmである。磨滅により内・外面の調整は確認できない。色調は内・外面とも橙色で、胎土は赤色粒子を多く含み粗い。20は杯部の約4分の1が残存している。口径は11.6cmで、口縁部内面は横ナデにより沈線を有している。杯部外面はヘラケズリがあるが不鮮明で、内面には暗文状のヘラミガキが斜めに施されている。色調は内・外面とも明るい褐色で、赤色粒子を含む胎土はやや粗い。21も杯部の約4分の1が残っているもので、口径14cmで口縁部は横ナデ、20と同様に杯部外面にはヘラケズリが、内面にはヘラミガキが施されている。色調は外面は明るい黄褐色、内面明るい褐色で、赤色粒子を含む胎土である。

22・23は幅が大きく聞く高杯の脚部下半部である。22は破片で、底径が15.2cmあり、外面は磨滅により調整は確認できない。端部は横ナデ、内面は上部は指ナデ、下部はヘラケズリによる成形である。色調は外面は橙色、内面は黄褐色を呈し、胎土は赤色粒子を多く含み粗い。23は約3分の1が残存している。底径は16.4cmで、外面のミガキは不鮮明である。端部は横ナデ、内面は上部は指ナデ、下部はヘラケズリで、透孔は3方向に穿たれたものと見られる。色調は外面は明るい黄褐色、内面は黄褐色、胎土は赤色粒子を多く含みやや粗い。

24~28は彎折脚高杯である。24は杯部底部から脚部柱状部で、彎折部分が残っている。柱状部の上半は中実で、かなりの重量感がある。杯部内面はナデ、脚部外面の上部は横方向の細かいヘラミガキ、中程から下部にかけては縦方向のヘラミガキが、そして下部にはその後さらに横方向のヘラミガキが施されている。内面は螺旋状にケズリ取られ、円錐形になっている。杯部内面から外面は赤彩され赤褐色、脚部内面は明るい黄褐色を呈し、胎土は小礫を多く含み粗い。25は彎折部から端部にかけての約3分の1の部分で、底径は13.4cmある。24と同一個体の可能性もある。外面は横方向の細かいヘラミガキ、端部は横ナデ、内面はヘラケズリのままである。色調は外面は赤彩により赤褐色、内面は明るい黄褐色で、胎土に小礫を多く含み粗い。26は杯部底部から脚部にかけて1

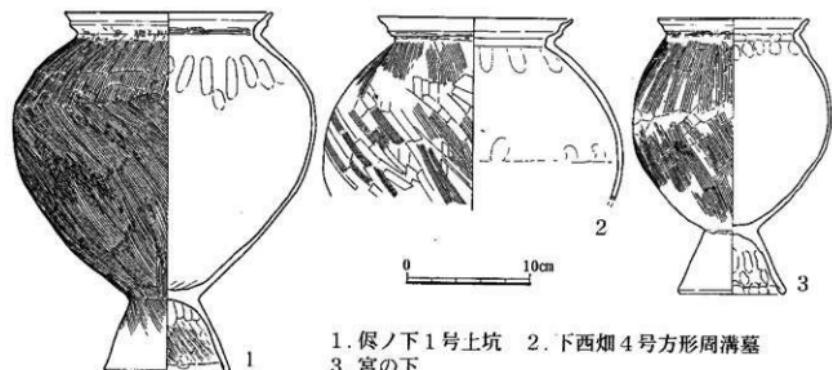
部欠損したもので、底径は12.6cmを測り、わずかに屈折しながら広がっている。杯部内面と外面は磨滅により調整は不鮮明であるが、柱状部下半から裾部にかけて横方向のヘラミガキがわずかに確認できる。端部は横ナデ、脚部内面は指オサエとヘラケズリによりやはり円錐形に成形されている。杯部内面から外面にかけては赤彩により明るい赤褐色で、胎土は赤色粒子、小礫を多く含み粗い。27は脚の屈折部を欠くもので、口径19.6cmである。口縁部は横ナデによって仕上げられ、杯部内面と外面は横方向の細かなヘラミガキ、脚部柱状部外面の中程は縦方向のヘラミガキ、下部にはその後横方向のヘラミガキが施されている。脚部内面の成形は24と同じである。色調はこちらも赤彩のため杯部内面から外面にかけては明るい赤褐色、脚部内面は明るい黄褐色を呈し、胎土は赤色粒子、小礫を多く含み粗い。28は杯部の約2分の1が欠損したものであるが、唯一全体の形状が復元できたもので、口径は18.5cm、器高は15.8cm、底径は12.4cmを測る。磨滅により杯部内面から脚部外面の調整は不鮮明であるが、27と同様、杯部の内・外面、脚部柱状部外面の下部から裾部にかけては横方向の細かなヘラミガキ、中程は縦方向のヘラミガキが施されているのがわかる。脚部内面の成形も同じである。杯部内面から外面にかけては赤彩により赤褐色で、脚部内面は橙色をしている。胎土は小礫を多く含み粗くなっている。

#### 4 若干の考察

以上のように各器種ごとに観察してきたが、これらのうち、甲斐に定着しているS字彫<sup>(5)</sup>と曲削の重要な指標となる屈折脚高杯についてもう少し見てみたい。

まずS字彫（第1図14）についてであるが、今回改めて観察した結果、体部中程にケズリの痕跡が確認できた。このような例は、東八代郡八代町伊ノ下遺跡<sup>(7)</sup>1号土坑（第2図1）、塙市下西畠遺跡<sup>(8)</sup>4号方形周溝墓（第2図2）や、東八代郡豊富村宮の下遺跡<sup>(9)</sup>（第2図3）などで確認できる。この時期のすべてのS字彫に施された技法かどうかわからないが、筆者分類のIV類・V類<sup>(10)</sup>のような、新しい段階のものに採用されたことは確かなようである。またこの段階の体部内面にハケ調整を残したもののは決して珍しい存在ではなく、同じ西田遺跡第2次調査37号住居跡<sup>(11)</sup>や、東八代郡御坂町姥塚遺跡<sup>(12)</sup>41号住居跡などで散見できる。さらに加納俊介氏が指摘したように、脚台部外面の斜め方向のハケが消失<sup>(13)</sup>しており、肩部外面横ハケの早い段階の消失と合わせ、濃尾平野のものとは異なる製作技法である。

一方、屈折脚高杯であるが（第1図24～28）、有段をもつ杯部の形態や、太く短い脚部の特徴は各地で見られるものとは大きく違うものである。裾端部の成形等についても、これらには村木誠氏の検証したような「初現的



第2図 体部外面にヘラケズリ調整を施したS字彫（1：4）

な特徴」<sup>24</sup>を見いだすことは難しい。しかし、脚部の形態は共存しているそれまでの主流であった開脚のもの（第1図22・23）とは明らかに違うことから、やはり甲斐における屈折脚高杯の初現のものである。また杯部と脚部の接合は、脚部の側面に粘土を貼り付け成形していく付加法<sup>25</sup>であり、杯部の横ミガキと、脚部柱状部に縦ミガキを施した後に上端と下端に横ミガキが施されていることが確認できることから、これらを考慮すれば、すべてが畿内系のものかどうか疑問が残るが、おそらく布留式（2式期）<sup>26</sup>の製作技法<sup>27</sup>の影響のもとに甲斐で作られたものと考えられる。なお杯部については、有段（屈曲）口縁鉢の変容したものと考えられるが、本県ではこの種の鉢の出土例がなく、今後の検討課題としておきたい。ところで高杯の杯部を鉢に置き換えたような例は、東八代郡中道町東山北遺跡<sup>28</sup>2号方形周溝墓出土の高杯があり、こちらは小型丸底鉢に脚をつけたものと思われる。

その小型丸底鉢（第1図15・16）についても畿内の製作技法の影響が見られ、口縁部が外曲する小型器台（第1図17）の系譜ははっきりしないが、この時期の東日本で多く見られるものである。この他二重口縁壺（第1図6）については、伊勢湾系<sup>29</sup>に系譜をもつものであり、単純口縁の台付壺（第1図8～10）は、弥生時代後期から在来の器種として残存するものである。

このように、本遺構出土の土器群は、屈折脚高杯の形態自体はきわめてイレギュラーなものであるが、在米化が進んだS字壺・小型丸底鉢・小型高杯・小型器台を含む器種構成であり、基本的に同一時期のものとしてとら

第1表 編年対照表（小林1998cに加筆）

河内 米田	大和 寺沢	尾張		信濃 青木	駿河 渡井	甲斐 小林	基準資料	墳 墓
		赤塚	加納					
庄内式期IV	布留0式期	延II 間式4期	延III 間期	II-2 期	4 期	大廓III式期	久保庄敷：弓矢 村前東A IV区13号住	北村1・3号墓 小平沢古墳？ 米倉山B1号墓 桜井塚1号墓
	布留1式期	延I 間2期	塔の越期	III-1 期	5 期			櫻田1・4号墓 大丸山古墳？ 北村2号墓 甲斐缺子塚古墳
庄内式期V	布留1式期	延II 間3期	塔の越期	III-2 期	6 期	大廓IV式期	坂井塚39号住 源ノ下1号土坑 坂井塚35・46号住 徒塚37号住 西田B区2号住	下西塚4号墓 東山北2号墓 桜井塚2号墓 西田A区1号墓 丸山原古墳
	布留2式期	布留2式期	松河I戸式期1期	西北出期	IV-1 期			松井塚3号墓
布留3式期III	布留3式期	松河I戸式期2~4	松河	IV-2 期	中見II代式期	(墓の下)	村内1号住 松木塚ノ塚	(墓の下)
	布留4式期	松河II戸式期	戸期					二之宮250号住 二之宮西75号住 東山南B2号墓

えることが出来よう。そして年代的には従来通り古墳時代前期後葉に位置づけられるものである。それは甲斐縄文塚古墳の出現前後の、伊勢湾系の土器群が甲斐において変容し、代わって畿内の影響が波及してくる中で生まれたものと、ひとまず理解しておきたい。

最後に畿内布留式併行期の土器編年について確認しておきたい（第1表）。併行関係については、河内・大和・尾張・信濃（長野盆地南部）・駿河（東部）のものを示しておく<sup>20</sup>。本遺構の土器群は筆者の編年の古墳時代IV期<sup>21</sup>の基準資料として位置づけられ、他に仮ノ下遺跡1号土坑・韮崎市坂井南遺跡<sup>22</sup>35号住居跡・同44号住居跡・姥塚遺跡37号住居跡がある。しかし小型丸底鉢の初現はⅢ期に遡る可能性もあり、X字形器台の存在も不明である。周辺地域では特に駿河の編年とのズレがあるが、IV期に見られる屈折脚高杯・小型丸底鉢の製作技法に畿内布留式の影響が見て取れることを、一つの画期として捉えたい。

中期については、はじめに述べたとおり資料的に少ないことから、現段階では見通しの提示のみにとどめておき、今後の増加を待ちたい。

## 5 おわりに

西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理を通して、古墳時代前期後葉の土器様相を改めて検討してみた。結果的に従来の編年的位置は変わることはないが、その中で筆者が一貫して追求してきた甲斐のS字縄文は、この時期体部外面にヘラケズリの採用と、脚台部外面の斜めハケが消失するものが現れ、製作技法を大きく変えてくる。そこに伊勢湾系の定着・変容と、畿内系と思われる新器種の波及の段階という画期を、より鮮明なものにすることができた。しかしS字縄文・高杯ばかりに頼ることなく、今後は小型丸底鉢・小型器台をひとつの核とした、周辺地域との編年を模索していきたい。

最後になりましたが、本稿を草するにあたり、坂本美夫、村木 誠の両氏にはご配慮・ご教示いただきました。記して御礼申し上げます。

（1999年2月4日稿了）

## 註

- (1) 赤塚次郎 1986 「『S字縄文』覚書'85」『年報 昭和60年度』(財) 爽知県埋蔵文化財センター
- (2) 小林健二 1993 「山梨県域の土器様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会新潟大会実行委員会  
小林健二 1994 a 「甲府盆地の外米系土器」「庄内式土器研究」V 庄内式土器研究会  
小林健二 1994 b 「甲斐における庄内式併行期の土器編年」「庄内式土器研究」VI 庄内式土器研究会  
小林健二 1998 a 「山梨県出土の東海系土器—波及と定着と変容—」「山梨県考古学協会誌」第10号 山梨県考古学協会  
小林健二 1998 b 「甲斐における土器群の西期と交流—東海系を中心にして—」「庄内式土器研究」XVI 庄内式土器研究会  
小林健二 1998 c 「甲斐における古式上師器の成立—3・4世紀の土器編年と墳墓—」「専修考古学」第7号 専修大学考古学会
- (3) 石神孝子他 1998 「山梨」「東国における5世紀の土器と社会」東国土器研究会
- (4) 山崎金夫他 1978 「西田遺跡—第1次発掘調査報告書—」山梨県遺跡調査団
- (5) 中山誠一・飯島 泉 1996 「14西田遺跡」「塙山市史」史料編第1巻 原始・古代・中世 塙山市  
坂本美夫 1998 「245西田遺跡」「山梨県史」資料編1 原始・古代1 考古(遺跡) 山梨県
- (6) 小林健二 1991 「甲府盆地におけるS字縄文の定着について」「古文化談叢」第26集 九州古文化研究会
- (7) 渡辺礼一 1984 「Ⅲ仮ノ下遺跡」「石橋条里制遺構・藏福遺跡・仮ノ下遺跡」山梨県教育委員会

- (8) 石神孝子 1998「10下西畠遺跡」『年報14 平成9年度』山梨県埋蔵文化財センター
- (9) 小林健二 1998 d 「豊富村宮の下遺跡出土のS字甕」『森和敏氏退職記念 山梨県考古学資料集I』森和敏氏退職記念刊行委員会
- (10) 註(2) 1998 a に同じ。
- (11) 小林健二 1993「外米系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (12) 木本 健他 1987『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会
- (13) 加納俊介 1998「S字甕の波及と定着」『静岡の考古学』同編集委員会
- (14) 村木 誠 1996「付篇1、名古屋市域の土師器について」『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡(第5次)』名古屋市教育委員会
- (15) 寺沢 薫 1980「弥生土器の形式分類」「六条山遺跡」奈良県教育委員会
- (16) 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」「矢部遺跡」奈良県教育委員会
- (17) 次山 淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会
- (18) 木本 健他 1993「東山北遺跡」山梨県教育委員会
- (19) 田口一郎 1981「(2) 二重口縁壺の系譜の検討」「元島名将軍塚古墳」高崎市教育委員会  
比田井克仁 1995「二重口縁壺の東国波及」「古代』第100号 早稲田大学考古学会
- (20) 註(16) 及び  
 米田敏幸 1991「2土師器の編年 1近畿」「古墳時代の研究6 土師器と須恵器」雄山閣出版  
 赤塚次郎 1990「考察」「廻間遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター  
 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」「松河戸遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター  
 加納俊介 1991「2土師器の編年 4東海」「古墳時代の研究6 土師器と須恵器」雄山閣出版  
 加納俊介 1997「廻間式か元扇敷式か—東国から見た弥生土器と土師器の境界—」『西相模考古』第6号  
西相模考古学研究会  
 原田 幹 1998「伊勢湾地域における土器群の画期と交流—伊勢湾系土器の拡散と東日本—」「庄内式土器研究」XVI 庄内式土器研究会  
 青木一男 1998「信濃における土器群の画期と交流—箱清水式土器文化圏の庄内式併行期を中心として—」「庄内式土器研究」XVI 庄内式土器研究会  
 渡井英賛 1996「東駿河における布留式併行期の様相(前)ー土器編年の設定ー」『静岡県考古学研究』28  
静岡県考古学会  
 渡井英賛 1998「大席式土器小考ー大席式土器の画期とその展開ー」「庄内式土器研究」XVI 庄内式土器研究会
- (21) 註(2) 1998 c に同じ。
- (22) 山下孝司 1988「坂井南」並崎市教育委員会

# 山梨市牧洞寺古墳採集の須恵器について

石神孝子

- 1はじめに  
2牧洞寺古墳研究略史

- 3採集遺物と帰属年代  
4おわりに

## 1 はじめに

牧洞寺古墳は、山梨市と東山梨郡春日居町のちょうど境に位置する水ヶ森山地の緩やかな南斜面上、標高320m付近に位置する。本古墳の所在する上岩下地区には、牧洞寺古墳の他にも指呼の間に天神塚古墳が所在する。さらに北方800m付近には山寺古墳、観音塚古墳などが所在し、これらの他にもかつては古墳が存在していると考えられている。これら現存する古墳を含め、総称して岩下古墳群と呼ばれている。

筆者が本古墳を初めて訪れたのは、1996年冬のことであった。石室は既に開口しており、前庭部付近には数多くの須恵器破片が散乱していた。これらはいずれも小片あるが、本古墳の築造年代等を考える上で非常に参考になる資料であるため、ここに紹介するものである。

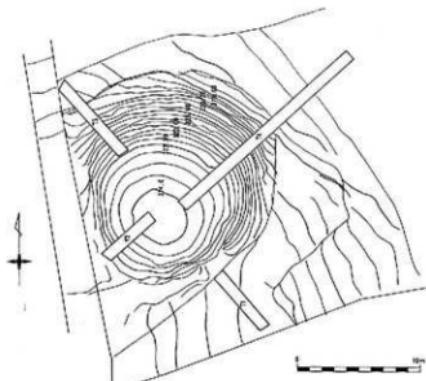
## 2 牧洞寺古墳研究略史

牧洞寺古墳は牧洞寺の西側斜面上に位置し、現状では直径約16m前後の円墳である。埋葬主体は角形の自然石を利用した無袖型の横穴式石室であり、南東方向に向かって開口している。石室規模は全長10.55m、奥壁付近の高さは1.85m、幅1.82m、開口部付近の幅は1.50mを測り、県内では姥塚古墳（東八代郡御坂町）、加牟那塚古墳（甲府市）、地藏塚古墳（東八代郡八代町）に次いで4番目の規模を誇る。

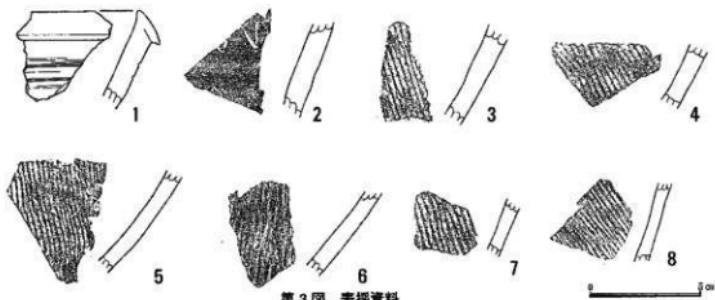
本古墳の存在は古くから知られていたようであるが、その概要是ほとんど明らかにされていなかった。このような状況下で、1975年に小林広和・里村晃一両氏は天神塚古墳の石室調査結果を発表した上で、牧洞寺古墳の石室についても触れ、「奥壁は一枚石で側壁は一号墳（天神塚古墳）より小型の石材を積んでいる」と報告している<sup>1)</sup>。一方1983年には古代甲斐の郡郷制を明らかにするといった観点から、古墳群との関係に着目した坂本美夫氏は、岩下古墳群は古墳時代後期後半になって勢力を伸ばし、八代勢力を抜き一大勢力を形成した新興勢力であり、銅鏡等仏教色の濃い遺物を出土した狐塚古墳や寺の前古墳等によって構成される春日居古墳群とも密接な関係にあったと推測している<sup>2)</sup>。1997年には山梨市教育委員会により墳丘確認を中心とした調査



第1図 位置図



第2図 墳丘地形・トレンチ設定図



第3図 採集資料

が行われ、前庭部に設定されたトレンチ内より須恵器片等の遺物が出土している<sup>3)</sup>。

### 3 採集遺物と帰属年代

今回採集した遺物はすべて前庭部付近で採集したものである。このうちの大部分を須恵器片が占め、若干土師器片も認められた。しかしこれらの土師器片からは、いずれも器種を知ることは不可能であった。須恵器片はいずれも小さいものではあるが、かろうじて器種の想定できるもののみを図化した。

第3図1～8はすべて須恵器片あるいは瓶破片である。このうち1は口縁部である。小片であるため、口径については不明である。内面には自然釉が付着している。外面頭部には2条の浅い沈線が認められるが、破片最下部にも同様な沈線痕が見られるため、最低でも3条の沈線が施されていたものと思われる。口唇部は外側に折り返し状に若干肥厚し、口唇部先端は内側へ内湾する。2は頸部破片である。ロクロナデの後、2条の櫛描波状文が施されたものと思われる。3～8はいずれも肩部破片である。外面はタタキにより調整される。色調は青灰褐色を呈し、胎土は密である。

また図化できなかったものの中に、蓋と思われるものがいくつか存在する。これらは色調などから同一の製品ではないようである。いずれも天井部分にヘラケズリが施され、内面はナデ、指頭圧痕が認められるものもある。

このような特徴からこれらの資料は田辺編年<sup>4)</sup>のTK209型式前後のものであると考えられる。

### 4 おわりに

今回紹介した資料は既に述べたように前庭部付近で採集したものである。1997年の山梨市教育委員会の調査でも前庭部付近では遺物の集中がみられることから、これらの遺物は古墳に伴う葬送儀礼に用いられたものであると推測される。上記でも明らかになったようにこれらの遺物の埋蔵年代は6世紀末から7世紀初頭に求めることができるものと考えられる。従って牧洞寺古墳の築造はこの時期が一つの定点になるものと推定できる。

以上のように牧洞寺古墳前庭部付近採集の資料から本古墳の築造年代について若干触れてみた。今後、古墳群の出現や被葬者像等様々なことが明らかになるであろう。今後の調査に期待したい。

(1999.1.4 稿了)

1) 小林広和・里村晃 1975 「山梨県の大根石室塚」「信濃」第27巻第4号 信濃史学会

2) 坂本美夫 1983 「甲斐の都(評)郷制」「研究紀要」1 山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

3) 三澤達也 1997 「4. 牧洞寺古墳」「1997年度上半期遺跡調査発表会要旨」 山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会

山梨県教育委員会では平成10年度に継続調査が行われている。

4) 田辺昭二 1979 「須恵器大成」 角川書店

## 山梨県内出土木製品について

雨 宮 加代子

山梨県立考古博物館では、平成9年度夏季企画展として「木の文化」を開催した。これは、近年低地の遺跡を調査する機会も増え、県内の木製品の出土件数も多くなってきており、それらの展示・公開の必要性を感じたことと、一般に考古学の遺物としてイメージすることが多い土器・石器・金属器だけでなく、多くは朽ちてしまう木の製品も重要な役割を果たしており、県内の遺跡から出土した木製品を見てもらうことにより、豊富な森林資源に基づいて連続と受け継がれる我々の「木の文化」を再確認する目的で開催された。

この企画展を開催するにあたり、平成9年6月から7月にかけて県内各市町村教育委員会に出土木製品の調査票を送付し調査を依頼した。さらに県埋蔵文化財センターの資料、今年度の新資料も加え、県内出土の木製品の集成を試みた。

原則として各市町村教育委員会から回答を受けたものはそのまま掲載し、県埋蔵文化財センター調査の資料並びに各市町村教育委員会既刊の報告書についてはその報告書の記載を基にした。掲載の資料は「製品」として加工の痕が認められるものとし、炭化材・自然木の類は省いた。

従って出土木製品の正確な数量、保存処理の状況など、不明な部分は空欄のまゝとしたため、資料としては甚だ心許ないものではあるが、一つの試みとしてとらえて頂ければ幸いである。

また、この場を借りて発表の時期が遅れることをお詫びするとともに、調査並びに企画展に快くご協力・ご出展いただいた市町村教育委員会、数々のご教示と叱咤激励をいただいた博物館職員に改めて感謝申し上げます。

<参考文献>

- |   |                         |      |
|---|-------------------------|------|
| 1. 年報9                                      | 山梨県埋蔵文化財センター            | 1993 |
| 2. 年報12                                     | 山梨県埋蔵文化財センター            | 1996 |
| 3. 山梨考古 第70号                                | 山梨県考古学協会                | 1998 |
| 4. 宮ノ前遺跡                                    | 韮崎市遺跡調査会・韮崎市教育委員会ほか     | 1992 |
| 5. 塩川下河原堤防遺跡 発掘調査報告書                        | 韮崎市教育委員会・塩川下河原堤防遺跡発掘調査会 | 1998 |
| 6. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第3集「石橋条里創造構・藏福遺跡・保ノ下遺跡」 | 山梨県教育委員会                | 1984 |
| 7. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第13集「柳坪遺跡」              | 山梨県教育委員会                | 1986 |
| 8. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第25集「金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)」   | 山梨県教育委員会                | 1987 |
| 9. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第35集「跳了塚古墳附丸山塚古墳」       | 山梨県教育委員会                | 1988 |
| 10. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第53集「大輪寺東遺跡」           | 山梨県教育委員会                | 1990 |
| 11. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第55集「身洗沢遺跡・一町五反遺跡」    | 山梨県教育委員会                | 1990 |
| 12. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第72集「二本柳遺跡」            | 山梨県教育委員会                | 1992 |
| 13. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第73集「地耕面遺跡」           | 山梨県教育委員会                | 1992 |
| 14. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第86集「大師東丹保遺跡」          | 山梨県教育委員会                | 1994 |
| 15. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第87集「油田遺跡」            | 山梨県教育委員会                | 1994 |
| 16. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第98集「伊府城跡V」           | 山梨県教育委員会                | 1995 |
| 17. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第101集「宮沢中村遺跡」          | 山梨県教育委員会                | 1995 |
| 18. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第102集「大師東丹保遺跡2」        | 山梨県教育委員会                | 1995 |
| 19. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第129集「向河原遺跡」           | 山梨県教育委員会                | 1997 |
| 20. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第131集「大師東丹保遺跡1区」      | 山梨県教育委員会                | 1997 |

遺跡名	所在地	遺物名	数量	時代	保存処理	所蔵先	文献
東畠遺跡	甲府市横根町	杓子状木製品	3	古墳時代	処理	甲府市教委	
		杭	10		処理		
朝氣遺跡	甲府市朝氣一丁目	砧	1	古墳時代	処理		
		下駄	2		未処理		
		網代	1		未処理		
		ヒョウタン容器	5		未処理		
		櫛	1		未処理		
		鳥形木製品	1		未処理		
		刀形木製品	1		未処理		
		杭	30以上		未処理		
		板	20以上		未処理		
		機織具	1		処理		
		機織具	1		未処理		
		舟	1		未処理		
		人形	1		未処理		
久保田遺跡	甲府市桜井町	楕	1	平安時代	処理	甲府市教委	
大坪遺跡	甲府市横根町	楕	1	平安時代	未処理	甲府市教委	
		皿	1		処理		
		板	1		処理		
		木筒状木製品	1		処理		
		板	1		未処理		
本郷遺跡	甲府市普光寺三丁目	井戸枠	1	平安時代	未処理	甲府市教委	
武田氏船跡	甲府市古府中町	方形板状木製品	2	中世	処理	甲府市教委	
		柱	1		処理		
		板	1		未処理		
		箸	2		処理		
		ヘラ状木製品	1		未処理		
		漆塗り椀	2		処理		
甲府城関係遺跡	甲府市丸の内一丁目	ぼうき	1	近世	処理	甲府市教委	
		楕	8		処理		
		箸	7		処理		
		釣瓶	1		処理		
		漆塗り箸	1		処理		
		柄杓	2		処理		
		皿	2		処理		
		墨書き山形蓋	1		処理		
		墨書き地熱札	1		処理		
		地錦箱	1		処理		
		井戸桶	2		未処理		
		下駄	8		処理		
		杭	30以上		未処理		
青沼遺跡	甲府市青沼三丁目	箸	2	近世	未処理	甲府市教委	
長善寺前陣屋跡	甲府市中央二丁目	井戸枠	2	近世	未処理	甲府市教委	
甲府城跡	甲府市丸の内一丁目	桐木		中世・近世		県埋文センター	16
		天水桶	1	近世・近代			
		木組み	1	江戸時代			
塙部遺跡	甲府市塙部二丁目	人形	2	平安時代か	処理	県埋文センター	2
		斎申	10以上	平安時代か	処理		

		漆塗り椀	1	処理		
		棒状木製品	3	処理		
		板状木製品	7	処理		
		曲物底	3	処理		
		曲物側板	1	処理		
		皿	1	処理		
宮ノ前遺跡	蔚崎市藤井町	3 奈良・平安	処理	蔚崎市教委	4	
		円形曲物	10	処理		
		蓋板	1			
		折敷	3	処理		
		柄	19			
		横櫛	1	処理		
		糸巻	1			
		馬頭	2	処理		
		横槌	1	処理		
		斎串	28			
		人形か	1	処理		
		棒状木製品	69			
		板状木製品	32			
		丸木弓	3	*		
		杭	11			
		角棒状木製品	12			
大輪寺東遺跡	蔚崎市旭町	柱根	7 中世	処理	蔚理文センター	10
		漆塗り椀高台部	1	処理		
		円盤状木製品	2	処理		
		自在鉤状木製品	1	処理		
		折敷底板	1	処理		
		箱側板	1	処理		
		箸	1	処理		
		板状木製品	2	処理		
		皿	1	処理		
		楕状木製品	1	処理		
		曲物	1	処理		
		桜皮	10	処理		
		下駄	2	処理		
		しゃもじ	1	処理		
		蓋	1	処理		
		紳状木製品	1	処理		
		環状木製品	1	処理		
		漆塗り皿	1	処理		
		椀	1	処理		
堀川下河原堤防遺跡	蔚崎市中田町	秘子上台	1 明治以降		蔚崎市教委	5
		木組み造構	1			
		枠類	3			
本村耕地1遺跡	白州町横手字久保頭	杭	3 中世	未処理	白州町教委	
柳坪遺跡	長坂町大八山	曲物底	3 平安時代	処理	蔚理文センター	7
		木簡	1	処理		
		しゃもじか	1	処理		
		工具部分か	2	処理		

		板材		
		角材		
宮沢中村遺跡	甲西町宮沢	下駄	江戸時代	県埋文センター 17
		漆塗り椀		
		桶	1	
		曲物		
		傘		
		桐木		
		木棺	1	
		枕列と網代	中世	
大師東丹保遺跡Ⅰ区	甲西町大師	下駄	1 鎌倉時代	県埋文センター 20
		蓋	1	
		折敷	1	
		漆塗り皿	1	
		箱部材	1	
		箸	4	
		斎巾	8	
		杭	580	
		円盤状木製品	1 先生時代	
		杭	1	
		建築部材	2	
大師東丹保遺跡Ⅱ区	甲西町大師	呪符	1 鎌倉時代	県埋文センター 14
		人形		
		斎巾		
		隨物		
		下駄		
		草履状木製品		
		曲物		
		椀		
		皿		
		蓋		
		盆		
		網代垣	1	
		柄鏡形木製品		
		建築部材		
		杭		
		木簡	1	
		方形井戸枠		
大師東丹保遺跡Ⅲ区	甲西町大師	下駄	鎌倉時代	県埋文センター 18
		草履状木製品		
		漆塗り椀		
		柱根		
		人形		
大師東丹保遺跡Ⅳ区	甲西町大師	杭	鎌倉時代	県埋文センター 18
		下駄		
		曲物		
		漆塗り椀		
		斎巾		
		建築部材		

		木簡	1			
油田遺跡	甲西町田島	堅杵	1	弥生時代		県埋文センター 15
向河原遺跡	甲西町江原	杭	7	中世	処理	県埋文センター 19
		箸	1		処理	
		棒状木製品	1		処理	
		栓か	1		処理	
		曲物底部	1		処理	
		漆塗り皿	1		処理	
金の尾遺跡	敷島町大下条	住居部材	約20	古墳時代	処理	敷島町教委
		柱根	4	弥生時代		県埋文センター 8
		梯子材	1		自然乾燥	
		棒状木製品	2			
かすみ提	昭和町河西	杭	33	近世	処理 3	
		蛇窓	1		処理	
二本柳(農道)	若草町加賀美	筋鍤車	2	中世		県埋文センター 12
		円盤状木製品	1			
		漆塗り皿	1			
		漆塗り椀	5			
		箸	1			
		板状木製品	7			
		折敷か	1			
		卒塔婆	1			
		曲物側板	1		自然乾燥	
		下駄	1			
二本柳(甲西バイパス)	若草町十日市場	漆塗り椀		中世		県埋文センター 1
		斎串				
		鏡形木製品				
		木棺				
西田遺跡	宮町地蔵堂	曲物	3	平安時代	処理	一宮町教委
		下駄	1		処理	
慈眼寺	一宮町木本	漆塗り椀	1	近世	処理	一宮町教委
石橋条里制造構工地点	境川村三門	柱根	30以上	奈良・平安	処理	県埋文センター 6
		有孔棒状木製品	1		処理	
		板材	2		処理	
		井戸・鉢出物	1		処理	
		踏繩の柄	1		処理	
		杭	13			
誠福遺跡	八代町永井	柱根	8	中世		県埋文センター 6
		漆塗り椀	2		処理	
		下駄	1			
		板状木製品	2			
假ノ下遺跡	八代町南	棒状木製品	1	不明	処理	県埋文センター 6
続子塚古墳	中道町	有孔円盤状木製品	1	古墳時代	処理	県埋文センター 9
		刀状木製品	2		処理	
		棒状木製品	3		処理	
市六遺跡	御坂町大野寺	なつめ玉	1	古墳時代	未処理	御坂町教委
地耕面遺跡	御坂町成田	斎串	50以上	奈良・平安		県埋文センター 13
		曲物	3			
		農具か	2			

身洗沢遺跡	八代町南	柱材	2	弥生時代	県埋文センター	11
		エブリ	1	処理		
		錫	1	処理		
		膝柄	1	処理		
		又巻	2	処理		
		剣形木製品	1	処理		
		皮縫部材	1	処理		
		部材	4			
		加工材	9			
		板	1			
		杭	1			
		割材	7			
		丸木材	2			
		削材	3	古墳時代		
		柱材	3			
		加工材	3			
		板	1			
		杭	2			
		板	2	近世		
勝沼氏館跡	勝沼町勝沼	漆塗り椀	5	戦国時代	未処理	勝沼町教委
		箸	20		未処理	
		楊枝	1		未処理	
		人形	1		未処理	
		下駄	4		未処理	
		雪駄	1		未処理	
		竹箒	1		未処理	
		杭	3		未処理	
		杖	2		未処理	
		折敷	2		未処理	
		櫛	2		未処理	
		曲物	4		未処理	
		木札	1		未処理	
		机材	1		未処理	
		柄	2		未処理	
		木彫削りかす	多数		未処理	
境沢遺跡	御坂町成田	木彫削り台	1		未処理	3
		桶材	1		未処理	
		礎板			御坂町教委	
		柱根	7			
		接続具(部材接続部)				

## 甲府城の鬼門守護と除災招福の思惟

### —稻荷曲輪にみる—考察—

崎 田 哲

#### はじめに

- 1 歴史の中の甲府城
- 2 稲荷曲輪と「輪宝」

#### 3 密教における「地鎮・鎮壇」と「輪宝」

- 4 愛宕山と稻荷曲輪
- おわりに

#### はじめに

甲府城は、甲府市北東部の愛宕山（標高427.9m）に連なる、一条小山（東西約200m・比高約30m）と呼ばれる丘を利用して、16世紀末に築かれた近世城郭である。正式名称は「甲斐府中城」であるが、一般的には甲府城と称され、他にも一条小山城・府中城・舞鶴城・赤甲城・錦城などの別称を有する。

築城から約400年を経た、本県唯一の近世城郭遺跡に対して、山梨県では平成2（1990）年度から10年計画で、石垣の改修を主とした整備を行い、また当センターでは、それに伴う事前の発掘調査を実施している。資料的価値が高い穴太積みの石垣や、金箔瓦をはじめとする数多くの遺構・遺物は、従来の甲府城に対する歴史的認識を一新するのに充分なもので、今回の発掘調査での成果は非常に意味深いものであったと言える。

本稿では、この発掘調査における成果を踏まえながら、「甲府城の鬼門守護と除災招福の思惟」について、甲府城の鬼門に位置する稻荷曲輪に注目して考察していくこととした。

#### 1 歴史の中の甲府城

天正10（1582）年の武田氏滅亡後、甲斐国は動乱の渦中にあったが、やがて関東の北条氏との間に起こった激しい攻防戦（天正壬午の乱）を制した徳川家康が、これを掌中に治める結果となった。

家康は、この直後に平岩親吉を城代に置き、新城の築城を計画させたと言われている。このときに城地として一条小山<sup>(1)</sup>が選定され、天正11（1583）年もしくは天正13（1585）年から甲府城の築城が開始された、というのが従来の説である。しかしながら、当時の家康を取り巻く諸處の状況や、従来の説の根拠となった文書などの再検討、更には発掘調査の成果などを通じて、近年では従来の説に疑問が提示されている<sup>(2)</sup>。

その後、天正18（1590）年に豊臣秀吉が、関東を平定（後北条氏の滅亡）すると、家康はその遺領に移封され、甲斐国は豊臣系の大名によって領有されることになった。以後、甲斐国が「関東（家康）に対する東の最前線」に位置づけられたことは、羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・率長と言った、秀吉の信任厚い大名が次々と入国した史実からも想像に難くない。そしてまた甲府城の築城が、彼らによって軌道に乗り、秀吉の思惟を大きく汲みながら完成していくことは、この時期に発給された文書の内容や発掘調査の成果からも理解できる<sup>(3)</sup>。

秀吉の死後、慶長5（1600）年の關ヶ原の戦で家康が勝利すると、甲斐国は再び徳川氏の所領となった。これ以降の約270年間、甲府城は「江戸の西の要」として位置づけられ、宝永元（1704）年から20年間を柳沢吉保・吉里が領有した以外は、徳川将軍家一門の所領もしくは人領として城番制・勤番制・城代制が敷かれていた。

明治維新以後は城郭としての使命を終え、明治6（1873）年の廢城令で城内の施設が破却された。わずかに内城のみは残されたが、やがてその一部も失われていった<sup>(4)</sup>。その後、甲府城は明治37（1904）年に舞鶴公園として開放され、更に昭和43（1968）年には現存区域が県史跡に指定されて、現在に至っている（図1）。

甲府城はその築城以来、歴史の表舞台に登場する機会には恵まれなかった。しかしながら、その存在は豊臣・

徳川のいずれからも重視され、常に時代の趨勢を扱うものであったと言える。このことは加藤光泰がその遺言状に「甲斐國之儀かなめ之處」<sup>[3]</sup>と記していることや、柳沢吉保が甲斐國受封の際に「甲斐國者枢要之地」<sup>[4]</sup>と記された朱印状を受けていること、更には幕末の慶応2（1866）年、駿府城と大坂城にしか設置されていなかった城代制を、甲府城に設けたことからも容易に想像できる。それだけに、甲府城における様々な発見は興味深い。特に、信仰上の痕跡は為政者の甲府城に対する意識が如実に顕現していると言えるのである。

## 2 稲荷曲輪櫓台と「輪宝」

稻荷曲輪は、天守台・本丸を東側から囲む天守曲輪の北及び東ドを巡るL字状の曲輪で、櫓台はその東北隅に設けられた高石垣の区画である（図1）。文禄2（1592）年の加藤光泰の書状には「其国ふしん土手ひかしの丸右かき出来候や」<sup>[5]</sup>とあるが、この中の「ひかし（東）の丸」こそ稻荷曲輪に比定される。恐らくこの時期、天守台・本丸など城郭の中心部は完成の域に達し、稻荷曲輪や星形曲輪への普請に取り掛かっていたのであろう。

稻荷曲輪には元来、城内の鎮守として庄城稻荷が祀られており<sup>[6]</sup>、稻荷曲輪の名称は、これに因んでいる。信仰に因む曲輪が鬼門<sup>[7]</sup>に置かれ、その東北隅の櫓台から「輪宝」<sup>[8]</sup>が検出されたことは興味深い。

絵図によると、稻荷曲輪櫓台には2層の建造物（稻荷櫓）があったとされている。発掘調査では櫓台上の西端及び南端から、扁平な削石を用いた礎石列が検出され（図2の①・②）、西端の礎石列と並行して栗石群が検出された（図2の③）。前者は、稻荷櫓の外観を構成するものであったと考えられ、後者については礎石が撤去されているが、元来は西端の礎石列と「対をなす基礎構造」<sup>[9]</sup>で、櫓の母屋を構成したものと考えられている。

「輪宝」（写真1）は、前述の母屋と考えられる範囲の内側から5点、検出された（図2）。1点のみ原位置を保っていなかったものの、他の4点は4隅を構成している。このうち西北隅の1点は、礎石直下で検出されており、他の3隅については礎石直下ではなかったが、同様の層から検出された。

これらは5点とも同一形態で、八鋸輪宝<sup>[10]</sup>と呼ばれる。厚さ0.1cm程度の薄い銅板を規格的に切断したものと考えられ、全長は約17.5cmで、中心には0.4cm程度の孔が開いている。表裏同型状で、片面の中心部に3cm四方の金箔が施されている以外に目立った装飾はない。

4隅の「輪宝」は、いずれも金箔が確認できる面を天上に向けて埋設されており、また5点とも微量ながら鉄殻が付着していた。興味深いのは、強弱の差はあるものの、5点とも中心の孔に衝撃痕が確認できることである。これらは金箔が確認できる面から突かれたもので、南東隅の1点と原位置を保っていなかった「輪宝」は強い衝撃痕が認められる。特に後者については強く刺し抜かれていたことが特徴に挙げられる。

これらの「輪宝」が埋設された時期については当初、17世紀中期に使用された「輪宝」に銅鑄造製の薄手作りがみられる<sup>[11]</sup>ことから、少なくともその時期まで遡ることができると考えられた。しかしながら、その後に実施された櫓台西面石垣の解体調査によって、解体された石垣の裏から、崩落痕を有する旧石垣（図2の点線部分）が検出されたことが、この時期を更に遡及させる重要な示唆が与えてくれた。即ち、1) 旧石垣は、築城期のものと考えられること、2) 解体された石垣の根石下（図2の網掛部分）から築城期の瓦が大量に出土し、その中には浅野氏の家紋（違い鷹の羽）を象った鬼瓦がみられたこと、3) 解体前の西面石垣の姿は、宝永2（1705）年の絵図に確認されるため、これが宝永2以前の改修であること、4) 崩落した石垣を埋め殺すかたちで新規の石垣が構築されているため、これが緊急の改修であった可能性が指摘できることなどから、「宝永2以前の櫓台西面石垣の崩落では、築城期の稻荷櫓を改革を要する損傷を受けなかった。このため、櫓の改築は行われず、これに最も影響の少ない方法を探って、崩落した石垣の前面に新規に積み直した」<sup>[12]</sup>と仮定できる。以上のことから、検出された「輪宝」は築城期のもので、その使用時期は16世紀末であると考えられるのである。

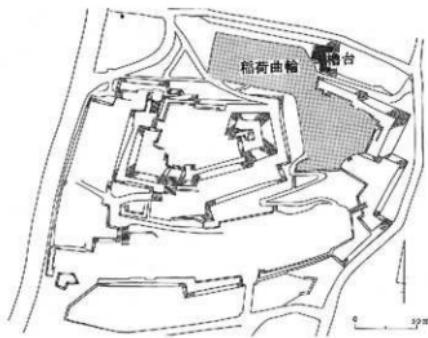


図1 位置図

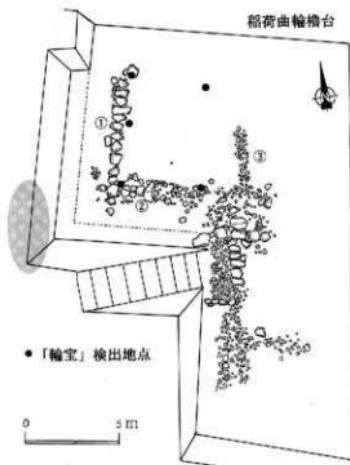


図2 「輪宝」検出地点位置図

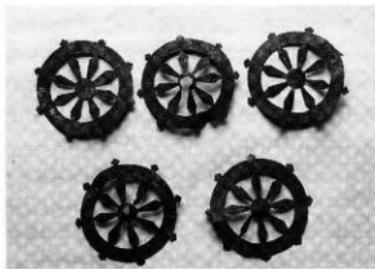


写真1 稲荷曲輪擂台から検出された「輪宝」

### 3 密教における「地鎮・鎮壇」と「輪宝」

稲荷曲輪擂台の「輪宝」は、礎石の下層から検出されており、また「輪宝」が密教法具である点を鑑みると、これが稲荷櫓建造以前に執行された、密教を基本とした「地鎮め」に関する祭祀に使用されたものであることは想像に難くない。しかしながら、単に「地鎮め」と言っても密教では、その修法の違いから「地鎮・鎮壇」「結界」「土公供」「鎮宅・安鎮」の4つに大別される。このうち「地鎮・鎮壇」と「結界」が本来の密教の修法で、両者は大概、同時に行われる。また、他の2修法<sup>30</sup>は他宗教の影響を多分に受けていると言わされている。「輪宝」は密教の儀軌に基づく法具であるため、本稿では特に「地鎮・鎮壇」と「結界」に限って述べていく。

「地鎮・鎮壇」は本来、区別された修法であった。『覺禪抄』<sup>31</sup>によると、地鎮は「不築壇以前修之」もので、二十種物<sup>32</sup>を入れた質瓶と、五色の玉を埋納するのに対して、鎮壇は「鎮壇築壇、建堂之後修之」もので、「輪宝」と標<sup>33</sup>を埋納するとされている。但し、これらは時代とともに簡略化の傾向をたどり、平安～鎌倉時代には「両度依有頃、地鎮壇一度修之」となっていった（地鎮・鎮壇合行の法）と言われる。

「輪宝」は本来、標と組にして埋納する。但し、埋納箇所については八方の場合と四方の場合<sup>34</sup>がある。

また、使用する「輪宝」の種類と埋設方法は、東北隅から埋設していく点で共通しているが、真言宗では三鉢輪宝を標の上に傘のように載せ、天台宗では八鉢輪宝に標を突き立てると言うように決定的な違いを見せる<sup>35</sup>。「鎮壇」に使用される「輪宝」の中心部に必ず孔が開いているのは、このように標との結合のためである。

因みに、これと同時に行われたであろう「結界」は、対象となる一定範囲（七里四方・上下八方）の悪鬼神を追い払い、一切護法善鬼神を迎える修法である。この場合、軍荼利明王の呪文を唱えて、印を結ぶのである

が、銀・銅の箱を用いたり、白芥子（けし）を用いる場合もあったという。

以上によって、稻荷曲輪檻台の「輪宝」及びその検出状況からもう一度、その性格をまとめてみたい。

第1に、「地鎮」の痕跡が確認されず、本来は「鎮壇」で使用されるはずの「輪宝」が礎石の下層から検出されたことから、この祭祀が「地鎮鎮壇合行の法」によって執行されたものであると判断できる。

第2に、4隅から検出された「輪宝」は、金箔の確認できる面が天上に向いており、残りの1点についても、中心の孔にみられる衝撃痕から推察して、やはり金箔は天上に向いていたと考えられる。これには呪術的な意図が感じられるが、「地鎮」の修法で、結界した範囲の東北隅と南西隅、南東隅と西北隅に縄を張り、その中に質瓶に埋納することから、恐らく、4隅の「輪宝」は四方を結界し、内なる世界を聖化する意図を以て埋納され、残りの1点は元来、4隅の「輪宝」を対角線上に結んだ交点に埋設されていたものと考えられる。

第3に、「輪宝」の中心の孔は、1) 0.4 cm程度と小さいこと、2) 著しい衝撃痕が、南東隅及び中心にあったと推定される「輪宝」のみにみられること、また縄は1点も確認されないことから、「輪宝」と対の縄は使用されなかつたと考えられる。5点の「輪宝」にみられる段階的な強さを示す衝撃痕は、この祭祀が権もしくはその代用品を用いて、東北隅から形式的に突き、最後に中心の「輪宝」を強く刺し抜いたことを彷彿とさせる。

第4に、「輪宝」に付着していた粉粧については、この祭祀において穀物が使用されたことの例証となろう。

これらは、検出された「輪宝」の形態などから、天台宗による祭祀である可能性が高いと言える。しかしながら、1) 八鋒輪宝を「地鎮め」に用いた例は、真言宗の寺院でも確認されていること、2) 甲府城の鬼門守護として置かれた愛宕神社の別当寺（愛宕山宝蔵院）が真言宗の寺院で「御代々奉御祈願勅旨之儀從高祖両部神道相伝受ニ而御祈持仕」<sup>27</sup>っていったこと、3) この祭祀が様々な宗教・宗派によって行われ、中には複数の儀軌を習合した例もみられることを考えれば、他宗教・宗派による祭祀である可能性も全く否定できない。

#### 4 愛宕山と稻荷曲輪

甲府城の縄張りを確認すると、稻荷曲輪の東北隅は檻台を先端にして南に屈曲している。これは鬼門を避けて設計されたことによるものと考えられるが、恐らく「地鎮め」に関する祭祀も鬼門除けの意味を含めて、入念に行われたのである。では、鬼門を区画する曲輪が、なぜ稻荷曲輪だったのであろうのか。

発掘調査の成果によると、この曲輪には築城期に虎口が存在していた可能性が指摘されている。これは檻台の南を巡る腰石垣の解体調査によって明らかになった<sup>28</sup>。解体対象となった右垣も、その裏から検出された旧石垣も、技術的・時代的には殆ど差がみられないため、築城から数年のうちに縄張り変更が行われたものと考えられる<sup>29</sup>。しかしながら、檻台を東北隅に設けて右垣を大きく南に屈曲させ、その檻台で「輪宝」を用いた「地鎮め」を行い、城内の鎮守として庄城福尚を置くなど、鬼門に対する様々な対処がみられる曲輪に、わざわざ虎口を設けることの危惧はなかったのであろうか。ここで、甲府城の鬼門守護の様相について注目したい。

稻荷曲輪の名称は、この曲輪内に鎮座した庄城稻荷によるることは既に述べた。しかしながら甲府城内で唯一、信仰的要素の強い名称を持つ曲輪が鬼門に位置することには意図的なものを感じる。甲府城の築城以前から、一条小山の地に稻荷社が鎮座していたことは伝えられている。この社は、甲府城の築城に伴って現在地（甲府市太田町）に移転したが（福積神社）、その摂社庄城稻荷は甲府城の鎮守として祀られたとされている。

稻荷信仰は、農業神・漁業神・商業神・福神などの性格を持ち、人々との生活に密着していたところから各地で部落神や駆除神として祀られている。「屋敷神は鬼門、すなわち東北にもうける」「鬼門除けに稻荷神を祀る」<sup>30</sup>という民俗事例から考えても、庄城稻荷がこの曲輪内に鎮座したことは、偶然ではなかろう。

また甲府城の城外には、鬼門守護神として愛宕神社（愛宕の勝軍地蔵）があり、その別当寺には新義真言宗愛宕山宝蔵院が知られている。これは元来、武田信玄が鷹嶺ヶ岳の鬼門守護として建立されていたものが、「天正十二年 神祖尾州御進発ノ刻ミ（中略）今ノ地ニ遷シ且ツ當御城鬼門ノ守護神トナシ」<sup>31</sup>たとされている。「今ノ地」とは甲斐奈山を指すが、この山はこのころに「愛宕山」と改称された。年代については、甲府城の築城の経緯を考えると疑わしいが、愛宕神社と宝蔵院が甲府城の鬼門守護として移転したことは事実であろう。

愛宕信仰は、火伏せの神・火防の神である。神仏習合の動きの中で、本地仏として勝軍地蔵を祀ったことから、愛宕信仰と地蔵信仰が融合され、「愛宕の勝軍地蔵」と言われた。多くの戦国大名が、これを軍神としたことは有名である。これに疫病などの侵入を防ぐ塞の神・境の神としての性格もあることは、京都の愛宕山が平安京を守護する神であったことからも判る。平安京を題材にした説話の中に鬼が登場するものがあるが、これらが逃げ去っていくのが愛宕山の方向である。「村の入口といわれる所に愛宕様の札を竹にはさんでさし」<sup>27</sup>たという民俗事例は、人・鬼の世界の境を守る愛宕信仰の様相を示しており、甲府城の鬼門守護として愛宕神社が祀られ、甲斐奈山が愛宕山に改称されたことも、単なる偶然ではないことの示唆となろう。

以上のことから城内の稻荷曲輪も、また城外の愛宕神社も、甲府城の鬼門におけるその守護と除災招福の思惟を多分に受けて、緻密な計画のもとに実現されたことが推測できる。では、鬼門にあえて虎口を設けたことは、これに矛盾していなかったのであろうか。

このことについては、京都の地勢とそこにみられる信仰的な逸話を探して考えてみたい。

京都盆地は、東北に比叡山、西北に愛宕山が雄える。平安遷都以来、京都はこの両山による気象を背景に語られることが多い。愛宕山に発生した雷雲が雷電を伴って、平安京から（稻荷社が鎮座する）東山の方面に米襲してくるというのは、その典型例である。『稻荷記』によれば、菅原道真的怨霊が火雷天神と化して内裏を米襲したという件を「(前略) 十六万八千ノ惡神ヲキクシ、雷電神ト現シテ内裏ニヲチクタリ、臣下ヲ損害シ、又御門ヲアヤメマイラセントシ給シニ、今日ノ宿直ノ神ハタレニカト御神アリシカハ、稻荷明神トナリマシヘテ御殿ニカケリ、御衣ノハシヲ延喜ノ御門ニウチキセカクシマヒラセラレシカハ、サシモヲソロシクハシマシ、天満白在天モ、稻荷ノ神威ヲハカリテ、ミツケマイラセラレシカハ、(後略)」と記している。このとき、火雷の暴威から醍醐天皇を救ったのは、稻荷大明神の被護によったとして、稻荷側はその神験を誇った<sup>28</sup>。

ここからは、稻荷社と愛宕山との靈験の優劣関係が見出されるが、筆者は、この優劣関係が実は比較的、広範にみられる信仰上の常識であったのではないかと推測する。

即ち甲府城においては、城外に愛宕神社を設けて、愛宕信仰による「塞の神」に鬼門守護を頼った、また城内には犀敷神的な位置づけのもとに稻荷社を設けて、愛宕信仰に対して優越的な靈験を持つことを期待した。そして、各々の信仰から得られる靈験と、その優劣関係を背景にした、より一層強固な除災招福の思惟を以て、鬼門における虎口の設計を可能にしたと考えられるのである。

### おわりに

古来より日本人は、自然のあらゆるものに靈威を認め、その靈力に怯え、様々な祭祀を行うことによって、これを敬ってきた。土地に対する祭祀も、いわばこのような思惟の現れの一つであろう。そこには常に人間社会における除災招福の思惟が内在していて、非常に興味深い。

築城においては、その地取（土地選定）から完成まで、様々な呪術的宗教のもとに行われたと言われている。恐らく鬼門だけでも多くの祭祀を、多くの信仰に基づいて執行したのではなかろうか。甲府城から「東北隅の特徴的な縄張り」や「稻荷曲輪における庄城稻荷の鉄座」、また「その東北隅の櫓台における『輪宝』を用いた祭祀」、更には「城外に鎮座した鬼門守護としての愛宕神社」と「愛宕神社の別当寺であった愛宕山宝藏院」などの信仰的な様相が確認できるのも、このことの例証であると考えられる。

近世城郭遺跡における「輪宝」の検出例は、江戸城（明治12年）や和歌山城（昭和43年）にみられるが、発掘調査によるものは恐らく例がない。それだけにこの祭祀の詳細を解明するために、甲府城の歴史的位置は高い。また、これが16世紀末のものであるという仮説が得ていれば、織田信長が城郭における「地鎮め」に関する祭祀の資料として、その価値は大きい。更に鬼門守護を視点に、様々な信仰の様相を解明することは、その根底に潜む、除災招福の思惟を理論づける上で極めて有効であろう。

しかしながら、それぞれの祭祀の詳細や、信仰の相関関係は極めて複雑で、これを実証することは困難である。これについては今後、考古学のみならず、歴史・民俗・宗教・建築学などの学際的視点による研究が期待される。

- 註（1）11世紀末に甲斐源氏の一条忠頼の居館が置かれた。忠頼が源頼朝に謀殺されると、忠頼の夫人はその死を悼んで館跡に尼寺を創建した。この尼寺は、正和元（1312）年に僧寺となり、時宗福久山・蓮寺と改称した。その後一蓮寺は、甲府城の築城に際して、天正19（1591）年に現在地（甲府市太田町）に移転した。
- （2）半山俊「甲府城の史的位置～甲斐国織豊期研究序説」（本誌9号、1993）。
- （3）甲府城の築城に關係すると考えられる文書が、豊臣系の大名が甲斐國を領有していた時期に多くみられる。また当時において、豊臣直下の城郭にみられる金箔瓦が、甲府城の発掘調査で確認されている。
- （4）図1の区域以外に、稲荷曲輪の西に星形曲輪、星形曲輪の西北に清水曲輪、清水曲輪の南に薬屋曲輪を加えて内城とされた。現在、清水曲輪跡にはJR甲府駅、薬屋曲輪跡には山梨県庁などが建つ。
- （5）浅野長政に宛てられた遺言状である。東京大学史料編纂所影写本「大洲加藤文書」。
- （6）五代將軍綱吉から発給された朱印状。「山梨県史」資料編8（675号文書）。
- （7）文禄の役で朝鮮に出陣した折、國家老に宛てた書状。東京大学史料編纂所影写本「大洲加藤文書」。
- （8）一条忠頼が居館を構えた際に、鎮守として稻荷社を祀ったとされている。この社はその後、一蓮寺の鎮守とされたが、甲府城の築城に際して現在地（甲府市太田町）に移転した（稻積神社）。そして一条小山には以後、稻積神社の桜社庄城稻荷が甲府城内鎮護の神として祀られた。
- （9）陰陽五行説やその他の方位説によって悪いとされている方角。東北隅は、北（陰）から東（陽）に転ずる急所にあたるため、これを危険視している。反対の西南隅は裏鬼門といわれる。
- （10）古代インドの武器で、梵語でチャクラ（斬龍羅）と言う。転輪型王の七宝の一つで、これを投擲して敵を倒す。仏教では、「輪宝」の武器としての鏡さが仏の説法に例えられ、これを転法輪と呼び慣わした。また密教では「輪宝」を法具とした。日本には平安時代初期に最澄・空海などが請來した。「輪宝」は、穀（中心部分）、輻（肘木部分）、軸（外輪部）、鋒（突起部分）の4部から成る。
- （11）宮里学「県指定史跡甲府城跡の発掘調査～平成の整備事業～」（『甲斐路』92、1998）
- （12）「輪宝」は、外輪部の突起の形態から八鋒輪宝（独鉢杵の先端を突き出したもの）・八角輪宝（外輪部に連なって八角形になっているもの）・三鉢輪宝（渦磨のように三鉢形をしたもの）に分類される。
- （13）西山要一「和歌山城出土の地鎮・鎮壇具」（『古代研究』28・29合併号、1984）
- （14）八卷與志夫氏の御教示による。
- （15）「土公供」は陰陽道の影響を受けたもので、主に庶民層の「地鎮め」に広く採用された。また「鎮宅・安鎮」は、仏教をはじめとする様々な宗教によって行われたもので、家に惡鬼がとりつかないように立柱・上棟・完成・屋根めなど、折に触れて行われた。
- （16）鎌倉時代初期の仏教書。真言宗の諸経法などに関する研究書。金胎房覺憲によって編まれた。
- （17）五宝、五薬、五穀、五香の20種から成る供物。
- （18）本来は、修法壇を結界するための棒状の法具。
- （19）石山寺多宝塔・金剛寺多宝塔・興福寺大御堂などは「輪宝」が4隅に検出された例である。
- （20）森郁夫「密教による地鎮・鎮壇具の埋納について」（『仏教芸術』、1972）
- （21）京都市埋蔵文化財センター「祥雲寺客殿跡の発掘調査」（真言宗智山派總本山智積院、1995）
- （22）「甲斐國社記・寺記」愛宕山宝藏院の条
- （23）現在、この場所にある出入口は、大正年間に謝恩碑建造の石材を搬入するために作られたものである。
- （24）「甲斐国志」卷之百（人物部第九）平岩主計頭親吉の条の記述（親吉が上州から甲州に移って、新たに「府之城」を築いた）の実証的となるかも知れない。
- （25）桜井徳太郎編「民間信仰辞典」（東京堂出版、1980）
- （26）「甲斐国志」卷之七十二（仏寺部第一）愛宕山宝藏院の条。
- （27）（25）に同じ
- （28）この段落は、近藤喜博「福荷信仰」（塙新書、1978）より要約。

## &lt;資料紹介&gt;高根町箕輪横森前墓地所在の地蔵陽刻板碑

坂本美夫

本板碑は、北巨摩郡高根町箕輪横森前の墓地にある。墓地の入口である南東縁に集められた石仏などの中に、六地蔵陽刻板碑とともに確認されたものである。地蔵陽刻板碑については、これまで須玉川以西に確認された例が無いといわれていた（持田友宏1992「印斐の板碑」2）が、本板碑のある高根町箕輪横森前はその須玉川以西に位置する地域である。新たな資料として提示したい。

本板碑は、安山岩製である。このため、風化などにより碑全体が摩耗している。また地蔵菩薩の顔は剥落などで、輪郭のみが確認できる程度である。大きさは、現状で全長47.8cm、幅が上部23.2cm、中央部26.8cm、下部22.7cm、厚さは14.5cmを測る。全体に丸味をもち、左右の辺は外側に刃状に張り、断面は蒲鉾状を呈する。

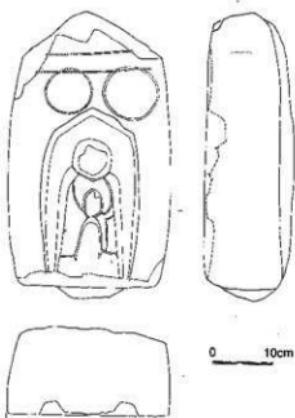
頭部を山形に形成し、その下に二条線を線刻している。二条線は不鮮明な部分が多く、痕跡程度といえるもので、幅1~2mmほどの浅い線刻で描かれていたものと推測される。なお、側面部においても二条線かと思われる同様な痕跡を認められる部分もある。この二条線の下には、おぼろげながらも直径8cm前後と9cm前後の日輪、月輪を確認できる。この日輪、月輪の下方で、碑のやや上部から下部にかけて高さ29.9cm、幅16.5cm、深さ2.2cmほどのが彫り込み（龕）が設けられており、中に高さ23cmほどの地蔵菩薩立像が半肉彫りされている。この地蔵菩薩像は、不鮮明であるが形態から合掌型に印を結んでいるものと考えられる。袈裟についても袖部の形状が部分的に把握でき、その辺部は横方向の彫りで表現されている。

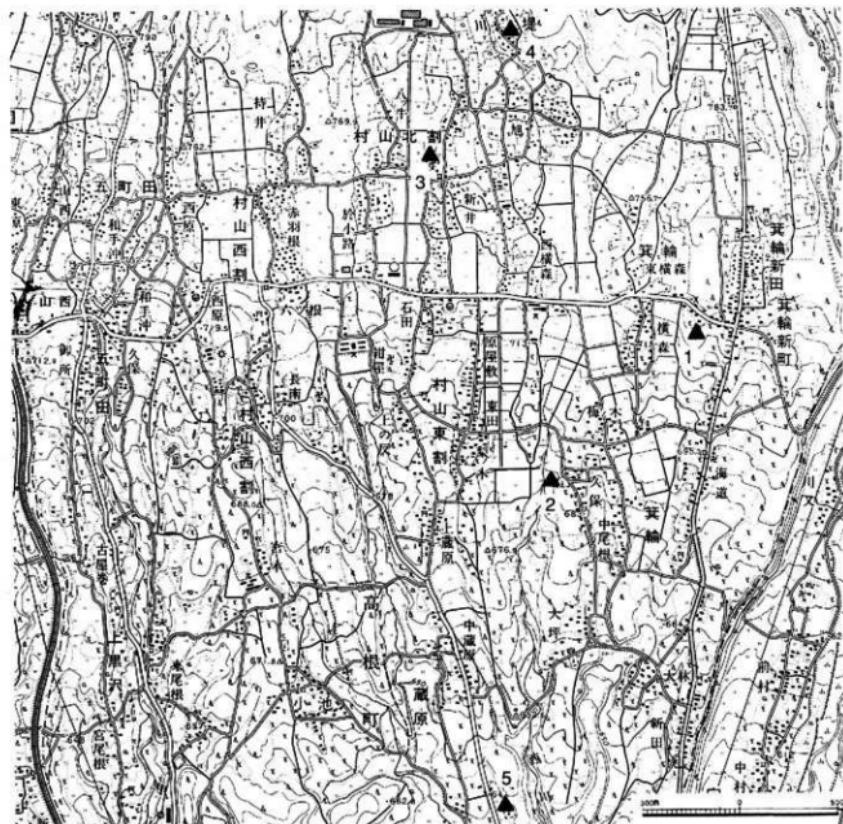
碑の下部には柄が見られるが、大きく欠損しないし摩耗しているものと考えられる。現状で長さ2.1cm、幅11.4cm、厚さ9.4cmの大きさである。なお、台座はみられなかった。

本板碑は、龕の中に前述のような地蔵立像が彫り込まれたものである。これまでに県内で確認されている地蔵陽刻板碑は、およそ19例ほどである。そして記年銘をもつ例は、永正6年（1509）銘の中巨摩郡敷島町久保の道祖神場板碑のみであり、実年代の不明なものがほとんどである。このような中で本板碑を比較してみると、最も良い例が北巨摩郡明野村厚芝にあるおかま地蔵の地下の穴蔵に収められている地蔵陽刻板碑であろう。おかま地蔵の地蔵陽刻板碑より幾分小振りであるが、形態的には瓜二つといえるほど類似性の強いものである。なお、本

板碑には記年銘がなく、造られた時期を明確にできない。しかし先程のおかま地蔵の板碑が15~16世紀のものとされていること（持田前掲書）、また本板碑と久保の道祖神場板碑との地蔵像の表現とに近いものがあり、本例もそのあたりに造られたものとみて大過ないであろう。

本例は、須玉川以西で確認できた地蔵陽刻板碑の一例である。このほかにも高根町内において地蔵陽刻板碑数例を確認することができた。まず、箕輪久保にある清水家墓地では、二基確認されている。いずれも日月を合せ刻むものであるが、下部を台状に作りだした形態で、これまでのものとやや趣を異にする。ハツ牛にある光林寺墓地には、上部を大きく欠損した一基が、また堤中島家裏にも陽刻地蔵板碑みられる。藏原下藏原にある鎧堂東の墓地で確認された一基（佐藤勝廣氏教示）は、細みで背が平らに近い仕上がりの形態である。このように、本横森前の例を含め都合6基が確認されたことになる。従って、これらから地蔵陽刻板碑の分布域が、須玉川のさらに西側の地域にまで及ぶことが確認できるのである。





高根町地内陽刻地蔵板碑分布図

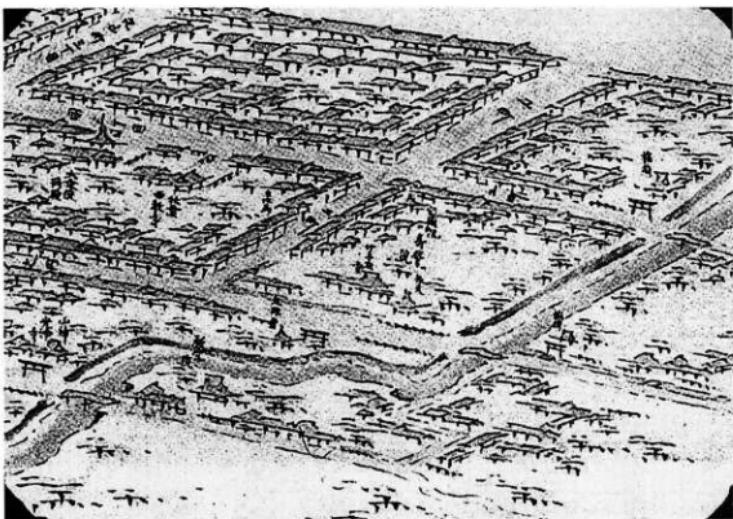
1. 横森前墓地 2. 久保清水家墓地 3. 光村寺墓地

4. 堤中島家裏 5. 鎧堂東墓地

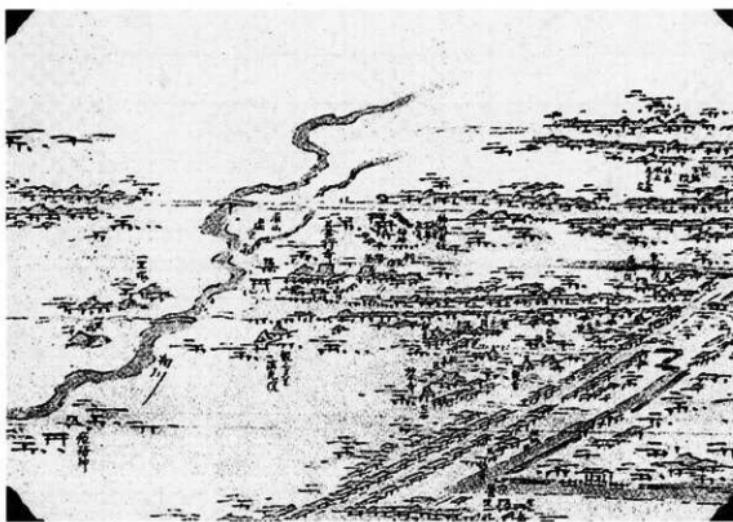
い伝えなどの調査をとおして、県内における月待信仰の実態を明らかにしたい。

参考文献及び挿図出典

- 一 桜井徳太郎「月待」「日本歴史大辞典」昭和三七年
- 二 插稿「山梨県における月待信仰について—特に石造物の展開を中心として—」「研究紀要」九十周年記念論文集 平成五年 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 三 「甲斐国志」第二巻 昭和四六年 雄山閣
- 四 甲斐善書刊行会編「裏見寒話」「甲斐善書」六巻 昭和四九年
- 五 児玉幸多監修「甲州道中分間延経圖」第二巻、第六巻 昭和六一年 東京美術（第一・二回）



1 府中工司奉書院二十三後堂

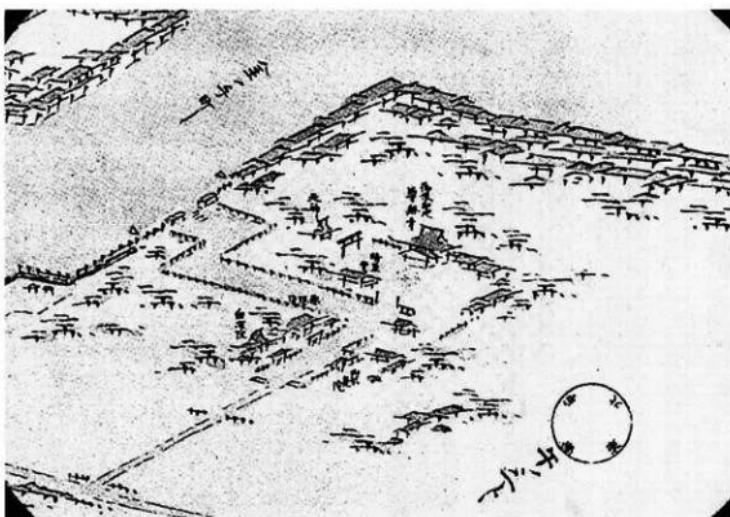


2 府中北天院勢至堂

第2図 月待信仰堂宇 (2)



1 上野原宿付近二十三夜景



2 府中金手町幕体寺勢至堂

第1図 月待信仰堂宇 (1)

る。甲州街道上野原宿からの所要時間であろうか、「牛ノ一ト」と記された

東側に「二十三夜堂」の書き込みとともに、堂宇が描かれている（月待信仰関係堂宇は、図の四隅の三角印よりそれぞれ対角線を引いた交点に位置するようした）。地名としては「鶴川宿」の上に「字大向」、それよりさらに上野原宿寄りに「字か掛」の地名がみられ、この「字香掛」のすぐ

東側に二十三夜堂はある。これから二十三夜堂は現在の北都留郡上野原町香掛あたりと考えられる場所にあったものと考えられる。ここでは、周囲に寺院の構えを全く確認できないことから、単独で二十三夜堂が存在したものと考えられる。

#### (二) 府中尊体寺勢至堂(同二)

勢至堂は、金手町の鍵形に折れ曲がった道の角に所在する尊体寺境内にある。境内の南西あたりに「勢至堂」の書き込みとともに、堂宇が描かれている。現在の甲府市城東一丁目三番三号に所在する功德山尊体寺（淨土宗）がそれである。なお、現在は同寺院の境内に「勢至堂」を確認することができない。

#### (三) 寿普院二十三夜堂(第一図一)

工町寿普院の境内の南端付近に「二十三夜堂」の書き込みとともに、堂宇が描かれている。現在の甲府市城東一丁目十番付近にあった淨土宗の寺院である。「國志」、「裏見寒話」などに記されている了雲山寿普院、工町二十三夜参詣と同一のものである。現在、墓地のみが確認されるにすぎない。

#### (四) 北天院勢至堂(同二)

甲府城の北西側で相川の東側付近に所在し、「勢至堂」の書き込みなど、堂宇が描かれている。絵図のなかでは、善行寺の南東方向と思われる近接位置にある。善行寺は現在の甲府市美咲一丁目一番二十三号にあるが、

北天院については確認できなかった。また、「甲斐国寺記・社記」にも北天院の記述は確認されなかった。なお、「國志」には「勢至菩薩也廿三夜参詣」と記されている水陽山桃岳院（府中三日町）が東側に隣接している。北天院のあつた場所は確認できなかつたが、現在の甲府市朝日二丁目

付近にあつたものと考えられる。

絵図である本文献からは、「國志」「裏見寒話」にみられた月待信仰関係堂宇のほかに、上野原宿の「二十三夜堂」、「尊体寺」の勢至堂で月待信仰の行われていたであろう新たな事例と、その具体的な位置、形態などを確認することができるものである。

### 三 月待信仰の実態

文献資料から、県内における月待信仰関係の施設などについて重複する例を除いて十一件ほどが確認された。形態別にみると寺院関連施設が八件、単独施設(二十三夜堂)一件、言い伝え一件となり。寺院関連施設が大多數を占めていることが分かる。単独施設は、寺院関連の施設なのかなは講義関係者によって作られたものなのかないすれかであろう。言い伝えについては一件であつたが、これ以外にも県内市町村誌に文献に記されていない言い伝えが幾つか取り上げられており、今後の収集によつて月待信仰の広がりをより明確に捕らえることができるものと思われる。

次にこれらの施設を地域別に見ると、当時の中心地であった城下町の甲府市域に七件と最も多くみられる。さらにはこれらと近世月待塔の分布状況とを合わせてみると、甲府市域の北側の武田・元細屋地区、それに南西側の貢川地区とにそれぞれ一基計三基の近世月待塔がみられる程度であり、近世月待塔の希薄な地域に関連施設が集中している傾向がみられる。そしてこのような傾向は、城下町といつた性格に求められるのである。また、寺院を中心に行われ、西昌院の「地藏祭り」、工町の「廿三夜参詣」などから近世月待塔を建てた周辺地域に比べ、一段と祭り的様相が強かつたのではないかとも考えられるのである。

### 四 おわりに

以上、文献資料から月待信仰関係施設などを拾つて若干の検討を加えて來たが、近世月待塔の見られない地域においても、文献資料から月待信仰の行われていた地域を確認することができた。今後、さらに絵画資料や言

## (一) 卷之二「仏閣」

## 〔廿三夜堂・桶屋町〕

とある。桶屋町は現在の甲府市中央一丁目・五丁目の一部である。廿三夜堂としているのであるから何らかの堂宇が存在していたのであろうが、現在まで場所はもちろんのこと、堂宇の存在自体も確認できない。なお、後述するが本書卷之五においても町に廿三夜堂の存在した記述がある。工町の廿三夜堂は、現在の城東一丁目十番付近に存在した寺院（寿院院）にあつたもので、本例とは接続した場所である。同じものではないかとも考えられるが、同一書の中で別々に記述されているところから別個のものと考え、桶屋町内のいずれかの地に「廿三夜堂」があったものと捉えておきた。

卷之二「仏閣」には、さらに「北山積翠寺の廿三夜」と題した記述がある。

「北山積翠寺の廿三夜観保の頃、積翠寺は山家の村也と雖も、府下近く出畠の外に、日暮錦城の下に薪を燃ぐ故に不自由なき處也。爰に一農夫あり、名は七兵衛と云ふ或日夕陽に及んで山谷鳴動せしか、彼七兵衛の仏檀へ金色の物入れり、七兵衛妙不測を得、病人の折り立身の願等、成就せずと云事なし、或日回国の道心者、郡内邊より来りて、七兵衛が家に参詣あり、近郷もあまたこれをしらず、遠近の群衆にて足を知る。夫より府下此法沙に及び四方より彼の家へ行く者多し、専ら廿三夜徳大勢や菩薩、彼か信厚を感じて、世界に慈悲を垂れんか為に、七兵衛が体を借りて妙教を施し玉ふと、程なく宰官より厳しく撻りて停止となる。愚子も父の命を受けて松樹を求めるか為に、彼處に行く事あり、然るにかたの如く

群衆せしを立寄て見るに、古き米蔵の中に小き禿倉あり、注繩をはり幣を切りて、其前に彼農夫胡坐す長髪乱髪篤慢を看たり、參詣の者、農夫を伴して種々の願事を演ぶ、其答ふること流るゝか如し、府下の富商有徳の鄰民、尼姫の類はいふに及ばず諸士も亦入来る、農夫が言を以て、廿三夜の神話といふ、些少の施物も貰らすといふ、其内一人ありて百姓体也母の煩

を祈る、七兵衛が云、病氣平癒せば、かな物を献せよ、但かな物は物に依りて、云價移し細かなる針を上くべしといふ、罪て願書をこむると云て、粗紙に書いていふ、おふくろの煩快くなられ候は、かね上へく候と、是を以て其怨なる事を知るへし、土民婦女は、彼に歎かるゝも宜なり、士に列する人さへも、聞々来る事あり、大丈夫たるへき者の耻へきの事なり」

とある。具体的な信仰の場所、堂などが存在するわけではないが、現在の甲府市積翠寺町付近の月待信仰についての言い伝えである。だが積翠寺町地域において、月待塔を確認することはできなかつた。しかし、このような話が伝わる背景には、この地域において月待信仰が盛んに行われていたと見るべきであろう。

## (二) 卷之五「風俗」

## 〔廿三日 立待 工町廿三夜参詣〕

とある。具体的な施設を記していないが、町名からしておそらく「国心」にみられたのである。現在の甲府市城東一丁目十番付近にかかる間にあつたのである。現在のたくさんの人々が、「廿三夜詣」で来たことが窺えるのである。なお、「立待」は、立つて月の出をまつ意で、本来ならば十七夜待が「立待」に当るものである。従つて「廿三夜待」との間では多少ちぐはぐな表記となるが、月待信仰（「廿三夜」）の形態を表したものといえる。

このように「裏見寒話」の中にも、三箇所にわたる月待信仰にかかる記述がみられる。特に積翠寺町付近に伝わる月待信仰の言い伝えは、月待信仰の盛んに行われた結果によるものと考えられことと共に、一般に広く浸透していた状況をも垣間見ることができる。

## 〔資料三〕 甲州道中間延経圖

本文献は、先の一つの文献と違ひ絵図であるところに特徴がある。すなわち具体的な場所が、絵図のなかに廿三夜堂、勢至堂などの書き込みとともに確認することができる。以下、取り上げてみることにする。

## (一) 上野原宿付近の「廿三夜堂」(第一図)

上野原宿のやや西側、鶴川宿の東側で両宿の中間付近において確認でき

「同宗（曹洞宗）成島村林照院ノ木除地畝五歩、本尊ハ勢至」とある。所在地の確認はできなかつたが、現在の中日摩郡玉鹿町西新井にあつた寺である。本尊が月待信仰の本尊でもある勢至菩薩であることから、後述の寺院にみられる勢至菩薩と「十三夜」との結び付きを通して、おそらく月待信仰が行わられたものと考えられるものである。

(二) 鎌国山興神寺（同郡筋加東中島村）

「曹洞宗下三条村教盛院ノ木黒印八十八坪、本尊ハ勢至」

とある。現在の昭和町加東中島・七四番地に所在する興禪寺がそれである。本尊は勢至菩薩であり、先のようなことから月待信仰の行われていたであろうことを想定することができる。

(三) 了雲山寿善院（府中町）

「・・・境内除地五百十坪本尊ハ弁財天天長四寸七分座像、浅野氏ノ老母「雲院ノ寄付ト云フ別堂ニ勢至菩薩ノ像長四寸八分ヲ安置ス人称シテ云云」  
〔十二・夜堂ト〕

とある。金子町甲福山教安寺（淨土宗）末寺十四ヶ寺の一つである。教安寺は現在の甲府市城東二丁目八番4号にあるが、寿善院は後述する「甲州道中延経図」からするところの教安寺から南南西方の指呼の間にあつた寺院である。現在そのあたりに寺院の存在を確認することはできないが、住居地図の同じ丁目十番地内に墓地の表示がみられる。あるいは、このあたりに寿善院があつたのであろうか。いずれにしても、ここでは本尊ではないが、勢至菩薩が別の堂に安置され、「十二・夜堂」と呼ばれ、月待信仰の対象となつていていたことを窺わせている。

(四) 金光山西昌院（府中横田町）

「同宗（臨済宗）円光院ノ末黒印千七十十五坪・・・本堂ヲ六角堂ト称ス地蔵ノ像六体ヲ安ンゼリ各長六尺・・・」とある。現在の甲府市武田三丁目四番二十七号にある西昌院がそれである。そして境内には再興されたものであるが、現在でも六角堂がみられる。この六角堂前に昭和六年建立された「六角地藏尊山絆」によると、八月二十二日には地蔵祭りが盛大に行われていたとのことである。祭りは地蔵祭

りであるが、本尊が勢至菩薩であり、かつ祭礼日も「二十二・夜待の縁日」である「二十二日」と言うことから考へると、地蔵信仰と月待信仰とが結びついたものではないだろうか。なお、近隣にある教昌院の境内には、造立年は彫られていないが、「基の二十六夜塔がみられる」。

(五) 永陽山桃岳院（府中元三日町）

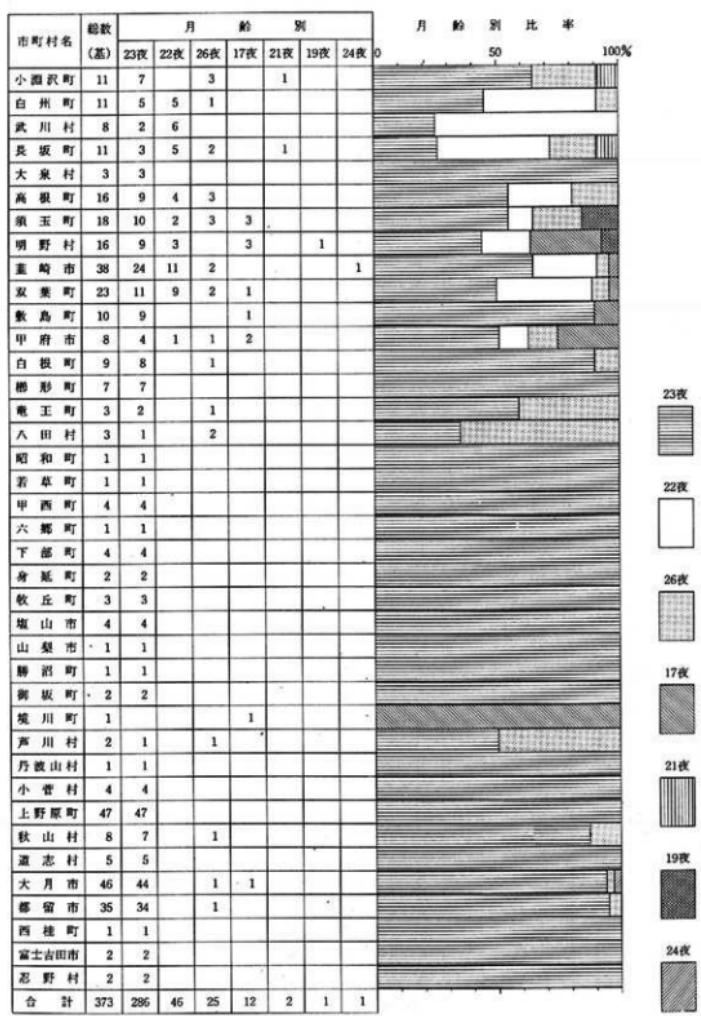
「同宗（臨済宗）妙心寺ノ木境内黒印四百五十坪浅野一紙黒印二・反五枚此米一石八斗トアリ本尊ハ勢至菩薩也廿二・夜待トス・・・」とある。現在の甲府市美咲二丁目一番三号にみられる桃岳院のことであろう。ここでは、本尊の勢至菩薩が「二十二・夜と呼ばれていたことが分かり、月待信仰がおこなわれていたことを強く窺わせるものである。

(六) 七覺山圓乘寺（八代郡中郡筋右左門村）

「・・・真言宗新義植林七ヶ寺ノ一・・・寛永十九年以来ノ御朱印ヲ藏ム御年賀拜礼ヲ勤ム年中行事正月三日孔雀明王七日行者講八日大仁王会・・・月八日薬師護摩供四月十五日五社権現祭礼・・・五九朔日大般若經転説修行十一月廿六夜待」

とある。現在の中道町右上口に所在する圓乘寺がそれにある。ここでは現在行されていないが、かつて圓乘寺の年中行事に組み込まれていたことが明確に捉えられ、そして十一月に「二十六夜待」の信仰の行っていたことが分かる。

「國志」からは、以上の六箇所を確認することができた。このうち寿善院、桃岳院、圓乘院について、二十三夜あるいは二十六夜といつた月待信仰の確実に行われていたことを捉えることができる。また、これらは勢至菩薩と月待信仰の結び付きが直接的に確認できる例であり、これらから残りの勢至菩薩を本尊とする清伝寺、興禪寺、西昌院の各寺院においても、月待信仰を行っていた可能性が極めて高いものと考へられるのである。また中道町それに玉穂町といった、これまで月待塔の確認されていない地域においても、確実に月待信仰の行っていた、あるいは行っていたであろうことを確認できる。このようにこれらは月待塔のみられない地域においても、月待信仰の行っていたことを知る好例といえる。



第1表 近世月待塔市町村別一覧表

# 山梨県における月待信仰について

—文献を中心として—

坂本美夫

## 二、月待信仰の実態

### 四 おわりに

#### はじめに

#### 一 はじめに

月待信仰は「特定の月齢の夜に人々が寄り合ひ飲食などをともにしながら月の出をまつ行事」<sup>1)</sup>で、平たく言えば月の出をまつて拝む信仰行事であり、その目的が農業生産に根ざした一種の現世利益を求めたものだったと考えられている。

このような月待信仰の山梨県における状況について、かつて石造物を中心とした検討したことがある。それによれば山梨県における月待信仰の初現は、須玉町若神子交差点や高根町箕輪中尾根所在の月待板碑の遺立された一四五〇—一四六〇年代に求められ、北巨摩郡地域とその周辺地域を中心に盛んだったことが捉えられる。そして一五二五年ころを最後に月待板碑の造立は確認されなくなり、再び月待信仰による石塔（近世月待塔）<sup>2)</sup>二十三夜・二十二夜・二十六夜・十七夜・二十一夜・十九夜・二十四夜塔）の造立が確認されるのは、七〇〇年代になってからのこととなる。この近世月待塔の省内における分布状況には、地域によって極端な濃淡が認められるものであった。それは北巨摩郡地域とその周辺地域（中巨摩郡の一部と甲府市）、そして大月市・上野原町を中心とした郡内地域において、際立った濃密な分布状況が捉えられている。両地域においてこれまでに省内で確認されている月待塔三七三基のうち三三九基<sup>3)</sup>率にして実に九〇パーセントを占める状況であった。一方、これら地域の周辺に位置する昭和町、

## 二、文献による月待信仰

文献の中に、「十三夜ないし月待信仰の本尊である勢至菩薩などを祀したもののがみられる。現在までにこれら月待信仰にかかる記述を確認できたものに『甲斐国志』（江戸時代、文化十一年＝一八一四年成立、松平定能編集）<sup>4)</sup>、『義見寒話』（江戸時代、宝暦二年＝一七五二年成立、野田成方著）<sup>5)</sup>、『甲州道中分間延経図』（江戸時代、文化二年＝一八〇六年完成、江戸幕府）<sup>6)</sup>の三件があげられる。次にこれらについて概要、さらに検討を加えてみたい。

[資料一] 『甲斐国志』（以下「国志」とする）

(一) 明月山清伝寺（巨摩郡中郡筋西新井村）

1999年3月31日 発行

**研究紀要 15**

編集・発行 山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

印 刷 株 式 会 社 ヨネヤ

BULLETIN  
OF  
YAMANASHI PREFECTURAL  
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY  
&  
ARCHAEOLOGICAL CENTER  
OF YAMANASHI PREFECTURE

Number 15  
CONTENTS  
March 1999

The movement of the neolithic age's cultural groups and the influence to Jomon culture in the delta zone of Changjiang River	Li Yingfu	1
About the aspect of the foreign system pottery's inflow between the latter half of the early Jomon period and the beginning of the middle Jomon period	Yukikazu Noshiro	13
The vicissitude from the wooden clay figurine of the early Jomon period to "Kappa" style clay figurine of the middle Jomon period		
-A thinking of the clay figurine excavated in Katsurano Site,Misaka Town-	Keiko Ichikawa	39
The sence and the theme of the site's distribution in the latter half of the final Jomon period -The site's continuity and location in Yamanashi Prefecture-	Takeshi Niitsu	53
The excavation report of Kabutsuppara Site -From March 3rd to March 26th,1998-		
	Shigeki Yamamoto & Kunio Amikura	67
The plant's and the animal's remains and their characters detected in Goshō Site,Otsuki City	Koji Kobayashi,Junko Yoshikawa,and Takeji Toizumi	73
About the flagged-floor Jomon house site in Otsuki Site	Miyuki Kasahara	83
The ancient topography and the site's location in the alluvial cone of Midaigawa River		
-The result of the trial excavation in Chubu-Oudan Free way-	Yasuo Hosaka	93
The tephra analysis of the trial excavation in Chubu-Oudan Free way	Manabu Kasai	101
The arrangement of the potteries excavated in No.2 house site of Nishida Site's B section, Enzan City		
	Kenji Kobayashi	103
About the Sue wares of the collections in Bokudoji Kofun,Yamanashi City	Takako Ishigami	111
About the article made of wood excavated in Yamanashi Prefecture	Kayoko Amemiya	113
A protection of the ominous direction and a consideration of "Josaishoufuku" (To remove misfortune and bring good fortune) in Kofu Castle -A thinking of "Inariguruwa" -	Satoshi Sakita	119
〈The introduction of the material〉 A jizo stele with the relief in Minowayokomorimae graveyard,Takane Town	Yoshio Sakamoto	125 (10)
A study on religious belief about "Tsukimachi-Shinko" in Yamanashi Prefecture		
-Especially focussing on a document-	Yoshio Sakamoto	134 (1)